

大宰府史跡

昭和59年度発掘調査概報



昭和60年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和59年度発掘調査概報

昭和60年3月

九州歴史資料館

序

昭和59年度は第三次五ヶ年計画の折り返し点にあたる。この計画では条坊制の解明に主眼をおいているが、これまでの調査結果によると政府前面には広範囲にわたって官衙が配されていたことが明らかにされ、大宰府研究に新たな一石を投じた。今年度も引き続き県道南側の地域について調査を行ったが、今回は大宰府官人の居住跡と推定される遺構が検出され、また新たな資料を追加することができた。このことは大宰府研究をさらに前進させるとともに、まだ明らかにされていない条坊制を解明するための有力な資料にもなると考えられ、今後さらに広範囲の調査を行うことが必要であろう。

なお、これまで大宰府史跡の発掘調査については竹内理三先生を委員長とする「大宰府史跡発掘調査指導委員会」の指導のもとに進めてきたが、今年度から「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称し、新たに13名の先生方に指導をお願いすることになった。昭和43年発掘調査開始以来永年にわたってご指導をいただきてきた旧委員の先生方に心から深甚の謝意を表する次第である。

また、大宰府研究の先駆者として常にご指導をいただきてきた前館長鏡山猛先生は昭和59年10月薬石効なくついに不帰の人となられた。誠に残念でならない。末筆ではあるが、これまでの学恩に感謝し、先生のご冥福をお祈り申し上げる。

昭和60年3月31日

九州歴史資料館長 田 村 圓 澄

例　　言

1. 本概報は昭和59年度に福岡県が国庫補助金を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡の発掘調査概報である。ただし第14・87・88次調査は昭和58年度に行った調査であるが未報告であるので併せて報告する。また第14次調査については昭和46年度に一部試掘を行い簡略な報告を行っているが、今回全面について再調査を行ったので併せて報告する。なお第89・91・93次調査については調査面積も僅少であり顕著な遺構は検出されなかったので、その報告については割愛した。さらに第94次調査については現在調査継続中であるので、その報告については次回にゆずる。
2. 検出遺構については、大宰府史跡調査研究指導委員の指導を受けた。
3. 第14・87・90次調査出土の木簡については岸俊男指導委員の教示を得た。
4. 遺構・遺物の写真は学芸第一課石丸洋の撮影による。
5. 本概報の執筆、編集は調査課の石松好雄、倉住靖彦、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、高橋章が行った。また遺物の整理については田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

目 次

序

I 調査計画	1
II 調査経過	2
1. 概要	2
2. 第14次調査	4
検出遺構	4
出土遺物	7
小結	36
3. 第87・90次調査	37
検出遺構	37
出土遺物	44
小結	80
4. 第88次調査	87
検出遺構	87
出土遺物	95
小結	112
5. 第92次調査	114
検出遺構	114
出土遺物	121
小結	144

挿図目次

第1図 大宰府史跡発掘調査地域図	折り込み
第2図 第14次調査遺構配置図	折り込み
第3図 S D320土層図	5
第4図 S E2502・2503・2504実測図	6
第5図 S K2501実測図	7
第6図 S D320出土土器・陶磁器実測図(1)	8
第7図 S D320出土土器・陶磁器実測図(2)	9
第8図 S D320出土土器・陶磁器実測図(3)	10
第9図 S D320出土土器・陶磁器実測図(4)	11
第10図 S D320出土土器・陶磁器実測図(5)	14
第11図 S D320出土土器・陶磁器実測図(6)	15
第12図 S D320出土土器・陶磁器実測図(7)	16
第13図 S D320出土土器・陶磁器実測図(8)	折り込み
第14図 S D320出土土器・陶磁器実測図(9)	18
第15図 S D320出土土器・陶磁器実測図(10)	20
第16図 S D320出土土器・陶磁器実測図(11)	22
第17図 S D320出土土器・陶磁器実測図(12)	24
第18図 S D320出土瓦製品・埴輪実測図	25
第19図 S X2507出土土器実測図	25
第20図 S X2508出土土器実測図	26
第21図 S D320出土軒丸瓦拓影・実測図	27
第22図 S D320出土軒平瓦拓影・実測図	29
第23図 S D320出土木製品実測図	33
第24図 S D320出土木製品実測図	34
第25図 S D320出土鉄製品実測図	35
第26図 S D320出土石鍋実測図	35
第27図 第87・90次調査遺構配置図	38
第28図 堀立柱建物柱断面図	41
第29図 S D2340土層図	42
第30図 S E2510実測図	43

第31図	S B 2530・2540・2528、S E 2510、S K 2524出土土器実測図	45
第32図	S D 2340出土土器実測図(1)	47
第33図	S D 2340出土土器実測図(2)	48
第34図	S D 2340出土土器実測図(3)	49
第35図	S D 2340出土土器実測図(4)	50
第36図	S D 2340出土土器実測図(5)	51
第37図	S D 2340出土土器実測図(6)	52
第38図	S D 2340出土土器実測図(7)	53
第39図	S D 2340出土土器実測図(8)	54
第40図	S D 2340出土土器実測図(9)	56
第41図	S D 2340出土土製品実測図	57
第42図	S X 2514・2532出土土器・陶磁器実測図	57
第43図	S X 2529、茶褐色土磨出土墨書き土器・硯実測図	57
第44図	軒丸瓦拓影・実測図	58
第45図	軒平瓦拓影・実測図	60
第46図	S D 2340出土木製品実測図(1)	77
第47図	S D 2340出土木製品実測図(2)	78
第48図	S E 2510井戸側拓影・実測図	79
第49図	石製品実測図	79
第50図	第88次調査遺構配置図	88
第51図	S B 2550柱掘形出土スサ入り炉壁片（写真）	89
第52図	掘立柱建物柱掘形断面図	91
第53図	S E 2511・2552・2553・2554・2556・2557・2558・2561・2562・2563実測図	折り込み
第54図	S X 2600実測図	95
第55図	S B 2555出土硯実測図	95
第56図	S B 2550・2555、S D 2572・2573・2582出土土器・陶磁器実測図	96
第57図	S E 2551・2552出土土器・陶磁器実測図	98
第58図	S E 2553・2554出土土器・陶磁器実測図	99
第59図	S E 2556・2557・2558・2559出土土器・陶磁器実測図	102
第60図	S E 2561出土土器・陶磁器実測図	103
第61図	S K 2593・2602・2603、S X 2617出土土器・陶磁器実測図	105
第62図	S X 2600出土土器・鉄器・船玉実測図	106

第63図	黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)	108
第64図	黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)	109
第65図	S E 2557・2561出土木製品実測図	110
第66図	石帶実測図	111
第67図	滑石製品実測図	111
第68図	滑石製品実測図	111
第69図	第92次調査遺構配置図	折り込み
第70図	掘立柱建物柱掘形断面図	117
第71図	S D 2350 A・B 土層図	118
第72図	S E 2621・2622・2623・2624実測図	119
第73図	S K 2641実測図	120
第74図	S K 2670実測図	121
第75図	S B 2620・2645、S D 2350 A・B、S D 2680出土土器・陶磁器実測図	122
第76図	S E 2621出土土器実測図	124
第77図	S E 2622・2624出土土器実測図	126
第78図	S E 2622出土紡錘車実測図	126
第79図	S K 2641・2642・2643・2644・2646出土土器実測図	128
第80図	S K 2649出土土器実測図	130
第81図	S K 2652・2656・2661・2664、S X 2678・2684・2686出土土器・陶磁器実測図	132
第82図	S X 2670出土土器実測図	134
第83図	S X 2690出土土器実測図	135
第84図	暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)	137
第85図	暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)	138
第86図	暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)	139
第87図	軒先瓦拓影・実測図	142
第88図	S E 2622出土木製品実測図	142
第89図	S E 2621井戸側実測図	143
第90図	暗褐色土層・S E 2623出土石鍋実測図	144
第91図	第92次調査時期別遺構配置概念図	145

図版目次

- 図版1 (上) 第14次調査区全景
(下) 槽 S A2505
- 図版2 (上) 井戸 S E2502
(中) 井戸 S E2503
(下) 井戸 S E2504
- 図版3 瓦敷遺構 S X2501
- 図版4 第87次調査区全景
- 図版5 第90次調査区全景
- 図版6 (上) 堀立柱建物 S B2355
(下) 堀立柱建物 S B2515
- 図版7 堀立柱建物 S B2520・槽 S A2522
- 図版8 堀立柱建物 S B2525・2530
- 図版9 (上) 堀立柱建物 S B2535
(下) 堀立柱建物 S B2540
- 図版10 堀立柱建物 S B2355・2525・2530・2535柱掘形
- 図版11 (上) 溝 S D2335
(下) 溝 S D2335・瓦敷 S X2523
- 図版12 (上) 第87次調査溝 S D2340
(下) 第87次調査溝 S D2340土層
- 図版13 (上) 第90次調査溝 S D2340
(下) 第90次調査溝 S D2340土層
- 図版14 井戸 S E2510
- 図版15 第88次調査区全景
- 図版16 堀立柱建物 S B2550・2565
- 図版17 (上) 堀立柱建物 S B2555・2560・2595
(下) 堀立柱建物 S B2550
- 図版18 (上) 堀立柱建物 S B2555・2595
(下) 堀立柱建物 S B2560
- 図版19 (上) 堀立柱建物 S B2565
(下) 堀立柱建物 S B2575

- 図版20 (上) 堀立柱建物 S B 2580・2585・2590
(下) 堀立柱建物 S B 2550柱掘形
- 図版21 (上) 溝 S D 2581・2582
(下) 井戸 S E 2551
- 図版22 (上) 井戸 S E 2552
(下) 井戸 S E 2553
- 図版23 (上) 井戸 S E 2554
(下) 井戸 S E 2556
- 図版24 (上) 井戸 S E 2557
(下) 井戸 S E 2558
- 図版25 (上) 井戸 S E 2561
(下) 井戸 S E 2563
- 図版26 木棺墓 S X 2600
- 図版27 第92次調査区と大宰府政庁
- 図版28 第92次調査区全景
- 図版29 (上) 第92次調査区南半部全景
(下) 第92次調査区北半部全景
- 図版30 (上) 堀立柱建物 S B 2620・土壤 S K 2641・溝 S D 2627
(下) 堀立柱建物 S B 2620
- 図版31 堀立柱建物 S B 2625
- 図版32 堀立柱建物 S B 2630
- 図版33 (上) 堀立柱建物 S B 2635・2640
(下) 堀立柱建物 S B 2635
- 図版34 (上) 堀立柱建物 S B 2645
(下) 堀立柱建物 S B 2650
- 図版35 堀立柱建物 S B 2655
- 図版36 (上) 堀立柱建物 S B 2660・2665
(下) 堀立柱建物 S B 2660
- 図版37 (上) 堀立柱建物 S B 2620・2660柱掘形
(下) 溝 S D 2350・2632
- 図版38 井戸 S E 2621
- 図版39 (上) 井戸 S E 2622
(下) 井戸 S E 2623

- 図版40 (上) 井戸 S E2624
(下) 土壌 S K2641
- 図版41 地鎮壇構 S X2670
- 図版42 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版43 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版44 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版45 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版46 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版47 第14次調査 SD 320出土土器・碗
- 図版48 第14次調査 SD 320出土陶磁器・墨書き土器
- 図版49 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版50 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版51 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版52 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版53 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版54 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版55 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版56 第87・90次調査 SD 2335・SE 2510・SK 2524出土土器
- 図版57 第87・90次調査 SX 2514・2529・2532・茶褐色土層出土陶磁器・碗
- 図版58 第88次調査 S B2555・S E2551出土土器・陶磁器
- 図版59 第88次調査 S B2554・2555・2558・2559出土土器・陶磁器
- 図版60 第88次調査 S E2561・S X2600出土土器・陶磁器・金属器
- 図版61 第88次調査 S K2602・2603・黒褐色土層出土土器・陶磁器
- 図版62 第92次調査 S D2350A・B・S E2621出土土器・陶磁器
- 図版63 第92次調査 S E2622・2624出土土器
- 図版64 第92次調査 S K2641・2642・2643・2644・2646出土土器
- 図版65 第92次調査 S K2649・2652出土土器・陶磁器
- 図版66 第92次調査 S K2656・2664・S X2678・2684・2670出土土器
- 図版67 第92次調査 S X2690出土土器
- 図版68 第92次調査 S X2690出土土器
- 図版69 第92次調査 喰褐色土層出土土器・土製品
- 図版70 第92次調査 喰褐色土層出土土器
- 図版71 第92次調査 喰褐色土層出土陶磁器

- 図版72 第14次調査 S D 320出土木簡実測図
- 図版73 第14次調査 S D 320出土木簡
- 図版74 第87次調査 S D 2340出土木簡実測図
- 図版75 第87次調査 S D 2340出土木簡
- 図版76 第87次調査 S D 2340出土木簡実測図
- 図版77 第87次調査 S D 2340出土木簡
- 図版78 第90次調査 S D 2340出土木簡実測図
- 図版79 第90次調査 S D 2340出土木簡
- 図版80 第87次調査 S D 2340出土木簡
- 図版81 第90次調査 S D 2340出土木簡
- 図版82 第14次調査 S D 320出土木製品
- 図版83 第87・90次調査 S D 2340出土木製品
- 図版84 第87・90次調査 S E 2510井戸側
- 図版85 第88次調査 S E 2557・2561、第92次調査 S E 2622・S K 2649出土木製品
- 図版86 第92次調査 S E 2621井戸側
- 図版87 第14次調査 S D 320出土軒丸瓦
- 図版88 第14次調査 S D 320出土軒平瓦
- 図版89 第87・90次調査 S D 2340・S E 2510・茶褐色土層出土軒先瓦
- 図版90 第92次調査 出土軒先瓦・石製品・鐵鎌
- 図版91 第14次調査 S D 320・S E 2503出土鐵製品・石製品
- 図版92 第87・90次調査 S D 2340・茶褐色土層出土土製品・石製品・草履
- 図版93 第88次調査 出土硯・石帶・石製品



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

I 調査計画

本年度の発掘調査は昭和57年度を初年度とする第三次五ヶ年計画の第三年次にあたる。この計画では現在進行中の観世音寺地区土地区画整理事業に伴う遺構確認のための事前調査も兼ねて、未だにその実態が明らかにされていない条坊制の遺構についての知見を得ることに主眼をおいている。この土地区画整理事業の対象地域は政府跡前面を東西に走る県道山家一閑屋線とその南をほぼ西流する御笠川によってはさまれた地域で、面積にしておよそ80ヘクタールである。この地域は故鏡山猛氏の大宰府条坊復原案によると南北は五条から九条にかけて、また東西は左郭八坊から右郭八坊にあたるが、これまで発掘調査はほとんど行われていない。ただ左右両郭の五条一・二坊地域については昭和46・48年度に行った住宅建設に伴う事前の発掘調査によって礎石建物および掘立柱建物の遺構が確認されている。このような状況のもとで第三次五ヶ年計画の立案にあたっては、この遺構が確認されている政府跡前面地域、すなわち字日吉、不丁、大楠を発掘調査の主な対象地域とした。このような第三次五ヶ年計画のうち、これまでに実施した二ヶ年の調査によって掘立柱建物をはじめ構、井戸など多数の遺構が検出され政府跡前面地域における遺構の様相をほぼ明らかにすることができた。すなわちこの地域には広場とみられる空間地を間において東・西対称に建物群が配置されており、遺構の配置および出土遺物などからみて、すでに八世紀前半代から官衙が配されていたものと推定される。その範囲は東西384メートル、南北196メートル以上におよんでおり、その西限は幅14メートルほどの南北大溝によって区切られたものとみられる。

以上のような調査結果をもとに昭和59年度は土地区画整理事業計画をも勘案して、南北大溝の西側、すなわち右郭五条二・三・四坊および同六条三坊について発掘調査を行うよう計画した。

この昭和59年度の発掘調査計画については昭和59年5月21日、22日の両日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会議において了承されたため計画どおり実施することとした。

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備考
88	6AYM-C	1,300	4月～7月	右郭六条三坊
89	6AYM-C	1,500	8月～10月	右郭五条三坊
90	6AYM-C	1,700	11月～2月	右郭五条四坊

II 調査経過

1 概要

昭和59年度の発掘調査は当初の計画どおり第88次調査から開始した。調査地は政府南門の西南約350メートルのところで、その南約80メートルのところを御笠川が蛇行しながら流れています。したがって氾濫原がすぐ近くまで迫っている。このためこれより以南では遺構が保存されている可能性はきわめて薄い。条坊復原案のうえでは右郭六条三坊にあたる。耕作土の除去および一部についてはすでに遺構検出を終了しており、また遺構面が浅かったこともある。4月16日には遺構検出を終了した。検出した主な遺構は掘立柱建物10棟、井戸11基のほか土塙墓、溝などである。掘立柱建物はSB2550を除いてはすべて平安時代に属するものであり柱掘形も小さく不規則である。発掘区東辺部で検出したSB2550は東西に廂のつく南北棟で奈良時代後半に属するものであるが、他の建物同様に柱掘形や柱穴が小さい。また調査区域内からの瓦の出土量がきわめて少ないと、さらに土器類では甕および越州窯青磁が多いことなどから、これらの遺構は官衙に関するものではなく、大宰府官人の居宅跡ではないかと推定するにいたった。この調査は5月8日にはすべてを終了した。なお、この第88次調査期間中に学校院西辺部において住宅建設に伴う事前調査を第89次調査として実施した。

第88次調査終了に引き続き5月9日から第90次調査として右郭五条二坊推定地の調査を開始した。調査地は政府南門の西南約150メートルのところで昭和58年度に行った第87次調査地の北側隣接地である。第87次調査では掘立柱建物5棟および南北溝(SD2340)を検出しているが、このうち調査区北辺部で検出した2棟の建物(SB2525・2530)は南妻の柱列を検出したのみであり、またSD2340もさらに北へ延びている。したがって第90次調査ではこれらの遺構の延長部について調査を行った。調査の結果SB2525については桁行9間分をSB2530については8間分を検出したが、いずれもさらに北へ延びている。またSD2340については15メートル分を検出し、新たに47点の木簡が出土した。この結果SD2340から出土した木簡は合計160点となった。調査結果の詳細については第87・90次調査を合せて報告する。またこの期間中、学校院北辺部において現状変更に伴う調査を第91次調査として実施した。

次に7月から第92次調査として第88次調査地の北方約100メートルの地点、条坊復原案の上では右郭五条三坊推定地について調査を開始した。この調査は当初計画では第89次調査として予定したものであるが、これまで述べてきたような調査の経過から調査次数を繰り下げたものである。調査は排土置き場が確保できないことから二回に分けて行った。したがって調査期間が若干長くなり11月末に終了した。検出した主な遺構は掘立柱建物9棟、井戸4基、柵列など

である。検出した建物はいずれも官衙域の建物と比較して柱間寸法が不揃いであり、また地域的にみても第88次調査地と同様に官人の居宅跡と考えられる。またここでは建物の振れや柱筋の通り、さらに柱掘形から出土した遺物などから八世紀前半代にはほぼ時期を同じくして建てられたと見られる数棟の建物があり、当時の建物配置の一端を窺うことができた。このように第88・92次調査によって官人の居宅跡と推定される遺構が検出されたことから第14次調査の項で報告する南北大溝 S D 320は政庁前面における官衙域の西を画するものである可能性はきわめて大きくなつた。この第92次調査期間中に観世音寺北辺部において現状変更に伴う事前調査を第93次調査として行った。

第92次調査地の埋め戻し終了後12月10日から当初計画で第90次調査として予定していた地域を第94次調査として開始した。調査地は第92次調査地の西側隣接地で、条坊復原案では右郭五条三・四坊にあたる。調査対象地は南北に細長く、また排土置き場が確保できないため二回に分けて調査を行うこととした。昭和60年3月末現在南半部について調査を終了し、北半部についてなお調査継続中である。

以上59年度に行った発掘調査地を地区別に記すと下記の表のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積 (m ²)	調査期間	備考
88	6 A Y M -C	1,200	840306～840508	右郭六条三坊
89	6 Z G K	90	840420～840424 850108～850111	学校院西辺部
90	6 A Y M -B	420	840509～840706	右郭五条二坊
91	6 Z G K	12	840514～850517	学校院北辺部
92	6 A Y M -C	1,915	840702～841130	右郭五条二・三坊
93	6 K K Z -A	14	840817～840824	観世音寺北辺部
94	6 A Y M -C		841210	右郭五条四坊

2 第14次調査

本次調査は太宰府市の土地区画整理事業に伴う事前の調査である。本調査地域は昭和46年度に住宅建設の発掘届が出されたため、部分的であるが発掘調査を実施している。この時の調査結果については調査区域が部分的であったこともあり、調査終了後に概略的な報告は行っていたものの、十分とは言えなかった。しかし今年度になって区画整理事業が当調査地周辺部に及び、調査の結果新たに判明した点もあるので、今回、以前の調査分を合せ報告することにする。昭和46年度調査では調査対象地域に北（3m×12m）・東（3m×13m）・南（3m×15m）に「コ」字型にトレントを設定し調査した。調査の結果、今回報告するS D320溝の北端と南端部それに東側溝肩を南北に13m分検出している。この時点では幅13mの溝であることが判明し、また昭和56年度に実施した第76次調査検出の南北方向の溝と連続することが、ほぼ明らかとなっていた。そして、溝の部分的な発掘ではあったが、溝中からはその時点ではきわめて数少ない出土例であった木簡が5点出土し、最下層からは奈良期の土器が多量に出土するなどの貴重な成果を得ることができた。

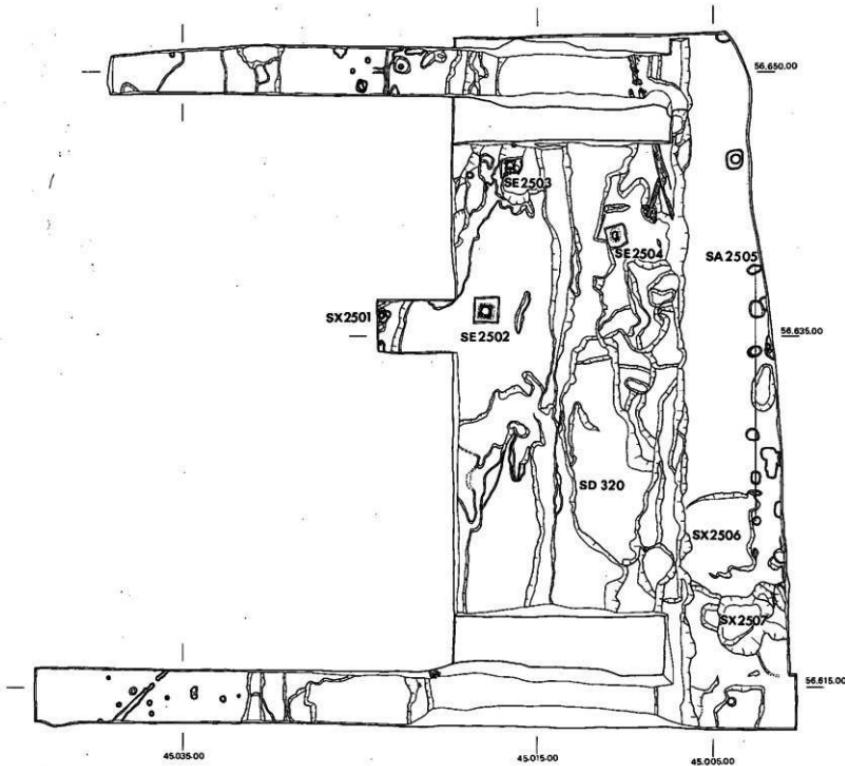
今回の調査の主たる目的は前回の調査で一部検出したS D320を全面的に発掘し、その詳細について知見を得、第76次調査検出の溝と連続することの確認を得ることにあった。発掘調査は対象地域の東半部について行い、前回調査分の一部についても再調査した。また西半部については数個所にトレントを設定し調査した結果、床土直下で遺構面となったが、顕著な遺構は検出されなかった。調査は昭和58年11月21日に開始し翌年1月24日に終了した。地番は太宰府市大字觀世音寺字大楠333番地である。

検出遺構

検出した主要な遺構は柵1条、溝1条、井戸3基、瓦組み遺構1基、土壇状遺構2などである。遺構面は全体に浅く、床土直下で遺構面となるが、南側では若干深くなる。発掘区の大部分は溝遺構（S D320）で占められ、東側部分の幅3m～5mの範囲でわずかに柵S A2505および落ち込みの土壇状遺構S X2506・2507を検出し、また西側の溝肩確認のため設定した拡張区で瓦組み遺構S X2501を検出しただけである。そして、溝底に近い部分で、溝の埋没後に構築された井戸3基を検出した。

柵

S A2505 発掘区東端近くで検出した南北方向に並んだ柱穴列である。柱間は5間あり、中央の柱間が広くなっている。中央柱間寸法は4.8m(16尺)で他は2.4m(8尺)である。柱掘形をみるとプラン的に一定しておらず、また深さも南から第1・5番目を除いて他が50cm～60cmあるのに対して20cmと浅い点など柵としてまとめるにはやや疑問があり、また2間の梁行を有

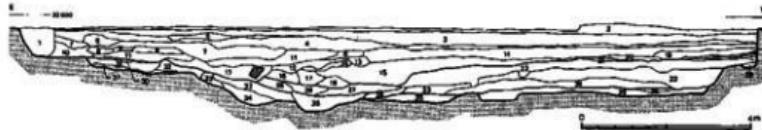


第2図 第14次調査造構配置図

し、東側へのびる2棟の東西棟建物を想定するとしても前に述べた二・三の点から確認し得ないが、ここでは柵遺構として報告する。

溝

S D320 発掘区の大部分を占める南北方向の溝である。東側溝肩はほぼ真南北方向をとり明瞭に検出したが、西側溝肩については発掘地域外へさらに拡がるため今回は明らかに出来なかった。しかしながら先の昭和46年度の調査では既に南・北で西側溝肩を一部確認していた。両調査の結果からみると溝は北端部で幅13.5m、深さ1.4mであり、南端部では幅16.0m、深さ1.9mを測る。溝底は北端部と南端部では約50cmの高低差があり、北から南へ流れている。溝の底部はなだらかに傾斜し中央部ではほぼ平坦な状態となっている。溝の埋土は大きく上層（灰褐色荒砂層・灰褐色砂質土層・黒灰色粘土層・暗青灰色砂質粘土層など）、中層（黒色粘土層・茶灰色砂層・暗青灰色砂質粘土層・窯植土層など）、下層（灰白色砂礫層・暗青灰色砂層・茶褐色砂層）からなり、そして中層の埋没時に形成された整地層がある。溝埋没後の堆積である②③を除去すると南北方向の小溝⑤が検出される。この小溝は溝埋土の上層を流れる溝でS D320最終末期の流れである。上層埋土と中層埋土の境をなすのは⑩の黒色粘土層で、その期の流れを示すものとして⑪の淡茶灰色砂層があり、その時の溜りである⑫は窯植土層である。この窯植土層は比較的厚くとくに溝中央部の南北に厚く堆積している。この中層窯植土層中から題籠1点と「鳥賦」などの文字を記した木簡1点が出土した。下層は⑬の灰白色砂礫層が大部分を占め、東側で⑭⑮の茶褐色砂層・暗青灰色細砂層が見られ、所々に⑯の窯植土層の溜りがみられる。この窯植土層は中層窯植土⑩⑪のように厚くなく、堆積状況も連続的みられるのではなく部分的である。とくに北端部付近と南側部分に多く堆積がみられる。この窯植土層からは「日置マカ良」など計6点の木簡が出土している。下層の大部分を占める灰白色砂礫層はこぶし大のものを含む荒砂層であり、流れが強かったことを物語っている。この灰白色砂礫層からは木簡1点が出土している。下層の最終期の流れを示す⑰は溝底のほぼ中央部を



第3図 SD320土層断面

- | | | | |
|----------------------------|-------------|---------|---------|
| 1. 昭和47年度開削トレンチ | 2. 黄褐色土(土壌) | 3. 灰褐色土 | SD320中層 |
| 4. 灰褐色砂質土 | | | |
| 5. 黑褐色砂質土 | | | |
| 6. 黑褐色砂(5と同じ) | | | |
| 7. 暗灰褐色粘土(砂がブロック状に混じる) | | | |
| 8. 黑色瓦砾 | | | |
| 9. 暗灰褐色粘土(7よりも砂質気味) | | | |
| 10. 淡灰褐色粘土 | | | |
| 11. 黑灰色粘土 | | | |
| 12. 黑灰色砂質粘土(砂は粗砂) | | | |
| 13. 暗灰褐色粘土(7と同じ) | | | |
| 14. 暗灰褐色砂(6に似る) | | | |
| 15. 黑褐色砂質土(粗砂、西側は粘質) | | | |
| 16. 黑褐色砂質粘土(12よりもやや砂が多く暗い) | | | |
| 17. 基礎瓦砾 | | | |
| 18. 黑色瓦砾 | | | |
| 19. 黑質灰褐色粘土 | | | |
| 20. 基質灰褐色粘土(バイラン土秋の土が混じる) | | | |
| 21. 暗茶褐色砂質土 | | | |
| 22. 黑褐色粘土 | | | |
| 23. 暗茶褐色砂(荒砂、下位は細砂粘質が混じる) | | | |
| 24. 暗青灰色砂質粘土 | | | |
| 25. 窯植土 | | | |
| 26. 淡茶褐色砂 | | | |
| 27. 窯植土(25と同じ) | | | |
| 28. 暗青灰色砂質粘土(24と同じ) | | | |
| 29. 暗茶褐色土 | | | |
| 30. 黑褐色粘土 | | | |
| 31. 黑褐色砂質土(11より粘質が強い) | | | |
| 32. 暗茶褐色砂質粘土(24に似る) | | | |
| 33. 基礎瓦砾 | | | |
| 34. 暗青灰色砂(灰色細砂) | | | |
| 35. 黑褐色砂 | | | |
| 36. 窯植土 | | | |
| 37. 灰白色砂礫(35と同じ) | | | |

やや蛇行しながら南北にのびる幅1.5m~2.0mの小溝で、溝底を抉るように流路をとっている。

井戸

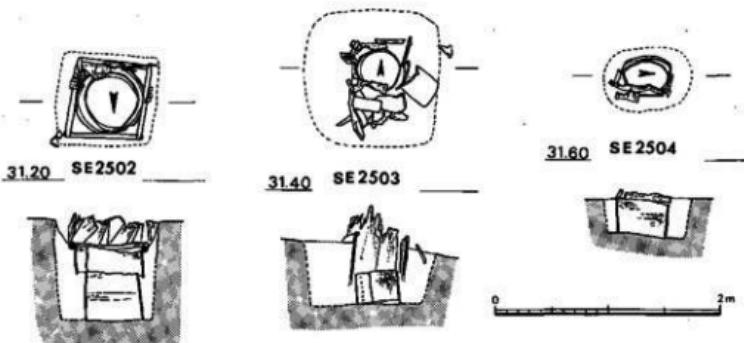
S E 2502 大宰府井戸分類のII-B・bに属する。溝S D 320に切込んでつくられた井戸で、掘形は井戸側検出面で確認され、東西0.9m、南北0.8mの方形プランである。掘形底面までの深さ約0.9mである。井戸側は東方に若干歪んでおり、上部は方形縦板、下部は曲物による構造である。上部の縦板材は幅約10cm~12cm、厚さ約1.5cmのもので南辺と東、西辺の一部に残存し、板材を二重ないし三重にあてがって立てられている。上部と下部の接合部分には径5cmの桜の丸太材を横棟にわたしている。下部は曲物2段が検出され、上段は径約60cm、高さ約22cm、下段は径約46cmで下方にむかって大きくなり径50cmを測る。

S E 2503 S E 2502の北側で検出し、S D 320に切込んでいる。大宰府井戸分類のII-B・bに属する。掘形は明らかでない。井戸側上端から底面までの深さ約0.6mである。上部は幅20cm~25cm、厚さ2cmの板材を縦に立てているが、すべて東方に傾いている。東側は板材ではなく、格子目叩きの平瓦を立て側板としている。南側には繩目・格子目叩きの丸・平瓦が乱積みされていた。下部は径38cm、高さ27cmの曲物が掘えられている。

S E 2504 発掘区西北隅部で検出し、S E 2503の東側に位置する。保存状態が悪く、井戸側検出面から底面までの深さが0.35mである。井戸側は曲物2段を検出したが、上段は残存高がわずか10cmで残りが悪く、下段は若干歪んではいるが上端部で径46cm、下端部で径40cmを測る。井戸側検出面で曲物周辺から板材が検出されたことから大宰府井戸分類のII-B・bに属すると考えられる。

土壤

S K 2508 発掘区東端中央部で検出した長径2.50m、短径1.40mの長円形を呈する土壤であ



第4図 S E 2502・2503・2504実測図

る。床土直下で検出された。深さは15cm～25cmあり、底部は錐錐状を呈する。

不明遺構

S X 2501 発掘区のほぼ中央拡張区の西端で検出した瓦組みの遺構である。直径80cmの掘形を有し、下部に一木を挟った桶様のものを置き、その上に瓦を縦に円形に並べて組合せ、井筒状にしている。下部の桶様のものは内径約30cm、深さ約45cmあり、内底は窩植のため凹凸がみられる。確認できた口縁部は2cm前後の厚さであるが、下方に向って肥厚しており下部は比較的の厚味を持ったものとみられる。上部の瓦組みは下部の桶様の口縁に沿って平瓦を縦位（一部横位）に2段ないし3段に並べ組んでいる。最上段の内径は30cm前後で桶様のそれとほぼ同じである。最上端からの深さは約85cmであるが、検出時には平瓦が倒れた状態で上面を覆っていたので、本来はさらに2段ないし3段組まれていたものとみられる。

S X 2506 発掘区の東南隅部近くにあり、溝S D 320の東脇部に接する浅い土壤状の落ち込みである。プランとして明瞭な輪郭はみられず、不整形で、深さ5cm前後で浅い。

S X 2507 S X 2506の南に接する土壤状の落ち込みで、プランは不整形であり、深さは50cm前後でS X 2506より深い。

出土遺物

S D 320出土土器・陶磁器（第6～16図、図版42～48）

溝から出土した土器・陶磁器はかなりの量にのぼる。土器には須恵器・土師器があり、陶磁器には緑釉・灰釉などの日本製施釉陶器と中国製陶磁器の青磁・白磁などがある。記述にあたっては、大きく須恵器・土師器・日本製施釉陶器・中国製陶磁器の4つの項に分け、さらにそれを溝埋土の層序に従って、上層・中層・下層の3つに分けて報告することにする。

須恵器

上層出土の須恵器はきわめて少なく、ここでは中・下層出土のものについて記述する。

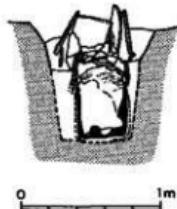
中層

蓋(1～3) 口縁部の断面がやゝ不明瞭な三角形となる1・3と明瞭な三角形を呈し、端部をわずかに外反させる2がある。いずれも天井部は回転ヘラケズリ調整し、焼成も堅緻で、全体の調整も丁寧である。

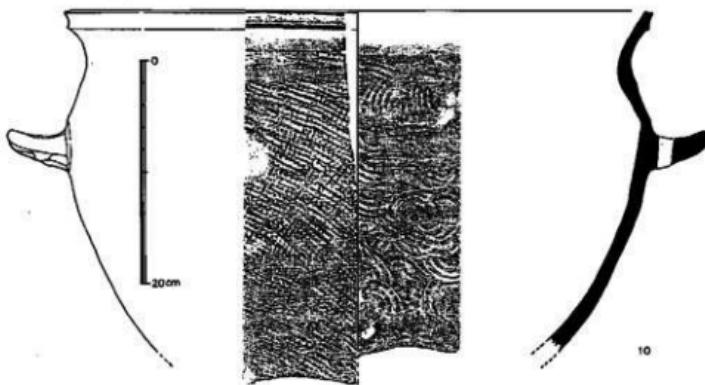
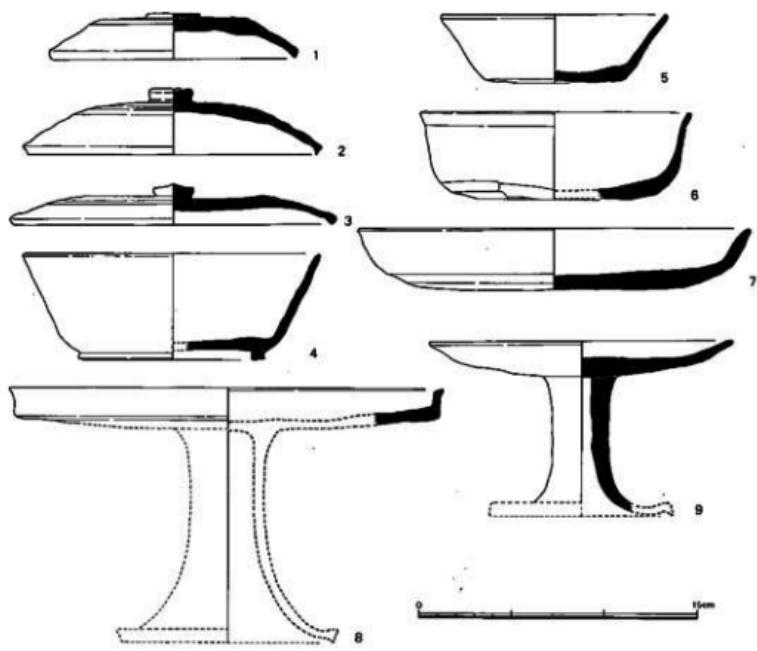
杯(4～6) 4は断面四角の低い高台を底部端に貼付している。体部は体部下位から斜め外方に直に立ち上がる。体部はヨコナデ、内底はナデ調整している。5・6は無高台で、5の体



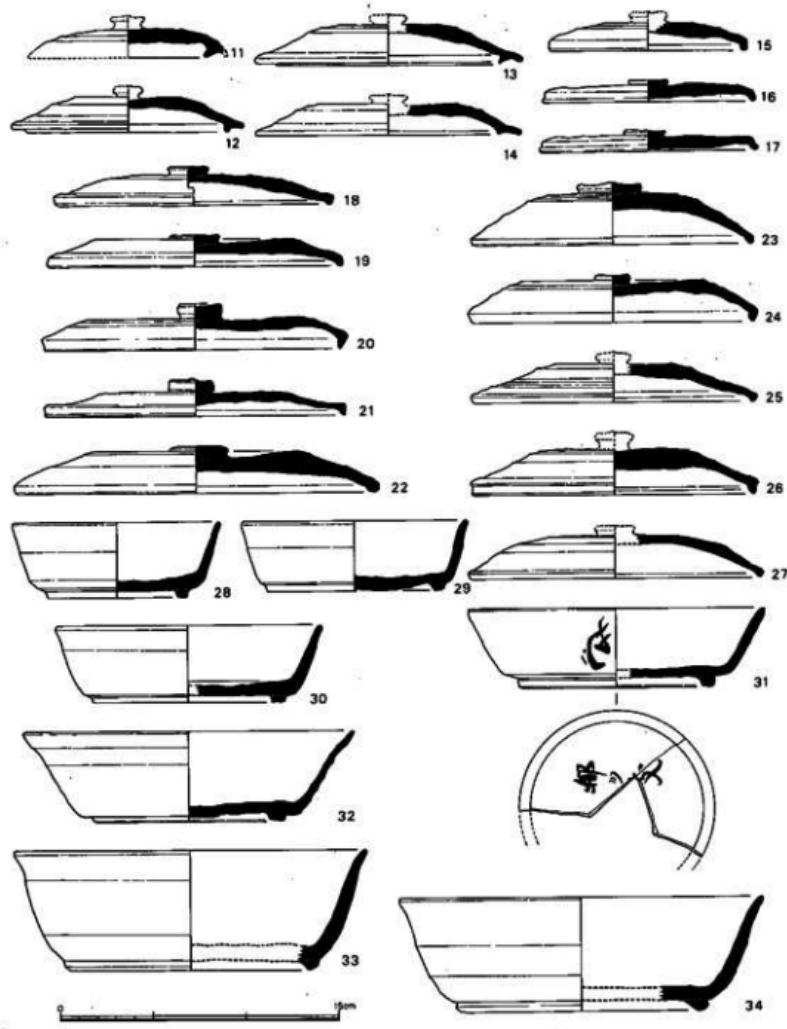
31.70



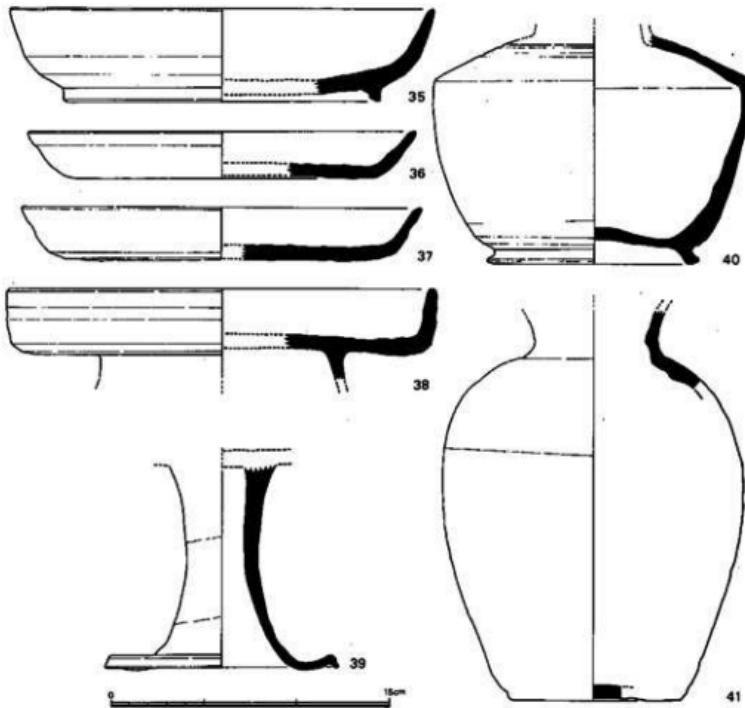
第5図 S X 2501実測図



第6図 SD320出土土器・陶器実測図(1)



第7図 SD 320出土土器・陶磁器実測図(2)



第8図 SD 320出土土器・陶磁器実測図(3)

部はヨコナデ、内底はナデ調整し、外底はヘラ切
りである。5の底部と体部は境が不明瞭で、体部
下位は丸味を有し、口縁部上位で若干外反させ、
内面はわずかに凹状になり、端部は丸くしている。
外底および体部下位は手持ちヘラケズリし、体部
はヨコナデで、内底はナデ調整である。

皿(7) 大形の皿で、底部と体部の境は不明瞭
で丸味を持つ。口縁端近くでわずかに外反させる。

須恵器
SD 320 中層出土

	口 極	器 高	底径・高台径
1	13.2	2.5	
2	15.6	3.6	
3	17.3	2.2	
4	16.0	5.8	10.1
5	12.2	3.7	7.6
6	14.7	4.8	8.4
7	21.1	3.4	15.9
8	23.2		
9	16.3		

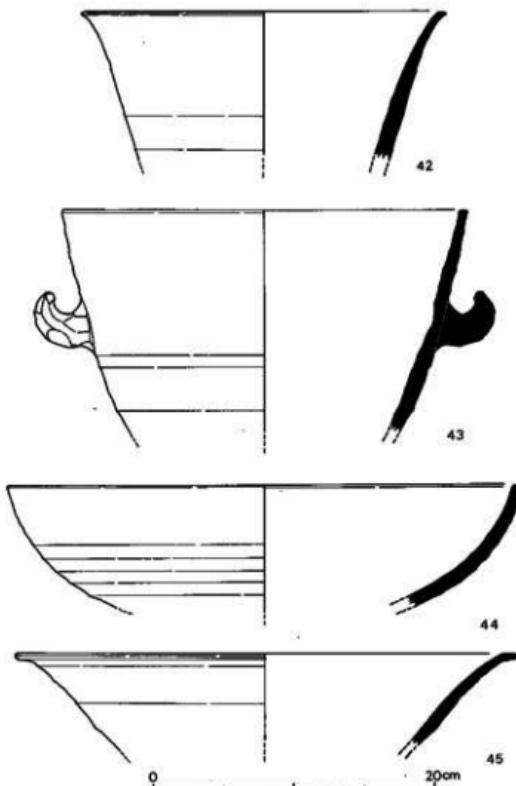
外底は体部下位まで丁寧なヘラ削り調整し、体部はヨコナデ、内底は一部ナデ調整している。胎土には若干砂粒を含み焼成はやや軟質である。

高杯(8・9) 8は杯部の小片で、体部は直に立ち上がる。口縁部は「く」字状に外反させ、端部は平らにする。外底は回転ヘラ削りしている。9の杯部は浅く、底部と体部には明瞭な境がなく丸味がある。杯部から脚部はヨコナデ調整しているが、内底中心部付近はナデ調整している。胎土には砂粒の混入は少なく、焼成も堅緻である。口縁部に一部煤の付着がみられる。

甕(10) 復原口径約52.4cmを測り、肩部最大径は上位にあり、口径とほぼ同じでありその部分に把手を貼付している。外面に細格子、内面に同心円の叩き目を有する。内底付近はナデ調整している。

下層

蓋(11~27) 11~14は返りを有し、11・12の小形と13・14の大形がある。身受け部と撮みを欠く他は完存しており、身受け部は意識的に打ち欠かれたようである。12の内面には漆状のものが付着している。14の返りはわずかにみられるだけで、七世紀の終末期の形状を示す。いずれも天井部の外面は回転ヘラ削りし、内面はヨコナデ後ナデ調整する。15~27は返りを有しな



第9図 SD 320出土土器・陶器実測図(4)

いもので、小形の15~17と一般的にみられる18~27がある。

15~16は口縁部を若干外反させ端部を丸くしている。一般的なものでは口縁部が明瞭な断面三角形を呈する20・24・26と口縁部をわずかに外反させる21がある。いずれも天井部外面はヘラ削り、内面はヨコナデ後ナデ調整している。19の天井部外面に墨書（判読出来ず）があり、内面に墨痕がみられる。また27は硯に転用しており、内面に墨痕がある。

杯（30~34）やや小形で体部が直上気味に直線的に立ち上がる28~31とやや大ぶりで深く、体部は斜め上方にのび、口縁部を外反させ、高台を底部端に貼付する32・33がある。底部と体部の境が不明瞭で丸くなる大形の35がある。35は体部下位にヘラ削り調整をのこし、高台内面を凹状にする。31の外底のほぼ中央に「那ツ支」、体部外面に横方向に「也」と判読できる墨書がある。

皿（36~37）いずれも底部は切り離しのままで、内底はヨコナデ後ナデ調整している。

高杯（38・39）杯部の一部と脚部がわずかに知れる小片である。厚手の体部は底部からほぼ直角に立ち上がる。杯部の底面はヘラ削りし、他はヨコナデないしナデ調整している。脚部の径が大きく、この形状のものは類例がなくやや特異なものと言える。小片であるため復原にやや疑問もあり、若干変る可能性もある。39は杯部を欠失した脚部片で、端部を断面三角形にしている。

壺（40~41）40は長頸壺の頸部を欠く。体部の傾きは少なく、下位はヘラ削り調整している。肩部に2条の浅い沈線が巡る。胎土には砂粒を比較的多く含む。胴部最大径17.0cm、高台径11.4cm。41は長胴の壺で、口縁部を欠失する他は完存する。体部中位よりやや上位まで回転ヘラ削りし、中位以上から頸部にかけてはヨコナデで、外底部はナデ調整している。胎土中には砂粒が多く、目立っている。胴部最大径は中位よりやや上にあり、16.2cmを測る。底部径は9.0cmである。

鉢（42~45）42は直線的な体部で口縁部はわずかに外反する。口縁端は平坦にしている。外側の体部中位まで回転ヘラ削りし、他はヨコナデ調整している。胎土中には砂粒は少なく精良

下層出土

	口径	器高	底径・高台径
12	12.5		
13	14.4		
14	14.3		
15	10.6		
16	11.5	1.2	
17	11.8	1.1	
18	14.9	2.1	
19	16.0	2.2	
20	15.8	2.5	
21	16.2	2.0	
22	19.6	2.5	
23	15.1	3.4	
24	15.2	2.1	
25	15.3		
26	15.3		
27	15.6		
28	11.2	4.1	7.5
29	12.2	3.8	9.4
30	14.4	4.1	10.35
31	15.9	4.3	10.6
32	17.8	4.9	10.3
33	19.0	6.5	13.6
34	19.6	6.2	13.6
35	22.9	5.0	
36	20.9	2.5	
37	21.6	2.9	
38	23.2		

なものである。復原口径26cm。43は把手付きの鉢で、体部から口縁部にかけてわずかに内彎する。把手貼付位置から下位は回転ヘラ削りし、他はヨコナデ調整している。把手は指押えによる成形である。復原口径28.8cm。44は丸底の鉢で、外面は口縁部付近までヘラ削りし、他はヨコナデ調整している。内底は使用されたのか磨滅している。復原口径36.6cm。45は朝顔形に大きく開く鉢で、口縁部を「く」字状に外反させ、上面は平坦にしている。口縁部近くまで回転ヘラ削りし、他はヨコナデ調整している。復原口径35.6cm。

土師器

上層

杯(46~57) 口径10.8cm~11.6cm、器高2.1cm~3.3cmを測る46~53と器高が高くなる口径11.2cm~11.8cm、器高3.0cm~3.5cmを測る54~57の2つに大別される。全て、底部はヘラ切り、体部はヨコナデで、内底は49の他はナデ調整している。51~54~56を除いた他は板状圧痕を有する。

高台付皿(58~59) 底部はヘラ切り、体部はヨコナデし、内底はナデ調整している。

碗(60~66) 器高が高く、直線的な体部を有する60・61と器高が低く、体部下位に丸味を有する62~63、それに口縁部をわずかに外反させる64~66の3つに分けられる。全て底部はヘラ切りで、62~63・65~66には板状圧痕を残す。体部はヨコナデで、内底はナデ調整している。

甕(67~68) 口径24cmの67と口径21.8cmの68がある。いずれも外面には煤が付着し、内面には炭化物が付着している。67の体部外面中位以下は粗い平行(一部斜格子)の叩き目を有し、68にも粗い平行(一部正格子)の叩き目が施されている。

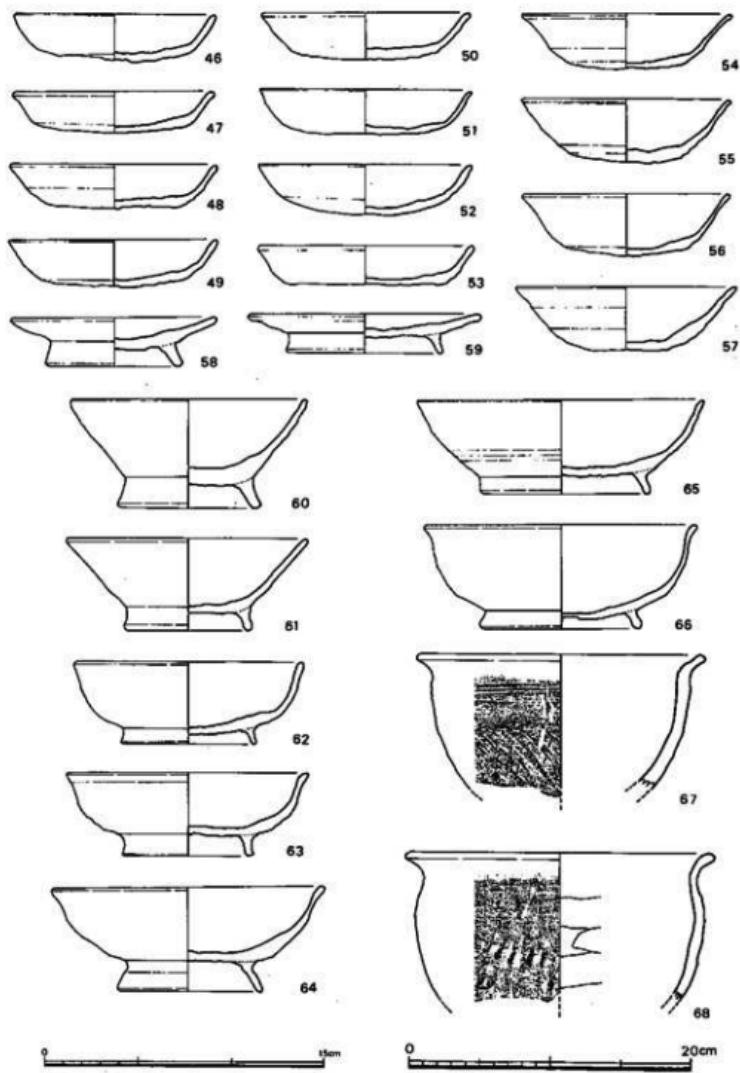
中層

蓋(69) 口径26.7cmを測る大形の蓋である。口縁端部はわずかに外反させる。天井部外面は丁寧に回転ヘラ削りし、口縁部付近はヨコナデ、内面はナデ調整している。胎土中には砂粒の混入はきわめて少なく精良で、焼成も良好である。

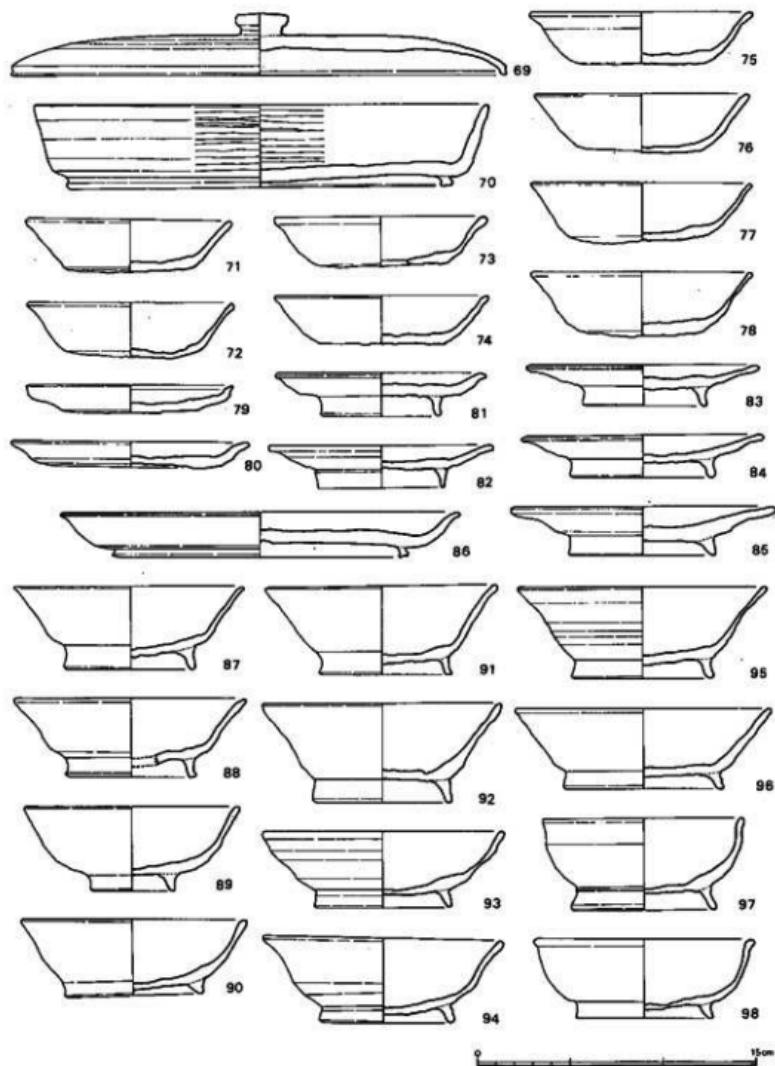
杯(70~78) 70は高台付杯で、口径24.5cmの大形で、69の蓋に見合う法量をもつ。体部の内外面から内底を丁寧なヘラミガキを施し、外底部はヘラ削り調整している。胎土はほとんど砂粒を含まず精良で、焼成も良好である。71~78の杯は口径11.1cm~11.5cm、器高2.6cm~2.9cmの71~74と口径11.6cm~12.0cm、器高2.8cm~3.5cmの75~78の2つに大別できる。全て底部はヘ

土師器 SD 320 上層

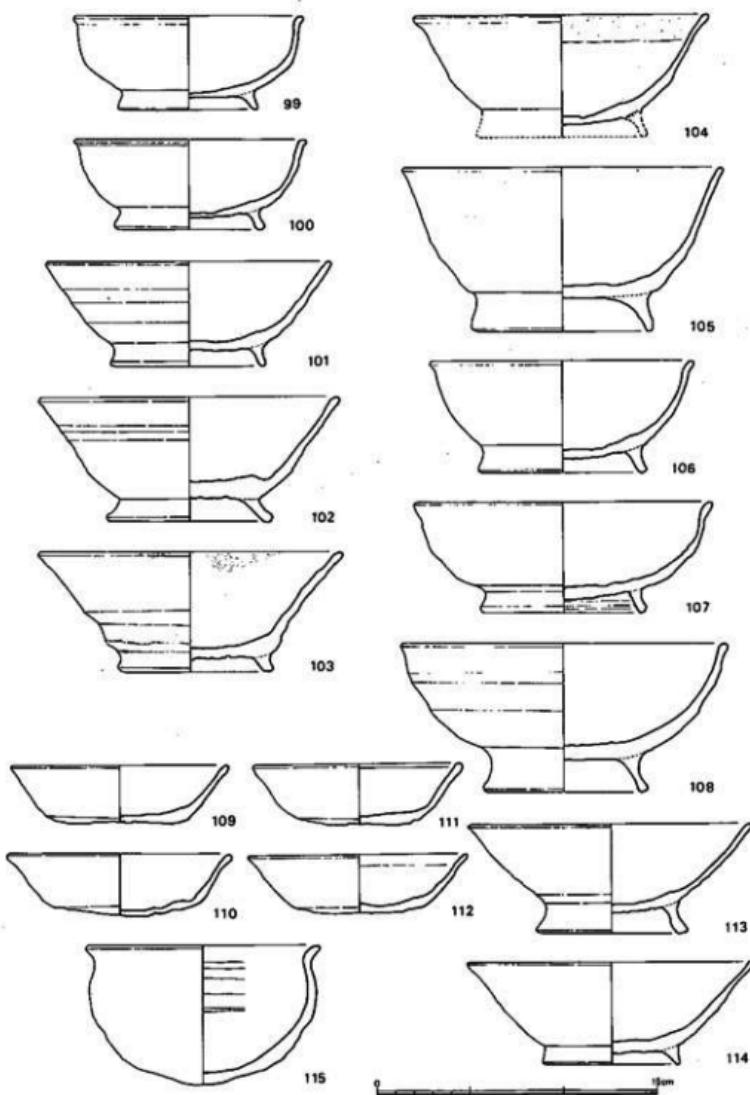
	口径	器高	底径・高台様
46	10.8	2.5	7.2
47	10.9	2.2	8.0
48	11.1	2.4	7.0
49	11.2	2.5	7.5
50	11.2	2.5	7.8
51	11.4	3.3	
52	11.5	2.7	
53	11.6	2.1	8.8
54	11.2	3.0	6.4
55	11.2	3.4	6.4
56	11.2	3.4	6.6
57	11.8	3.5	6.6
58	11.1	2.7	7.3
59	12.6	2.1	8.4
60	12.8	5.9	7.8
61	13.0	5.0	6.8
62	12.4	4.4	7.2
63	13.0	4.5	7.1
64	14.8	5.6	7.8
65	15.4	5.1	9.1
66	14.7	5.6	8.7



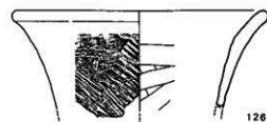
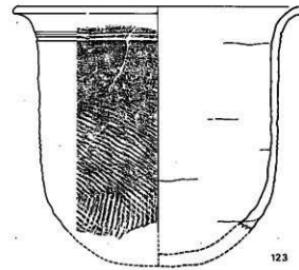
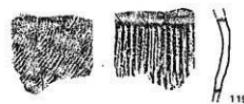
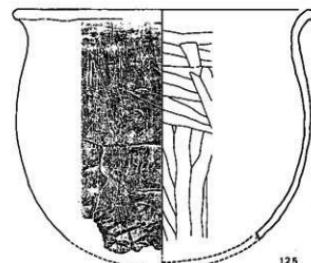
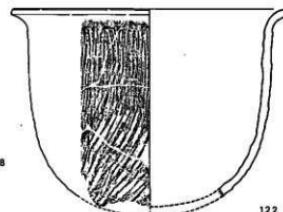
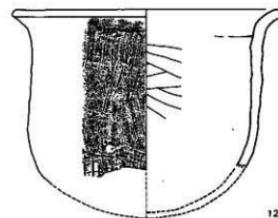
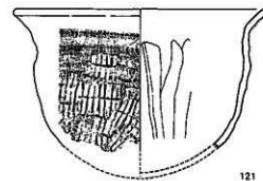
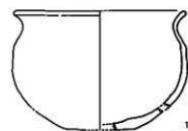
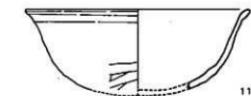
第10図 SD 320出土土器・陶磁器実測図(5)



第11図 S D320出土土器・陶磁器実測図(6)



第12図 SD320出土土器・陶磁器実測図(7)



0 1 20cm

第13図 SD320出土土器・陶器実測図8)

土師器
SD 320 中層

ラ切りで、体部はヨコナデするが、内底部は73を除いて他はナデ調整する。73・75以外は板状圧痕を有する。77の内面にはわずかに煤の付着がみられる。

皿(79・80) 底部はヘラ切り、体部はヨコナデ、内底はナデである。79は体部上位で直上に屈曲させ口縁部を外反させる。79の外底には板状圧痕を有する。

高台付皿(81~85) 口径11.4cm~12.1cmの81・82と口径12.5cm~14.2cmの83~85がある。体部はヨコナデで内底はヨコナデないしナデである。底部にヘラ切り痕を残す。

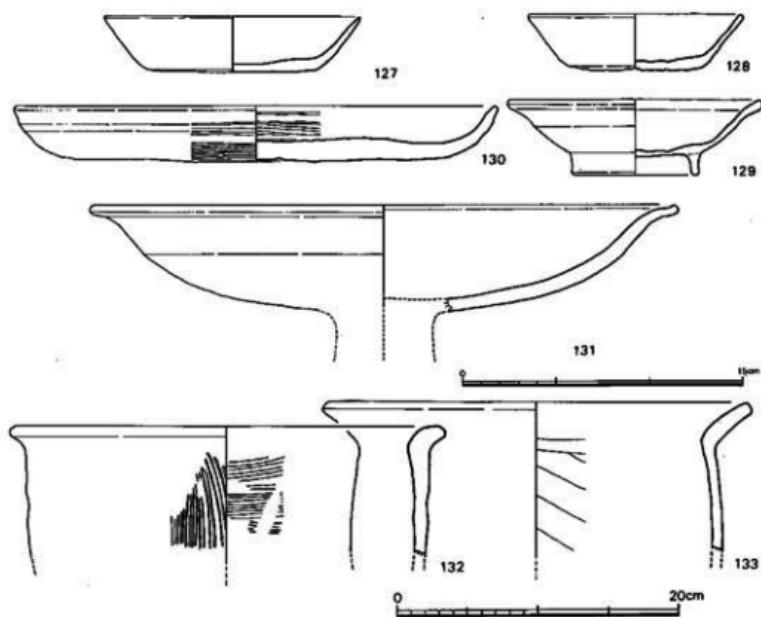
椀(87~96) 口径10.4cm~12.5cm、器高4.1cm~5.4cmの87~100と口径14.1cm~17.5cm、器高5.6cm~8.8cmの大形の101~108がある。87~96は体部下位に若干丸味を有し、体部から口縁部はほぼ直線的で斜め外方にのびるのを特徴とするAタイプと97~100のように体部が内彎し、口縁部を外反させるBタイプがある。101~105は前者のAに対応するもので、106~108は後者Bに対応する。全て体部、口縁部はヨコナデで調整し、内底はナデである。但し、108は内面にミガキを施し、コテあて痕を有する。底部はヘラ切りで、半数以上に板状圧痕が残る。89・90・101・103には煤が付着している。

整地層

杯(109~112) 全てヘラ切りで、体部はヨコナデで、内底はヨコナデないしナデである。112以外は板状圧痕がみられる。

椀(113~114) いずれも直線的な体部を有するが、113は口縁部をわずかに外反せる。体部・口縁部はヨコナデで、内底はナデである。113の口縁部外面には一部煤の付着がみられる。

	口径	器高	底径・高台径
69	26.6	3.4	
70	24.5	4.5	21.0
71	11.1	2.9	7.2
72	11.1	2.9	7.2
73	11.4	2.7	7.0
74	11.5	2.6	6.8
75	12.0	2.8	6.9
76	11.6	3.2	6.8
77	11.8	3.2	6.8
78	11.8	3.5	6.6
79	11.1	1.5	7.3
80	12.8	1.5	9.8
81	11.4	2.4	6.4
82	12.1	2.4	6.3
83	12.5	2.2	6.7
84	13.0	2.3	7.8
85	14.2	7.9	2.6
86	21.5	2.4	15.9
87	10.4	4.5	7.1
88	12.5	4.3	7.1
89	11.6	4.5	4.8
90	12.2	4.1	7.5
91	12.5	4.8	7.1
92	12.8	5.4	7.4
93	13.1	4.1	7.4
94	13.0	4.6	7.2
95	13.4	5.0	7.7
96	13.8	4.4	8.5
97	10.8	4.9	7.8
98	11.9	4.3	7.4
99	12.3	5.1	7.6
100	12.5	4.9	8.1
101	15.3	5.6	8.3
102	16.2	6.7	8.9
103	16.4	6.5	8.3
104	15.8	6.6	9.2
105	17.2	8.8	9.6
106	14.1	6.1	9.0
107	15.9	6.0	8.8
108	17.5	8.7	8.0
109	11.8	3.1	7.6
110	12.1	3.4	7.8
111	11.3	3.3	6.5
112	11.8	3.2	6.9
113	15.3	5.9	8.1
114	15.4	5.5	7.3



第14図 SD320出土器・陶器実測図(9)

壺(115) 口径12.6cmで、外面はヨコナデで、内面は横方向の削りである。外面には煤が付着している。

鉢(116) 口径22.4cmの底を丸くする鉢で、鍋として使用している。口縁部は外反し肥厚させる。外底部は手持ちヘラ削りし、他はヨコナデで、内面は刷毛目調整する。外面には煤が付着し、内面には炭化物が付着している。焼成は良好である。

壺(117～125) 口径17.2cm、復原高は約12cm位に考えられる。底部は平底気味で、底部がナデ以外はヨコナデにより調整している。外面に煤付着がみられる。胎土中には砂粒をほとんど含まず、焼成も良好である。118～120は玄界灘式製塙土器である。いずれも小片で、119と120は胴部片である。平面は細かい平行叩き目、外面は木目に直交する粗い平行叩き目を伴う。製塙土器特有の胎土で、淡茶色を呈している。121は口径25.2cmで、外面には粗い格子の叩き目があり、内面は縦方向にヘラ削りする。胎土中の砂粒は比較的少なく、焼成も良好である。外面には煤の付着がある。112～124は胴部が直に近い形状を持つ。122は口径27.6cmで体部外面の上位は刷毛目と平行叩き目が重複し、中位以下は平行叩き目を有する。口縁部付近の内外面

土師器
SD 320 下層

はヨコナデで、内面の口縁部以下はナデである。また内面には指頭圧痕が著しく、赤色物および炭化物が付着している。123は口径29.0cmで、体部外面は平行叩き目を有するが上位はヨコナデで叩き目を消している。

	口径	器高	底径・高台径
127	13.8	3.0	9.2
128	11.5	3.0	7.1
129	13.7	4.1	6.3
130	2.6	3.0	18.9

124は口径27.0cmで、体部外面は刷毛目調整を施しているが、体部下位は粗い格子の叩き目がみられる。口縁部内外面はヨコナデで、他はヘラ削りする。外面には煤が付着する。125は胴部が丸くなる特徴を有する。口径30cmで、胴部最大径は上位にあり29.8cmを測る。体部外面は乱雑な刷毛目調整を施し、体部下位は粗い格子の叩き目がみられる。口縁部内外面はヨコナデで、内面はヘラ削りである。126は外反する体部と口縁部の小片である。口縁部は肥厚している。口径25.6cmで、体部外面は平行叩き目を有し、口縁部はヨコナデで、内面はヘラ削りする。小片であるため全形は知り得ないが、類例もなくわめて特異な形態の土器(ここでは叩き目などから甕類として報告する)と言える。

下層

杯(127・128) 127は底部をヘラ削りする。体部などの調整は磨滅して不明である。胎土は精良である。128は底部をヘラ切り、体部をヨコナデ、内底はナデである。板状圧痕を有す。

椀(129) 直線的な体部は高台部から斜め外方にのび、肥厚気味の口縁部はわずかに外反させる。体部はヨコナデ、内底はナデである。

皿(130) 口径26cmを測る大形の皿である。底部と体部の境が不明瞭で、体部は内巻気味となる。体部の内外面と内底は丁寧なヘラミガキを施す。

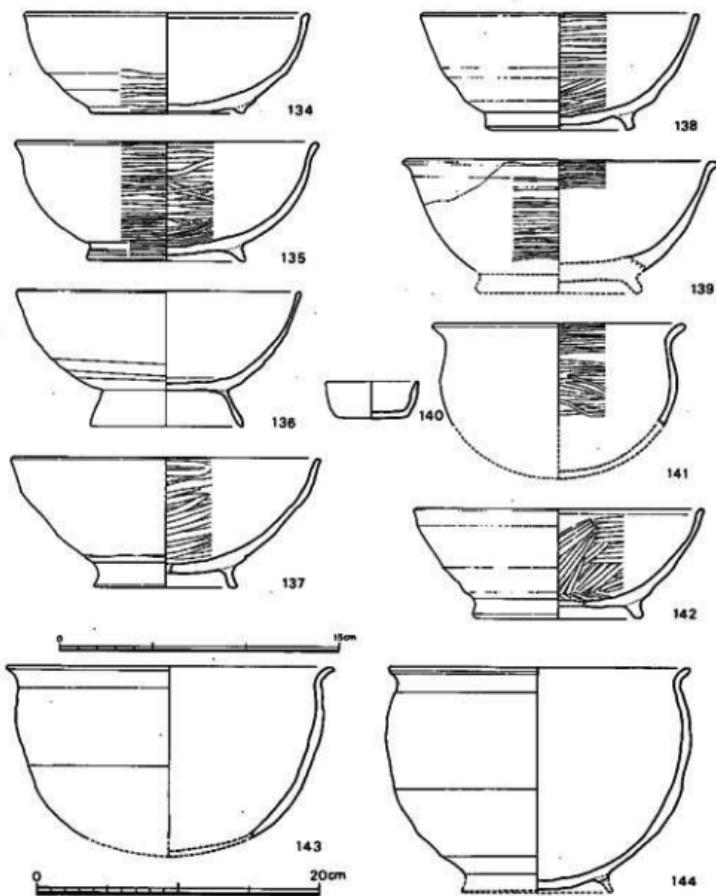
高杯(131) 杯部のみの小片で、復原口径31.6cmを測る大形のものである。杯部の底部と体部は丸くなり、境はない。外反させた口縁部は上方へつまみ上げ不明瞭な断面三角形となる。底部から体部中位は回転ヘラ削りし、口縁部はヨコナデである。胎土はきわめて精良で、淡赤茶色を呈する。

甕(132・133) 口縁部を短く「く」字状に外反させる甕で、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整を施す。口縁部はヨコナデである。復原径は31.0cm。133はやや胴のふくらむ甕で、体部外面はナデで内面はヘラ削りする。外面には煤が付着する。復原口径30.4cm。

黒色土器

上層

椀(134・135) 内外面を焼したB類がある。いずれも内外面に粗いヘラミガキを施す。134は軟質なため、とくに内面のミガキは不明瞭であり、体部下位は回転ヘラ削りされている。135の底部には板状圧痕を有する。



第15図 SD320出土土器・陶磁器実測図10

整地層

椀(136・137) いずれも内面のみを焼したA類で、136は内面にヘラミガキを施しているものの、軟質なため不明瞭である。外面の体部下位は回転ヘラ削りし、底部には板状圧痕がみられる。137も内面に粗いヘラミガキを施し、比較的明瞭に残る。

中層

椀(138・139) いずれも内面のみを焼したA類で、138は内面を粗いヘラミガキし、139は内外面の全面をヘラミガキする。138は板状圧痕を有する。

皿(140) 内外面を焼すB類である。内外面の全面をヘラミガキする。体部はヨコ方向のミガキを施す。

甌(141・143・144) いずれも内面のみを黒色に焼したA類である。141は口径13.6cmで、内面をヨコ方向にヘラミガキする。外面は淡茶色を呈し煤が厚く付着する。143は口径23.2cmを測り、内面をジグザクにヘラミガキし深黒色の光沢を持つ。外面は口縁部から体部中位までヨコナデで、中位以下はヘラ削りする。144は高台付の甌で、口径21.3cmを測る。外面の口縁部から体部中位は回転ヘラ削りし、中位以下は回転による荒いヘラ削りを施す。内面の中位以上は回転ヘラミガキし、中位以下は横方向のジグザクのミガキを施す。

下層

椀(142) 内面のみを焼したA類で、内面は粗いヘラミガキを施す。体部外面はヨコナデである。

灰釉陶器

皿(145) 高台付の皿の底部片である。内面には淡黄緑色の釉が施され、外面は露胎となる。外面の体部下位と底部は回転ヘラ削りしている。上層出土。

綠釉陶器

椀(146・147) 146は淡茶色ないし暗灰色の精良な胎土に濃緑色の釉を全面に施す。内底見込みに沈線を巡らし、また高台疊付部に凹線を入れる。残存部の見込みに白色粘土の目跡1個が残存しており、位置的に3足になると考えられる。147は底部と口縁部片であり、直接には接合しないが、同一個体と考えられ図上復原した。内底見込みに暗文状のミガキを施す。体部の外面はヘラ削りしている。

上層

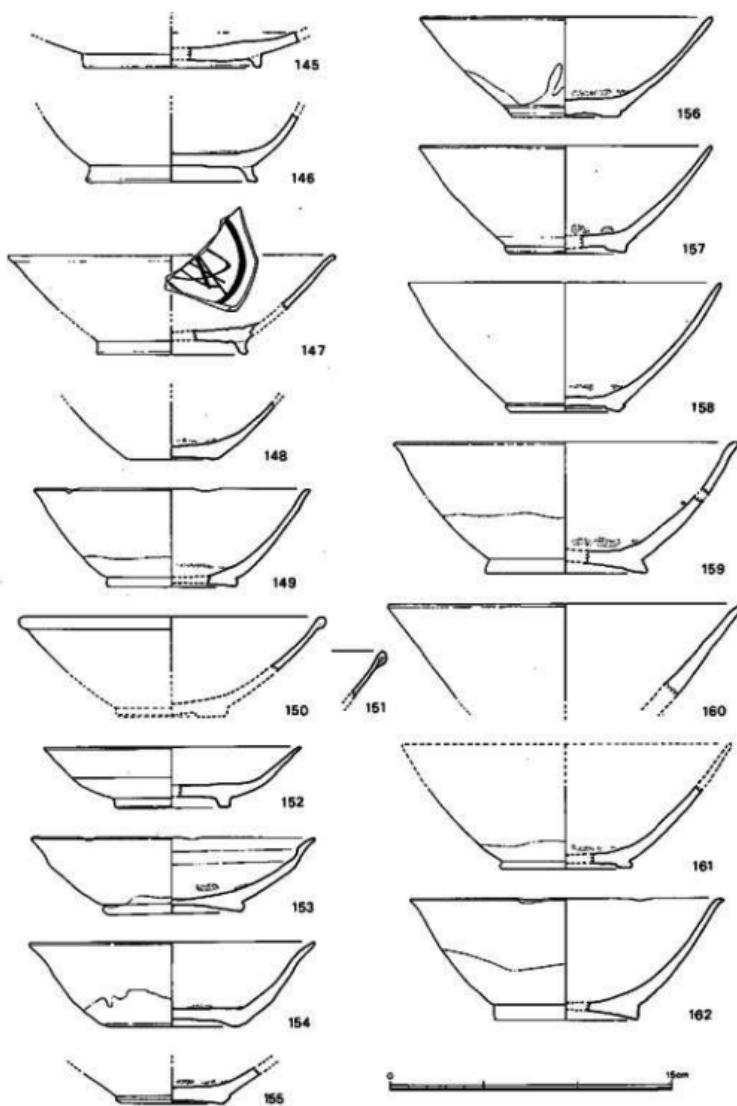
青磁

椀(148・149) いずれも越州窯系で、148は平底となり、全面に黄茶色の釉をかけている。内面の見込みと外底部周縁には白色を呈する目跡が5個ある。149は輪花を有する平底の椀で、外面の体部下位と底部は露胎となっており、外底部はヘラナデを施している。釉下には白化粧土を施す。

中層

黒色土器 上層、整地層、中層、下層

	口 径	器 高	底径・高台径
134	15.3	5.4	8.9
135	16.3	6.45	8.1
136	14.3	7.3	8.2
137	16.6	7.1	7.7
138	15.0	6.3	8.0
139	16.9		
140	5.0	2.0	4.3
142	15.5	6.0	9.1



第16図 SD320出土土器・陶磁器実測図(1)

白磁

椀(150・151) 口縁部を折り曲げて小さな玉縁をつくる椀の小片である。淡黄白色の釉を全面にうすく施す。邢州窯系白磁と考えられる。

青磁

皿(152) 復原口径は13.8cm、器高6.2cmで、深草色の釉を全面に施す。体部下位はヘラ削りしている。

杯(13・154) 輪花を有し、口縁部を外反させる。口径15.2cm、器高4.1cmで外面の体部下位および底部は露胎である。白土の目跡6個がある。154の外面体部以下と底部は露胎で、釉は黄緑色を呈する。口縁部に褐斑がある。

椀(155～159) 155は淡緑黄色の釉を全面に施している。外底は回転ヘラ削りし、高台風の周縁部はヘラナデし、9個の目跡が残る。156は口径15.6cm、器高5.4cmで、濁黄緑色の釉を施し、外面体部下位と底部は露胎となっている。内底見込みと高台疊付にそれぞれ7個の目跡がある。157は口径15.6cmで淡緑黄色の釉が全面施釉され、内底見込みと高台疊付部に目跡がある。158は底部を除いて淡黄緑色の釉が施される。釉下に白化粧土がある。内底見込みに目跡7個がある。口径16.6cm、器高6.5cm。159は2個の破片を図上復原したもので、体部中位以下を露胎とし、釉は淡黄緑色の釉を施す。釉下に化粧土がみられる。外底はナデている。155～159はいずれも越州窯系である。

整地層

青磁

椀(160) 口縁部片で、復原口径18.9cmである。輪高台か円盤高台のものであろう。

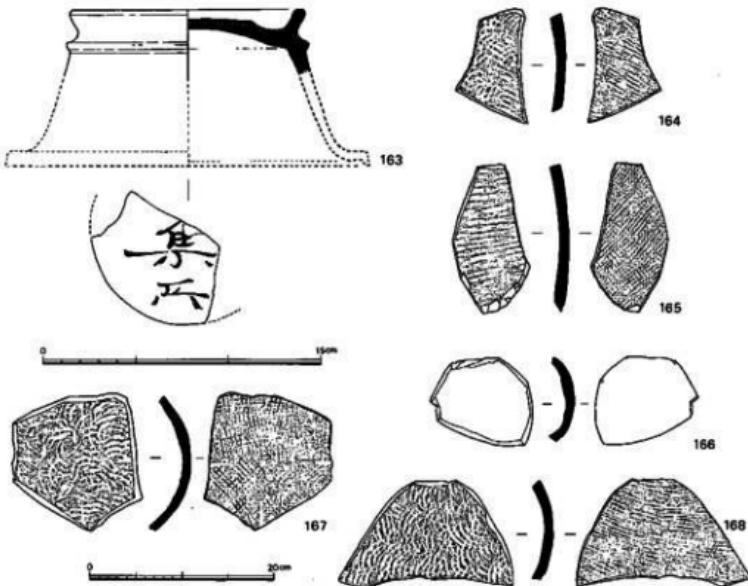
下層

青磁

椀(161・162) 161の体部下位と底部は露胎で、淡黄白色釉を施す。釉下に化粧土があり、内底見込みに目跡を有す。162は輪花を有し、外底を除いて淡黄緑ないし暗茶色の釉を施す。外面の口縁部から体部中位には釉下に化粧土がある。底部に糸切り痕を残す。

墨書き土器(図版48)

小破片であるため作図できなかった墨書き土器についてまとめて報告する。これらは全てSD320出土のものである。Aは須恵器皿の底部に書かれており、「主典」と判読できるが、「主」についてはやや疑問が残る。中層出土。Bは須恵器杯蓋の内面の口縁部近くに書かれている。これで一字を成すか不明であるが現状では「家」と判読できる。中層出土。Cは須恵器杯蓋の天井部に書かれ、「家」と判読できるが、熟語を成すものは不明である。中層出土。Dは須恵器杯蓋の内面口縁部付近に墨書きされているが、上部が欠失しているため判読できない。下層出土。Eは須恵器の杯蓋と思われるが小片であるため器形は判然とせず、墨書きについても偏の



第17図 SD 320出土土器・陶磁器実測図(1)

「彳」がかろうじて読める程度である。中層出土。Fは須恵器皿の底部に墨書きされており、文字左半分が欠失しているため不明である。下層出土。Gは須恵器皿の外底部のはぼ中心部に墨書きされているが、文字の上半分が欠失して判読できない。中層出土。Hは土師器杯の外底部の全面に墨書きされているが、かろうじて「息」の2字が判読できるだけで他については明らかでない。中層出土。

硯(第17図)

円面硯(163) 円面硯の硯部と團台の一部が残存する。硯部と團台は連続して成形する。硯部と團台の境に外堤と断面三角形の凸帯を貼付する。硯部には粘土板を貼付し、陸と海を作る。團台には透しが2個所残るが部分的であるため復原できない。硯部の裏面に「集□」の墨書きがある。また硯部には使用痕と墨痕がみられる。

猿面硯(164~168) 猿の面部を硯に転用したものである。いずれも端部は研などの再調整はしていない。164の外面は円弧状叩き目で、使用のため滑らかとなり、墨痕が認められる。外面は平行叩き目を有す。165の内面は平行叩き目で、器面は滑らかになり墨が付着する。外

面は細格子の叩き目を有する。下端部は打ち欠いて成形か。166は内外面ヨコナデで内面は滑らかで墨痕が付着する。167は青海波叩き目と一部ナデで器面は滑らかとなり墨痕が付着している。外面は細格子の叩き目を有する。168は内面に青海波の叩き目を有し、調整はしていない。164の外面は円弧状叩き目、外面には平行叩き目を有する。165の内面は平行叩き目で、外面は細格子の叩き目を有する。下端部は打ち欠いて成形か。166は内外面ヨコナデである。167は青海波叩き目と一部ナデ調整で、外面は細格子の叩き目を有する。168は内面に青海波の叩き目を有し、外面は平行叩き目を有する。いずれも内面は使用のため、器面は滑らかとなり、墨痕が付着している。

土製品（第18図）

円盤状土製品（1）平瓦片を打ち欠き、円盤状に成形したものである。器面は磨滅が著しく、明瞭でないが、縦目状のもののが認められる。

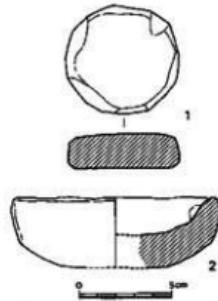
埴鍋（2）小片のため明瞭でないが、復原口径11.0cmを測る。内面には固形物の付着が認められる。

S X 2507出土土器（第19図）

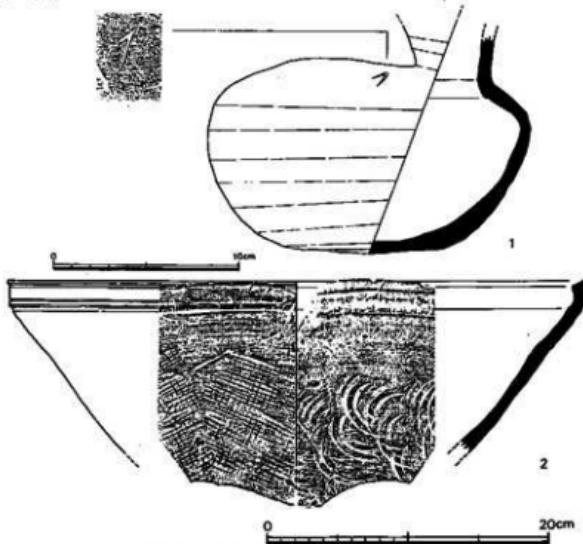
須恵器

平瓶（1）肩部から頸部にかけてはヨコナデで、胴部は回転ヘラ削りし、外底はナデのみでほとんど未調整である。肩部に「イ」のヘラ記号がある。

鉢（2）口縁部を直上にひき上げ、端部を内傾させ平坦にする。直立する口縁部外面には上・下に深い沈線を巡らし、その間に沈線による波状文を入れる。口



第18図 S D 320出土瓦製品
・埴鍋実測図



第19図 S X 2507出土土器実測図

縁部はヨコナデで体部外面は細格子の叩き目を、内面には青海波の叩き目を有する。復原口径41.4cmを測る。

S X 2508出土土器・陶磁器(第20図)

土師器

椀(1) 体部がやや内彎する椀で、底部に板状圧痕を有する。口径12.6cm、器高4.9cmである

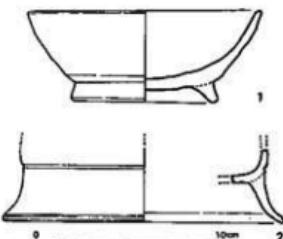
縦軸陶器

香爐(2) 香爐身の小片である。淡茶色の精良な胎土に淡緑色の釉がかかっている。脚部と体部の境に沈線を巡らす。

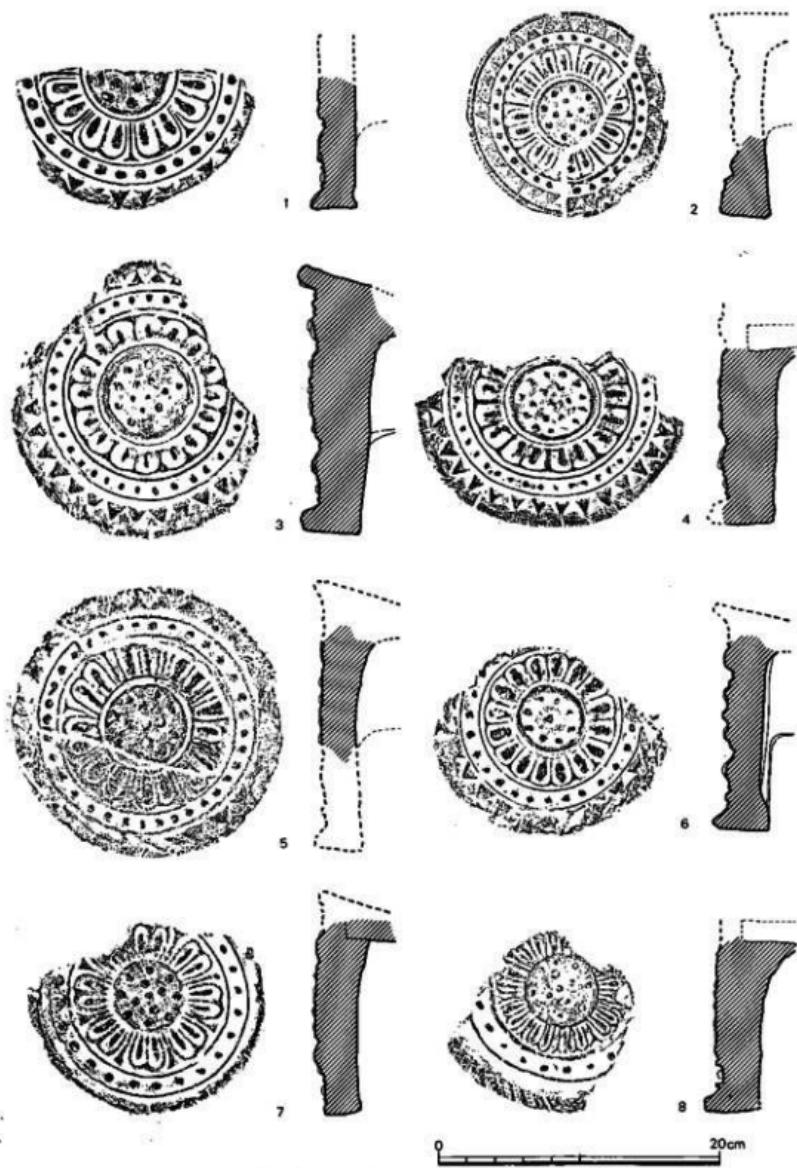
瓦類(第21・22図、図版87・88)

この調査で出土した瓦類は軒丸瓦149点、軒平瓦160点および文字瓦、文様瓦1点、鬼瓦片5点、面戸瓦1点である。これらは溝S D320の上層、中層、下層から出土したが、上層、中層出土瓦と下層出土瓦の間には若干の混入はあるにせよ前者が平安時代、後者が奈良時代を主体に出土している傾向を見出せる。ここでは昭和46年度の発掘調査で出土した瓦を合せて報告すると共に下層出土瓦を中心に述べることとする。軒丸、軒平瓦の出土量と内訳については巻末の別表に示した。

軒丸瓦は19型式に分類できる。第21図-1は老司Ⅱ式と呼ばれているもので9点出土した。約2分の1の残存であるが、中房に1+5+9の円錐を伴う蓮子を配し、蓮弁は端正で複弁八弁蓮華文をなす。外区内縁は珠文、外縁には正三角形に近い凸鋸齒文を配している。瓦当裏面は刷毛目によって調整されており、下半部には周縁に沿って幅1cm前後の凹みが認められ、指ナデ調整を行っている。2は1点出土した。1にくらべ瓦当径は一回り小さくなり、完存する例から中房は1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。外区は内区より一段高く平坦で、珠文と鋸齒文が同一面上にある。黒色に焼成され軟質である。3は21点出土し、総数の14%を占める。中房内に1+6+10の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。弁区幅が狭いため弁は幅に対し長さが短くなり、子葉は盛上りが大きくて円形に近い形をなす。珠文36個、凸鋸齒文33個を配している。瓦当裏面はナデによって仕上げているが、下半部に凸帯を設ける例もある。4は12点出土した。3と比較的類似しているが、中房蓮子は、1+6+12で、外区珠文38個、凸鋸齒文30個である。蓮弁は3より若干長くなる。瓦当裏面はナデによって丁寧に仕上げており、下半部に凸帯を設けるものとそうでないものがある。5は3点出土した。小片ではあるが完存する例から中房は1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。外区内縁には珠文34個、外縁に29個を配している。瓦当面は平坦で蓮弁の盛上りはない。6は3点出土した。この瓦についての瓦当文様、技法の説明は第87図-1の説明を参照されたい。7は54点出土し、



第20図 S X 2508出土土器実測図



第21図 SD320出土軒丸瓦拓影・実測図

軒丸瓦総数の36%を占め、今回出土した中で最も多い。鴻臚館式で中房に1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文で、外区内縁に珠文24個を配している。黒色に焼成されたものが9割を占めており、これらは鴻臚館式軒丸瓦の特徴といえよう。8は11点の出土である。第87・90次調査でも出土しており、複弁九弁蓮華文で中房に1+4+8の蓮子を配している。瓦当裏面は丁寧にナデ調整を行っている。

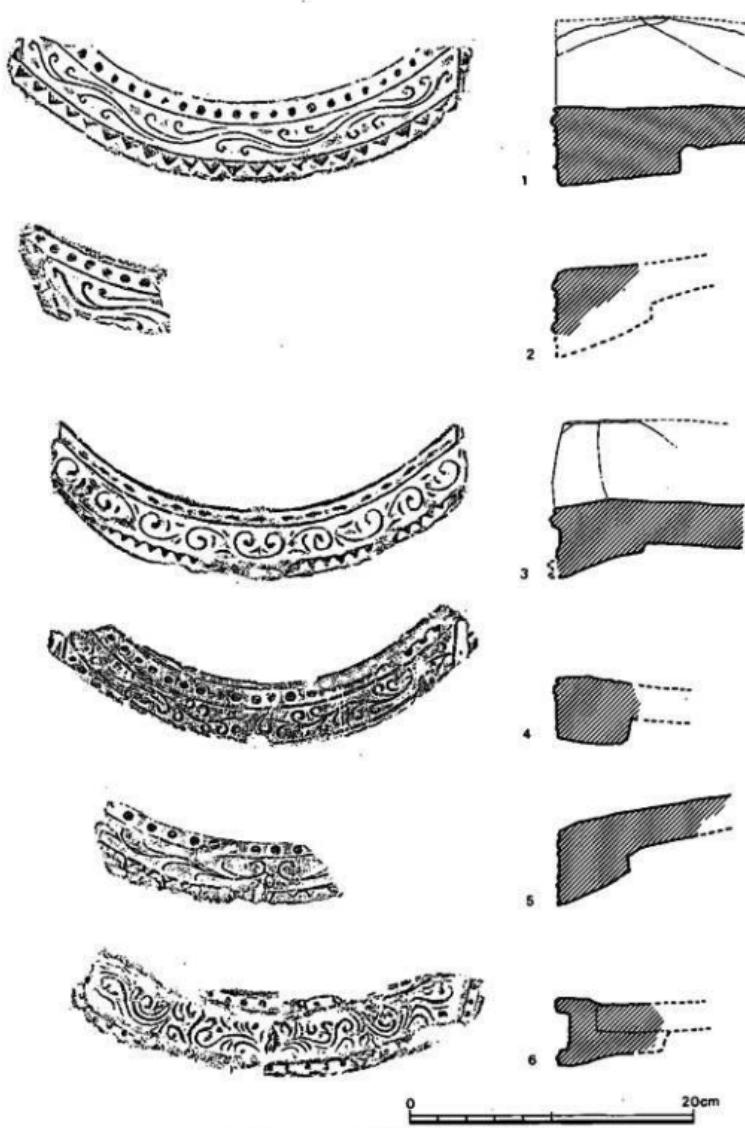
軒平瓦は12型式に分類でき、このうち下層出土のものは6型式である。第22図-1は老司Ⅱ式で41点が出土し総数の26%を占める。第21図-1の軒丸瓦と組合うものである。内区は右から左へ流れる扁行唐草文であるが、右端蔓草は他の蔓草に比べ逆向きになる。上外区は珠文25個、両脇区と下外区には凸鋸齒文を配する。粘土紐の巻上げによる成形で、顎部は粘土板を張り付けたものと一部粘土を継ぎたしたものがある。2は、これまでの調査でも数点検出しているが、完存するものではなく文様構成は定かでない。左端の蔓草の流れからすると1の右端蔓草の逆向きになり、左から右へ流れる扁行唐草文と考えられる。3は鴻臚館式で74点が出土し、軒平瓦総数の約半数近い46%を占めている。中層、下層からの出土が多い。中心に「小」字形の子葉をおき、曲線文からなる中心飾を配し、左右に4回反転する均整唐草文である。上外区は杏仁様の珠文15個、下外区は下向凸鋸齒文を密に配している。平瓦凸部は縄目と平行線の叩き2種がある。4は14点出土。内区は中心に向って左右から蔓草が派生する均整唐草文である。上・下外区はボタン状の珠文を配するが、4の下外区は削り取られている。また上外区には布目痕が認められる。頭は段頭で縄目の叩きである。5は10点出土した。曲線文の中心飾を配し、左右に4回反転する均整唐草文である。文様の彫りが浅く、蔓草は細い線で表現されている。頭は5cmの段頭でヘラ削り調整を行っている。6は下層から1点出土した。桃実様の中心飾をおき左右に変化に富んだ蔓草を配する均整唐草文である。上・下外区および両脇区は珠文である。頭は段頭から曲線頭に変化する過渡期に属し、貼付けによっている。平瓦凸面は細い正格子目との叩きで「大國」銘が認められる。

文字瓦は総数336点が出土し、叩き、書体などから「平井」銘10種、「佐」銘8種、「賀茂」銘5種に細分される。なかでも10点以上を超えるものに「平井瓦屋」、陰刻の「平井瓦」、陽刻の「平井瓦」、「平井」、「佐」、「小イ瓦」、「八年」銘などがあり、前三者が10%~15%前後の出土率を占めている。しかも中層、下層に集中して出土しており、上層は数点のみである。また「小イ瓦」銘も同様の出土傾向を示している。

木簡（図版72・73）

本次調査では、昭和46年度に5点、本年度に10点、合わせて15点の木簡を検出したが、いずれもSD320から出土したものである。はじめにそれらについて概略的に見ておこう。

すべてに墨痕が見られるわけではないが、それらを形態的に分類してみると、まず何らかの原因によって損傷を受けているためにその原形を特定できないもの（081型式、以下の型式分



第22図 SD 320出土軒平瓦拓影・実測図

類および各種の記号は木簡学会のそれによる)が12点もあるが、これは出土遺構が溝であることとも無関係ではないと考えられる。残りの3点は、長方形の材の上端近くの左右両辺に切り込みをいたるもの(032型式)および題籠と笠塔婆の一種と推定されるもの各1点であるが、後二者は061型式に分類できるだろう。

次にそれらに墨書きされた文字について見てみると、1字以上を判読ないし推定できるものは6点にすぎない。このほかに墨痕を確認できるものが5点見られるが、いずれも腐蝕などのために断片的にしか残存しておらず、具体的な文字を想定することはできない。そして残りの4点はその形状からして木簡ないし木簡の一部とみなしうるものであるが、現状では墨痕は全く認められない。

以下、出土木簡のうち代表的なものについて概要を報告し、合わせて若干の所見を述べる。

(1)

061型式。柾目。中層出土。軸部の大部分を欠失しているが、題籠の頂部であり、表面および各辺はきれいに整形されている。その法量は、長さ4.9cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmである。また残存軸部の断面は方形を呈し、幅は0.4cmである。裏面には縱方向の凹みが見られるが、これは腐蝕による二次的なものと考えられる。表裏両面ともに墨痕は全く認められないが、墨書き面が削り取られたのか、あるいは整形されただけで、結局は墨書きされなかつたのかは明らかでない。表面の状況から推せば、後者の可能性が大きいように思われる。

(2) ^(**)日置マカ良

081型式。板目。下層出土。左右両辺については確認できないが、上下両端とともに折損している。現存法量は、長さ10.7cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。各文字の大きさは必ずしも一定しておらず、とくに「置」字は大きい。第4字は現状から「力」字と判断したが、人名であることを考慮すれば、本来は「刀」字のつもりであったと解した方が妥当と考えられる。この日置部刀良がいかなる人物であったかは明らかでないが、西海道における日置部に関しては、「和名抄」に肥後國玉名郡日置郷、薩摩國日置郡、同じく薩摩郡日置郷などが見える。

(3) 「V□□ □□□十一一年」

032型式。板目。下層出土。若干の損傷は見られるが、ほぼ完形とみなしてもよいだろう。その法量は、長さ27.2cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmである。表面はとくに上半部が腐蝕しており、断片的な墨痕が見られる程度にすぎない。第1字は示偏の文字であるが、旁部の墨痕は認められない。以下の中部にかけての墨痕はいずれも字形をなさない。下半部は、第1字との位置関係からして、いわゆる割注式に記されていると考えられるが、その左側には墨痕を確認できない。下半の「□□」は「十一年」が続くことから年号と考えられ、それは前述のようなSD320の時期から推して九世紀初頭前後のものであろうし、十一年が存することからして、宝亀、延暦、弘仁などが該当する。とくにその残存字形を考慮すれば、延暦が最もふさわしいよう

思われ、延暦十一年は792年に当たるが、墨がうすいため断定するには躊躇せざるをえない。

- (4) • □□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□
• □□□□□□東頓鈴類鈴鈴

081型式。柾目。下層出土。上下2片に折れている。文字の位置から見て左辺は二次的に切断されており、右辺および上下両端も原状を保つかどうか明らかでない。現存法量は、長さ26.2cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmである。内容的には習書であろう。第1~4字は墨がかなりうすく、また断片的であるが、形状的には下半部の「類」字によく似ており、同字と推定される。第7・9字に見える「類」字の字義は「頭がかしいで正しくない」であるが(『大漢和辞典』)、その習書がいかなる意味をもつのかは明らかでない。第5字および「鈴」と判別される第8字などの字義も明らかではない。裏面右行の「口」字はいずれも墨がうすい。左行については第5字以下の左側に墨痕が見え、表面の文字から推せば、「類」字のくりかえしであろう。

- (5) • ×忌忌忌忌忌忌 □□□□□□×
忌頓首諸詔 諸□詔□□□
□□□ 内
• ×□正正月月月月月月月月月月月 ×
偽偽偽偽偽偽偽偽偽偽偽偽偽□
頓頓頓頓頓頓 □□淨淨淨

081型式。柾目。上下両端は折損している。現存法量は、長さ20.4cm、幅3.7cm、厚さ0.4cmである。昭和46年度に検出したもので、「大宰府史跡出土木簡概報(一)」では木簡6として報告したが、その後の知見を加え、訣文を上記のように訂正する。内容的には習書であり、「詔」字は「啓」字の異体字である。

- (6) • ×□五 九斤二両二分四□^(墨) ×
□ 烏 賦 □
□
• ×□□ 荒□七□×

081型式。柾目。中層出土。右辺は上半部の欠損を除いて原形をとどめているようであるが、左辺は二次的に切断され、上下両端は欠損している。現存法量は、長さ9.6cm、幅2.0cm、厚さ0.3cmである。表面は第1行が第2行の右半に重なっており、また両行の筆跡も異なっているが、その関係は明らかでない。第2行目最下端の文字は貝偏であり、習書の可能性も考えられるが、原形も明らかでないし、断定はできない。第1行目を習書とはみなしがたいので、少なくとも2度の異なる機会に墨書きされたとも考えられる。裏面の「荒□」は齊射のため判読できない。

- (7) •□ 上□
•□ □

081型式。板目。各辺とも損傷している。現存法量は、長さ15.1cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmである。腐蝕および損傷のため断片的な墨痕が見られるのみで、判読しがたく、具体的なことは明らかでない。

以上、出土木簡のうち代表的なもの7点について概要を報告し、若干の所見を述べたが、最後に一言しておこう。点数も少なく、しかも溝からの出土でもあるので、あるいは単なる偶然かもしれないが、いわゆる習書木簡が目立つように思われる。(4)と(5)は明らかにそうであり、(6)にもその可能性が考えられる。また、断片的な墨痕のみであるため報告を省略したものの中にも習書と推定できるものがあった。さらに、昭和56年度の第76次調査においても、同じSD320の南方から習書木簡を1点検出している。現時点でのこのような習書木簡の出土の意味を明らかにすることはできないが、これらはこの溝の近辺に位置した施設において書かれたものであろうし、遺構の性格を考えるための一つの手がかりとなるよう思う。

木製品(第23・24図、図版82)

木製品は主に南北大溝SD320の中層脣植土および下層の脣植土、砂土から出土した。

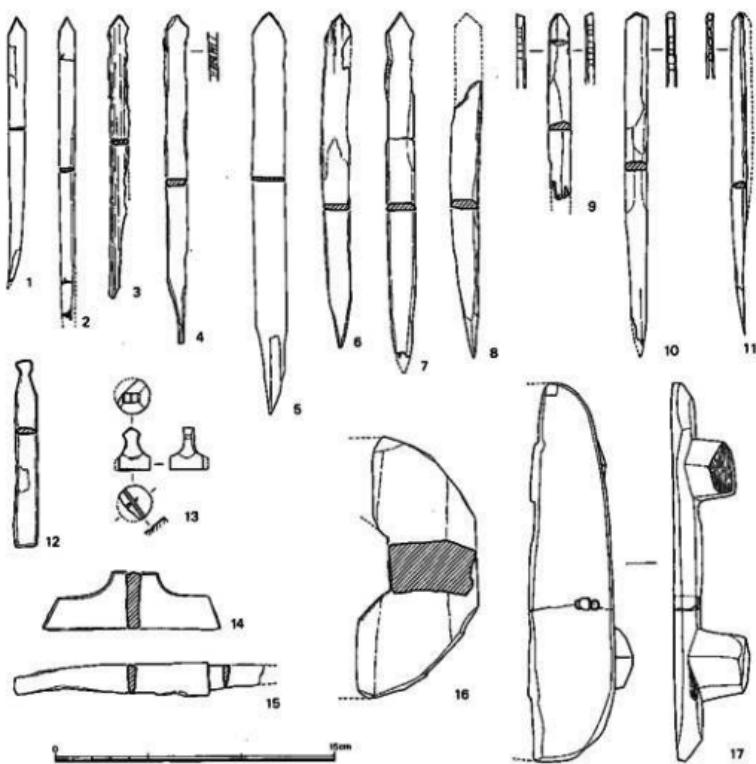
削掛け(1~11) いずれも薄板の頭部を半頭状にし、下端を尖らせたもの。側面の加工の有無により3種類に分類できる。1・2は厚さ1~3mmの極く薄い板を加工したもので、側面の切込みはない。両面とも割載のままである。いずれも下端部を欠失している。3~8は側面に上・下から切込みをいれている。ただし5は加工痕跡が明確に観察できない。表面は割載のままのものと一部に荒い削りを加えるものがある。9~11は通常の削掛けのように深く切込みを入れるのではなく、両側面の脣部に主軸とは直角方向に5ないし7個の刃形を入れる。9は片面にやや丸みを持たせ頭部に切込みを入れる。10、11は両面を荒く削り丸味を持たせている。

簪形木製品(12) 断面が長円形の板材の一端を両側面からV字形の切込みを入れて人頭形を作り出す。長さ10cm、厚さ0.4cm、板目材。

木印(13) 木目の細かな材を加工したもの。印面は直径1.8cmの円形であるが一部を欠失している。印面中央には鉗とは斜交する方向にV字形の切込みを一本入れる。さらにそれに直交する方向にも同じ切込みを入れるが片側は周縁にまでは達していない。鉗は4方向から削りを加えて分鉗形につくり出している。全高2.3cm

琴柱形木製品(14) 厚さ0.8cmほどの板材を凸字形に加工したもの。下半部両端は斜めに切り落す。上半部も同様に斜めに削るが、下半部の境付近はゆるくカーブを描く。上・下端は直に削る。長さ9.5cm、幅3.1cm、板目材。

刀子形木製品(15) 杵と思われる板材を加工したもの。把を着装した状態に作っているが、把刀身部分はわずかに2.5cm位を残すのみで大部分が欠失している。把は幅2cm位であるが、把

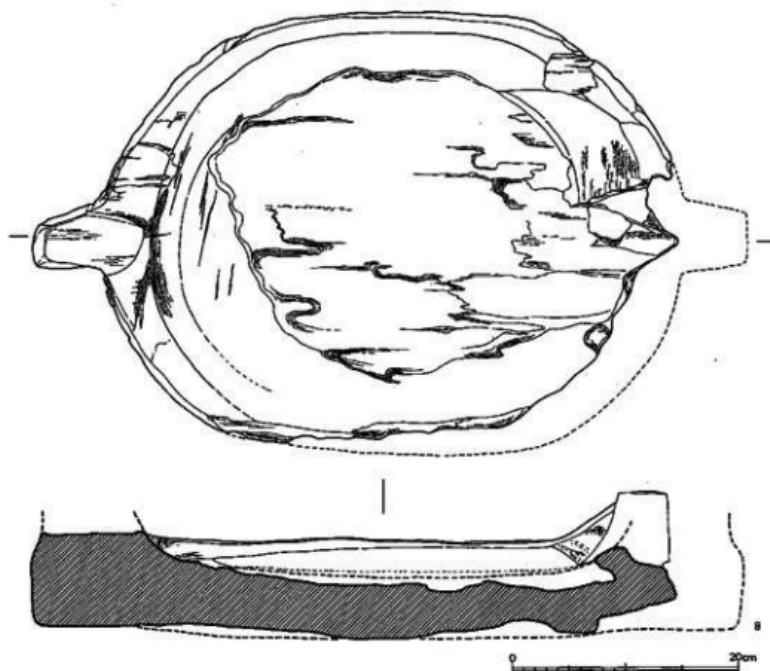


第23図 SD 320出土木製品実測図

尻付近はやや狭く「く」字形にしている。板目材。

輪状木製品(16) 厚い板材を手斧で荒くはつって加工している。2分の1を欠失しているが、外周は円形に作ることを意図したものと思われる。中心部に孔を穿っているが、残存部からみて六角形になるものと思われる。表面は荒く削り、裏面は割断のまま。板目材。

下駄(17) 広葉樹と思われる材を加工した2枚歯の下駄。2分の1を欠失しているが、形状は兩丸長方形を呈する。歯は鋸びきでつくる。後方の鼻緒孔は直径0.6cmで錐で穿っている。孔の両脇に径0.4cmの三ツ目錐によるとと思われる円の痕跡が残っている。歯は前後とも磨滅しているが、前歯の方が著しい。



第24図 SD 320出土木製品実測図

把手付大盤(18) 長径52cm、短径39cmの長円形で、長径の両端に把手が付く。火を受けていたため全面が炭化しており加工痕跡を観察することができない。内面はやや舟底形を呈し、底部外面は平坦である。全体的に器壁が厚く底部では約6cmの厚さを有する。口縁部はほとんど欠失しているため詳細は不明である。

鉄製品(第25図、図版91)

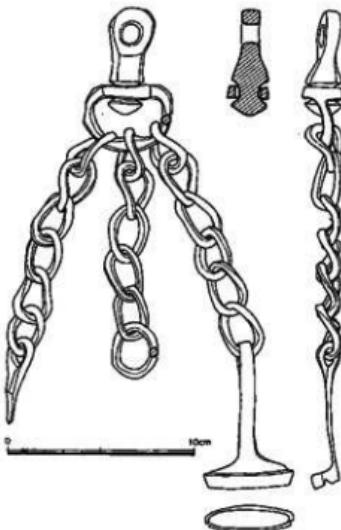
鉄製鎖製品 上部に0.9cmの孔を有する軸に自在に回転する環を付け、その環に3条の鎖を垂下させる。そして、2条には下端に平面T字形を呈する金具を取り付けているが、うち1条は中途で欠失している。金具の先端は長円形の輪となっている。3条の鎖は径6mmの輪を「S」字状に若干ひねり5個繋いでいる。用途不明。SD 320中層出土である。

鉄錆 鉄錆が十数本ないし数十本が銹着した塊が7個出土している。最大の塊は53本銹着している。尖根式錆で、基は円形で基部は0.3cm、範被中位で0.6cmを測る。身長は1.2cm、身幅

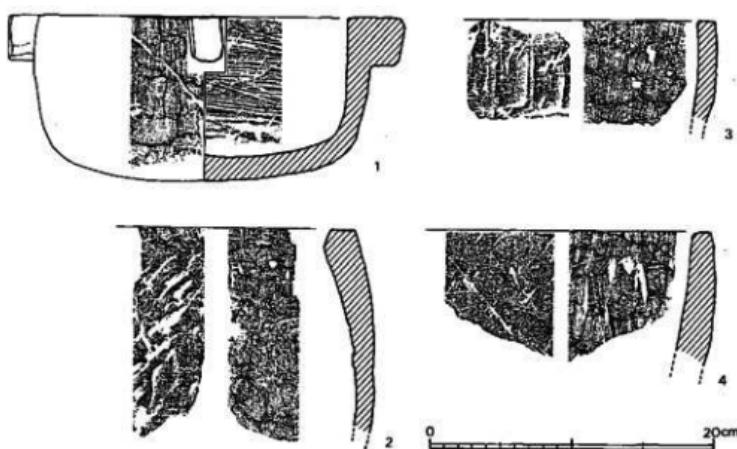
0.6cm、身厚さ0.2cmである。井戸S E 2503から2個、SD 320中層から5個出土している。

石製品(第26図、図版91)

石鍋(1～4) 1は全体の3分の2が残存する。口縁部の平面形が円形に近い隅丸方形を呈し、対応する4箇所に断面四角の把手を削り出している。底部はやや丸味を帯びた平底となる。外面の体部と底部の一部は平ノミによる横方向の削りで、底部は横と縦方向の削りを行っている。内面は横方向の乱雑な削りで仕上げる。復原径約23.5cm、器高11.5cm。中層出土。2は体部から口縁部が内側に、口縁部に向ってしだいに器肉が厚くなる。口縁部内面は大きく面取りする。中層出土。3は体部から口縁部にかけて、ほぼ直立し、器肉が均一なものである。口縁端を若干面取りする。上層出土。4は体部から口縁部がやや外傾し、口縁端に向って器肉が薄くなる。口縁



第25図 SD 320出土鉄製品実測図



第26図 SD 320出土石鍋実測図

部内面を若干面取りする。上層出土。2～4はいずれも外面は平ノミによる横方向の削りで、2の内面は斜め方向の削りがあり、3には縦に打ち込んだノミの痕跡がある。1と2の外面には煤が付着している。

小結

今回検出した主な遺構である南北溝 S D320は昭和46年度の第14次調査と昭和56年度の第76次調査を含め前後3次にわたって発掘調査を実施している。先に第76次調査報告時に検討を試みているが、若干の相違もみられるので再度 S D320について検討を行い結びとしたい。

まず溝の位置関係についてみると、S D320の確認できた最北端は政庁南門の心から南へ約58mあり、最南端は211mある。このことから未発掘部を含め長さ約153m分を確認したことになる。今回検出の溝心と第76次調査時の溝心とは約2.0mのずれがあり方位的には約N 0°45'Wであり若干東偏している。政庁の軸線が真北よりやや東偏していることからすると、それに合せたと考えることができる。溝心は政庁軸線より約192m(640尺)の所に位置している。

次に年代についてであるが、溝の最下層の流れを示す砂層中から、多量の須恵器・土師器等が出土した。これらは八世紀代のもの（八世紀後半代が多い）を中心として、若干七世紀後半代と十世紀代のものを含む。このことから、溝が掘られた年代は必ずしも断定できないが、遅くとも八世紀後半代には確実に存在し、最下層の流れは十世紀代に及ぶと考えられる。中層の埋土中には十世紀中頃、後半代のものを含み、若干十一世紀前後のものを含む。また上層埋土中からは十一世紀前後の時期までが認められる。溝の廃絶については第76次調査ではS D320廃絶後の流れであるS D2010があり、それは十一世紀後半代～十二世紀前半代であった。そのことから、S D320の廃絶は遅くとも十一世紀後半代であろうとの結論を得ていたが、今回の調査ではこのS D2010は検出されず、北方においては削平されたことも考えられる。以上のことからするとS D320の廃絶を十一世紀前後の時期に求めることは可能であろう。

3 第87・90次調査

本次調査はいずれも土地区画整理事業に伴う事前の調査である。調査地域は昭和58年度に実施した第83次調査地の北側に接し、県道山家一関屋線に隣接している。昭和58年度に実施した第83・84・85次調査では掘立柱建物17棟や「天平六年」の紀年を有する木簡等が出土した南北溝S D2340などを検出するなど官衙に関する新たな知見を多数得ることが出来た。したがって本調査地の南に接する第83次調査地までは確実に建物の跡があり、また南北溝S D2340も伸びている。これらの調査結果をもとに今回は北側地域における建物群の跡と南北溝S D2340の北方における状況の確認などを主たる目的とした。

調査は区画整理事業の進行との関連から2回に分けて実施した。調査対象地の南半分を第87次調査とし、残り北半分を第90次調査として実施した。第87次調査は昭和59年1月15日に開始し、2月25日に写真撮影、実測を含め一応終了した。その後掘立柱柱穴の確認と上層遺構の南北溝S D2335やS X2523が存在するために発掘できなかった南北溝S D2340の発掘作業を行い、3月5日に全作業を終了した。地番は太宰府市大字觀世音寺字不丁288-2・6・7・9番地である。第90次調査は昭和59年5月9日に開始し、6月14日に写真撮影、その後実測を行い、掘立柱柱穴の確認などの補足調査を含め7月5日に全作業を終了した。地番は太宰府市大字觀世音寺字不丁288-8・15・16番地である。

ここでは両調査を合わせ報告する。

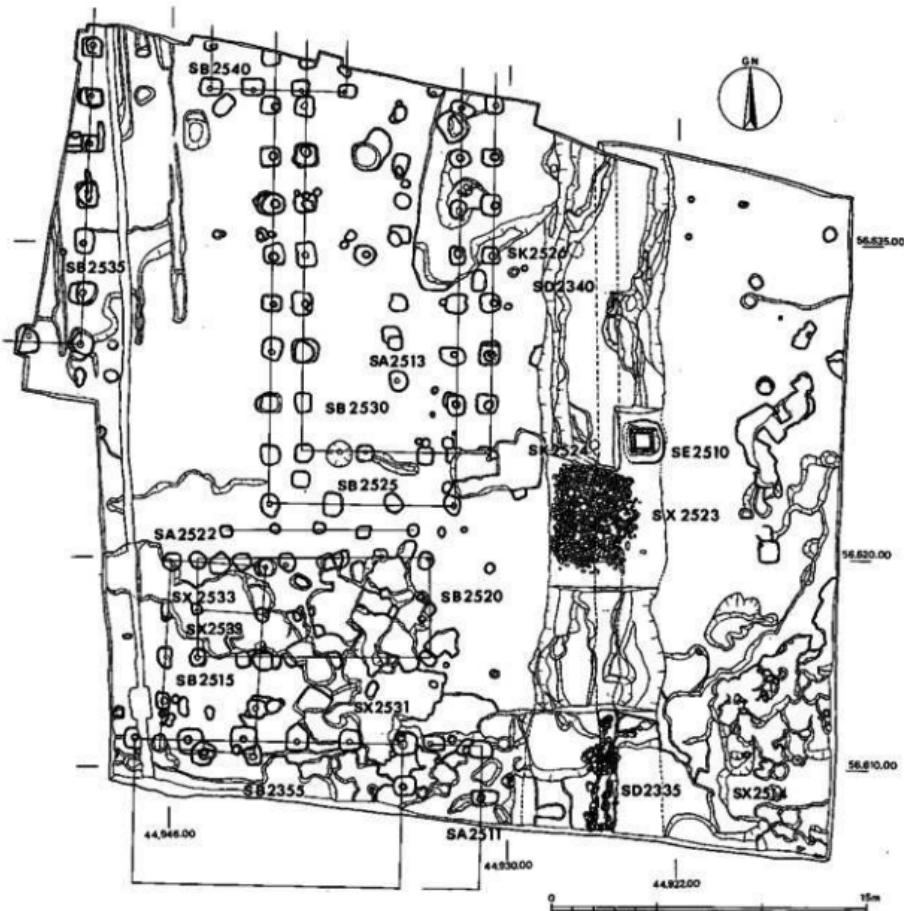
検出遺構

今回検出した主要な遺構は掘立柱建物7棟、櫛3条、溝2条、土壙5基、井戸1基、瓦敷造構1、それに粘土探掘穴などである。

遺構面は全体に浅く北側地域では床土直下で遺構面となるが、南側では若干の灰褐色土層がみられる。遺構面は北端部と南端部では約50cmの高低差があり、南が低く、ゆるやかに傾斜している。遺構が検出される地山の多くは黄色の粘質土層で部分的に茶灰色の砂質土層のところもある。

掘立柱建物

S B2355 発掘区西南隅部で検出した5間×3間の東西棟建物である。この建物は昭和58年度に行った第83次調査で南側半分を検出しており、既にその概略は報告しているが、改めてここで報告する。桁行12.75m(42.5尺)、梁行は6.90m(23尺)である。柱間寸法は桁行で2.55m(8.5尺)等間であり、梁行は中央間が2.70m(9尺)で広く、脇間が、210m(7尺)である。柱掘形は一辺1m前後の開丸方形を呈し、柱の痕跡が全てに見ら

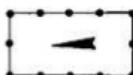


第27図 第87・90次調査遺構配置図

れた。柱穴内の上位で縦目の瓦片がみられたことは注意される。建物方位はN 1°5'Wである。

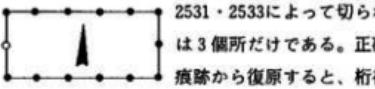
S B 2515 発掘区の西南隅部で、S B 2355の柱掘形を切る4間×2間の南北棟連物を検出した。

柱掘形のいくつかはS X 2533で切られており、全くその痕跡を止めないものもある。柱掘形はS B 2355のそれよりも一回り小さく、その形状も円形に近いものや長方形など一定していない。柱痕跡が残っているものもあり、それからすると桁行9.0m(30尺)、梁行4.5m(15尺)である。柱間寸法は桁行で、

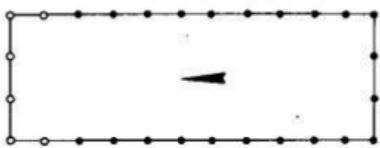


中央 2 間が 2.1m(7 尺)、両脇間が 2.4m(8 尺) であり、梁行は 2.25m(7.5 尺) 等間である。建物方位は N 3° 25'W である。柱掘形の切り合い関係から S B2355 より新しく、S X2531・2533 より古い。

S B2520 S B2515 と一部重複する 5 間 × 2 間の東西棟建物である。柱掘形の多くは S X


2531・2533 によって切られているため明確でなく、柱痕跡を止めるのは 3 個所だけである。正確とは言えないが、東北隅と西南隅に残る柱痕跡から復原すると、桁行 10.95m(36.5 尺)、梁行 4.80m(16 尺) である。柱間寸法は桁行で、中央間 3 間が 2.25m(7.5 尺) 等間、脇間 2.1m(7 尺) である。梁行は 2.40m(8 尺) 等間である。建物相互の切り合い関係はないが、S X2531・2533 より切られており、これよりも古い。建物方位は N 0°45'E である。

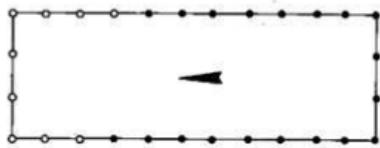
S B2525 発掘区のはば中央部で検出した 9 間以上 × 3 間の南北棟建物で、桁行で 9 間分を



確認したが、さらに北方の発掘地域外へ延びており、桁行規模については明らかにすることことができなかった。柱掘形は一辺 1m 前後の隅丸方形を呈し、そのほとんどに柱痕跡がみられ、東側柱列の南から 3 番目と

7 番目の柱掘形には柱根が残存していた。桁行の総寸法は不明であるが、梁行は 8.85m(29.5 尺) である。梁行柱間寸法は中央間がやや狭く 2.85m(9.5 尺) で脇間が 3.0m(10 尺) である。桁行については柱痕跡が知られる南から第 4 柱間と第 8 柱間までの各柱間の計測値（東・西側の柱列の対応する柱間はそれぞれ若干異なるのでその平均値）は 2.41m・2.35m・2.24m・2.40m・2.37m であり、第 6 柱間が 2.24m とやや狭くなっている。また、東側柱列に残存していた柱根間の距離は 9.45m(31.25 尺) で第 6 柱間を計測値に近い整数値 2.25m(7.5 尺) をとると残りの 3 柱間は 2.4m(8 尺) の等間になり、柱痕跡の計測値とも余り矛盾がみられない。この建物の桁行は 9 間以上の規模を有するもので、仮に桁行 11 間と考えた場合、第 6 柱間が中央になる。このことから中央柱間のみやや狭く 2.25m(7.5 尺) とし他の柱間は 2.40m(8 尺) 等間のものとして計画されたと考えられる。建物方位は N 1°7'W で、S B2355 と同一方位をとる。東側柱列の最北端（南から第 9 番目）の柱掘形を切って、1m × 0.8m 大の花崗岩の自然石が斜めに落し込まれている。平らな面があり、礎石の可能性も考えられる。

S B2530 S B2525 とほぼ同じ位置にあって重複する 7 間以上 × 3 間の南北棟建物で、桁行



方向で 7 間分を確認したが、さらに北方の発掘地域外へ延びており、桁行規模については明らかにすることことができなかった。柱掘形も S B2525 と類似しており、柱痕跡も比較的の残存状況は良好であった。桁行の総

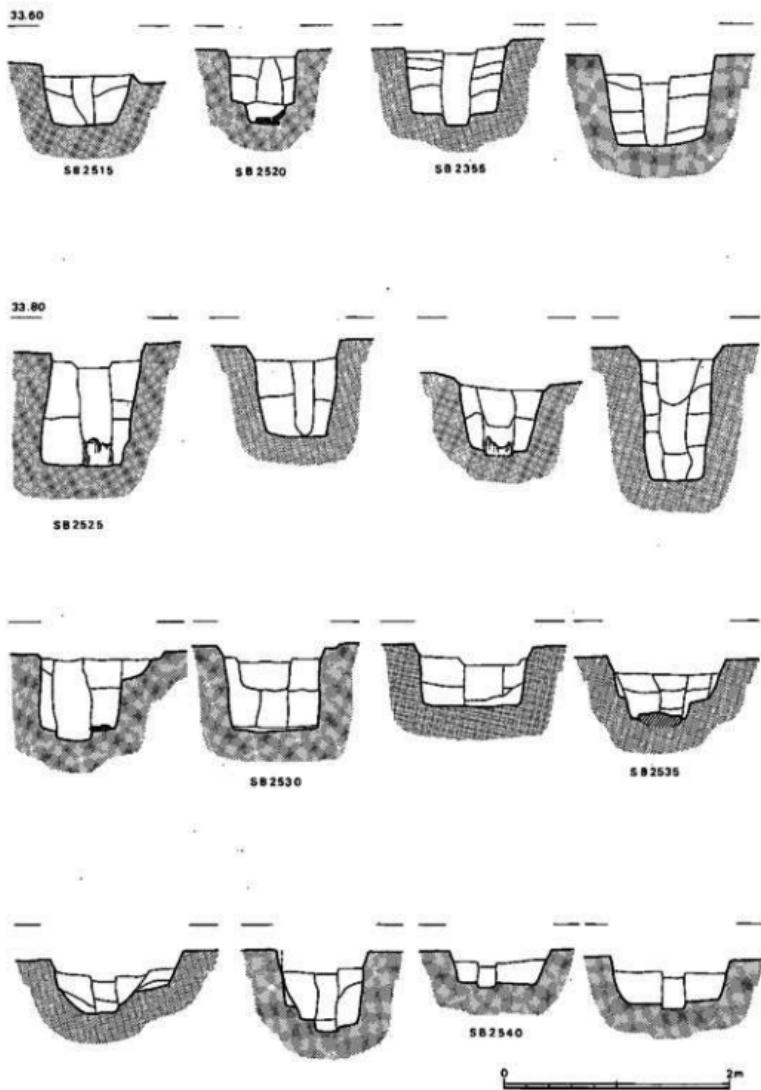
寸法は不明であるが、梁行については、8.85m(29.5尺)、柱間寸法は中央間がやや狭く2.85m(9.5尺)で脇間が3.0m(10尺)であった。梁行については8.85m(29.5尺)をはかる総長、中、央間・脇間の柱間寸法とともにSB2525と同じ規模である。桁行については柱痕跡が知られる南から第3柱間と第7柱間までの各柱間の計測値(東・西側柱列の対応する柱間はそれぞれ若干異なるので、その平均値)は2.41m・2.28m・2.45m・2.35m・2.39mで、SB2525と近似した数値である。この建物は7間以上の規模を有するもので、またSB2525と梁行規模が同一であり、桁行柱間寸法も近似する数値をとること、また建物方位もN 1°7'Wで同一方位であることなどを考慮すると、桁行9間以上を有し、柱間寸法も第4柱間が7.5尺で他は8尺等間を有する同一規模の建物と考えられる。SB2525との先後関係は不明であるが柱穴中に繩目の瓦片が混入している点、SB2355と類似している。

SB2535 発掘区西北端にあり、SB2525・2530の西側で検出した6間以上×1間以上の南北棟建物で、さらに北・西方の発掘地域外へ延びている。柱縫形は一辺1m前後で柱痕跡も残存状況が良好である。桁行は6間分を検出したが、各柱間の計測値は南から2.46m・2.34m・2.34m・2.46(?)m・2.30m・2.41mで若干のバラつきがみられるが、その平均値を求めるよ約2.4mとなり、計画柱間寸法は8尺等間と考えられる。梁行については柱縫形の半分を確認できただけで、柱痕跡も明らかでないため柱間寸法は不明であるが、8尺前後のものであったと考えられる。東側柱列の南から第1番目の柱縫形には自然石を礎板として使用していた。建物方位はN 2°10'Wである。

SB2540 発掘区北端にあり、SB2525・SB2530と重複する1間以上×3間の南北棟建物で、さらに北方の発掘地域外へ延びている。柱縫形は長方形を呈し先述のSB2525・2530に比べやや小さく、深さも若干浅い。柱痕跡は全てにみられ、その各柱間の計測値は梁行で東から2.08m・2.28m・2.08mで、中央間がやや広く7.5尺、脇間が7尺のものである。桁行は1間分のみであるが2.06m(7尺)の数値が得られた。建物方位は梁行方向で余り正確とは言えないが、SB2525・2530と同一方位をとっている。

柵

SA2511 SB2355の東側で検出した「コ」字形をなす柵である(南側半分は既に昭和58年度の第83次調査で検出している)。東西方向は1間でSB2355の北・南側柱列に柱筋を通し、南北方向は3間でSB2355の東側柱列から約4.35m(14.5尺)の距離でそれに平行である。東西方向はSB2355の隅柱から約1.8m(6尺)の間隔をおいて始まる。柱間寸法は2.55m(8.5尺)である。南北方向は南から2.25m(7.5尺)・2.40m(8尺)・2.25m(7.5尺)の柱間寸法を有する。SB2355に柱筋を通しており、方位的にも同じであることから、SB2355に付属する施設と考えられる。



第28図 据立柱建物柱振形断面図

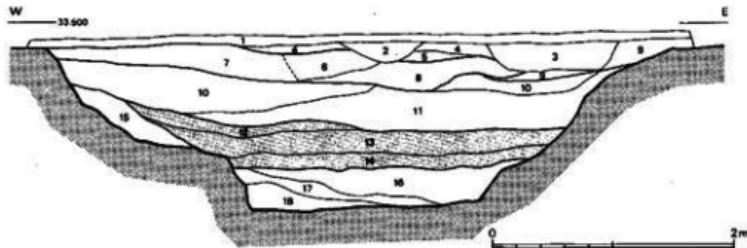
S A2522 S B2520とS B2525の間にある東西方向の柵である。柱掘形は50cm前後のものでプランも一定しておらず、深さも浅い。柱痕跡がないので明確ではないが、柱間寸法は東から2.4m(8尺)、2.1m(7尺)、2.1m(7尺)、2.4m(8尺)である。方位としては若干西へ振っており、S B2520の建物方位に近似している。このことから考慮すればS B2520に付属する施設の可能性が強い。

溝

S D2340 発掘区の東端寄りで検出した南北溝である。前年度第83、84、85次調査で検出され、木簡、その他溝からの出土遺物の重要性が知られるにいたった。今回はその北側にあたり南北に約33mを検出したが、溝中央部に瓦敷構造(S X2523)と南端部に石組構(S D2335)があるため、その中間6m(南半)とS X2523の北半を完掘した。南半は幅約5.5m~6.0m、最南端部で深さ約1.93mあり、北半では幅約5.8~6.2m、深さ約1.15mである。溝底面は北端で絶対高32.360m、南端で31.980mあり、約100分の2でゆるく南へ傾斜している。

溝埋土は大きく3層に分かれる(第29図)。下層は暗灰色粗砂⑩と、茶褐色砂土⑯がかなり厚く堆積し、それに混在して黒茶色粘質土⑪が認められ、流れの強かったことを物語っている。中層は暗青灰色砂質土⑫(黒灰色粘土塊を含む)と黒灰色粘土⑬、黒色土が比較的厚い層をなし、木簡、土器、瓦等はこの層からかなりまとまって出土した。上層は暗灰色粘質土⑪と黒色土⑬が認められ、この層からも土器、瓦、木簡等が検出された。上層から上の層にはS D2335、S X2523等が造られるが、S D2335の埋土(茶灰色砂質土)⑯をのぞいた他の層は整地された層と考えられる。

S D2340から出土した遺物は、先の第83、84、85次出土遺物と年代的に大差なく、早い時期に埋没したものと考えられる。溝はさらに北へ延びているが、結局第85次調査で検出した南端



第29図 S D2340土層図

- | | | |
|----------------------|------------------------|-----------|
| 1. 黄色土 | 10. 黒色土 | SD 2340上層 |
| 2. 暗茶灰色砂質土 | 11. 暗灰色粘質土 | |
| 3. 茶褐色土 | 12. 黒色土 | SD 2340中層 |
| 4. 暗灰色土(瓦を混じえる) | 13. 黒灰色粘質土 | |
| 5. 暗茶色砂 | 14. 單青灰色粘質土(黒灰色粘土塊を含む) | SD 2340下層 |
| 6. 暗茶灰色砂質土(瓦を混じえる) | 15. 單茶灰色粘質土(灰色粘土を混じえる) | |
| 7. 暗茶黄色土 | 16. 茶褐色砂土 | |
| 8. 茶灰色砂質土(S D2335埋土) | 17. 黒茶色粘質土 | |
| 9. 茶灰色砂質土 | 18. 暗灰色粗砂 | |

部までの総延長131.50mを確認したこととなる。

S D 2335 第83次調査で検出した石組溝（S D 2335）の延長で、S D 2340廃絶後に造られた溝である。発掘区南端から約4.0m付近まで石組がみられるものの残存状態はきわめて悪く、側石の石組と石敷が比較的残っているのは長さ1m分くらいである。この部分での溝幅は約50cm、深さ約40cmで、第83次調査結果とはほぼ同じである。北方に行くに従って溝のプランは不明瞭となり、わずかに砂の流れが認められるだけである。この溝が全てにわたって石組であったのかは抜き取りの痕跡ないので定かではない。

井戸

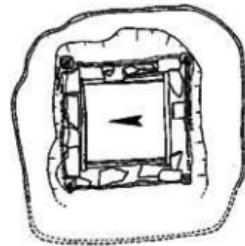
S E 2510 発掘区東端にあって、検出した溝 S D 2340のほぼ中央部に位置し、溝埋土に切り込んで構築された井戸である。掘形はほぼ一辺約1.9mの隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さ約1.2mである。上部は四隅に一辺8.0cm前後の断面方形の角柱を配し、幅10.0cm~12.0cm、厚さ2cmの板材を縦に整然と立て並べている。最も保存が良い西北の隅柱は残存高約60cmである。四隅の角柱から角柱までの長さは東西94cm、南北98cmでほぼ正方形のプランを呈する。したがって縦板材は8~9枚程度並べられている。縦板は内側と外側の二重になっており、内側の板材の合せ目に外側板の中央部がくるよう配されている。下部は井籠組の井戸側が1段分（高さ約28cm）残存していた。一辺の長さは内法で69.8cm~71.2cmあり、厚さ約5.6cmである。上部縦板材と井籠組上端との間は約1.5cm前後あり格子目叩きの平瓦、丸瓦が敷かれていた。平瓦の中には「筑前」「賀茂瓦」、「佐瓦」等の文字瓦が含まれていた。

その他の遺構

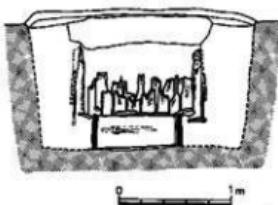
S X 2514・2531・2532 発掘区の西南部と東南部で顕著にみられる黒色粘土の採取のための掘削穴である。これはS B 2515・2520などの柱掘形を切っており、その掘削はプランや深さも一定でなく乱雑である。これは砂質の部分にはみられず、黒色粘土部分のみ集中して掘削されている点は注意される。

S X 2533 2個の柱掘形がS X 2532を切込んでおり、いずれも柱根がわずかに残存していた。この柱穴が個々に独立したものか、櫛になるものかは不明である。

S X 2523 S D 2340の中央部に検出し、溝 S D 2335が廃絶された後にできた瓦敷遺構である。



33.60



第30図 S E 2510実測図

瓦敷は南北約5m、東西約4mを測り、破碎した丸・平瓦が密に検出されたが、なかには丸瓦、平瓦が並列する個所も認められた。瓦は縄目・格子目叩きの丸・平瓦が混在し、他に無文磚、文字瓦（平井瓦、佐瓦、賀茂瓦、筑前）がある。

出土遺物

S B2530出土土器（第31図）

須恵器

杯（1）直接に接合しないが同一個体と考えられ、図上復原した。体部と内底部の大部分はヨコナデで、内底中心部はナデ調整する。胎土中に砂粒は少なく精良である。柱樋形内より出土。

S B2540出土土器（第31図）

須恵器

皿（2）底部はヘラ切りで生乾燥後に器面調整をして平滑にしている。体部との境は手持ちヘラ削りをしているため境界が不明瞭となる。内底中心部はナデ調整する。口縁部に漆が付着している。復原口径18.7cm、器高3.2cm。

S D2335出土土器（第31図、図版56）

土師器

皿（3・4）3は復原口径14.7cm、器高1.7cm。底部はヘラ切り、体部はヨコナデである。4の底部は丁寧に回転ヘラ削りし、体部から内底はヘラミガキを施す。胎土にはほとんど砂粒を含まない精良な土器である。復原口径20.4cm、器高2.8cm。

杯（5・6）5は底部をヘラ削り調整する無高台の杯である。磨滅のため全体に不明瞭である。6は内外面をヘラミガキするが、内面については不鮮明である。

椀（7）底部を除いて内外面を回転ヘラミガキする。底部に「有」の文字を線刻する。

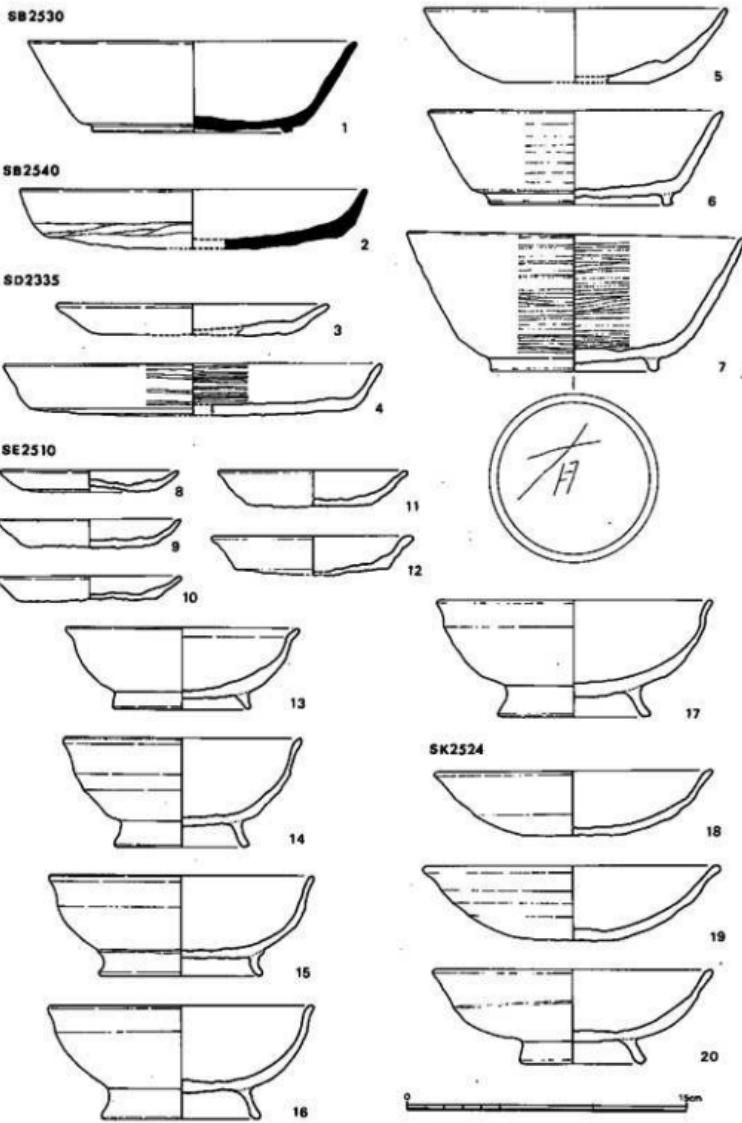
S E2510出土土器（第31図、図版56）

土師器

皿（8～12）口径9.7cm～10.0cm、器高1.2cm～1.5cmのものと、口径10.3cm～10.9cm、器高2.0cm～2.1cmがある。いずれも底部はヘラ切りで、板状圧痕を有する。

碗（13～17）体部中位が丸味をもち、口縁部を

	口径	器高	底径・高台径
3	14.7	1.7	9.6
4	20.4	2.8	17.5
5	16.2	4.0	7.6
6	15.8	5.1	9.8
7	18.0	7.4	9.0
8	9.7	1.2	7.2
9	9.9	1.5	6.0
10	10.0	1.3	7.5
11	10.3	2.0	6.9
12	10.9	2.1	8.2
13	12.6	4.5	7.5
14	12.8	5.9	7.3
15	14.2	5.5	8.7
16	14.3	6.2	8.6
17	14.9	6.3	8.2
18	14.9	3.5	
19	15.9	4.0	
20	15.0	5.1	6.7



第31図 SB2530・2540・2528、SE2510、SK2524出土土器実測図

外反させる椀である。全体はヨコナデにより成形し、内底はナデ調整する。

S K2524出土土器（第31図、図版56）

土師器

丸底の杯(18~20) いずれも内面をミガいて器面調整する。19の内面には楕円状の炭化物が付着している。20は18・19の形態のものに高台を貼付けしたものである。

S D2340出土土器（第32~41図、図版49~55・92）

須恵器

蓋(1~27) 1・2のように身受けの返りがあるものも少数ではあるが出土している。両者ともに外天井部はヘラ切りのままである。1の外天井部にヘラ記号、内天井部には墨が付着している。転用硯とすれば大宰府出土例中最古に位置付けられる。5~7・11・16・21のように口縁部が小さくなつたものも含まれる。昨年度に報告した第84次調査出土品にはみられなかつた現象である。11・18の外天井部は未調整である。6・18は内天井部を硯部としている。11・17・25に墨書があるが、判読できるものは25の「勝万呂」だけである。11の外天井部には板状圧痕がある。

杯(28~67) 29・30・32・49・52・65・69の外底部には回転ヘラ削り調整があるが、他はヘラ切り離しのままである。30のヘラ削りは丁寧で、体部中位から始まる。36・56・58の外底には板状圧痕がある。47の底部にはヘラによる家らしき文様がある。30・32・40・48・51は灯火器として使用されたためであろう内面に煤が付着している。46の内面には赤色顔料、68の内面には漆が付着している。51・56・60・69には墨書があるが、判読できるのは51の「杉寺」、60の「元」である。

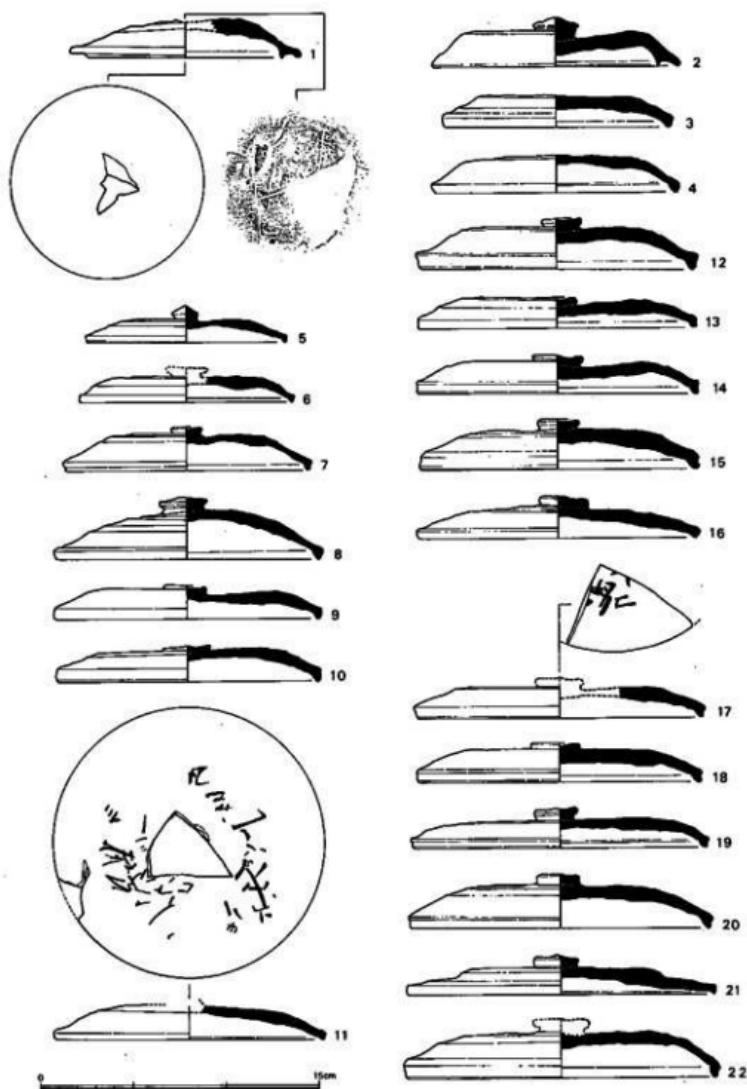
皿(70~73) 全て回転ヘラ削り調整。70の口縁端部は平坦にし、外側を若干ひねり出している。

高杯(74~79) 深い杯部を有する74・75と浅い皿形品を杯部とする二種類が出土した。杯部底部は回転ヘラ削り調整である。78の脚部にはシボリ目がある。75の脚部中位に1条の沈線があるが一巡しない。74の内面には油煙が付着している。

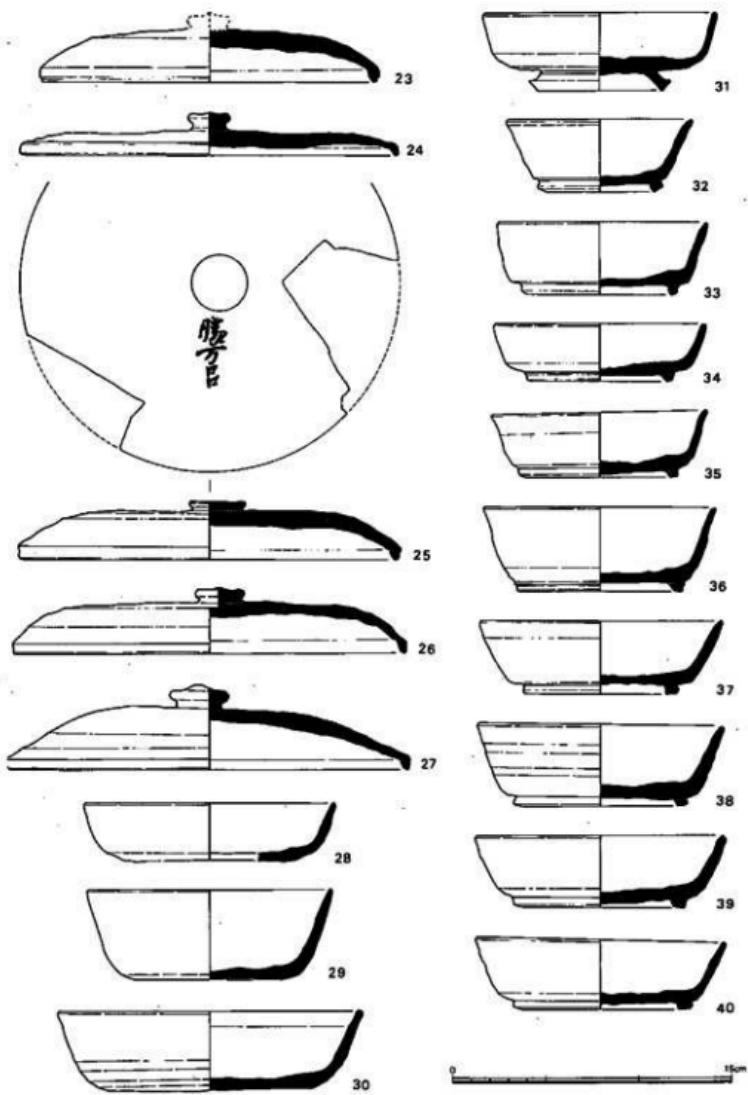
壺蓋(80~82) 天井部は回転ヘラ削り調整である。80は口縁部内面に1条の粘土紐を貼付けているため端部が内傾している。82は撥が剥離した痕跡や貼付け時のヨコナデ等はない。

壺(83~85) 83は「葵巣形」の壺である。体部下位から底部全面に回転ヘラ削り調整がある。胴部最大径は中位近くにあり、20cmを測る。胴高指数は44.5、径高指数は77.5である。84は短頸の小壺で、肩部と胴部の違いは明瞭で稜をなし、径10.4cmを測る。底部は手持ヘラ削り調整を行う。85は短頸の壺に復原できる体部の破片である。肩部に1条の沈線が巡る。体部中位以下は回転ヘラ削り調整をしている。

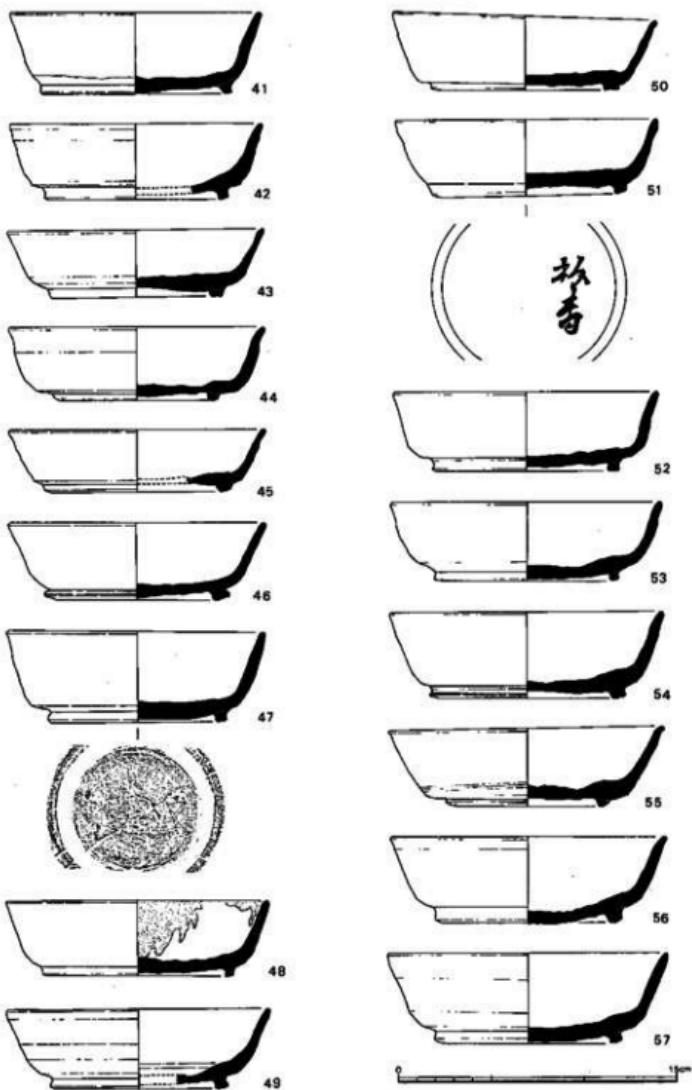
鉢(86~91) 86は平底の深鉢の残片である。残存部にはヘラ削りなどの調整はない。生乾燥



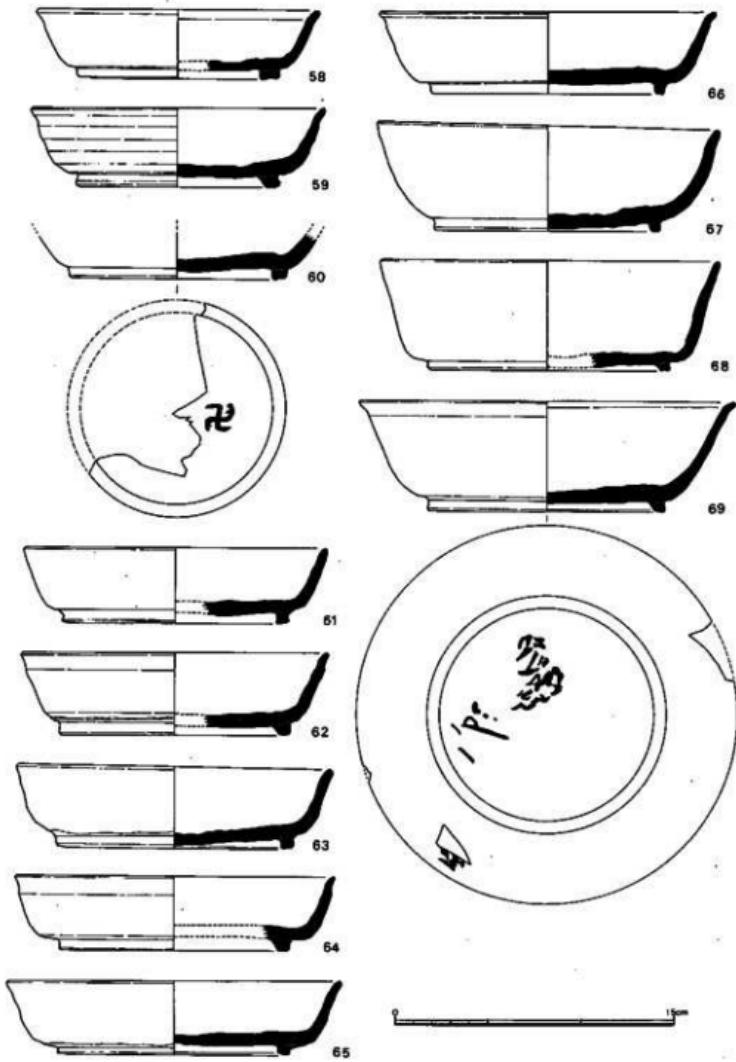
第32図 SD2340出土土器実測図(1)



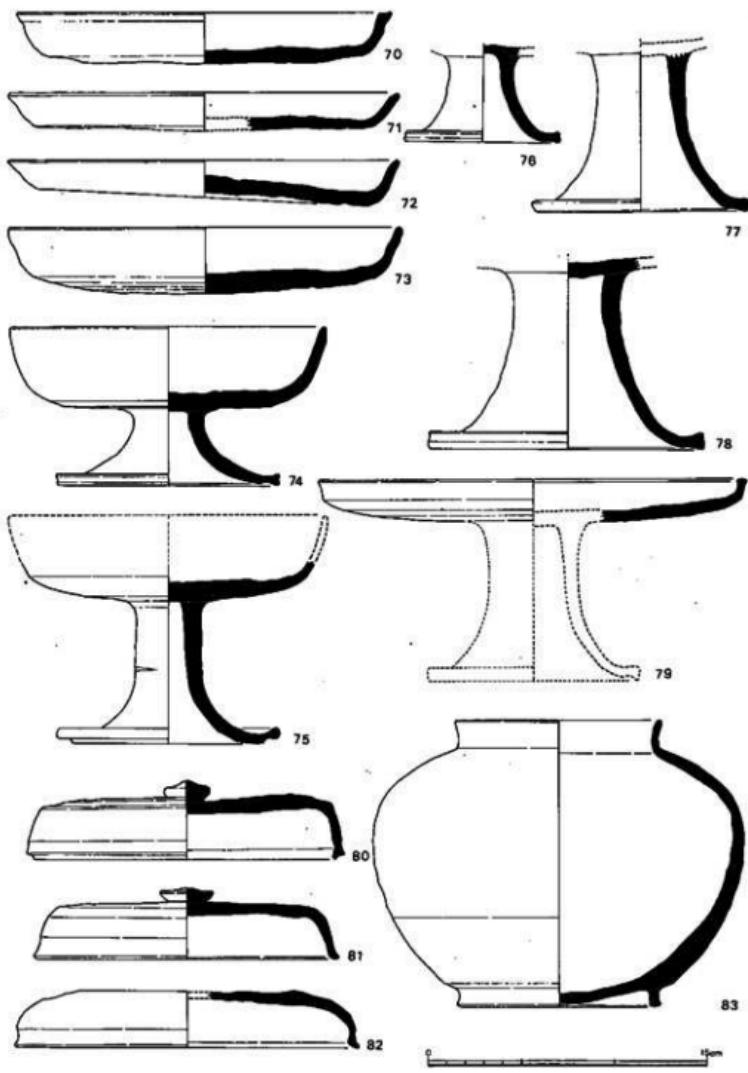
第33図 SD 2340出土土器実測図(2)



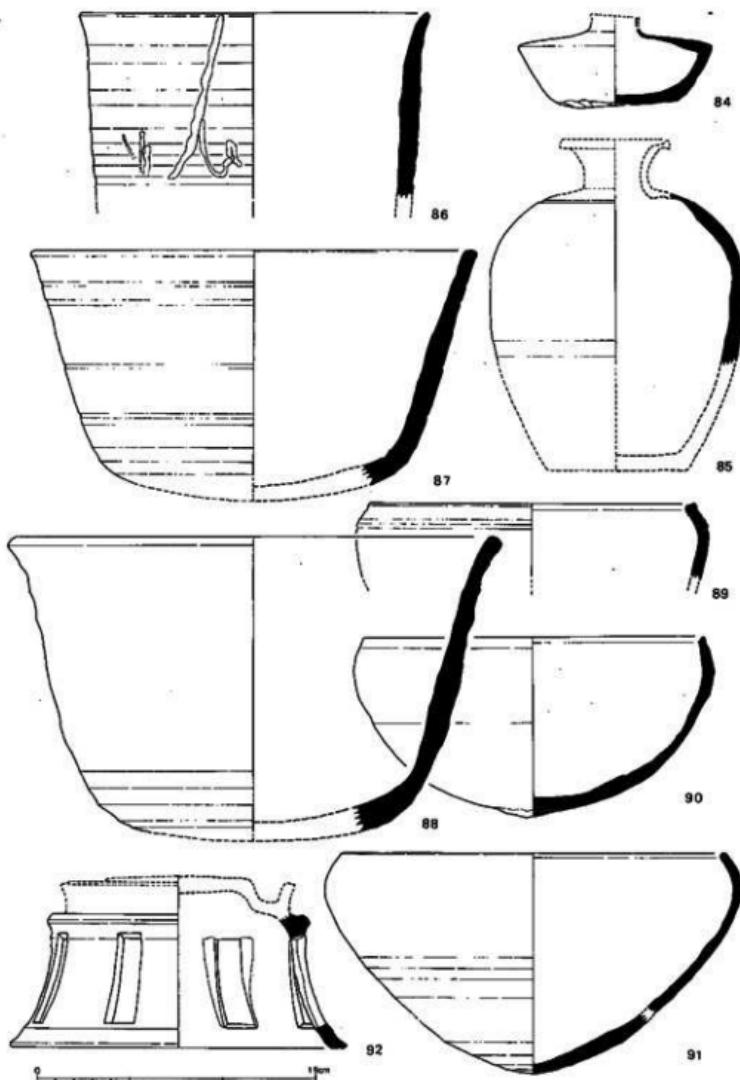
第34図 S D2340出土土器実測図(3)



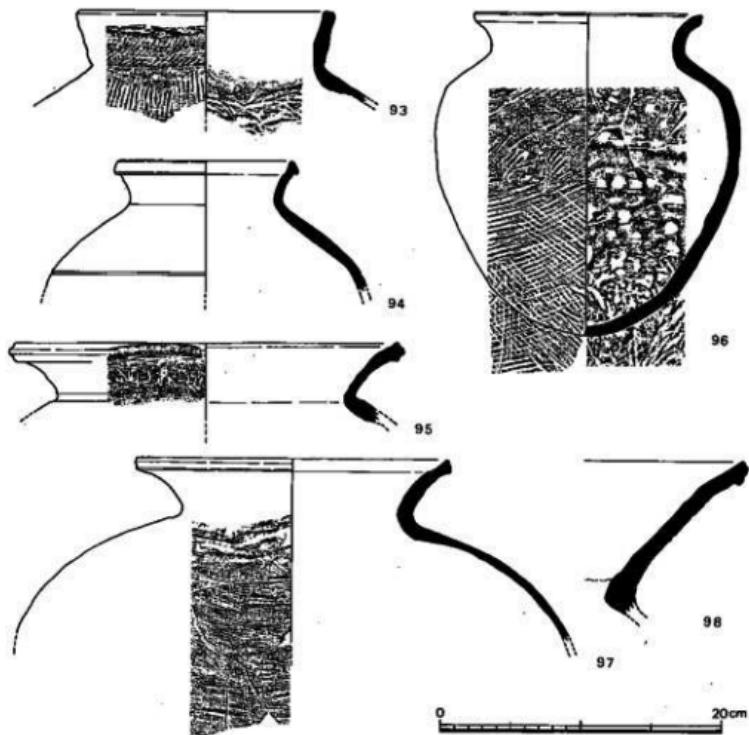
第35図 SD 2340出土土器実測図(4)



第36図 SD 2340出土土器実測図(5)



第37図 SD 2340出土土器実測図(6)

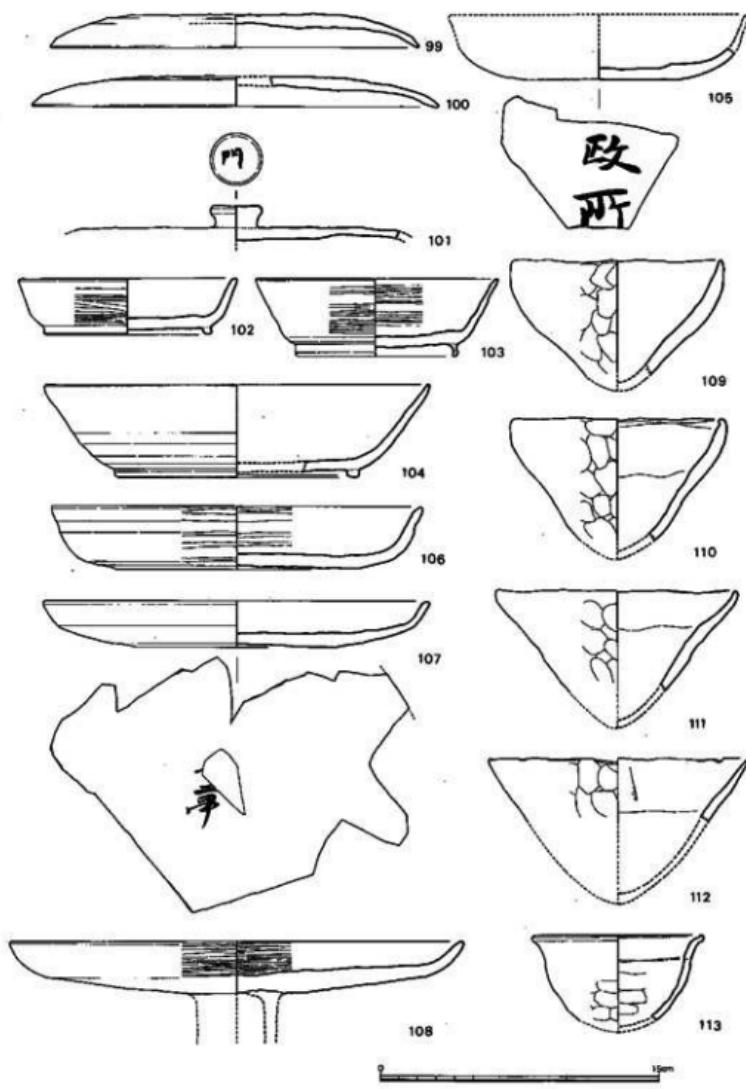


第38図 SD 2340出土土器実測図(7)

時にヘラにより文様らしきものを描いているが意味は不明である。87・88は丸底で体部下位から底部にかけて回転ヘラ削りをしている。87の沈線は意識的なものではなく、成形時に生じたものである。84は口縁端部と肩部に2条の突帯が巡る。90・91は鉄鉢形の鉢である。90は丸底にした後に粘土を貼付け、尖底風に仕上げている。両者とも体部中位以下は丁寧な回転ヘラ削り調整をしている。

硯(92) 円面硯の脚部小片である。透しの位置が2箇所知れるだけで、その幅は明らかでないが、他の例から想定復原した。精選された粘土を用い、灰色で硬質に焼成している。

甕(93-98) 93は頸部まで平行叩き目があり、頸部はヨコナデにより、体部上位はカキ目によって消されている。94は体部上位に1条の沈線が巡り、残存部外面全体にカキ目があり、叩



第39図 SD 2340出土土器実測図(8)

	口 径	高 度	底径·高台径
1	12.5	2.0	
2	13.3	3.7	
3	12.1	6.6	
4	13.0	2.0	
5	10.8	2.0	
6	11.5		
7	13.2	2.4	
8	14.0	3.4	
9	14.2	1.8	
10	14.2	2.0	
11	14.4		
12	14.9	2.3	
13	15.0	1.6	
14	15.1	2.1	
15	15.0	2.7	
16	15.2	2.3	
17	15.3		
18	15.3	2.1	
19	15.7	2.1	
20	16.1	2.9	
21	16.5	2.1	
22	16.6		
23	18.0		
24	20.3	2.3	
25	20.4	3.1	
26	21.0	3.5	
27	21.6	4.6	
28	13.5	3.1	9.5
29	13.2	4.8	7.8
30	16.4	4.3	11.0
31	12.6	4.2	7.7
32	10.0	3.9	6.8
33	11.3	3.9	8.4
34	11.4	3.1	7.8
35	11.6	3.5	8.5
36	12.4	4.6	9.0
37	13.0	3.9	8.2
38	13.3	4.4	9.4
39	13.4	3.9	9.7
40	13.5	3.7	9.7
41	13.5	4.4	10.3
42	13.6	4.1	10.0
43	13.8	3.6	9.1
44	13.8	4.0	8.8
45	13.9	3.3	10.1
46	13.9	4.2	10.0
47	13.9	4.9	9.6

	口 径	高 度	底径·高台径
48	14.1	4.1	10.3
49	14.2	4.3	9.6
50	14.2	4.1	10.1
51	14.2	4.1	10.5
52	14.3	4.3	10.0
53	14.7	4.3	10.0
54	14.8	4.7	10.6
55	14.9	4.2	8.7
56	14.9	4.7	10.0
57	15.1	4.9	10.1
58	15.2	3.7	10.9
59	15.9	4.3	10.9
61	16.3	4.1	12.2
62	16.6	4.5	12.4
63	17.0	4.4	12.7
64	17.7	4.0	12.4
65	18.0	4.0	12.5
66	18.1	4.4	12.4
67	18.4	5.7	12.1
68	18.4	5.9	13.1
69	20.3	5.9	12.7
70	20.1	2.8	16.9
71	21.0	2.1	18.3
72	21.1	2.0	17.8
73	21.2	3.6	18.5
74	17.0	8.5	11.9
79	23.1		
80	16.0	4.2	
81	16.4	3.9	
82	18.4	3.0	
83	11.1	15.5	11.0
86	18.8		
87	24.0	(13.5)	
88	26.6	(16.5)	
90	18.3	9.7	
91	20.6	11.9	
96	16.2	22.8	
99	19.9	1.7	
100	21.9	1.6	
102	11.7	4.0	9.1
103	13.1	4.2	8.7
104	20.8	5.0	13.1
106	20.0	3.4	13.0
107	20.9	2.5	10.8
108	24.5		
113	9.3	(5.3)	
115	24.7	(24.5)	

きはない。95の頸部に「宇治部君」という焼成前のヘラ描文字がある。96・97は外面に平行、内面に弧状の叩き目がある。96の内面上位には成形時の指頭痕が調整されることなく残っている。この指頭痕のある外面にも平行叩き目があり、当具としての叩き目が残存していないのは理解に苦しむ。98は頸部に3条の沈線を巡らし、体部内面には弧状の叩き目がある。

土師器

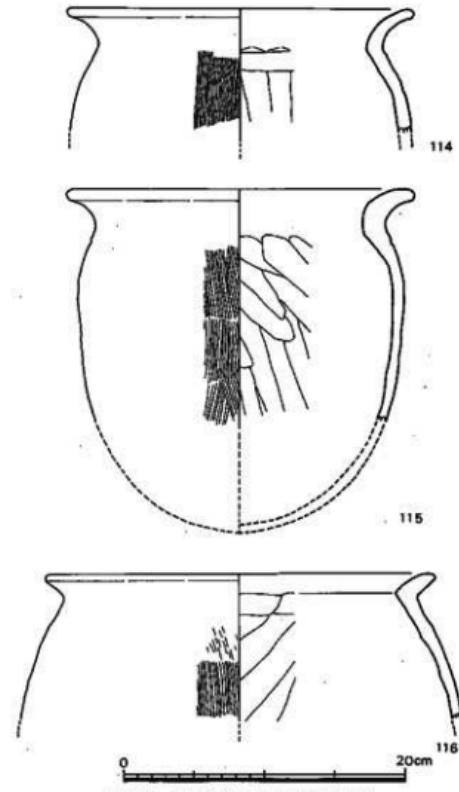
蓋(99～100) 99・100の外天井部は丁寧な回転ヘラ削り調整、口縁部はヘラミガキ状に器面調整している。あるいは皿形品かも知れない類例の乏しい資料である。101は撥頂部に「門」の墨書がある。外天井部は回転ヘラ削り、内面はヘラミガキしている。

杯(102～105) 102は外面、103は内外面をヘラミガキしている。104は体部中位以下を回転ヘラ削りしている。3点とも胎土は精良である。105は無高台の杯に復原できる残片で、外底部に「政所」と読める墨書がある。

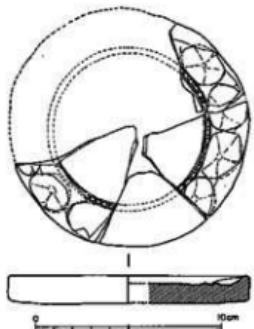
皿(106・107) 106・107の外底は回転ヘラ削り調整をしている。106は内外面を粗なヘラミガキをしているが、内底は磨滅のため明らかではない。107の底部は口径に比して小さく、稀有な資料である。底部に2～3字の墨書が認められるが判読困難である。

高杯(108) 脚部を欠失し、杯部だけが残存している。杯部外底は回転ヘラ削り調整、体部および内底部はヘラミガキしている。

塩壺(109～112) 図示した塩壺は全て円錐形のタイプであり、圧倒的にこのタイプが占める



第40図 SD 2340出土土器実測図(9)



第41図 S D2340出土土製品実測図

が円筒形のものも若干出土している。外面は指頭圧痕、内面は器面調整のため、型原体を知る手掛りを失っている。型造り。

甕(113~116、A・B) 113は人面用土器であり、体部中位以下には乱雑な指頭圧痕が残り、この部分の内面は横方向のナデにより指頭圧痕を消去している。体部上半はヨコナデ調整である。人面土器のように溝に流すような祭祀用を目的とした器であろう。114~116は3点ともに相違した特徴を有している。114と115は口縁部が外彎する特徴は一致するが、115の方が厚く古期の特徴を示している。116は115と同様に口縁部を厚くつくり、しかも内面の口縁部と体部との境はヨコ方向のヘラ削りにより明瞭な稜線をなす。図版55-A・Bは玄界灘式土器である。

用途不明土製品(第41図) 瓦質の焼成で軟質で、淡黒灰色を呈する。内面は平滑に仕上げられている。鉄型とも考えられるが、使用された痕跡ではなく、鉄型特有の真土やスサなどもない。

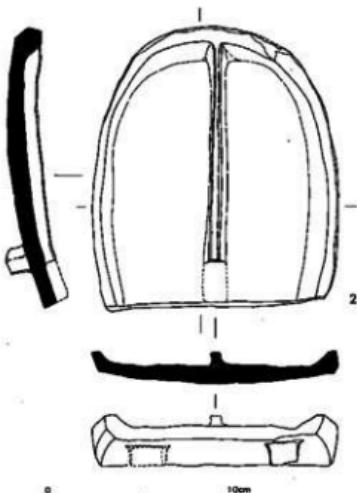
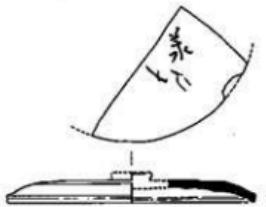
S X2514・2532出土土器・陶磁器 (第42図、図版57)

緑釉陶器

椀(1) 口縁部の小片で、淡灰色の精良な胎土に淡黄緑色の釉がかかる。内面に毛彫り文様



第42図 S X2514・2532出土土器・陶磁器実測図



第43図
S X2529、茶褐色土層出土墨書き土器・現実測図

がある。

青磁

合子(2) 越州窯系の合子の身である。口縁部を欠くが、立ち上がりの部分がわずかに残る。外面は回転ヘラ削りし、内面はヨコナデである。灰色の胎土で、底部は露胎となっているが、他は淡黄緑色の釉が施されている。今回が初例の資料である。

S X2529出土土器 (第42)

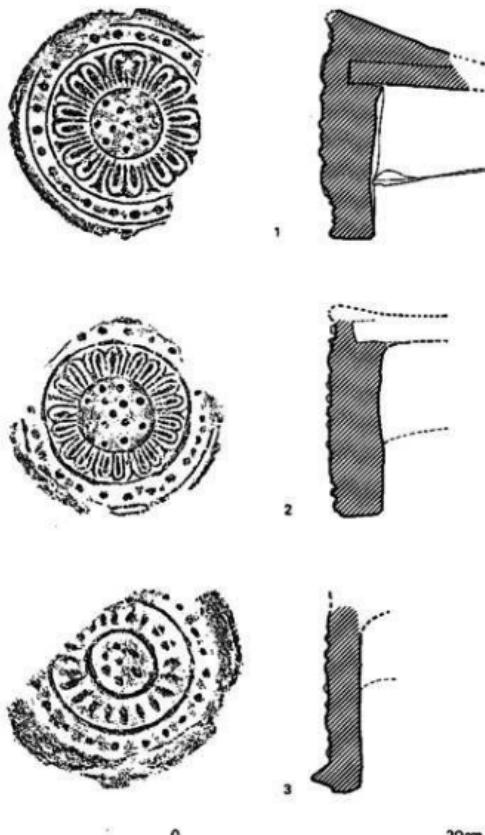
図、図版57)

須恵器

蓋(1) 復原口径13.2cmで、天井部の外面はヘラ切り後ヨコナデしている。内面は墨書きと墨痕がみられ、硯として転用している。墨書きは「承」の異体字である。「承」と意味不明の「ナ」がある。

暗褐色土層出土土器 (第43図、図版57)

硯 硯頭部が丸くなり、硯部を中央に凸帯を設け二分割した、いわゆる二面風字硯と呼ばれるものである。硯尻部には縁部を設げず、裏面に平面が五角形になる高さ約1.7cmの脚を2個貼付けている(1個は欠失している)。硯面はナデで、裏面は木口を使ったヘラナデであるが、部分的に縁部と同時にヘラ削り調整している。硯面は使用され器面は滑らかとなっている。左右の硯面の一方には部分的



第44図 軒丸瓦拓影・実測図

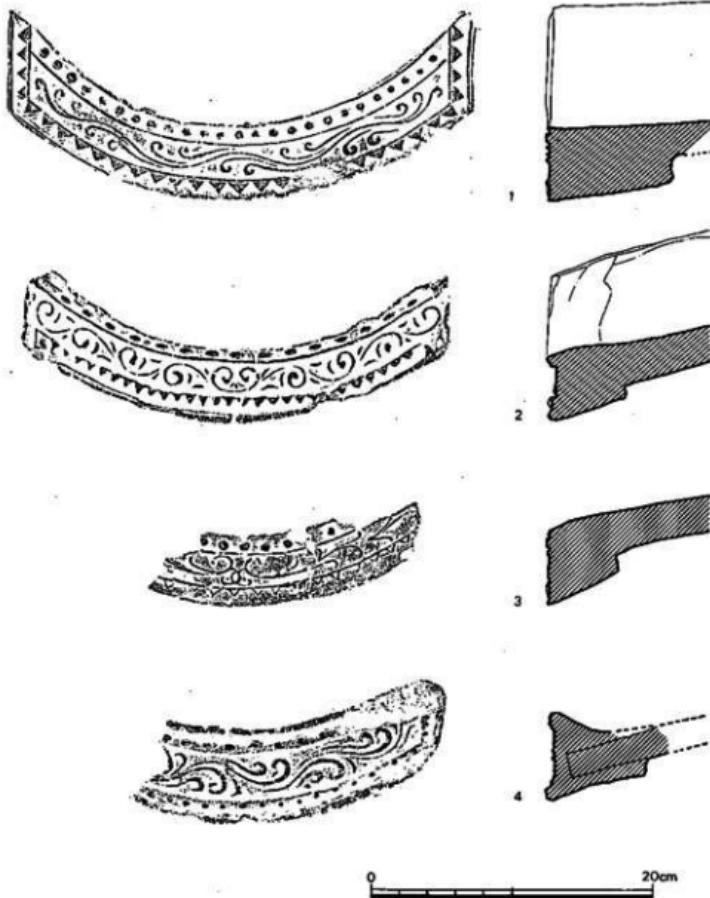
に朱墨痕がみられる。S D2335・2340埋没後に堆積した暗褐色土層出土である。

瓦類（第44・45図、図版89・90）

この調査で出土した瓦類は軒丸瓦56点、軒平瓦82点、文字瓦、鬼瓦、贊斗瓦である。これらは主に遺構面を覆う灰褐色土、暗褐色土、茶褐色土から出土したが、特にS D2340から出土した軒先瓦、丸・平瓦は注目すべきものがある。すでに第85次調査において紀年銘のある木簡と共に伴しており、今回も4例の紀年銘のある木簡と共に存し、それから絶対年代を知ることが可能である。S D2340出土軒先瓦については第85次調査において報告した軒先瓦（別表1—1、3、5と別表3—1、2、3、4）以外に新たに検出した瓦は1点である。ここではS D2340出土の軒先瓦を中心に出土量の多いものについて述べることとする。

まず軒丸瓦であるが、第44図—1は鴻臚館式で10点出土し総数の18%を占める。S D2340から検出した。中房に1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。内区の蓮弁と外区珠文の割付けが整然と行われている。瓦当と丸瓦の接合位置は弁区付近にあり、丸瓦凸面にかなり多い支持土が充てがわれている。第44図—2は13点出土し、総数の23%を占める。瓦当面は全体に平坦で、中房に1+4+8の蓮子を配し、蓮弁は複弁九弁蓮華文である。外区内縁には珠文22個をおき、外縁は比較的平坦な素縁である。瓦当と丸瓦の接合位置は珠文帶付近にあり、1と同様サシコミ式による技法である。この瓦はS D2340の上層（茶灰色土）から出土した。第44図—3は7点出土し、総数の12.5%を占める。中房は比較的太い脇線が巡り、1+6の蓮子を配す。弁は小さく単弁二十一弁を配し、外区内縁には23個の珠文を巡らす。外縁は素縁で断面三角形である。この瓦は文様的にはくずれた様相を示しているが、成形ないし瓦当裏面下端に凸帯を有するものもあり、製作技法には古い要素が伺える。淡茶色で胎土に砂粒が多く含まれている。

軒平瓦の出土率は鴻臚館式が圧倒的に多く総数の52.4%を占めている。第45図—1は老司Ⅱ式と呼ばれている瓦で10点出土した。S D2340から出土し、すでに第85次調査において木簡と共に伴している。瓦当面は右から左に流れる扁行唐草文で、両端2本の支葉をのぞいた他の支葉はすべて主軸をなす波状線からはずれている。上外区に珠文25個、下外区および脇区は外向凸鋸齒文を配する。頭部は9cmを測る深い段頭で、平瓦との接合位置は強い指ナデによって調整されている。2は鴻臚館式で43点出土した。文様は内区中央に「小」字形の小葉を配し、曲線文で囲んだ中心飾である。唐草はそれから左右に4回反転するが、接続しておらず、各々子葉を伴っている。上外区に杏仁様の珠文15個を配し、下外区は外向する凸鋸齒文28個と、内向する凸鋸齒文1個を配している。頭は5.5cmを測る段頭である。S D2340出土の鴻臚館式軒平瓦の平瓦部凸面の叩きはそのほとんどが繩目で、黒色に焼成されている。3は20点出土し、軒平瓦出土総数の24%を占める。中心飾は交差する曲線文から成り、左右に唐草文が派生する。蔓草は細い線で表現され、蔓草の巻は弱い。上外区に珠文、下外区は線鋸齒文である。頭は段頭



第45図 軒平瓦拓影・実測図

である。4は5点出土した。そのうちの1点はSE2510の井戸に使用されていたものである。内区文様は左から右に流れる扁行唐草文で、三本の蔓草を1単位とした唐草文である。上外区、下外区、脇区は小粒の珠文を密に配している。製作技法はいわゆるサシコミ式によっており、額は段額から曲線額に変化する過渡期に属する。井戸中出土の土師器からみて十世紀後半を下

限とすると考えられる。

文字瓦は60点出土し、10型式26種に分類できる。「平井」銘瓦11種、「佐」銘6種、「賀茂」銘2種の他「大国」、「八年」、「小イ瓦」などが主なものである。特に「大国」銘はSB2515建物の柱頭形から出土した。「大国」銘を伴う軒平瓦は別表3—9で中心飾に桃実様を配した均整唐草文で、これとセット関係にある軒丸瓦は別表1—14である。これらは政厅跡回廊の西南両部の調査において、多量の焼土と共に検出されておりその出土状態から下限を十世紀前半までとすることが可能である。

この他道具瓦に鬼瓦片、熨斗瓦1点、無文塊がある。鬼瓦はSD2340から1点出土し、政厅跡脇殿出土のものと同じものと考えられる。

木簡(図版72—81)

木簡は、第87次調査ではSD2340の中層から51点、また第90次調査ではSD2340の上層から2点、中層から41点、そして下層から4点、の合計98点を検出した。このほか、いわゆる木簡様木片がかなり見られたが、そのいずれにても墨痕は認められず、また形状的にも損傷のために原形を推定できない小片が多く、木簡ないしその一部とみなすには決め手に欠けるので、ここではそれらをすべて除外した。このSD2340からは、すでに昨年度の概報でも報告したように、第83~85次調査において合計62点を検出しているので、最終的には総計160点の木簡を検出したことになる。なお、前述のように、この両次調査区に特記すべきほどの差異は存しないが、木簡については便宜的に両次調査を区別して報告することにしたい。また、図版番号のうち括弧つきのものは赤外線テレビの画面を撮影したものである。

はじめに、第87次調査出土の木簡について概略的に見ておこう。

墨痕の有無はともかくとして、これらを形態的に分類してみると、次のようになる。なお、以下の型式分類は木簡学会のそれに準拠している。

まず、現状ではいわゆる短冊型を呈するもの(011型式)が1点見られるが、後述のように、これには若干の疑問が存するようにも思われる。次に、長方形の材の一端近くの左右両辺に特有の切り込みを入れたもの(032型式)が14点あり、そのほかに、その他端を尖らせたもの(033型式)が2点、またそれらが何らかの原因によって損傷しているために他端の原状を特定できないもの(039型式)が12点ほど見られる。このように、いわゆる付札類が合計28点あり、全体の約55%を占めている点が注目されるが、SD2340出土木簡の全体を見ても、この型式のものが約三分の一強を占めており、大きな特徴をなしている。一方、損傷や腐蝕など何らかの原因によってその原形が明らかでないもの(081型式)が20点あり、そして削屑(091型式)はわずか2点にすぎない。出土点数に比して削屑が少なく、039型式や081型式などの損傷を受けているものが多いが、昨年度の概報でも述べたように、これは出土遺構が溝であることと無関係ではなく、流れているだけに損傷する機会が多かったのであろう。

次に、これらの木簡に墨書きされた文字について見てみると、その字数はともかくとして少なくとも1字以上を判読ないし推読できるものは31点あり、約61%を占める。また単なる墨痕や墨つきではなく、文字のかなりの部分が残存しているが、腐蝕などのために断片的であり、具体的な文字を想定できないものが7点、わずかな墨痕が見られるだけで、字形をなさないものが7点見られる。そして残りの6点は形状的には木簡ないしその一部と判断されるが、墨痕は全く認められないものである。

以下、第87次調査出土の木簡のうち代表的なものについてその概要を報告し、合わせて若干の所見を述べるが、駆文に付した符号はいずれも木簡学会で用いられているものである。

(1) 「V横屋郡紫草升根」

032型式。柾目。上下2片に折れ、上端左辺などに若干の損傷は見られるが、両片はほぼ接合し、また原形をとどめているので、完形とみなしてもよいだろう。その法量は、長さ12.8cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmである。全文字の墨は完全に消失しているが、その痕跡は明瞭であり、それによって判読できる。第85次調査出土の木簡(4)よりは若干小ぶりであるが、両者は同文であるだけでなく、筆跡もきわめて近似しているので、同筆の可能性が考えられる。紫草など内容については昨年度の概報に述べているので、ここではくりかえさない。なお、頸部に見える痕跡は結えつけられた紐のものであろう。

(2) 「V怡土郡紫草升根」

032型式。柾目。表面に若干の腐蝕は見られるが、他に損傷はなく、ほぼ完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ11.0cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmである。表面はかなり黒ずんでおり、文字はかろうじて判読できる程度である。木簡1に対比すれば、「郡」字などの筆跡が似ているので、同筆かとも考えられる。怡土郡は筑前国15郡のうちで、現在の福岡県糸島郡に当たるが、かつての伊観県(『日本書紀』仲哀八年正月壬午条)や伊都国(『魏志倭人伝』)などの故地としても知られている。

(3) 「V怡土郡紫草升X」

039型式。柾目。腐蝕が著しく、とくに下半部を欠いているが、記載内容から推して、本来は032型式のものであろう。現存法量は、長さ10.2cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmである。これも表面が黒ずんでおり、肉眼では部分的な墨痕が見られる程度にすぎず、判読は困難であり、赤外線テレビによった。「升」字は図示した程度にしか判読できないが、他の例からしてこの判断に大過はないだろう。また、これの下位には「根」字が記されていたのであろうが、損傷のため確認できない。全体的な運筆は木簡(2)と似ているように考えられるが、「紫」字など明らかに異なる点も見られ、にわかには判断できない。

(4) 「V夜須郡天平^{天平}年」

032型式。柾目。下半部などに損傷は見られるが、全体的には原形を保っているとみなして

よいだろう。その法量は、長さ9.8cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmである。墨はうすく、「夜」字を除けば、肉眼による判読はかなり困難である。下半部はいわゆる割注式に記されているが、その左側に墨痕は認められない。「□」字は、間隔的に1字分であること、またこの位置の損傷部の下端に図示したような墨痕が見られること、などの点から推定したが、その中心部を欠いているので、断定はできない。「八」字の可能性も考えられるが、最終画の形状からしてそれは小さいだろう。内容的には訣文以外のことが記されていないので、詳細は明らかでない。なお、夜須郡は第85次調査出土の木簡(2)にも見られた。

(5) • 「▽岡郡全」
• 「▽一編+根」

032型式。柵目。上端の右辺に若干の欠損は見られるが、ほぼ原形を保っているとみなしてよいだろう。その法量は、長さ9.1cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。墨は比較的うすい。第1字はかなり簡略化されているが、「岡」字の異体字と考えられる。岡郡は筑前国遠賀郡すなわち現在の福岡県遠賀郡のことである。第85次調査出土木簡の中には「岡賀郡」(5~7)および「遠賀郡」(9)などと記したものが見られたので、必ずしも同一の時期ではないにしても、同郡名に関する三種の表記があまり隔たっていない時期に用いられていたことになり、この点でも注目される。すでに昨年度の概報でも述べたように、これらのうち「岡」が最も古く、ついで「岡賀」に改められたが、間もなく「遠賀」に変更されたと考えられる。また郡名表記法の1字から2字への改制が和銅六年(713)前後とすれば、この木簡の下限時期をある程度比定できるだろう。「全」の意味は明らかでないが、あるいは裏面の記載に関連するのであろうか。裏面は「1編は10根からなる」という意味であろうが、それがいかなる物品の単位かは明らかでない。しかし、その一つが「根」であることや後掲の木簡(1)などを参照すれば、これも紫草に関連するものと推定される。

(6) • 「▽岡郡□」
• 「▽一編+」

032型式。柵目。上端の両辺を欠損しているが、頂部は原状を保つとみなしてよいだろう。左右両辺および下端も原状を保っていると考えられる。木簡(5)と同文ではないが、内容的には同質と考えられ、材も同じようであるので、これも032型式と判断した。その法量は、長さ10.1cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmであり、前者より一まわり大きい。墨は全体的にうすいが、からうじて判読できる。これも「岡」字には異体字を用いているが、木簡(5)のそれとは若干異なる。また他の文字にも相異が見られるので、同筆とはみなしがたいように思う。第3字はいまだ明らかでないが、他字の大きさなどから見て、2字とみなすべきかもしれない。裏面では木簡(5)の「根」に相当する文字が見られない。この部分だけが削り取られたような痕跡は認められないで、もともと記されていなかったとも考えられ、この差異については検討を要する。

(7) 「三井郡庸米六斗」

011型式。板目。現状では損傷とみなすほどのものが認められないので、一応011型式と判断した。しかし記載内容からすれば、むしろ032型式の方がふさわしいようにも考えられるので、肩部が二次的に切断されている可能性を含め、この点についてはさらに検討をする。現存法量は、長さ11.2cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmである。墨はかなりうすく、とくに「庸」字の部分は不鮮明であるが、判読はできる。三井郡は筑後國10郡のうちで、現在の福岡県三井郡から久留米市にかけての地域に当たるが、「延喜式」民部上には「御井」郡と見える。庸は力役の代納物で、一般には布がよく知られているが、そのほかに米や塩などでも納められた。「延喜式」主計上によれば、庸米は1丁に3斗とされており、これの6斗は2人分に当たる。

(8) ×毛郡三斤八両

081型式。板目。上下両端ともに折損している。現存法量は、長さ16.8cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmである。第1字を上半部を欠いているが、残存字形および西海道の郡名であることなどから「毛」字と判断した。西海道において「某毛郡」と称するのは、筑後國三毛郡、豊前國上毛郡、同じ下毛郡そして多根島(大隅国)熊毛郡の4郡であるが、これがそのいずれであるかは判断できない。物品名が見えないので、この木簡の性格などは明らかではないが、その単位名からして、何らかの調庸物に関するものであろう。

(9) ×紫口」

081型式。柾目。上半部を欠いている。現存法量は、長さ11.4cm、幅2.6cm、厚さ0.3cmである。墨はかなりうすく、肉眼では「紫」字以外はほとんど見えない。しかし赤外線テレビによれば、「紫」字の下位にも墨痕が見られ、あるいは「草」字の一部かとも考えられるが、断片的であるために断定はできない。いずれにしても、これも紫草に関するものと推定されるが、詳細については明らかでない。

(10) 更更

081型式。柾目。各辺ともに損傷している。現存法量は、長さ5.0cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmである。現状から「更」字の習書と判断したが、左辺が二次的に切断されていることを考慮すれば、「更」を旁とする文字の可能性も考えられる。

(11) 「△合志郡紫草大根四百五十編」

032型式。板目。切込みを有することから032型式に分類したが、板というよりも、棒とみなした方がよいようにも思われる。その法量は、長さ39.2cm、幅3.1cm、厚さ1.6cmである。中央部付近から上部には漆が付着しているが、それをわざわざ塗付したとは考えられないので、おそらくは木簡としての用済み後に漆を用いた何らかの作業の用具として再利用されたのであろう。このような漆の付着に加え、表面が腐蝕していることもあり、上半部では判読が容易でない。合志郡は肥後國14郡のうちで、現在の熊本県菊池郡地方に当たる。「紫」字はきわめて

断片的な墨痕しか残存していないが、その形状や「草」字に統くことなどから判断した。「紫草大根」は紫草のうちでも根の大きいものを指すのであろう。「編」という単位が用いられているが、前掲の木簡(5)を参照すれば、450編は4500根ということになる。木簡(1)などに見られるように、20根が紫草を整理する際の標準的な一単位とすれば、これはかなりの数量になる。この木簡の形状も注目されるが、それはかかる紫草の質や数量とも無関係ではないだろう。

(3) 「V合志」

032型式。柾目。損傷らしいものはほとんど見られないので、完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ7.4cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。墨は若干うすいが、判読は容易である。『和名抄』によれば、「合志」は肥後國の郡名および薩摩國高城郡の郷名としても見える。しかし郡名だけを記している例は他にも見られるが、国郡名を省略し、郷名だけを記したと考えるのは不自然であり、やはり前掲の木簡(1)のほかに木簡29や第90次調査出土の木簡(2)などにも見られるように、これは肥後國合志郡の意味と考えた方が妥当であろう。ただ、これにはこの2字しか記されていないので、いかなる性格のものであるかは明らかでない。

(4) 「V□□郡□□」⁽¹⁸⁾

039型式。板目。上端の左右両辺および下半部を欠損し、ほぼ全面的にかなり腐蝕しているが、頂部中央と左右両辺はなお原状をとどめている。現存法量は、長さ8.9cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。肉眼では第3字が「郡」字と推定されるだけで、他はわずかな墨痕が見られる程度にすぎない。しかし、赤外線テレビによれば、「郡」字を確認できるほかに、第1・2字はその残存字形から「山鹿」と推定される。また図では第4・5字をあたかも「三町」と推定できるかのように示しているが、これは墨痕を確認できる部分だけを示したもので、あくまで参考にすぎない。両字ともいまだ細部を判別しえていないが、この2字にこの木簡のポイントがあり、この点については、後考を俟ちたい。

(4) 「V大野加海マ郡」

032型式。板目。頂部にごくわずかな損傷は見られるが、ほぼ完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ9.6cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmである。墨は明瞭であり、「加」をいかに解するかが問題ではあるが、おそらくは「大野郡と海マ(部)郡」という意味であろう。とすれば、両郡ともに豊後國8郡のうちであり、現在の大分県大野郡および南・北海部郡に当たる。他に記載が見られず、また郡名だけでもあるので、この木簡の具体的な性格などは明らかでない。なお、郡名だけを記したものには後掲の木簡(9)、(20)などが見られる。

(5) 「V大野口」

039型式。柾目。上端の左右両辺および下半部を欠いている。現存法量は、長さ5.2cm、幅2.4cm、厚さ0.2cmである。肉眼では、「大」字が見える程度であるが、赤外線テレビによって「野」字を確認できた。木簡(4)と同じく、この「大野」は豊後國大野郡を指すと考えられるが、

第3字はごく小さな墨痕が見られるだけで、字形をなさないために推定もできない。他に記載はないので、具体的なことは明らかでない。

(16) 「三袋並大分 大V」

032型式。板目。とくに損傷と言うほどのものは見られないので、完形と判断した。その法量は、長さ15.1cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmである。今回のものを含め、大宰府史跡出土の木簡で下端近くに切込みを入れたものはこれが初例である。原形は上下両端近くにそれぞれ切込みを入れた031型式ではないかとも考えられるが、確認はできない。第3~5字は割注式に記されているが、その左側に墨痕は認められない。これと同じ書式の木簡29を参照すれば、「大分」は大分郡のことと推定される。しかし、「郡」字が記されるべき位置の面は削り取られており、本来は墨書きされていた可能性も考えられるが、墨痕は全く認められず、もともと墨書きされていたかどうかは判断できない。なお、大分郡は豊後国のうちで、現在の大分県大分郡に当たる。最下端の「大」字の位置は「三袋」および「並大分」のいずれとも対応せずにずれているが、その意味は明らかでない。物品名を記されていないが、大分郡所産のある物品が三袋あり、その規格はいずれも大であるという意味であろう。

(17) 「V薩麻國枯根」

032型式。板目。下端に若干の損傷は見られるが、完形である。この種の木簡としてはかなり大きいが、そのわりに字数は少ない。また右辺の切込みの入れ方は特徴的であるが、これがいかなる理由によるのかは明らかでない。その法量は、長さ25.9cm、幅4.4cm、厚さ0.6cmである。墨は比較的うすいが、十分に判読できる。「枯根」が特定の植物を指すのか、植物の根の枯れたものを指すのかは明らかでない。

(18) 薩麻頬姓

081型式。柾目。2片に折れ、上端を欠損しているが、左右両辺および下端は原状を保つと判断される。現存法量は、長さ8.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmである。「薩麻頬姓」は薩摩国頬姓郡の意味であろうが、国、郡が省略されている理由は明らかでない。「続日本紀」文武四年六月庚辰条に見える「衣評」はこれの古称である。現在の鹿児島県揖宿郡に当たり、同郡に頬姓町が見える。この4字以外には記されていないので、この木簡の性格は明らかでないが、一種の落書の可能性も考えられる。

(19) 「V大隅郡」

032型式。柾目。下端部表面に損傷は見られるが、全体的にはほぼ原形を保っている。その法量は、長さ10.5cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmである。大隅郡は大隅国の一郡であり、和銅六年(713)四月の大隅国に建置に際して他の3郡とともに日向国から分割された。したがって大隅郡そのものはそれ以前から存在していたわけであり、これには国名が記されていないので、いずれの国に属していた時期のものかは判断できない。現在、同郡は存在しないが、鹿児島県

鹿屋市から肝属郡にかけての地域がその郡域であった。これには郡名しか記されていないので、具体的な性格などについては明らかでない。

(21) 「V桑原郡」

032型式。柾目。右辺に小さな損傷が見られるが、全体的にはほぼ完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ10.2cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。「桑」字は異体字を用いている。桑原郡は大隅国の中でも、現在の鹿児島県姶良郡の北部地域に当たる。桑原郡の史料的初見は『日本後記』の延暦二十三年(804)三月庚子条であるが、大隅国では天平勝宝七年(755)五月に菱刈郡が建置されているので(『続日本紀』同月丁丑条)、桑原郡もこの間に建置されたとする見解がある(『国史大辞典』桑原郡条)。しかし、桑原郡自体の建置を示す史料は見られず、また前述のようなS D2340存続時期あるいは同時に出土した木簡に天平年間の年紀が見られることなどからして、桑原郡は天平年間にはすでに存在していたと考えられる。これにも郡名しか記されていないので、その具体的な性格などは明らかではない。

(22) ×屋郡伊賀□^(佐賀)

081型式。柾目。上下両端部を欠損し、2片に折れ、齧歛も著しい。完全ではないが、両片はほぼ接続するとみなしてよいだろう。他にこれと同材ではないかと推定されるものが2点あるが、それらにはわずかな墨痕が見られるにすぎず、現状ではこの3点は相互に接続しない。現存法量は、長さ14.6cm、幅2.5cm、厚さ0.2cmである。肉眼ではかすかな墨痕が見られる程度で、ほとんど判読できない。第1字は上半部を欠いているが、残存字形から「屋」字と判断した。西海道において「某屋郡」と称するのは筑前国糟屋郡だけである。「伊賀」はいかなる意味か明らかでないが、糟屋郡に統くことなどからすれば、地名の可能性も考えられる。しかし『和名抄』の同郡内郷名には見えない。下端の2字は字形から「黒米」かとも推定されるが、いまだ断定できない。あるいは「伊賀黒米」になるのかもしれないし、さらには両片が接続するとなみしたことを再検討すべきかもしれない。いずれにしてもこれについては後考を俟ちたい。

(22) • 「V怡土郡□×

• 「V□

039型式。柾目。頂部と右辺以外を欠損しているが、本来は032型式のものであろう。現存法量は、長さ4.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmである。肉眼ではほとんど判読できないが、両面に墨書きが見られる。他の例を参照すれば、第4字は「紫」字の上端部かとも考えられるが、ごく小さな墨痕であるので、断定はできない。裏面の文字は「艮」を旁とする文字であり、「根」字の可能性も考えられるが、これの上位には墨痕が見られないで、問題が残る。

(23) • 「V豊前□□□^(佐賀)

• 「V□平八□九□^(佐賀)

039型式。板目。全体的に損傷がひどく、また腐蝕も著しい。さらに2片に折れているが、両片はほぼ接続する。現存法量は、長さ7.6cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmである。肉眼では両面ともかすかな墨痕が見られるのみで、ほとんど判読できない。赤外線テレビによれば、墨痕は断続的であるが、「豊前」をほぼ判読できる。第3～5字は、「豊前」に続くことやその残存字形などから、「國京都」かと推定されるが、決め手に欠ける。またその場合、第6字は「郡」字の可能性が大きいが、わずかな墨痕が見られるのみで、判断できない。豊前国京都郡とすれば、現在の福岡県京都郡に当たる。裏面では3字を判読できるが、「□」字は下端が欠損部にかかるため「日」字のようにも見える。他の2字は墨痕のみで、字形をなさないが、あるいは「天平八年九月」の意味であろうか。

04 「▽□□郡一□^(重複)

039型式。板目。損傷がひどく、また面もかなり腐蝕している。現存法量は、長さ12.1cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmである。肉眼では「郡」字の偏と「一」字が見える程度にすぎない。赤外線テレビによても、第1・2字はそれぞれ右端にわずかな墨痕が見られるのみで、西海道の郡名であることを考慮しても、具体的な文字は想定できない。一方、第5字は竹冠の文字と推定でき、その字形から「龍」字と考えられる。とすれば、郡名と数量が記されただけで、物品名は記されていなかったことになるが、その意味は明らかでない。

05 三袋合志郡 大

081型式。板目。下端は原状をとどめているが、上半部はかなり腐蝕している。そのため損傷がひどく、とくに上端が原状を保つかいなかは判断しがたい。前掲のように、木簡06はこれと同じ書式であり、それには下端近くの左右両辺に切り込みが見られたが、これではその有無を確認できない。現存法量は、17.8cm、幅2.9cm、厚さ0.4cmである。最下端の「大」字を除けば、肉眼ではかすかな墨痕しか判別しない。第1字は「二」字のようにも見えるが、その上にかすかな墨痕が認められるので、「三」字と判断した。また第2字も損傷のために判読しがたいが、木簡06を参照して「袋」字と推定した。合志郡およびこの木簡の性格については前述したので、ここではくりかえさない。

06 □□加□□^(重複)

081型式。板目。上端部を欠き、かなり腐蝕している。現存法量は、長さ15.6cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。腐蝕のため肉眼で墨痕を判別することは容易でない。これも木簡06などと同じ書式であり、第1字は左半部を残すのみであるが、その字形から「六」字と考えられる。第2字は、かすかながらも、右半部も見られ、「袋」字であろう。第3字は中心部を欠くが、前例から見て「並」字と推定される。しかし第4・5字はわずかな墨痕のみであり、判読できない。前例からすれば、郡名であろうか。

07 魔嶋六十四斗

081型式。板目。上端を欠き、2片に折れている。左右両辺は原状をとどめ、下端もその可能性があるように見えるが、にわかには判断しがたい。現存法量は、長さ18.4cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。墨はうすく、肉眼では第2字の偏と「四斗」が見えるにすぎない。第1・2字は若干不鮮明であるが、ほぼ判読できる。第3字は最終画が折損部にかかるために確認できないが、「六」とみなしてよいだろう。「鹿嶋」は薩摩国鹿児島郡の意味であろうが、「続日本紀」天平宝字八年(764)十二月是月条には「鹿嶋信爾村」と見える。地名と数量が記されているだけであるので、この木簡の具体的な性格などは明らかでない。

(8) □□

□

081型式。柾目。右辺は原状を保っていると考えられるが、他は確認できない。裏面にかなりの削り跡が見られ、とくに上下両端では厚さが異なり、下端の方が厚い。現存法量は、長さ10.2cm、幅2.5cm、厚さ0.4~0.9cmである。ほぼ全面的に墨痕が見られるが、面が削り取られているため、第1字を除き、いずれも字形をなさない。第1字も完存してはいないが、おそらく「豈」字であろう。とすれば、その下位の墨痕は「前」字の第4画、さらにその下位は「國」字の第2画の可能性が考えられ、あるいは「豊前國」云々と記されていたのかもしれないが、現状ではあくまでも一つの推測にしかすぎない。

(8) □ 神マ足嶋米

神マ□□□□

・□月廿六日 □

081型式。柾目。左右両辺は原状を保つと考えられるが、上端を欠損し、下端もその可能性が大きいようである。現存法量は、長さ9.0cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmである。表裏両面ともかなり黒ずんでおり、肉眼では墨痕をほとんど判別できず、赤外線テレビによって判読できた。表面の右行第1字はかなり明瞭であるが、欠損部にかかっているため推定するにとどめた。左行第3字以下は4文字と推定されるが、不鮮明であり、判読しがたい。裏面の第1字も欠損部にかかっているが、数字であり、その字形からは「六」ないし「九」のいずれかの文字が考えられる。下端の文字も判読できない。上部を欠損しているため、「□」字が、「下神マ」というような氏姓の一部をなすのか、あるいは、たとえば位階の下階を示すのかは判断しがたい。かりに氏姓とすれば、下神氏については『新撰姓氏錄』未定姓の摂津國の部に「葛木襲津彦命男、腰裾宿祢之後者」と見えるが、下神部については明らかでない。また、この場合、左行も「下神マ」の可能性が考えられる。いずれにしても、この木簡は断簡でもあるので、詳細について明瞭でない。

(8) • 「□□□□□

• 「合 □

081型式。柾目。左右2片に割れているが、接合する。現状では必ずしも断定できるわけではないが、墨痕の状況から見て、各辺とも二次的に切断されている可能性が考えられる。現存法量は、長さ9.2cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmである。表裏両面ともにかなり黒ずんでおり、肉眼による判読は容易でない。表面では5文字が見られるが、いまだ判読していない。また裏面下端の文字は左に片寄っており、「一」字と断定するには躊躇される。

- (31) • □□
動梨梨□□□
• □
□

081型式。柾目。各辺とも損傷している。現存法量は、長さ15.5cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmである。表裏両面に墨書が見られるが、習書と考えられる。裏面は判読できない。

- (32) □□□□

081型式。柾目。左右両辺は原状を保っているが、上下両端は損傷しているようである。現存法量は、長さ8.4cm、幅2.6cm、厚さ0.2cmである。墨はうすく、5字以上の文字が記されているが、判読できない。

次に、第90次調査出土の木簡について述べる。

前述のように、この次調査でも合計47点の木簡を検出した。それらを形態的に分類すると、次のようになる。011型式が1点、一端は方頭で他端は欠損のため原形が明らかでないもの(019型式)が3点、032型式が1点、039型式が9点、081型式が28点、そして091型式が5点である。なお、039型式のうちの1点は長方形の材の両端の左右両辺に切込みを入れたもの(031型式)と推定されるものであるが、上下2片に折れ、現状では直接に接続しないので、この型式に加えた。木質などから見て、同一個体の可能性が大きいように考えられるが、別個体とすれば、039型式のものが1点ふえることになり、総点数も48点となる。

次に、それらの文字を見ると、20点については少なくとも1字以上を判読できる。また文字のかなりの部分が残っているが、損傷などのために具体的な文字を想定できないもの、およびごくわずかな墨痕が見られるだけで、字形なきものがそれぞれ10点ずつ見られる。そして残りの7点は形狀的に木簡ないしその一部と断定できるものであるが、墨痕は全く認められないものである。このうちの4点は039型式のものであるが、いずれも腐蝕が著しく、墨が消失したのか、もともと墨書きされなかったのかは判断しがたい。

それでは、代表的なものについて概要を報告し、合わせて若干の所見を述べるが、これらはいずれもS D2340の中層から出土したものである。

- (1) • 「三關兵士□□□宗形マ刀戸早馬赤猪」
• 「□二人□」

011型式。柾目。右辺上部に若干の損傷は見られるが、完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ22.8cm、幅3.6cm、厚さ0.9cmである。面はかなり墨ずんでおり、とくに上半部の肉眼による判読は困難である。第5、6字はかなり複雑な字画の文字であるが、墨がうすく、不鮮明でもあるため判読できない。第5字は革偏の文字と推定され、旁部は「麿」字に似ているようにも見えるが、かかる文字は確認できず、さらに検討を要する。第7字は「役」字であろうが、上位の2字を判読できないので、推定にとどめる。第9字は欠損しているが、残存字形や氏名であることなどから判断した。第13字は「日下」の2字かとも考えられるが、その大きさから見て、1字とみなした方がよいだろう。

「三團」は3軍団の意味であろうが、それがどの軍団を指すのかは明らかでない。しかし第85次調査出土の木簡(1)には筑前・筑後両国の兵士のことが見え、また後述の宗形部刀良がその兵士であることから推せば、少なくとも1団は筑前国のそれと考えられる。ちなみに、筑前国には4団が置かれ、そのうちの2団はいわゆる軍団印から御笠、連賀両団であったことが知られている。宗形部はもともと筑前國宗像郡を本拠としたのであろうが、同氏は大宝二年(702)の筑前國嶋川辺里や豊前國仲津郡丁里などの戸籍に見えるほか、『続日本紀』和銅二年(709)六月乙巳条には御笠郡大領宗形部堅牛の名が見えるように、かなり広く分布していたようである。また、日下部はそれ以上に広く分布しており、西海道の各國でその存在が知られている。なお、藏司西地区における第4次調査で出土した木簡には里長日下部君牛寄の名が見られた(『大宰府史跡出土木簡概報』)。

裏面にもかすかな墨痕が見られるが、肉眼ではほとんど判読できない。赤外線テレビによつても、「二人」以外は判読できず、この2人が表面の2人を指すのかどうかも明らかでない。

(2) 「V合志口

039型式。柾目。文字の位置から見て、左辺は二次的に切断されており、本来は左辺にも切込みが入れられていたと考えられる。下端も二次的の切断の可能性を考えられるが、現状では断定しがたい。現存法量は、長さ21.5cm、幅3.2cm、厚さ0.3cmである。「合志」の2字は確認できるが、第3字は不鮮明であり、判読は容易でない。偏では下部に「口」が見えるが、上部は損傷のため判別できない。旁は一見「平」のように見えるが、その上に小さな横棒が見え、「平」と断定するには問題が残るよう思う。しかし「郡」字の旁ではなく、むしろかかる字形からは「評」字の可能性が想定されるが、いまだ断定はできない。かりに「評」字とすれば、この木簡が廃棄された時期はともかくとして、それ自体の年代はかなりさかのぼることになる。合志郡についてはすでに述べたので、ここでは繰り返さないが、これには3字しか記されていないので、具体的な性格などはほとんど明らかでない。いずれにしても、この木簡についてはさらに検討を要する点が少なくない。

(3) *

□本□

□ 十一月 日田山□□人
木工□□□□孔館仕五日 並月八 九年
□□秦人マ 遠雲館仕七日」

- 「天平八年十一月
十一□□□□十二月

□□ □□

019型式。板目。5片に折れ、損傷が著しい。上端を欠き、左辺は二次的に切断されているが、下端と右辺は原状を保つと考えられるので、019型式と判断した。現存法量は、長さ11.4cm、幅3.0cm、厚さ0.4cmであるが、両面とも波うたようになっている。裏面両面に記載されているが、その天地は反対であり、おそらく両者は異筆であろう。

表面の1行目の第3字は「郡」字のようにも見えるが、左半部が2行目に重なっているために判別しがたい。かりに「郡」字とすれば、西海道において「某本郡」と称するのは筑後・肥後両国の山本郡だけであるが、第1字を「山」字とはみなしがたいように思われる所以、なお問題が残る。2行目は他行と筆が異なり、むしろ裏面によく似た筆跡である。その下半部は欠損しているので、判読しがたい。3行目の第3～5字は右半部を欠失しているが、残存字形および4行目からほぼ推定できる。第5字は下位の「孔」字の大きさから見て「山」字とみなしてよいだろう。なお、「木工」の左側には墨つきが見られる。4行目の第1・2字はかすかな墨痕が残るのみであるが、その形状から見て、3行目と同じく「木工」と考えられる。また第6～8字を他字に比較すれば、かなり大きい。内容的には木工秦人部山孔と同じく秦人部遠雲の上番した日数を記したものであろうし、「九年」は天平九年(737)のことかもしれない。しかし、西海道における秦人部についてはよく知られていないし、また「館」ないし「館仕」や「並月八」の意味など、いまだ不分明な点が少なくなく、さらに検討を要する。

裏面の文字は、表面に比較して、かなり太く大きい。2行目の第3字は「日」字と推定したが、この部分から下部は齊触しているので、断定はできない。同じように、第4字以下の3字も判読できない。3行目は左半部を欠失しており、現状では部分的な墨痕が見られる程度である。具体的な内容は明らかでないが、表面と同じく、上日に關するものであろうか。

- (4) • 「V鹿□□□
• 「V斗

039型式。板目。右辺の下半部を欠失し、下端も原状かどうかは判断しがたい。現存法量は、長さ9.4cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmである。表面の第2字は大半を欠損しているので、具体的な文字は想定できない。左側に墨がついているが、必ずしもこの文字を抹消しようとしたものではないだろう。第3字は残存字形から「穴」字と推定されるが、右半部を欠くので、断定はできない。いずれにしても、中心部を欠損しているので、詳細なことは明らかでない。

(5) ×両二分二朱□□⁽²²⁾

081型式。柾目。左辺は原状をとどめていると考えられるが、他の各辺はいずれも損傷している。現存法量は、長さ10.1cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmである。最下端の文字はいまだ判読していない。何かの量を示しているが、欠損のため、それが何であるかは明らかでない。

(6) 進上豊後國海部郡眞紫草…□□□⁽¹⁷⁺³⁾

081型式。板目。2片に折れている。両片はほぼ接続するようであるが、完全ではないので、必ずしも断定はできない。右辺は原状を保つと考えられるが、他辺はいずれも欠損している。現存法量は、上片が長さ7.0cm、幅1.4cm、下片が長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さは両片とも0.2cmである。各文字は左半部を欠失しているが、十分に判読できる。しかし下片の文字はいまだ明らかでない。豊後国海部郡は第85次調査出土の木簡(4)にも見られたが、「部」字に正字を当てている点が注目される。眞紫草も紫草の一類ないしその状態を示すものと推定されるが、具体的には明らかでない。この木簡の書式は他の紫草関係木簡のそれとは異なっており、木簡としての機能や性格も異なっていることを示唆している。原形が明らかでないなど、いまだ検討を要する点が少なくはないが、荷札であった可能性も考えられる。また下片の第2字を「斤」字とすれば、他の木簡に見える紫草がいまだ植物としてのそれを指していると考えられるのに対し、この眞紫草はすでに染料に精製されたそれを指しているのかもしれない。

(7) 「V奄美鷲×

039型式。柾目。下半部を欠いているが、頂部および左右両辺は原状をとどめている。現存法量は、長さ5.0cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmである。墨は若干にじんでいるが、明瞭であり、判読に支障はない。「奄」字は「奄」に音通るので、「奄美」は「あまみ」と訓読できるだろう。とすれば、この「奄美鷲」は大きくは奄美諸島のこととも考えられるが、やはりその中でも奄美大島を指すとみなした方が妥当であろう。奄美島については、「日本書紀」に「海見嶋」(齊明天三年七月己丑条)や「阿麻弥人」(天武十一年七月壬子条)などが見え、また「統日本紀」では、「奄美」(文武三年七月辛未条)や「奄美」(和銅七年十二月戊午条)などと見える。この木簡は大宰府と奄美島などのいわゆる南島との関係を考える上で注目されるが、他の部分を欠失し、この3文字が知られるのみであるので、具体的なことは明らかでない。

(8) 「V伊藍嶋□□×

039型式。柾目。頭部右辺と下半部を欠損し、さらに左右2片に割れているが、両片は完全に接合し、頂部と左右両辺は原状をとどめている。現存法量は、長さ7.7cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmである。表面は若干黒ずんでいるが、第1～3字はほぼ判読できる。第4字は木簡の文字であるが、旁部を判別できない。第5字はわずかに上端が残存するのみである。全体的な筆跡は木簡(7)によく似ているように思われる。「伊藍嶋」については他に所見資料がなく、その訓も明らかでない。しかし「奄美鷲」から推せば、これも南島の一島と考えられるが、具体的

には比定しえない。ただ、鈴木靖民氏は奄美諸島の一つである沖永良部島に比定されているが（同氏「大宰府出土の木簡」—「歴史読本」3月号、1985年—）、いまだ確認していないので、今後の検討を俟ちたい。なお、木簡(7)とこれらの出土の意味などについては後述する。

(9) 宅麻

081型式。柾目。下端は原状をとどめているようであるが、他辺はいずれも腐蝕しており、原状を保つかどうか確認できない。4片に折れているが、各片は相互に完全に接続する。現存法量は、長さ13.3cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmである。文字は明瞭で、この2文字以外には見られない。「宅麻」は肥後国託麻郡のことと考えられ、現在の熊本県飽託郡に当たる。「郡」字も省略されているが、その部分の面を割り取ったような痕跡は認められない。もともと記されていないのであろうが、その意味は明らかでなく、この木簡自体の性格なども明らかでない。

(10) ⁽⁺⁾ × □ 一月 ■ 田山 □ X



• X + 十一月 □ X

081型式。柾目。各辺とも損傷している。現存法量は、長さ6.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cmである。表裏両面に記されているが、その天地は逆転している。この点では木簡(3)と同じであり、両者の記載内容も類似しているように考えられる。すなわち、ともに月名を示し、またその意味は明らかでないが、「田山」という文言が見られる点も共通している。これは断簡であるので、詳細な内容についてはこれ以上明らかにできないが、上日に関する木簡である可能性の存することを指摘し、後考を俟ちたい。

(11) 上日六十□

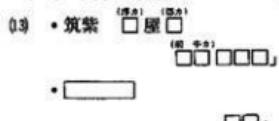
019型式。柾目。上半部を欠き、3片に折れているなどの損傷のほかに、腐蝕も著しい。しかし、左右両辺および下端はなお原状をとどめており、019型式と判断した。現存法量は、長さ14.2cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmである。腐蝕などのために5文字しか確認できないが、本来はこれ以上に記されていたのではないだろうか。内容的には上日数を記したものであるが、いかなる職種の人物のものは明らかではない。

(12) 「^(墨) □ 田ア □

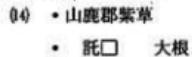


019型式。柾目。下端部の欠損は明らかであるが、上端については確認できず、一応原状を保つと判断した。現存法量は、長さ18.4cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmである。面はかなり黒ずみ、判読は容易でない。文字ないし墨痕が見られるのは上半部のみで、写真では下半部にも墨痕が存するように見えるが、そうではないと判断した。第1字の部首は「頁」であり、偏は「各」と推定されるので、「額」字とみなしたが、細部が不鮮明であるので、いまだ推定にとどめた。上位2字に比して第3字の墨はきわめてうすいが、赤外線テレビによって判読した。以下はわ

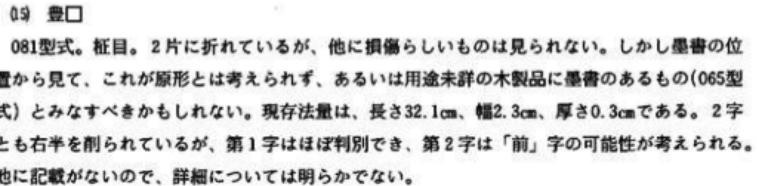
すか墨痕が見られるのみで、いずれも字形をなさない。「轄」と「轄」の両字は同音同意であり、「轄田ア」は額田部の意味と考えられる。西海道における額田部については、大宝二年の筑前国鷲郡川辺里戸籍に額田部乎太売らの名が見え、「和名抄」には筑前国早良郡額田郷が見える。他の文字を判読できないので、この木簡の具体的な性格などは明らかではない。



081型式。柾目。上端を欠損し、左辺も二次的に切断されているが、右辺と下端は原状をとどめているようであり、091型式に分類してよいかもしれない。左右2片に割れているが、ほぼ完全に接合する。現存法量は、長さ19.1cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。上半部は墨がうすく、また下半部は欠損部にかかるため、文字の判読はともに容易でない。第5字は偏を確認できないが、「郡」字であろう。前述したように、西海道において「某屋郡」を称するのは筑前国轄屋部だけであるが、第3字を「轄」字とみなすことはできない。その字形や「轄」に意味が通じることなどから「津」字と推定したが、全体的に不鮮明であるため断定はできないし、「津屋郡」という用例についてもまだ確認していない。第2、3両字の間に1字分の空白が見られるが、墨痕ではなく、面を削り取ったような痕跡も認められない。下半部では2字を推定でき、最下端は「衣」を旁とする文字であるが、判読できず、文意も明らかでない。裏面は部分的な墨痕が見られるのみで、いずれも字形をなさない。



081型式。板目。各辺ともに損傷している。現存法量は、長さ23.2cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmである。「山鹿郡」は比較的明瞭であるが、「紫草」の墨はうすく、「草」字には墨がついている。山鹿郡は肥後國に属し、現在の熊本県鹿本郡、山鹿市に当たるが、前掲の第87次調査出土の木簡(13)にも見える。裏面は、肉眼ではほとんど見えないが、赤外線テレビでは4文字を判別できる。第2字は麻垂が見えるだけであるが、第1字を考慮すれば、「麻」であろう。肥後國託麻郡を意味するのであろうが、前掲の木簡(9)では「宅麻」と記されていた。「大根」は第87次調査出土の木簡(11)に見えるそれと同意と考えられる。



081型式。柾目。2片に折れているが、他に損傷らしいものは見られない。しかし墨書の位置から見て、これが原形とは考えられず、あるいは用途未詳の木製品に墨書のあるもの(065型式)とみなすべきかもしれない。現存法量は、長さ32.1cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmである。2字とも右半を削られているが、第1字はほぼ判別でき、第2字は「前」字の可能性が考えられる。他に記載がないので、詳細については明らかでない。

他に記載がないので、詳細については明らかでない。

(10) ×□箇

081型式。柾目。上半部を欠損しているが、原形は033型式の可能性も考えられる。現存法量は、長さ9.5cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmである。面が黒ずんでいるため判別しがたいが、2字を確認できる。第1字は欠損部にかかっているので、判読できない。具体的なことは明らかでないが、何物かの個数を示すものであろうか。

01) 及充片百□^足

井西

西□□□門

081型式。板目。横材を用いている。各辺は損傷している。現存法量は、横15.2cm、縦3.7cm、厚さ0.8cmである。また界線をひいており、その間隔は右から2.9cm、2.0cm、2.9cm、3.0cm、3.6cmで、必ずしも一定していない。なお、他にこれと近似するものが1点見られるが、現状では接続せず、筆跡も異なる。「西門」などいかにも意味がありそうであるが、詳細は明らかでない。何らかのテキストにもとづく習書の可能性も考えられる。

(10) 十七大□□

081型式。板目。左右両辺の上部は原状をとどめているようでもあるが、3片に折れ、各辺の損傷はひどい。現存法量は、長さ17.6cm、幅2.2cm、厚さ0.6cmである。「十七大」は明瞭でないが、かろうじて判別できる。第4字以下は肉眼ではほとんど見えない。その旁は「良」であるが、偏は判別できない。上位3字とは異筆であろうか。詳細については明らかでない。

09 □□

081型式。柾目。各辺の損傷がひどい。現存法量は、長さ13.2cm、幅4.4cm、厚さ0.8cmである。面はかなり黒ずんでおり、判読は容易でない。2字が見えるが、かなり左に片寄っている。現状から一応「鳥鳥」と判断したが、左辺が原状を保つかどうか確認できないので、「鳥」と旁とする字の可能性も考えられる。しかし、いずれにしても、習書とみなしてよいだろう。

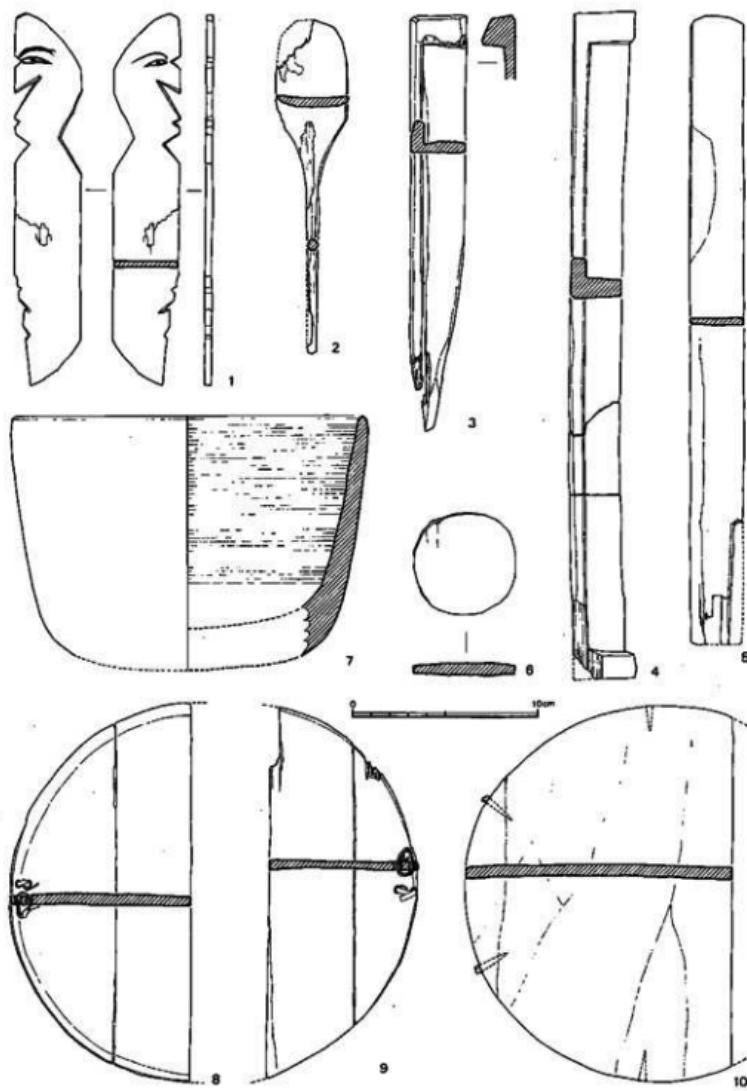
09 □□七

081型式。柾目。左辺は原状を保つようであるが、他辺はいずれも欠損している。現存法量は、長さ5.5cm、幅1.5cm、厚さ0.1cmである。墨がうすく、また欠損部にかかっているため、「七」字以外は判読できない。いわゆる草書風に書かれているようである。断片でもあるので、詳細なことは明らかでない。

01) □□□

□□□□□□□□□□□□

081型式。柾目。下端は原状をとどめるようであるが、他辺は損傷が著しい。現存法量は、長さ19.5cm、幅4.9cm、厚さ0.6cmである。腐蝕が著しいため、肉眼ではほとんど判別できない



第46図 SD 2340出土木製品実測図(1)

が、赤外線テレビでは2行にわたって墨痕を確認できる。しかしそれらはいずれも断片的であり、具体的には判読できない。

木製品（第46・47図 図版83・84・92）

木製品は主に調査区東側で検出した南北溝S D2340から出土した。特に下層青粘土および中層灰色砂質土から多く出土している。

人形(1) 厚さ0.3cmの柾目材に両側から切込みを加えて人形にしたもの。顔面は真直な側面に「V」字形の切込みを入れ口と鼻を表現している。特に鼻は斜め上方に向って大きく切込みをいれており、いわゆる大鼻になっている。両面に眉と目を墨書きする。後頭部は小刻みに削り、丸く作り出す。頭頂部から約3分の1のところで両側から「V」字形の大きな切込みを入れ、頭部を表現している。脚部は斜め下方に向って3個の切込みを入れているが、何を表現したものか定かではない。ただ脚部下端の後方を丸く削っているところから、仮りにこの人形を天地逆にすると顔面の表現と同じであり、あるいは顔面を作る場合の仕損じとも考えられる。高さ20cm、幅3.5cm。

匙(2) 柵の板目材を加工したもの。身は先端を半円形にする。表裏の別があり、表は平滑に仕上げ、裏は荒い削りで甲高にしている。身の側縁から頭部にかけてはゆるく内彎して柄に統く。柄は面取りし、断面は円に近い。先端に向ってしだいに細くしている。長さ18cm、身の最大幅4.0cm。

方形盤(3・4) 3は板目材を加工したもの、側縁は木目に平行する方は幅が狭く、直交する側は幅広にしている。高さ1.3cm、底部と側縁に2次加工の痕跡がある。4は柾目材を加工したもので、3と同様に木目に平行する方がやや幅が狭い。高さ1.0cm。

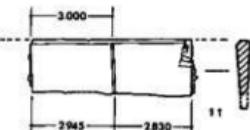
短冊形木製品(5) 板目材の両面を丁寧に削り整えている。上端は丸くし、下端は直に切り落す。両面とも墨痕等は認められない。長さ34cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。

小円板(6) 柅目材を削り円形につくる。片面は丁寧な削りを加工しているが一方の片面は割載のままである。直径5.4cm、厚さ0.5cm。

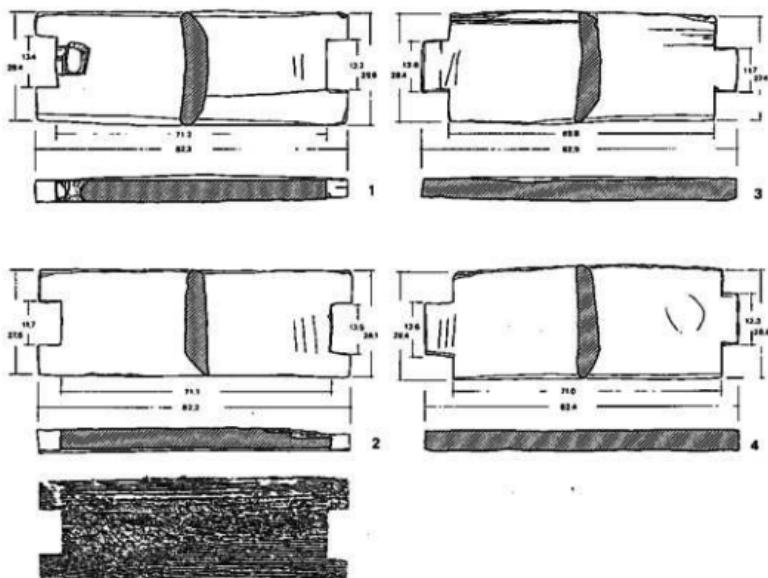
木鉢(7) 挽物鉢の破片である。木目のつまった材を縱木取りしている。剖面からみて底部はかなり厚い。口縁端部は丸く仕上げている。一部に磨滅しているところがある。外面は平滑に仕上げているが内面にはロクロ挽きの痕跡が残る。残存している円弧から直径19.2cm、器高13.8cm位に想定できる。

曲物蓋(8・9) いずれも2分の1を欠失している。板目材を加工したものである。8は縁端部からやや内寄りに周縁にとって刻線がある。それぞれ1個ずつの棒皮が残る。

曲物底板(10) 3分の1を欠失している。木目のつまった柾目板を加工したもの。両面とも



第47図 S D2340出土木製品実測図(2)



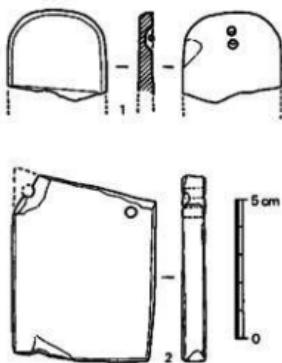
第48図 S E 2510井戸側拓影・実測図

丁寧な削りで仕上げている。側面は直に削る。4個の木釘孔があるが、うち2個には断面方形の木釘が残る。直径20.3cm、厚さ0.6cm

木尺(11) 2寸分を残すのみで両端を欠失している。目盛は1寸刻みに刃物で「V」字形に刻んでいる。1目盛の実測値は第47図に示したとおりで多少のばらつきがある。

井戸側 (第48図、図版84)

S E 2510 溝 S D 2340 (天平六、八年銘木筒出土)
埋没後に構築された井戸 S E 2510 の最下段には井戸組の井戸側が1段組まれていた。この井戸は十世紀後半代に考えられるもので、日吉、不丁の官衙域における建物に伴う井戸の可能性が強い唯一の資料である。



第49図 石製品実測図

井戸側の残存状態はきわめて良好であった。部材全長は82.2cm~82.9cm、幅27.4cm~29.6cm、厚さ5.5cm~6.0cmで、4枚ともほぼ同じ法量の材である。隅の仕口は3枚組とし、東・西面の井戸側を出納とする。各部材とも片面に樹木表面の自然面を一部残しているので、木取りは木裏が内面にくるようにしている。木口面は鋸挽の痕跡がみられる。部材両面は手斧で削っている。部材の1つには入納の近くにノミで穿った穴がある。また組合せの番付と考えられる刻線がみられる。組んだ時の内法は69.8cm~71.2cmの正方形となり、平均数値は70.8cm(2.4尺)である。

草履溝S D2340の下層から出土した。裏向きの状態で出土し、保存状況が悪かったため動かすことができず表は確認できなかった。上端部を欠失しているが、他は完存する。残存長15.5cm、幅9.8cmである。二本燃りした繩を周縁部近くに巡らし、その間に藁を一本ずつ並べた状態で挟みこんでいる。

石製品（第49図、図版92）

石帶（1）帯の先端を飾る鉈尾である。下半分は欠失しているが、先端のかがり穴1個がみられる。残存部では幅3.5cm、厚さ0.5cmである。本来は濃緑色を呈し光沢があったと思われるが現状では風化のため表面が大部白色化している。蛇紋岩か。

砥石（2）一部欠失しているがほぼ完形に近い。上端近くの両側に径4mmの孔を穿っている。幅5cm、厚さ0.8cmである。灰黒色を呈する砂岩系のものである。

小結

これまで不丁地区で実施した過去6個所の調査地と今回の第87・90次調査を含めて、合計27棟の掘立柱建物等を検出した。今回の調査地域は昨年度実施した第83・84次調査および昭和45年度の第17次調査地域と隣接しており、今回でこの一帯の遺構状況の概略をほぼ把握することができた。前年度までの分については昭和58年度の調査概報に詳細にまとめ報告しているので、ここでは新たに検出した掘立柱建物と「天平八年」銘の木簡などを共伴した溝S D2340出土の遺物について若干の検討を行い結びとする。

建物 まず建物について検討すると、今回検出した掘立柱建物は7棟で、それに付属する棚3条がある。これらの建物は方位と重複関係から少なくとも4期に大別される。方位関係ではS B2355・2525・2530・2540はN 1° 5'Wで同一方位をとる。またS B2525・2530・2540はほぼ同位置で重複する南北棟である。これら3棟の建物は柱彫形の切り合い関係もなく、また柱彫形から出土した遺物もわずかであり、しかもいずれも八世紀後半代のものを含むことなどの点からみてその先後関係は明らかにし得ない。建物規模からみると、S B2525とS B2530はほぼ同じ柱間規模であり、建て替えの可能性が強い。またS B2540は先の2棟に比較して柱彫形がやや小さく、深さも浅い。次にS B2355とS B2530には柱穴中に鴨臘館系の瓦が混入するこ

いう似かよった状況がみられる。

以上のことから S B2355・2525・2530・2540の同一方位をもつ建物については、S B2355とS B2530が同一時期に存在していた可能性が強く、次の2案が考えられる。

- ① { S B2355
S B2530→S B2525→S B2540
- ② { S B2525→S B2530→S B2540
S B2355

次に S B2355については方位はN 2° 10' Wで先述の4棟よりさらに東偏している。S B2355他3棟の建物との先後関係は不明であるが、政庁第Ⅱ期の軸線(N 0° 17' 12" W)から考慮するとS B2355が後出すると考えられる。

S B2520とS B2515は重複しているが、柱掘形の切り合いはなく先後関係は不明である。しかしながらいずれも柱掘形は先述の建物よりひとまわり小さく、また不規則である点から、それらよりも後出する(S B2355柱掘形を切っている)と考えられる。方位関係からS B2515が後出する。

最後に以上をまとめると次のような変遷になろう。

	I 期	II 期	III 期	IV 期
①	S B2355 S B2530→S B2525→S B2540	S B2535	S B2520	S B2515
	S B2525→S B2530→S B2540 S B2355			

年代については必ずしも明確でないが第Ⅰ期の上層を八世紀後半代と考え、第Ⅳ期はS B2515柱掘形から出土した「大国」銘の平瓦から九世紀代と考えておきたい。昨年の調査結果では、礎石建物への移行時期を九世紀前半代に考えており、この地域においてもS B2525の柱掘形を切って落し込まれた礎石様のものがあり、また十世紀後半代の井戸S B2510が存在することなどから、礎石建物が存した可能性は十分あり得る。今一つS B2515から出土した「大国」銘瓦が年代的に明らかではなく九世紀代という大きな年代幅をとった。

因みに、発掘区北端で検出した南北棟建物S B2540は更に北方へ延びており、S B2525・2530と同じく9間ないし11間の桁行を有したとすれば、日吉地区官衙建物群の最北端に位置する掘立柱建物S B2000北側柱列とほぼ同一線上に位置することになる(9間と11間の場合では南北に各2.0mずれる)。そして藏司前面築地S A1410との距離は約26mである。

また、日吉地区官衙建物にみられた梁行3間の建物が不丁地区においても今回の87・90次調査地域に集中している(年代的な相違がみられる)ことは注意されるが、ここでは指摘するに止める。

		須 惠 器			計	土 師 器			計	総計	比 率 (%)
		上層	中層	下層		上層	中層	下層			
食 器	蓋 A	4	3	15	22					22	
	B	29	153	39	221	8	20	5	33	254	
	杯 A	0	3	0	3	2	2	0	4	7	
	B	33	112	11	156	10	10	2	22	178	
	皿	2	7	0	9	0	4	0	4	13	
	盤 A	1	1	0	2	3	4	1	8	10	79.5
	B	1	2	0	3	1	0	0	1	4	
	鉢	1	10	2	13					13	
貯 藏 具	鉢鉢	0	4	0	4					4	
	高杯	2	3	0	5					5	
	壺蓋	3	6	0	9					9	
	壺	1	1	1	3					3	
	小壺	0	1	0	1					1	5.6
煮 炊 具	甕	5	13	1	19					19	
	平瓶	1	2	1	4					4	
計		83	321			18	74	4	96	96	14.9
計			321	70	474	42	114	12	168	642	1100
比 率 (%)				73.8			26.2				

SD2340 出土土器点数表

土器 表で示した数字は口縁部だけを数えたものである。須恵器と土師器の割合は昨年度報告の総点数を数えた表Aと大差ない。口縁部や底部片を数えた表Bを参照すると須恵器の割合は減じ、土師器が増えている。また貯蔵具と煮炊具の割合も逆転する。

出土土器のなかでは特に顕著な傾向は杯の蓋や身にみられる。出土土器の項で述べたように、蓋では口縁部が退化し、小さくなつたものの、身では体部と底部の境が明瞭になるものなどが少數ではあるが出土している。SD2340から紀年銘のある木簡が4点出土している。もっとも新しいものは天平八年(736)であるが、新出土の須恵器をみると、溝の埋没年代は736年よりも降り、八世紀中頃とする方が妥当ではないかと考えられる。

瓦類 次に瓦類についてみると、SD2340出土瓦をのぞいた以外は特にきわだった出土傾向は認められなかった。しかしながら第44図-2・3および第45図-3は遺構面を覆う暗褐色土、茶褐色土層から出土し、その出土量は軒丸瓦、軒平瓦とともに鴻臚館式瓦に次いでいる。第44図-2、第45図-3はすでに前年度報告しているごとく、出土点数などからセット関係の可能性が考えられる。この軒先瓦は第14次調査で検出したSD320でも比較的高い出土率を占めており、不丁地区においてのかなりまとまった出土は、建物との関連性からみて、貴重な資料と言える。

SD2340出土瓦は第85次調査で出土した木簡にみえる天平六年に近い時期に投棄されるとみられ、鴻臚館式軒平瓦の年代を八世紀第1四半期終末頃に推定できた。さらに鴻臚館式瓦、老司系瓦(別表1-1、5)は柱穴および掘形の切合い関係などから、老司系瓦が先行することが

明らかになっている。從来鴻臚館式瓦の年代観を大宰府政府Ⅱ期の開始時期に想定されていたが、今回新たに「天平□年」、「天平八年十一月」の紀年銘の木簡が出土し、それとともに鴻臚館式軒丸瓦（第44図-1）が出土した。この出土によって老司Ⅱ式、鴻臚館式はセット関係で検出したことになり、昨年報告した絶対年代にさらに確実な手掛りを与えたこととなる。

木簡 前述のように、本年度はSD2340から2度にわたって合計98点の木簡を検出し、昨年度に検出した62点を合わせれば、総計160点になった。98点のうち、代表的なもの52点については概要を報告し、若干の所見を述べたが、ここではそれらについてまとめてみたい。

まず、昨年度検出の木簡では紫草関係のものが大きな特徴の一つをなしていたが、本年度の木簡でもそれが目立ち、内容的にいくつかの新知見をえた。すなわち、第87次調査出土の木簡④（以下では87-④というように記す）を含め、新たに8点を検出したが、さらに87-(5)・(6)の2点も関連性を想定できるので、その合計は15点となった。また、その貢納郡も、筑前国の轄屋・岡賀、加麻の3郡に加えて、筑前国怡土郡、肥後国の中志・山鹿・託麻の3郡、そして豊後国海部郡の5郡が判明し、豊後国はその正税帳から知られていたが、紫草がかなり広範な地域から貢納されていたことを示している。

一方、断片的な87-(9)はともかくとして、その書式はほぼ共通しているが、その中で90-(6)だけは大きく異なっている。前述のように、これが染料としての紫草の荷札であったとすれば、紫草の植物から染料への精製は、大宰府だけではなく、各國さらには各郡においても行われていた可能性が考えられ、その場合、在地にはかなりの技術が存したことにもなる。しかしあわざか一例にすぎないので、豊後国ないし海部郡だけの特例かもしれないし、さらにはこの木簡は欠損のため原形も明らかでなく、荷札に不可欠と考えられる年紀の有無も確認できないので、ここではその可能性を指摘するにとどめ、後考を俟つことにしたい。

ところで、87-⑩に見られるように、紫草を数える単位として「編」も用いられており、この点から87-(5)・(6)も紫草に関連するものと推定したのであるが、とすれば、新たな問題が派生する。すなわち、一方では20根を標準的な1単位とする数え方が用いられているにもかかわらず、他方では10根を1編とする数え方が存したことになり、それではなぜ20根を2編と称しなかったのかという疑問が生ずるからである。すでに昨年度概報でも述べたように、これらの木簡は大宰府において紫草を保管整理するために用いられた付札と考えられるが、その際に異なる2つの単位を用いることがありえないことではないにしても、作業などを煩雑ならしめる一因となるのではないだろうか。しかし現実に「根」と「編」の二単位が用いられていたことは事実であり、そこには何らかの政策的な意図が作用していたと考えざるをえない。そこで注目されるのが、「根」を用いているのは単に「紫草」とされているものであるのに対し、「編」が用いられている87-⑩では「紫草大根」とされていることである。「大根」は90-⑩にも見えるが、これは断片的であるので、これを別にすれば、87-⑩ではことさらに「紫草大根」と

されていることに意味があるように思われる。あくまでも1つの推測にすぎないが、整理保管に際して「紫草」と「紫草大根」とは区別され、それぞれ用いられている単位も異なっていたのではないだろうか。「紫草」と「紫草大根」の差異が単なる根の大きさによるのか、それ以外にも存するのかをはじめ、いまだ明らかでない点もあるが、今はこの程度にとどめておく。

次に、特徴の第2点としては多くの国郡名および地名が見られる点を指摘できるだろう。便宜的に第85次調査で検出したものを含め、SD2340出土木簡に見えるそれらを示すと、右掲の一覧表のようになる。これには推証したものをお加えているが、その個々については前述しているので、ここではとくに注記しなかった。また、必ずしも「國」字は付されていないが、明らかに国名と判断できるものは国名の部に分類した。郡名の部のうち、4と5および6~8の2組はいずれも同一郡であるが、郡名表記の相異に意味があると考えられるので、一応区別した。その他のうち1・32・33の3点以外はいずれも郡名と考えられるが、「郡」字が付されていないので、とりあえず区別した。

これらの中には習書と推定されるものも含まれているが、87-19を和銅六年(713)四月の大隅国建置以後のものとすれば、これらは西海道9国のうち日向国を除く8国におよんでいる。しかもその多くは付札類であり、それ以外のもので何らかの物品との関連性を推定させるものが少なくなく、大宰府における管内諸国島からの物資の集積状況の一端を

国名	郡名	その他	木簡番号
1	筑紫	90-03	
2	筑前	85-(1)	
3	怡土	87-(2)-(3)-22	
4	轄屋	85-(4)、87-(1)-21	
5	津屋	90-03	
6	岡	87-(5)-(6)	
7	岡賀	85-(5)~(7)	
8	速賀	89-19	
9	加麻	85-(8)	
10	夜須	85-02、87-(4)	
11	筑後	85-(1)	
12	三井	87-(7)	
13	肥前	85-14	
14	松浦	85-14	
15	合志	87-03、90-(2)	
16	合志	87-(1)-29	
17	(元)宅麻	90-(9)-04	
18	山鹿	87-03、90-04	
19	豊前	85-(1)、87-23-28、90-03	
20	京都	87-23	
21	豊後	90-(6)	
22	大野	85-01、87-10-09	
23	海部	87-04、90-06	
24	大分	87-09	
25	薩摩	87-07-08	
26	頭姓	87-09	
27	斐鳴	87-27	
28	大隅	87-09	
29	桑原	87-28	
30	口毛	87-(8)	
31	口口	87-24	
32	捲夷鳴	90-(7)	
33	伊藍鳴	90-(8)	

示している。もちろん、大宰府の機能や性格などからすれば、これらの木簡の出土はむしろ当然のことであり、ことさらに特記すべきほどのことではないかもしれないが、大宰府の管内諸国島に対する総管機能の一端を示す物証が得られたという点で評価できるだろう。なかでも、養老四年（720）までは在地の抵抗が続いた薩摩・大隅両国関係のものが見られることは、木簡の具体的な時期を特定できないにしても、両国に対する律令制支配の浸透を考える上で一つの手がかりになるように考えられる。

同じことは90-(7)・(8)についても言える。古代国家といわゆる南島との交渉については『日本書紀』以下に散見されるし、大宰府とそれとの関係にても、『続日本紀』によれば、慶雲四年（707）七月には大宰府に来た南島人に位階と物を授けたこと、天平七年（735）には大宰大弐小野老が高橋牛養を南島に派遣して航路標式を建てさせたことなどが知られる。このほか、明記されていない場合でも、南島との交渉において大宰府が一定の役割を果たしたんだろうことは推察にかたくない。南島人は「化外民」ないし「夷人」とみなされていたが、彼らがもたらした「方物」にかかる木簡が付けられたことは注目される。ここで南島人とその交渉などの問題について考える余裕はないが、この木簡はその交渉を示す物証というにとどまらず、来貢のあり方を考える上において重要な意味をもつと言えるだろう。

このほか、昨年度概報でも述べたような付札類が全体の約三分の一強を占めていること、85-1(1)や90-1(1)などの軍制に関連するものが見られること、なども特徴の一つとしてあげうるし、さらには90-(3)のような工人などの上番に関するものも注目される。しかしこれらについては今後の検討に委ねなければならない点が少なくないので、ここでは指摘するにとどめる。

最後に、これらの木簡の時期について若干述べておこう。第85次調査出土の木簡からは養老から天平前半代にかけての時期が考えられたが、当然のことながら、今回も同じような傾向をうかがうことができる。すなわち、具体的な年紀としては、87-(4)の天平六年と87-23および90-(3)の天平八年の二種のみであるが、このほかにある程度までを推定せるものがいくつか見られる。その第1は90-(2)で、「合志評」と判読できるとすれば、これは少なくとも大宝元年（701）前後までさかのぼることになる。共伴遺物などから見たS D2340の時期とともにくに矛盾はしないが、「評」字と断定するにはいまだ疑問が残るので、この点についての検討は今後の課題である。また90-13は原形も全文意も明らかでなく、下半部からは一種の習書である可能性も考えられるが、これでは「^{（押）}屋^{（押）}」に対して、「筑紫」と記されている点が注目される。筑紫が津屋郡に対する國名を意識したものとすれば、この木簡は筑紫國が前後に分割された七世紀末ないしそれからさほど経ていない頃を下限とする時期のものということになる。しかし他に傍証史料は見られないでの、いまだ1つの推測にすぎず、これについてもさらに検討を要する。これに対して、87-(5)・(6)の下限時期は和銅六年前後に比定でき、共伴遺物にこの時期のものが多いこともこれを傍証しており、その確実性は上記の二者よりも高いと考えら

れる。そこで、木簡に墨書きされた年代と廃棄された年代との関係などの問題もあるが、ここでは木簡のおおまかな年代として和銅年間から天平年間の前半代までの時期を考えておこう。

4 第88次調査

大宰府政府南門の前面を走る県道閑屋一山家線の南側に政府域の張出し部があり、広場と考えられる中央の空間地をはさんだ東西に官衙域の存在することは、これまでの発掘調査の成果として明らかにされている。その西を限ると考えられる溝SD320の西側、すなわち政府域に隣接する一帯にどのような内容の遺構が所在するのか、期待を持たれるものがある。しかしながら、この付近ではSD320に伴う一連の調査区や、昭和48年度に第29次調査として実施された広丸地区など過去にわずかの調査例しかなく、そのいずれでも顕著な遺構は検出されていない。今回の調査は土地区画整理事業に伴う事前調査であるが、こうした問題の解明を主な目的とした。

調査区はSD320に関する第76次調査区の西に接する水田地1200m²で、大宰府条坊復原案の右郭六条三坊に相当する。地番は太宰府市大字觀世音寺字大楠323番地である。

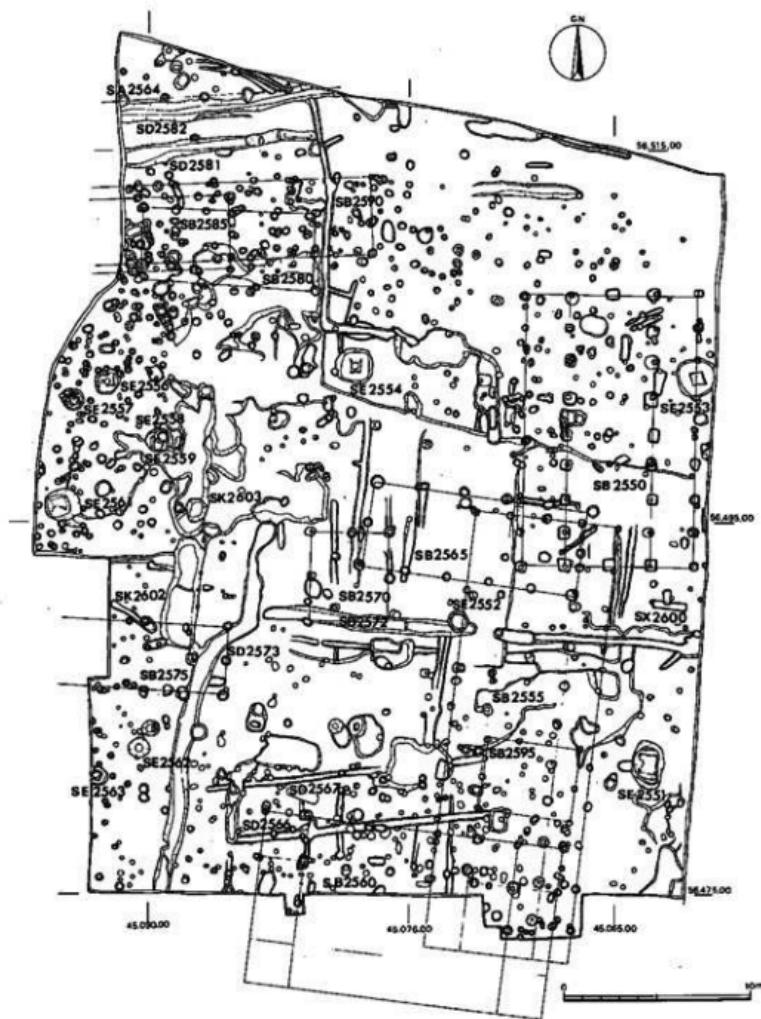
調査は昭和59年3月6日に開始した。耕土は事前に区画整理事業に伴い削平されており、床土の除去から始めた。調査区の東半では床土直下に遺構面があり、3月8日には東から遺構検出にはいり、掘立柱建物・井戸などを確認した。西に向かうにしたがって床土と遺構面の間に黒褐色土層をはさむようになり、多少時間を要したが、4月17日に遺構検出を終了した。以後、写真撮影、実測および補足調査を行い、5月8日に調査を完了した。

検出遺構

検出した主な遺構は掘立柱建物10棟、橋1条、溝7条、井戸11基、土壙・柱穴などである。遺構面は調査区の東半では床土の直下で検出されたが、西半では北辺を除いて20cm~30cmほど厚さの黒褐色土層に覆われていた。この部分においても遺構は黒褐色土層を除去した後に確認されており、遺構の層位的な区分はできなかった。

掘立柱建物

S B 2550 調査区の東辺で検出したN 1°Wに方位をとる掘立柱建物である。梁行4間(9.2m)×桁行8間(14.6m)の南北棟で、東西の両面に扉がつく。身舎部分の柱掘形は柱位置の明らかな例が多い。柱掘形はおおむね一辺60cm前後の方形プランを呈するが、円形状のプランの例が6ヵ所みられる。遺存状態の良い柱穴で径約22cmをはかるが、全体に柱穴は小さい。柱穴にはスサ入りの炉壁片(第51図)・焼土・炭などが埋め込まれていた。身舎中央の桁方向北から5間分には床東の柱穴6個がある。桁行は1.8m前後に配された柱位置の間隔からみて6尺等間である。梁行は2.3m前後をはかり、8尺をやや下回っている。東・西につけられた廊の柱掘形は方形形状をな



第50図 第88次調査造構配置図

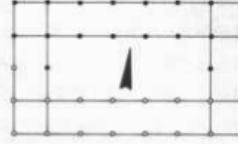
す西南隅の1例を除いていずれも円形をなす。大きさも身舎のそれにくらべ径30cm~50cm前後となり、小形化している。東側柱列は身舎と2.3mの間隔で配される。これに対し西側柱列は直線をなさず、柱筋をはずれる例もあるなど乱れているが、おおむね身舎と2.3m~2.4mの間隔をもつ。平均して梁行は2.3mの等間となるが、おそらくは8尺等間で企図されたのであろう。したがって梁行4間(8尺等間)×桁行8間(6尺等間)の東西に廟が取り付く南北棟建物に復原しうる。S D2555・S E2553によって切られている。

S B2555 S B2550の南に位置し、それに後出する梁行4間×桁行10間以上(おそらくは他例



からみて11間)の南北棟建物で、やはり東西の両面に廟がつく。南端は調査区外に延びている。方位をN 7°15'Wにとり、S B2550よりもかなり東に振れている。柱掘形はいずれも円形で、身舎では50cm~60cm前後をはかるが、廟のそれは約30cmの小形の例が多い。柱間の間隔は乱れていて、廟は必ずしも直線に並ばず、梁方向に柱筋の通らないものもある。また西側柱列には柱掘形を欠く例すら認められる。ともあれ、梁行の柱間は比較的まとまっていて1.95m(6.5尺)等間をなす。桁行の柱間は1.9m~2.3mの間にあるが、北端の1間(おそらくは南端の1間も)を8尺、他を7尺ととれば一応のおさまりがつく。S B2550に後出する。またS E2552埋土中に廟の柱掘形が認められたので、それにも後出する。

S B2560 調査区の南端にその東半をS B2555と重複させて位置する東西棟建物で、大部分



は区外に延びる。方位をN 7°Wにとる。柱掘形の配置からみて梁行2間以上(おそらく4間)×桁行7間の四面廟建物であろう。柱掘形は形状・大きさとともにS B2555に同じ、身舎にくらべて廟は一回り小さい。身舎の柱間は梁行・桁行ともに2.2m~2.35mをはかる。桁行(5間)の総長は11.3mとなり、平均2.26m(7.5尺)等間となる。また廟は梁行・桁行ともに約2.4m(8尺)をはかる。したがって7.5尺等間に企図された身舎の四面に、梁行・桁行ともに8尺の廟が取り付く四面廟建物である可能性が強い。

S B2565 S B2550・S B2555および中央付近のS B2570と重複して位置する。梁行2間



(4.6m)×桁行5間(11.6m)の東西棟建物である。柱掘形は円形プランを呈し、径40cm~70cm前後をはかる。柱間寸法は梁行・桁行ともに2.32m前後の等間となり、8尺をやや下回ることになる。

この付近には建物としてまとまる例を除いて柱穴はほとんど存在しない。その点や等間の配置



第51図 S B2550柱掘形出土
スサ入り炉壁片

からみて、これが1棟をなすことは疑いないが、正確にみれば梁と桁とは直交せず、西南隅が約85°に交叉する菱形とみる時にもっともおさまりがよい。N 7°30'Wに方位をとる。

S B2570 調査区のはば中央に位置する。建物の北半では明瞭な径50cm~60cm前後の円形の柱掘形が認められたが、南半は溝S D2572で削平され不明瞭であった。それより南へは延びず、2間×2間のN 1°30'Wに方位をとる建物である。柱間寸法は南北方向では約2.4m(8尺)等間となる。東西方向では総長約4.2mをはかる。やや西側の間隔が広いが、約2.1m(7尺)等間を企図したものであろう。したがって梁行2間(14尺)×桁行2間(16尺)の南北棟建物と考えられる。

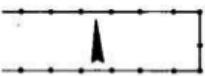
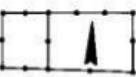
S B2575 調査区の西辺に位置する掘立柱建物で、N 3°20'Wに方位をとる。梁行2間(3.6m)の東西棟で、桁行は3間(5.4m)分を検出したが、西半は調査区外に延びている。柱掘形は径40cm~50cm前後の円形プランを呈する。柱間寸法は梁行1.8m(6尺)、桁行2.25m(7.5尺)である。

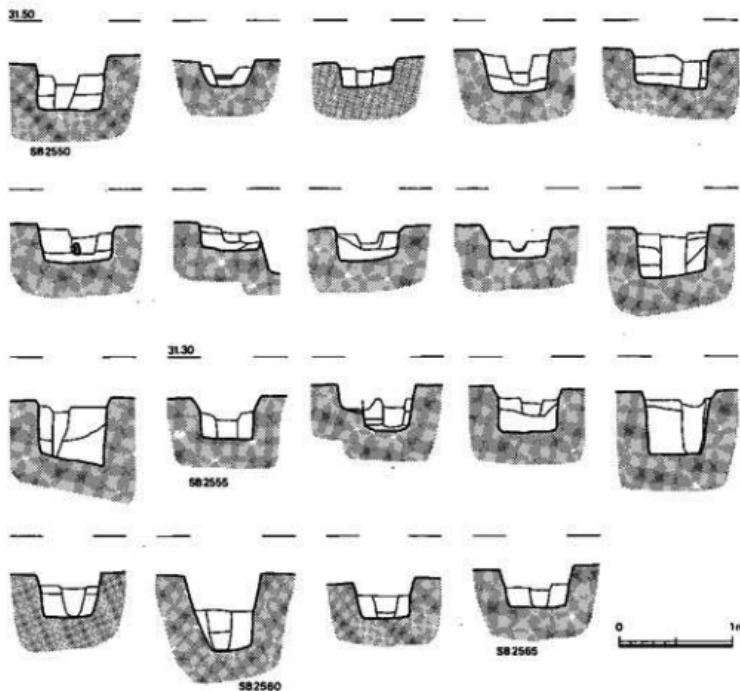
S B2580 調査区の北西に多数の柱穴の集中がみられ、重複した建物の存在が認められる。

S B2580はその1棟で、梁行2間(3.9m)×桁行5間(9.3m)の東西棟に復原しうる。方位をN 2°Wにとる。柱掘形は径40cm前後の円形プランを呈する。柱位置は不規則で、西側の妻が1.95m(6.5尺)等間であるのに対し東側妻は4.2m(1.95m+2.25m)となり、全体を台形状にしている。桁方向にしても同様で北側柱列が5間であるのに対し、南側柱列は4間である。すなわち北側では東から3間分の柱間を2.0m(7尺弱)等間にとるのに対し、南側では2間分3.0m(10尺)等間にとっている。残りの2間分は1.65m(5.5尺)等間となり、東側3間分との間に間仕切りの柱穴が認められる。なお南側柱列と約2mの間隔をおいて東西に並ぶ柱穴列があり、これを一連と考えれば梁行3間×桁行5間の東西棟建物になるが、柱間寸法がより以上に不規則となる。ここでは梁行2間の建物として復原し、3間となる可能性を指摘しておく。

S B2585 S B2580と重複する東西棟建物で、梁行2間(4.0m)×桁行3間(約5m)以上となり、その西半は調査区外に延びる。方位をN 2°Eにとる。柱掘形は径40cm前後の円形プランを呈する。柱間寸法は梁行で2.0m(7尺弱)等間であるが、桁行は東から1.65m·1.8m·1.5mとなり不規則である。東端の1間は1.5mとみられないこともなく、そうであれば1.5m(5尺)+1.8m(6尺)+1.5m(5尺)の柱間となり、桁行3間の建物となる可能性もある。しかし妻柱に相当する位置に柱穴を欠いている。柱穴の1つがS B2580のそれと接するが先後関係は不明。

S B2590 S B2585の側柱列に平行してそれぞれ0.5m、0.7mの間隔で2条の柱穴列が走る。妻柱の位置が南に片寄りすぎる点や柱間間隔がやや不規則である点など疑問もあるが、一応掘立柱建物として復原しておく。





第52図 据立柱建物柱断面図

梁行2間(4.2m)×桁行6間(12.5m)以上の東西棟建物で、方位をN2°30'Eにとる。梁行の柱間寸法は北側の1間が2.4m(8尺)、南のそれが1.8m(6尺)となる。また桁行は東から1.8m(6尺)、2.4m(8尺)、以下は2.1m(7尺)となる。

S B255 S B2555と完全に重複して位置する建物で、方位をN8°20'Wにとる。梁行2間(3.9m)×桁行3間(4.95m)の東西棟に復原される。柱掘形は径35cm前後の小形のもので円形プランを呈する。柱間寸法は梁行2.1m(7尺)+1.8m(6尺)、桁行1.65m(5.5尺)等間である。S B255との先後関係は不明。

柵

S A2564 調査区の西北隅をほぼ東西に走る溝S D2582の北岸に沿って1条の柵が認められた。その位置からみて溝と関連すると思われる。4間分(9m)を検出したが、さらに東西に延びると思われる。柱間寸法は2.25m(7.5尺)である。

溝

S D 2566・2567 調査区の南端近く、S B 2560付近に位置する。2条の溝はいずれも幅0.35m～0.45m前後をはかり、東から西へと流れている。深さは0.1m未満と浅く、削平されたのである。両溝は溝岸端で2.5mの間隔をもち、流れの方向、溝底の高さを等しくする。道路の側溝などとして同時に存在したと考えられる。

S D 2571・2572 調査区中央のやや南をほぼ東西に走る溝で、S B 2555・S E 2552を切っている。両溝は中間の陸橋部で切られているが、同一溝であろう。東側のS D 2571は幅0.45m前後、深さ0.1mをはかるが、その両端はやや深くなっている。溝底は水平である。S D 2572は長さ11.4m、幅0.75m～0.85m、深さ0.1mをはかる。ゆるやかに西から東へ流れ、東側の3分の1は一段深くなっている。両溝は地山に削り込まれているが、その間に約1m幅の陸橋部が削り残されている。位置と方位からみてS B 2565に関連する溝であろう。

S D 2573 調査区の西辺付近を南北に流れる溝である。幅1.0m前後、深さ0.2mをはかり、北から南へゆるやかに流れれる。北端から約5.7mで流れの方向を変えるが、その変換部に0.3mの間隔をおいてS D 2572の西端がくる。S D 2572とはほぼ直角の位置にあり、やはりS B 2565に関連する溝であろう。S B 2575を切っている。

S D 2581・2582 調査区の北西隅付近をほぼ東西に走る。S D 2581は幅0.7m、深さ0.2mほどで、西に向かって幅広となっている。ゆるやかに西へと傾斜しているが、東端付近はやや深まっている。溝肩が平均して1.1mほどの間隔をもってその北を走るS D 2582は、幅0.85m～1.0m、深さ0.35mをはかる。両端ともに調査区外に延びているが、流れはゆるやかに西へと向かっている。両溝の間の平坦地にはその延長部を含めてほとんど柱穴がみられない。またS D 2582の北岸に接して櫻S A 2564が配され、S D 2581の南に柱穴が集中している。これからみてこの地区的建物群の北を限る施設に伴う溝であろう。溝S D 2566・2567と方向を等しくし、その関連がうかがえる。

井戸

S E 2551 S B 2555の東で検出した。長軸2.6m、短軸1.7mの橢円形プランの掘形を上面で認めたが、下部では方形をなしており、本来は一辺1.7mほどの隅丸長方形掘形であったと思われる。底面までの深さ1.03m。井戸側は方形縦板であるが、残りは良くない。底面に隅柱として径10cm～15cmの丸太材を打ち込み、内法長95cmの方形に縦板を配している。縦板は2重に配している。縦板を支える横桟と両側の隅柱2本は残存していない。縦板の残存高は約30cmである。隅柱・縦板からみて主軸の方位をN 7°15'Wにとっている。大宰府検出井戸分類のII-A類に属する。

S E 2552 S B 2565の南側に位置し、S D 2572によって切られている。またS B 2555の廻の柱掘形が掘り込まれていたので、先行していることが知られる。井戸掘形は径1.1mの円形で

0.7mの深さに掘られている。井戸側はわずかに破片を残すが、それによって大要を知りうる。掘形の下面是径約75cmの円筒状をなすが、その壁面に貼付くようにして縦板がみられ、その内側に接するように曲物が置かれていた。したがって井戸側に径70cmくらいの曲物を置き、その外側に補強材として縦板を置いたものに復原できる。すなわちIV—B—b類ではなく、III類に分類される井戸であろう。底面には50cm前後の礫を厚く敷き詰めている。なお上面に炭の堆積が認められた。

S E 2553 調査区の東辺で検出した井戸で、S B 2550を切っている。掘形は径2.0mのやや角張った円形プランを呈する。井戸側は深さ0.65mで検出された。横板を使用した方形井戸側で、内法長55cm~60cm、深さ90cmをはかる。横板の端部に合欠きをつくり組み合わせる嵌板のものであった。主軸の方位をN 10°E にとる。I類に分類される。

S E 2554 S B 2565の北西で検出した。掘形は長軸2.0m、短軸1.9mの隅丸方形プランを呈する。井戸側は方形縦板で主軸を南北に組み、底部に曲物を置いている。まず基部に一辺7cmほどの角材で横桟を組む。南北方向の角材の両端に枘をつくり、東西方向の角材の両端の枘穴と組み合わせている。内法長で79cm×71cmをはかり、南北にやや長い。その20cm上にもう1組の横桟がみられる。まず板材で横桟を組み、その上に角材の横桟を重ねている。各辺ともに幅広の縦板を3枚使用している。土圧によって側板は著しく歪んでいる。底に径40cm、深さ12cmの大きさの曲物を置く。掘形上面からの深さは1.36mである。主軸をほぼ南北にとる。II—A類に分類される。

S E 2556 調査区西辺の中央付辺には井戸5基が集中している。S E 2556はそのうちもっとも北に位置する。一辺1.35mの隅丸長方形の掘形に、方形井戸側が組まれているが、残存状態は良くない。四隅に径10cmほどの丸太材を隅柱として打ち込み、その3本が残っている。心々で東西75cm、南北56cmをはかる。横桟はすでに失われている。東辺を除いて縦板は内側に倒れ込んでいるが、東西約70cm×南北約65cmの内法長に復原される。底面には径37cmの曲物が置かれているが、深さなどについては不明である。掘形上面から底面まで0.7mの深さをはかる。II—A類に分類される井戸である。掘形の周囲の四方に2.0mの間隔で柱穴が配されており、上屋を架したこと知りうる。主軸を南北にとる。

S E 2557 S E 2556の西南に位置する。掘形は径1.15mほどの円形プランを呈する。井戸側は四隅に径4cmの丸太材を隅柱として打ち込み、横板をわたして組んでいる。内法長50cm、板材の深さ25cmをはかる。井戸側上面の周囲には瓦を敷き詰めていた。主軸の方位をN 13°30'Wにとる。底部には径20cmほどの曲物容器が置かれていた。

S E 2558 S E 2556の東南に位置する井戸で、S E 2559から切られている。そのため掘形の大部分が破壊されているが、残部からみて軸長1mほどの隅丸方形と思われる。井戸側の上部は不明であるが、下部に曲物2段を掘えている。上段は内径52cm、深さ40cm、下段は内径44cm、

深さ31cmをはかる。掘形上面から底面までの深さは1.4mである。現状ではⅢ類であるが、Ⅱ-B-b類の可能性ももっている。

S E 2559 S E 2558の西南に接し、それを切っているが、残存状態はきわめて悪かった。掘形は隅丸方形プランを呈し、上端の軸長1.25m、下端で0.85mをはかる。井戸側は径4cmほどの丸太材を打ち込んだ隅木3本と横桟3本、および縦板材1枚が残り、方形縦板の井戸側であることを示していた。隅木・横桟の間隔からして、内法長は約60cmに復原される。底面には長径65cm×短径55cmほどに復原される曲物が置かれていたが、小片をとどめるにすぎなかった。主軸をほぼ南北にしている。Ⅱ-A類に分類される井戸である。

S E 2561 S E 2558・2559の西南に位置する。掘形は長軸1.85m、短軸1.7mの不整円形である。井戸側は方形縦板で組まれていたが土圧によって大きく歪んでいた。四隅に4cm～7cm大の角材を打ち込んで隅柱とし、その間に横桟を3段に組み、幅7cm前後、残存長約145cmの縦板を並べていた。底面で内法長94cmをはかる。主軸の方位をN 10°Eにとる。Ⅱ-A類に分類される。今回の調査で検出された11基の井戸中もっとも深く掘り込まれた例である。

S E 2562 調査区の西南隅近く、S B 2575の南で検出した。掘形は上面で長径1.21m、短径1.06mのはば円形プランを呈し、1.47mの深さをはかる。井戸側は存在しなかったが、底面が径42cmの円形をなし、下底から10cmほど壁面が直立することなどからみて、曲物が据えられたものと思われる。

S E 2563 S E 2562の西南に位置する。長径1.05mほどの角張った不整円形の掘形に、Ⅱ-A類に分類される井戸側が据えられている。方形縦板側は最下段の横桟のみを完全に残すが、縦板は抜き取られたためかほとんど残っていない。横桟の内法長45cm。底には内径41cm、深さ20cmの曲物が据えられていた。N 25°Wに方位をとる。

土壤

S K 2602・2603 調査区の西辺に所在する大土壤で、南北方向に並ぶ。S K 2602は長さ約6m、幅1.7m～2.0m、深さ0.2m～0.3mをはかる土壤で、北にむかって傾斜している。S K 2603はその北に位置し、長さ約8m、幅約2m、深さ約0.3mをはかり、南北両端が深くなっている。両土壤とともに長方形の両端を半円形にしたような形状をし、幅・深さをほぼ共通にしている。ただ上端幅5cmほどのわずかな堤部をもって南北に分けられている。おそらく両土壤は相互に関連するものであろう。調査区の北辺・西辺・南辺に数多く分布する柱穴群が両土壤の東側では疎になる点はことに注目される。

墓

S X 2600 S B 2550の南で木棺墓1基を検出した。墓壙は上端で長さ1.80m、幅は中央でやや狭くなるが平均0.45m、深さ0.22mをはかり、細長く掘り込まれていた。墓壙内から鉄釘が検出され、釘留めの木棺を埋置していたことがうかがえるが、棺材は遺存しなかった。人骨の

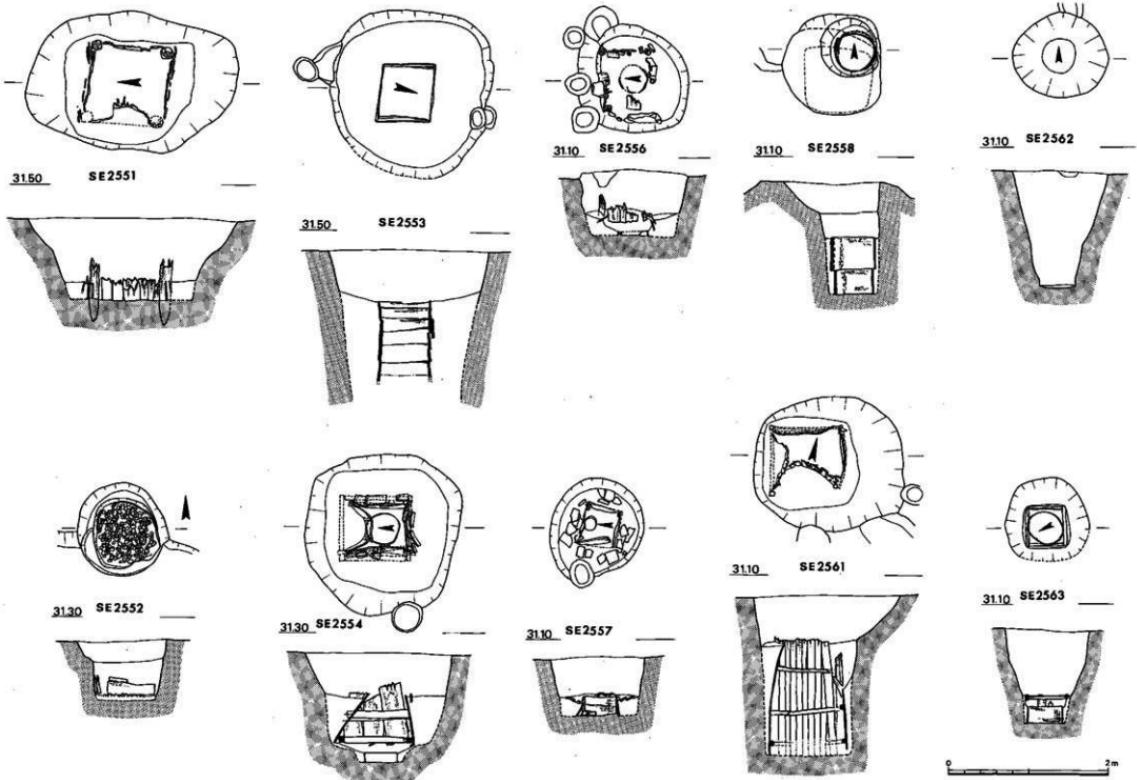


図59 S E2551・2552・2553・2554・2556・2557・2558・2561・2562・2563実測図

遺存もなかったが、遺物が東端に集中しており、頭位を東にしたことが知られる。主軸を N 95°30'W にとる。

遺物は土師器（小皿・杯）・鉄刀子・鉄鎌・鉛玉各 1 が出土した。鉛玉を除いていずれも墓壙底よりもかなり浮いた状態にあり、棺蓋上に副葬されていたと判断される。

同様の掘り込みは S B 2550 の北半で 2 基認められた。東側の 1 基

は浅く墓とは考え難い。西側のそれは長さ 1.4m、幅 0.5m、深さ 0.3m をはかるが、墓を裏付ける遺物の出土はなかった。

出土遺物

S B 2550 出土土器（第 56 図）

須恵器

皿（1）小形の皿で、柱掘形から検出した。口径 14.8cm、器高 2.6cm、底径 11.2cm をはかる。体部はヘラ切り離された底部から直線的に立ち上がる。口縁外端には凹部が沈線状にめぐっている。

甕（3）柱掘形柱穴中から検出した小形の甕の口縁部片である。口縁端部外側には 2 条の沈線をめぐらし、頸部から上をヨコナデで仕上げ、胴部に叩き目を施している。

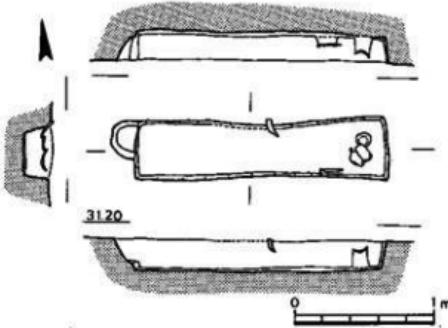
土師器

皿（2）口径 19.5cm、器高 1.8cm、底径 14.9cm をはかる。底部は回転ヘラ削りし、体部・内底部をヨコナデ、ナデで調整している。柱掘形柱穴から検出。

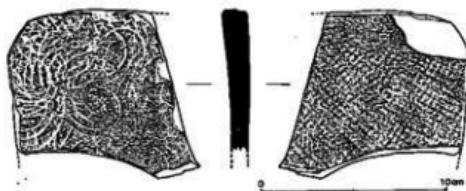
S B 2555 出土土器・鏡（第 55・56 図、図版 58・93）

土師器

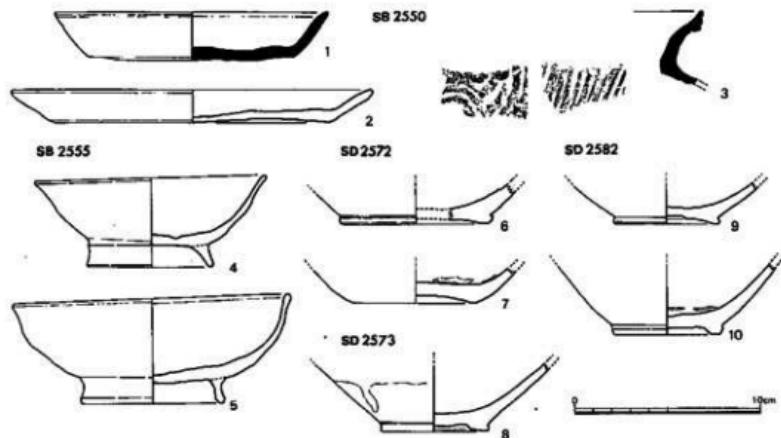
椀（4・5）S B 2555 の身合柱掘形内の柱穴（西列北から 6 番目）から出土した。4 は口径 12.4cm、器高 4.7cm～5.0cm、高台径 6.7cm をはかる。器形はや



第 54 図 S X 2600 実測図



第 55 図 S B 2555 出土実測図



第56図 SB 2550・2555、SD 2572・2573・2582出土土器・陶磁器実測図

やいびつで、軟質の焼成のためか器面が磨滅し調整を不明にしている。5も器面の磨滅した椀で、4にくらべていっそう体部に丸味が加わり、新しい要素をもたらしている。口径15.0cm、器高5.4cm～5.9cm、高台径7.8cmをはかる。

硯

猿面硯 須恵器甕の肩部片を利用した硯で、打ち欠いた端部を掠って整形している。硯面には弧状の当て具痕が残るが、過度の使用で擦り減り、平滑になっている。背面には細い格子の叩き目がみられる。柱掘形から出土。

SD 2572出土陶磁器（第56図）

青磁

椀(6) 底径8.3cmに復原される椀底部の小片で、内面には黄緑色の釉がかけられるが、外面および外底部は露胎で赤茶色を呈する。内底の見込み部に目跡が認められる。越州窯系。

杯(7) 2分の1を残す底部の破片で、底径6.5cmをはかる。胎土は灰白色を呈する。内面には全面に黄茶色をおびた緑色の釉が施され、部分的に褐釉もみられる。内底見込み部には目跡が残る。外面はほとんど露胎であるが、部分的に黄褐色の釉の流れがみられる。

SD 2573出土陶磁器（第56図）

青磁

椀(8) 胎土が淡赤茶色をなす越州窯系青磁椀の底部片で、内面および外面の中位から上には黄茶色気味の緑色の釉がかけられている。外面は削りで調整され、下位は露胎のままである。

内底の見込み部と高台下面に目跡を残している。底径5.8cm。

S D 2582出土陶磁器（第56図）

青磁

椀(9・10) いずれも全面に施釉された越州窯系青磁椀の底部片である。9は蛇の目高台で、径5.8cmに復原される。茶灰色気味の黄緑色の釉をかけている。高台疊付部に目跡が残るが、削り取られている。10は高台径6.0cmに復原される。黄緑色の釉がかけられ、細かい貫入がみられる。内底見込み部および高台下面に目跡が残るが、後者は削り取られている。

S E 2551出土土器・陶磁器（第57図、図版58）

SE 2551・2552

須恵器

蓋(2) 無返りの蓋で、天井部はヘラ切り離しのままである。内面はやや平滑になっている。

杯(2・3) いずれも有高台の杯で、底部から立ち上がる体部は口縁部近くでわずかに外方に曲がる。高台は底部と体部の境に付けられ、やや外開きになっている。3の高台下底部には板状の圧痕が認められる。3は井戸側中からの出土。

土師器

皿(4・5) 4は外底部を回転ヘラ削りしているが、体部の調整は風化のため明らかでない。井戸埋土かの出土。5は体部をヨコナデ、内底部をナデで仕上げている。井戸側中からの出土。

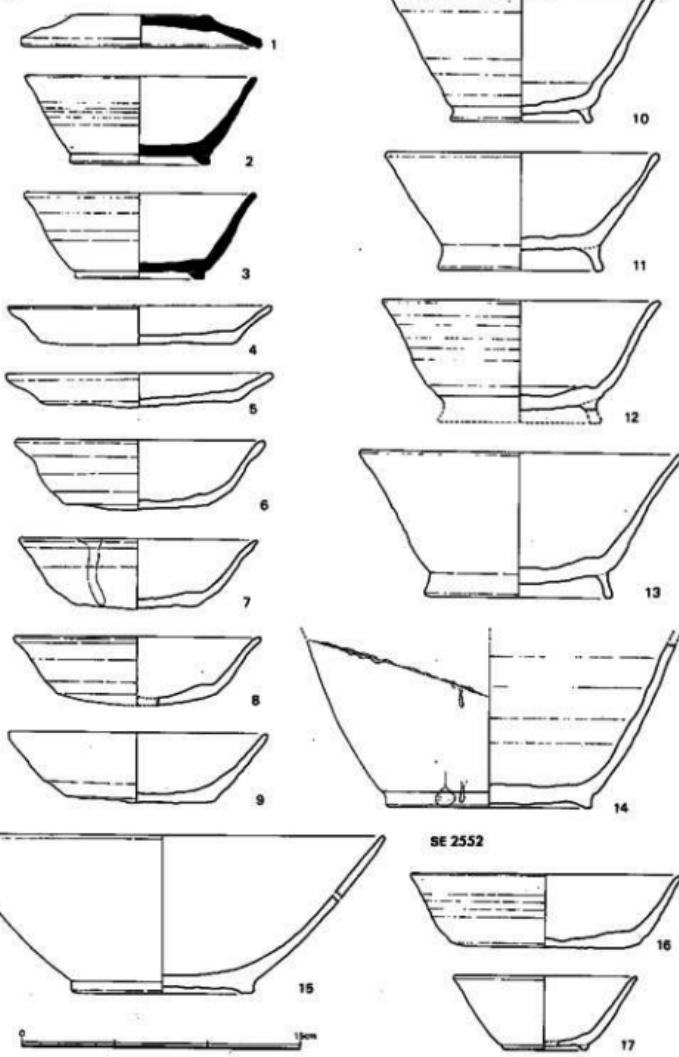
	口 径	器 高	底径・高台径
1	13.0	1.7	
2	12.6	4.8	7.7
3	12.5	4.6	7.0
4	14.2	2.1	10.4
5	14.4	1.9	11.0
6	13.5	3.7	7.7
7	13.0	3.8	6.6
8	13.3	3.8	8.6
9	14.0	3.8	8.0~8.2
10	14.4	7.0	7.6
11	14.9	6.4	9.0
12	15.0	8.0	10.0
13	17.4		
14			11.1
15	(24.1)	(8.6)	9.9
16	14.6	4.0	10.1
17	9.9	4.0	4.6

杯(6~9) ヘラ切り離しされた底部からヨコナデ調整された体部が立ち上がる。体部は内縁気味に立ち上がるが、古期の特徴を残す9がそのまま端部にいたるのに対し、6~8は上位でやや外反する。7は内面の中位まで墨様の付着物がみられ、一部下面に垂れ下がっている。9の外底部には板状圧痕が認められる。6~8は井戸側中からの出土。

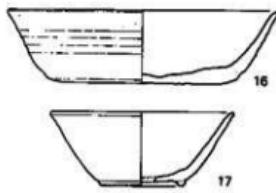
椀(10~13) いずれもヘラで切り離された底部から直線的に立ち上がる深めの体部の椀である。体部および内底はヨコナデ、ナデで調整されている。底部と体部との境に付けられた高台は外方に開き安定している。10~12は井戸側中からの出土。12は煤が付着し、内外面ともに黒褐色になっている。

壺(14) 壺の下半部で、井戸中から出土した。内面の全面および外面の一部に漆が付着している。胴部の破損面にも漆が付着しており、壺下半部を漆容器として転用したものであろう。外底部および胴部外面はヘラ削りで形をととのえている。胴部はその後にヘラミガキで調整しているようである。低い高台が付けられている。

SE 2551



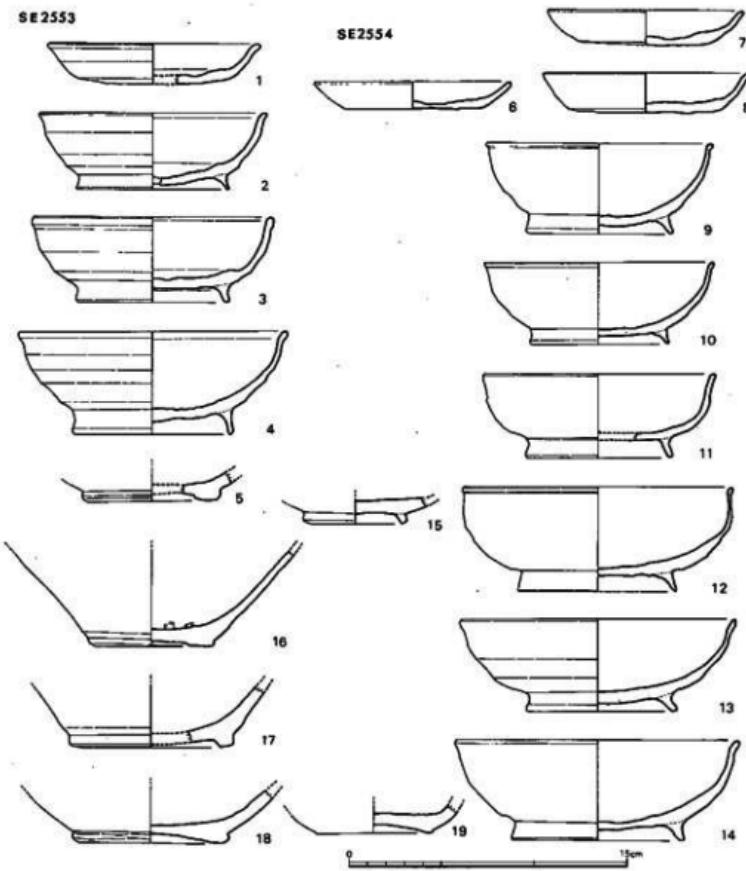
SE 2552



第57図 SE 2551・2552出土土器・陶磁器実測図

青磁

碗(15) 口径24.1cmに復原される越州窯系の大形の碗である。高台をヘラ削りでつくり出し、疊付部は露胎となって赤褐色を呈する。14個に復原される目跡がみられる。他の部分は灰色の緻密な胎土に淡黄緑色の非常に良好な釉がかけられ、光沢をもって発色している。井戸側内からの出土。



第58図 SE2553・2554出土土器・陶磁器実測図

S E 2552出土土器（第57図）

須恵器

杯(16) やや軟質の焼成の杯で、内彫気味に立ち上がる体部は先端がやや外反する。外底はヘラで切り離され、体部・内底部をヨコナデ・ナデで仕上げている。井戸側中からの出土。

土師器

椀(17) 口径9.9cmに復原される小形の椀で、回転ヘラ削りされた底部と大きく開く体部からなる。よくえらばれた胎土を比較的硬質で焼成している。赤茶色を呈する。井戸側中からの出土。

S E 2553出土土器・陶磁器（第58図）

土師器

皿(1) 口径11.4cm、器高2.2cmをはかる。底部はヘラ切り離しされ、体部をヨコナデ・ナデでていねいに調整している。井戸側中からの出土。

椀(2～4) 口縁部付近で外反する丸味の強い体部に、外方に開く高台を付けた椀である。外底部はヘラ切り離しされ、2には板状圧痕が認められる。体部・内底部はヨコナデ・ナデで調整を加えている。2は体部の内外面に煤状の付着物がみられる。いずれも井戸側中からの出土。

青磁

椀(5) 越州窯系青磁椀の底部片。残部外面は露胎で、赤茶色を呈する。内面には黄色味をおびた緑色の釉がかけられている。内底の見込み部に目跡が残されている。井戸側中からの出土。

SE 2553・2554

	口径	器高	底径・高台径
1	11.4	2.2	8.3
2	12.3	4.1	8.2
3	13.0	4.6	8.3
4	14.6	5.6	8.7
5			7.6
6	10.6	1.5	7.4
7	10.5	1.9	7.1
8.	11.2	2.2	8.2
9	12.2	4.9	7.8
10	12.4	4.4	7.4
11	12.6	4.6	8.0
12	14.6	5.7	8.4
13	14.9	5.0	8.0
14	15.2	5.4	9.2
15			5.7
16			6.8
17			8.8
18			8.4
19			6.3

S E 2554出土土器・陶磁器（第58図、図版59）

土師器

皿(6～8) 口径10.5cm～11.2cmほどの皿で、6は他にくらべやや器高が低い。底部はヘラ切り離しされ、体部・内底部をヨコナデ・ナデで調整している。7・8の外底には板状圧痕がみられる。

椀(9～15) いずれも底部から体部にかけて丸味の強い線を描くが、口縁端近くで軽く外方に口を開いている。ことに12はそれが顕著で、反転した口縁の外側下端に段差をつけるため、いわば小さい玉縁状をなしている。ヘラで切り離された外底部には外に開く高台が付けられている。9を除いて器高がやや低い。器表の荒れている11、外底をていねいにナデで再調整した

13を除いて、板状圧痕がみられる。

灰釉陶器

椀(15) 灰白色の胎土を用いた椀の底部のみが残る。淡い灰緑色の釉が内面にうすくかけられている。

青磁

椀(16~18) いずれも椀の底部片で、越州窯系のものである。16は全面に釉がかけられ、内底の見込み部と高台疊付部に目跡が残るが、疊付のそれは削り取られている。17は風化が著しいが、高台疊付部を除いて全面に釉がかけられている。疊付部には目跡がみられる。内底見込み部のそれは不明瞭。18は内面のみに施釉され、風化しているが、やや白っぽい黄灰色をなす。内底見込み部に目跡がみられる。外面は露胎で、赤茶色を呈する。

杯(19) 底部のみ完存する。内面には黄茶色気味のあわい緑色の釉をかけている。見込み部に4個の目跡がみられる。外面は露胎をなし、赤茶色を呈する。長沙窯系の製品であろう。

S E 2556出土土器・陶磁器 (第59図・図版59)

須恵器

杯(1・2) いずれも5分の1ほどどの破片で、ヘラで切り離されたやや不安定な底部と直線気味に立ち上がり口縁部が外反する。

土師器

皿(3~5) ほぼ同大の皿で、ヘラ切り離しされた底部に直線状に立ち上がる体部がつく。いずれも器表が磨滅し、調整不明。他にくらべ薄手につくられた7は、体部上位が大きく外反している。赤茶色を呈し、淡茶白色の他の杯・椀と色調を異にする。10は凸状の不安定な底部をなす。

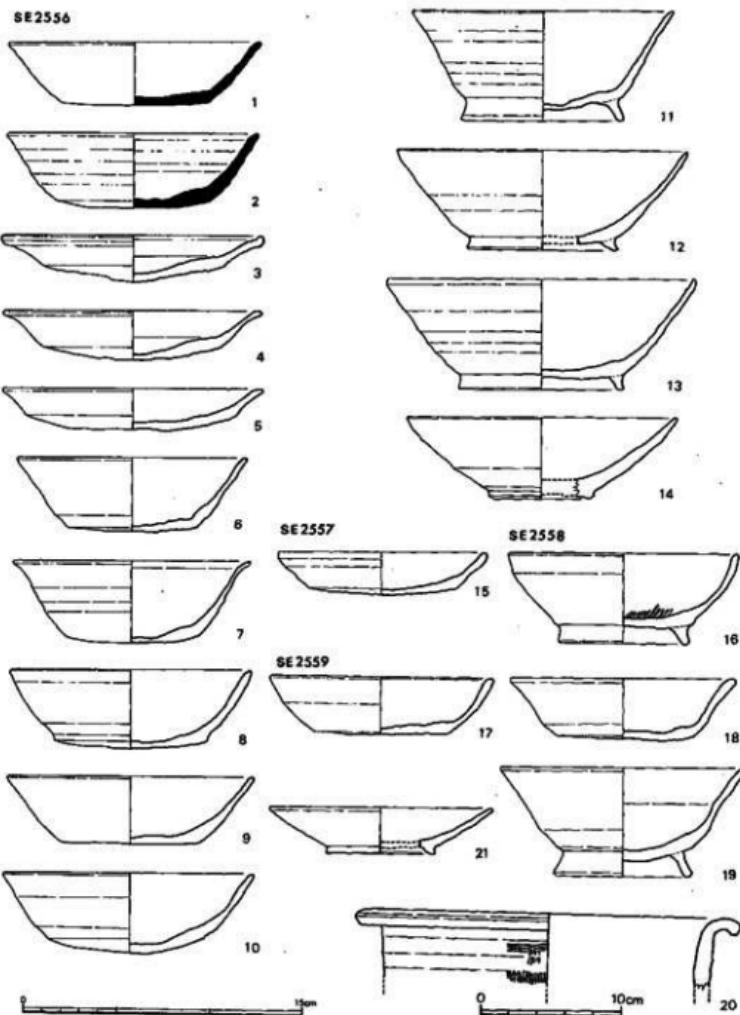
椀(11~13) 11は杯よりも深めにつくられた体部に、外に強く開く高台が付けられている。これに対し、12・13は丸味をもって内湾する体部に低い高台を付けている。いずれも器表の磨滅がいちじるしい。

青磁

椀(14) 越州窯系椀の6分の1ほどどの破片である。淡茶灰色の胎土でつくられた器表の全面にやや黄茶色気味の緑色の釉が施されている。蛇の目高台の外端は斜めに削られ、そこに目跡が残されている。

SE 2556・2557・2558・2559

	口径	器高	底径・高台径
1	13.8	3.4	8.0
2	13.5	4.1	8.3
3	14.0	2.5	9.8
4	14.0	2.7	9.5
5	14.2	2.25	11.4
6	12.3	4.0	7.0
7	12.7	4.5	7.1
8	13.0	4.3	8.2
9	13.4	3.7	7.5
10	13.6	4.4	8.5
11	(14.2)	5.9	8.7
12	15.6	5.4	8.1
13	16.6	6.0	8.8
14	14.6	4.4	5.8
15	11.4	2.3	8.0
16	12.4	4.9	7.1
17	12.0	3.1	7.2
18	12.2	3.2	7.4
19	13.2~13.4	5.9	7.5
20	27.4		
21	12.1	2.5	5.9



第59図 S E 2556・2557・2558・2559出土土器・陶磁器実測図

S E 2557出土土器（第59図）

土師器

皿(15) 口径11.4cmをはかる皿で、ヘラ切り離された底部とヨコナデで調整された体部とからなる。

S E 2558出土土器（第59図・図版59）

黒色土器

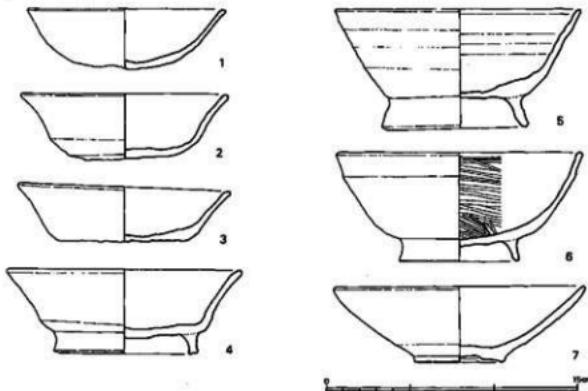
椀(16) 内面を黒く焼した黒色土器A類の椀で、体部の3分の1を欠く。内縁しつつ立ち上がる体部の外面は磨滅が著しい。内面は漆黒色を呈している。内底には粗く施されたヘラミガキが明瞭に認められる。外底部には板状圧痕がみられる。

S E 2559出土土器・陶磁器（第59図・図版59）

土師器

杯(17・18) ほぼ同大の杯であるが、18の体部上位は大きく外反している。いずれもヘラ切り離された外底部に板状圧痕が認められる。灰白色を呈するが、部分的には黒灰色をなす。井戸側内の下層から出土している。

椀(19) ほぼ完形で、杯と同じく灰白色を呈する。ややいびつで、底部から立ち上がる体部は凹凸が著しく、大粒の砂粒が器表に目立つなど、杯とともににつくりの荒さが目立つ。高台はていねいにつくられ、外方への開き具合と厚さから、安定感をもたらしている。ヘラ切り離し



第60図 S E 2561出土土器・陶磁器実測図

された外底部はていねいにヨコナデされている。井戸側内の下層からの出土。

甌(20) 復原口径27.4cm、器肉の厚さ1.0cmをはかる甌の破片が出土している。外面はヨコナデで調整し、口縁部上面や頸部以下にはさらにハケ目調整を加えている。内面の調整は不明。

縁釉陶器

皿(21) 須恵質につくられた有高台の皿の小片で、全面に施釉されている。釉は濃緑色のもので、部分的に銀化している。口縁端部に1個所輪花がみられる。

S E 2561出土土器・陶磁器（第60図・図版60）

SE 2561

土師器

杯(1～3) ヘラで切り離された底部から体部が立ち上がるが、1は底部が丸底状になっている。いずれも板状圧痕が認められる。器表の磨滅した1・2に対し、井戸側内出土の3は残りがよく、ヨコナデによる体部・内底の調整を示している。

	口 径	器 高	底径・高台径
1	11.9	3.55	5.8
2	12.3	3.5	6.7
3	12.8	3.3	7.75
4	13.6～14.2	5.1	8.5
5	14.7	7.2	8.7
6	14.7	6.5	7.1
7	15.0	4.55	5.3

3は製作途中で体部に生じたヒビ割れと、その内外に無造作に粘土を貼り付けての補修がみられる。

椀(4～5) 4は2のような形状の外反する体部に高台を付けている。整形は雑で、いびつな器形をなす。内面のはば全体に煤が付着する。井戸側内下層からの出土。5は高い高台の付いた安定感のある椀で、体部の立ち上がりを直線的につくっている。

黒色土器

椀(6) 体部は半円形状に丸味をもってつくられ、それに外に開く高台を付ける。灰白色を呈するが、内面を黒色に焼している。黒色土器A類の椀である。外面はヘラ切り離された外底部を含めヨコナデ調整を加えている。内面はヘラミガキで仕上げている。

青磁

椀(7) 越州窯系青磁で、5分の2ほどの破片である。暗灰色の胎土にくすんだ黄緑色の釉をかけている。施釉は全面におよぶが、くすんだ色調で発色は良くない。高台疊付部は部分的に露胎となる。

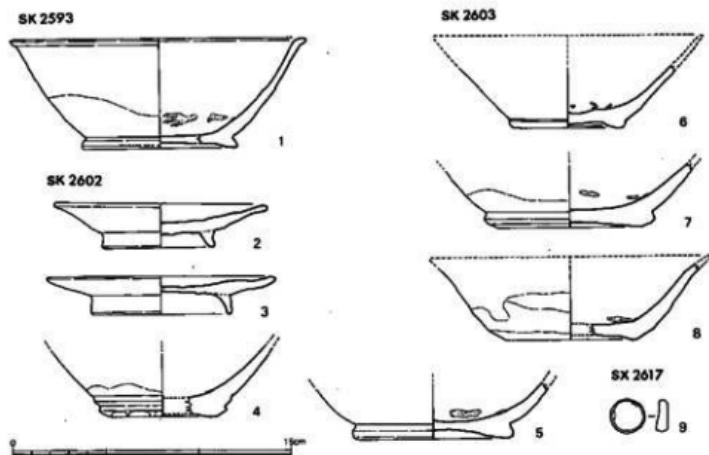
S K 2593出土陶磁器（第61図）

SK 2593・2602・2603

青磁

椀(1) S B 2575の東南に接する長円形土壙から出土。越州窯系青磁片で、黒色の斑点を含む暗灰色の胎土に、淡黄緑色の釉をかけている。内外ともに細かい貫入がみられ、内底見込み部には目跡がみられる。外面下位から上げ底気味の外底部

	口 径	器 高	底径・高台径
1	16.0	5.9	8.4
2	11.6	2.4	6.0
3	12.4	2.1	7.6
4			6.9
5			8.6
6	(14.6)	(5.0)	6.3
7			9.3
8	(15.2)	(4.5)	7.2



第61図 SK 2593・2602・2603、SX 2617出土土器・陶磁器実測図

にかけては露胎をなす。

SK 2602出土土器・陶磁器（第61図、図版61）

土師器

高台付皿（2・3）口径11.6～12.4cmの有高台の皿である。いずれも器表は磨滅し、わずかに2の内底にヨコナデ調整を認めるにすぎない。

青磁

碗（4・5）いずれも越州窯系青磁碗の底部小片である。4は内外面に灰緑色の釉をかけるが、体部下位から上げ底気味の外底は露胎で小豆色を呈している。内底見込み部と高台疊付部に目跡がみられるが、後者のそれは削り取られている。5は内面に黄色味の強い緑色の釉をかけている。細かい貫入がみられる。外面は露胎をなす。いずれも胎土は淡灰色を呈している。

SK 2603出土陶磁器（第61図、図版61）

青磁

碗（6・7）底部の完存する6は全面に黄色味をおびた茶色の釉がほどこされている。釉の発色は良い。内底の見込み部にはうず巻き（巴）状に中心に向かう7個の目跡がみられる。高台疊付部の7個の目跡は削り取られている。7は体部下位から外底部にかけて露胎をなすが、他には淡黄緑色がの釉がかけられている。内底の釉はうすい。見込み部に目跡3個が残り、本来12個前後であったことをうかがわせている。いずれも越州窯系。

杯(8) 口径15.2cm、器高4.5cmに復原できる杯で、胎土は淡い茶灰色を呈する。下地に化粧土をかけ、黄緑色の釉を施している。外面下位から底部にかけては露胎をなす。内底見込み部に目跡がみられる。

褐釉陶器

壺(A) 四耳壺の破片で、肩部に逆U字形の耳が付けられている。赤褐色を呈する胎土には黒砂・白砂を含む。外面には緑褐色の釉がかけられているが、耳の3cm下位くらいまでしかおよんでおらず、それ以下は露胎で灰色をなす。内面にはうすく灰色の釉がかけられている。

S X2617出土陶磁器（第61図）

白磁

皿(9) 梵などの白磁の再加工品で、体部を擦って径1.8cm~1.9cmの円形に仕上げている。両面には黄色味をおびた白色の釉がかけられている。S K2603西側の小ピットから出土した。形状・大きさには碁石を思わせるものがある。

S X2600出土土器・金属器（第62図、図版60）

土師器

皿(1) 口径9.8cm、器高1.3cm、底径7.8cmをはかる。棺蓋上副葬品。

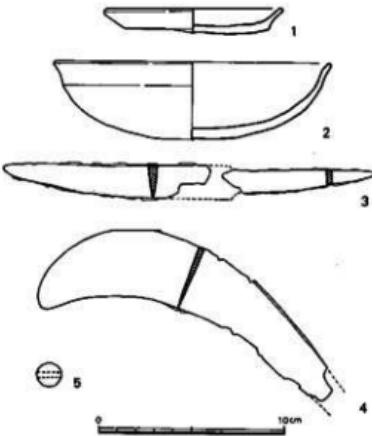
丸底の杯(2) 口径15.0cm、器高4.2cmをはかる。底部はヘラで切り離されているが、磨滅のために他の部分の調整は不明。1とともに頭部付近の棺蓋上に副葬されていた。

金属器

刀子(3) 長20cmほどに復原される刀子で、関部を欠損していた。身幅1.8cm、峰厚0.5cmをはかる。鞘の痕跡はなかった。東に頭位をとると推測される遺骸の左肩部付近で検出されたが、墓壙底よりも8cmほど浮いており、土師器とともに棺蓋上に副葬されたものであろう。

鎌(4) 曲刃鎌で柄着装部を欠く。残存長16.8cm。丸くおさめられた切先から大きく身幅を広げ、茎部に向かって細くなる。身の最大幅3.6cm、峰厚0.3cm。墓壙の北側中央付近で棺内に落ち込むような状態で検出されており、棺蓋上の副葬品である。

鉛玉(5) 口径1.3cmの鉛製丸玉で、真中に径3mmの円形孔が通じる。基壙底の頭部と



第62図 S X2600出土土器・金属器・鉛玉実測図

黒褐色土器

推定される部分から検出されており、棺内副葬品と思われる。

黒褐色土層出土土器・陶磁器・硯(第63・64図、図版61)

土師器

皿(2~7) 口径10.1cm~11.2cmをはかる皿である。底部はすべてヘラで切り離され、2~4・5・7には板状圧痕がみられる。

高台付皿(8) 口径11.6cm、器高2.2cmの皿で、1.2cmの高さの高台を付けている。きわめて軟質に焼成されている。

椀(9~14) 口径11.9cm~13.1cmの椀で、9・10には高台が付かない。9は口縁端部をわずかに外反させるもので底部から体部にかけて丸味が強い。11~14はこのような無高台の椀に、1.1cm前後の高さの高台を付けたものである。いずれも底部をヘラで切り離され、12・13を除いて板状圧痕がみられる。

甕(15~18~20・A) 15は小形の甕で、口径16.1cm、器高10.2cmほどに復原される。口縁内面をヨコナデで仕上げているが、内面は磨滅、外面には煤が著しく付着し、調整は不明瞭である。18は大甕片で口径を28.6cmに復原しうる。胴部外面をハケ目で調整し、内面はヘラ削りしている。口縁部はヨコナデで調整している。19・20・Aは玄界灘式土器として分類されている製塙用の甕で、胴部外面に縦方向の粗く凹凸の激しい平行叩き目を施している。19・Aには内面にも縦方向の細かい平行叩き目がみられるが、20は磨滅して確認できない。20の外面には煤が付着している。

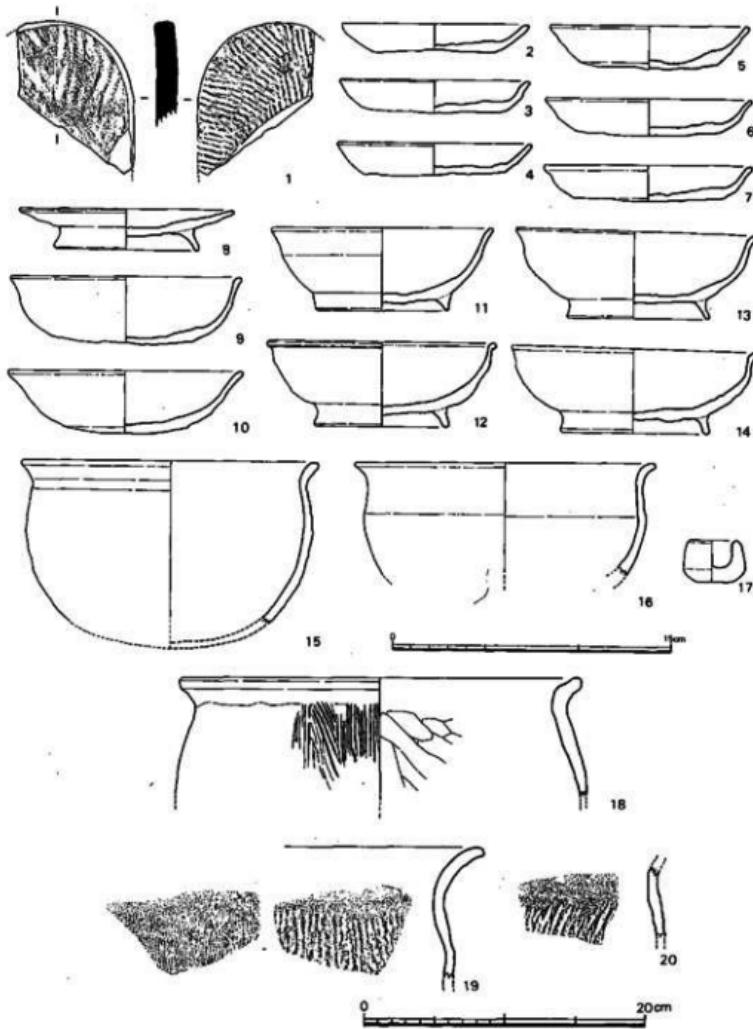
手捏土器(7) 比較的精選された胎土を用いた手捏ねの容器で、器面もていねいに調整している。黒灰色を呈する。

黒色土器

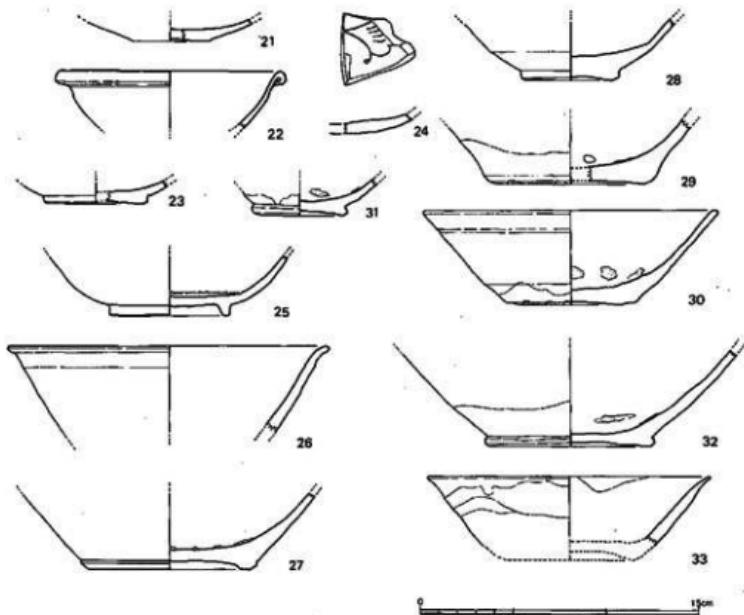
甕(6) 口径16.2cmに復原される小形の甕で、内面を黒色に焼した黒色土器A類のものである。磨滅ため調整は不明。外面は全体に煤が付着している。

灰釉陶器

	口径	器高	底径・高台径
2	10.1	1.5	6.9
3	10.2	1.8	7.7
4	10.4	1.8	7.7
5	10.8	2.4	7.4
6	11.2	2.0	7.8
7	11.2	2.0	8.1
8	11.6	2.2	7.8
9	12.4	3.6	7.8
10	12.6	3.4	6.6
11	11.9	4.5	7.2
12	12.2	4.6	7.2
13	12.8	4.7	7.7
14	13.1	4.6	8.0
15	16.1		
16	16.2		
17	2.6	2.3	2.7
18	28.6		
19			
20			
21			4.1
22	12.5		
23			5.6
24			
25			6.4
26	17.3		
27			9.5
28			5.3
29			9.3
30	14.9	5.1	6.9
31			5.1
32			9.1
33	15.2	(4.5)	(7.7)



第63図 黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)



第64図 黒褐色土器出土土器・陶磁器実測図(2)

椀(21) 糸切りされた底部の破片で、内面に薄く灰色の釉がかけられている。体部外面はヨコナデで調整されている。

白磁

椀(22・23) 22は体部の破片で、体部の端をつまみ出し外側に折り曲げて玉縁を形成している。内外面にわずかに空色味をおびた白色の釉を施している。23は蛇の目高台の底部片で、高台疊付部・外底部は露胎であるが、他にはやや黄色味をおびた白色の釉をかけている。

青磁

椀(25~32) いずれも越州窯系の椀である。25・27・28は高台疊付部を除いて残部のほぼ全面にうすい灰緑色一黄緑色の釉がかけられるが、他は体部下位から底部が露胎である。32の露胎部分は赤茶色をする。また25・28には目跡がみられないが、他の底部片にはすべて内底見込み部に目跡を残している。27・29・30には疊付部にも目跡がみられ、削り取った部分の周囲が赤く発色している。30は比較的破片が大きく全形を知りうる。灰色味の強い灰緑色の釉がうす

くかけられるが、体部下端から底部にかけて露胎となる。目跡は内外に12個ずつみられる。

杯(24・33) 24は越州窯系で、杯の底部破片と思われる。外底に目跡が残り、その部分だけ露胎で赤褐色をなす。黄緑色の釉がかけられ、内底に草葉文が線彫りされている。大宰府では初出である。33は口径15.2cm、器高4.5cmの大きさの杯で胎土は灰白色を呈する。内面および体部外面上半にうすい黄緑色の釉を施し、口縁部にはさらに褐色の釉をかけている。外面下半は露胎をなす。内底見込み部に目跡を残している。

水注（B）長沙窯系の水注の注口部片である。注口は八角形に面取りされている。灰白色の胎土に白粉の強い黄灰色の釉がかけられ、さらに、褐色をかけている。細かい貫入がみられる。釉は内面にもおよび、注口よりも上位にみられる。外面にかけられた褐色は注口を通じて内面にも流れ、茶色味をおびた黒褐色の釉が注口の内面の下位に垂れ下がっている。

硯

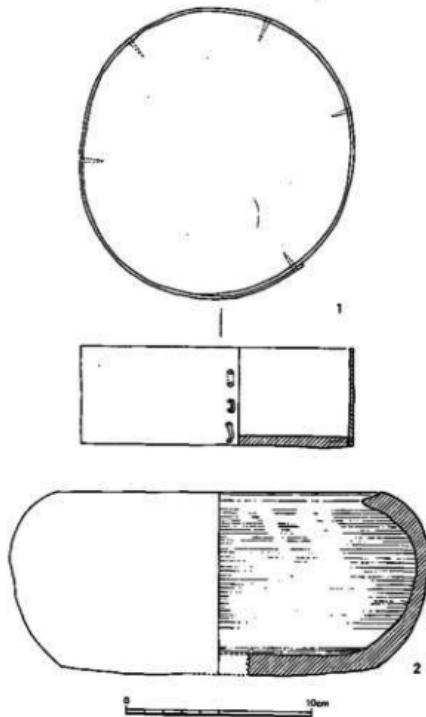
猿面硯（1）砂粒をあまり含まない胎土を堅密に焼成した須恵器窯の胸部片を利用した硯で、破面端部をていねいに擦って形を整えている。硯面は平行叩き文、背面は細かい平行叩き文である。

瓦類

この調査で出土した瓦類は丸・平瓦のほかに軒丸瓦3点、軒平瓦11点、文字瓦31点がある。これらは主に造構面を覆う黒褐色土層から出土したが、特にS E 2554からは多量の丸・平瓦とともに別表一4・6・7と文字瓦が出土した。

軒丸瓦・軒平瓦は別表に示すとおりであるが、特にきわだった出土傾向は認められない。このことは軒先瓦の出土が少ないとともに、検出された建物の性格を考える上で、1つの要素となろう。

文字瓦は「平井瓦」「佐瓦」「賀茂瓦」「小才瓦」「八年」「四王」など



第65図 S E 2557・2561出土木製品実測図

があり、6型式12種類に分類できる。S E 2554出土の文字瓦は「平井瓦」「平井」「佐」「賀茂瓦」である。

木製品（第65図・図版85）

曲物容器（1）底板は長径15cm、短径14cmのややいびつな円形を呈する。両面は丁寧な削りで整え、側面はやや法をつける。周縁側面には5個の木釘孔が穿たれているが、間隔は不揃いである。柾目材を使用している。側板は分離している。厚さ0.2cmの柾目材で、継じ合せ部の内面にのみ幅約0.5cm間隔で刻み目を入れている。縫いは3段分が残っている。S E 2557出土。

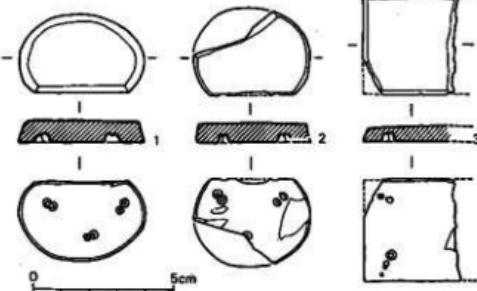
挽物容器（2）ロクロ挽きの鉢。口縁部は大きく内湾し、いわゆる鉄鉢形を呈する。また口縁端部は幅0.5cm位を1段低く削り、蓋受けとしている体部外面は滑らかに仕上げているが、内面には粗いロクロ挽きの痕跡

が明瞭に残っている。底は平底で内面には灰白色の石灰質状のものが付着している。直径22.6cm、高さ9.8cm、横木取り、材は広葉樹と思われる。S E 2561出土。

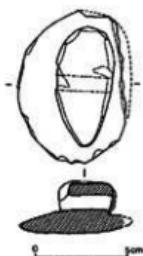
石製品

（第66～68図、図版93）

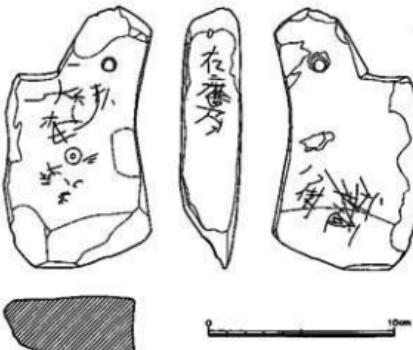
第66図は石蒂である。1は丸瓶で、S E 2557の北にある小ピットから出土した。縦幅2.8cm、横幅4.5cm、厚さ0.8cmをかる。表面・側面は研磨さ



第66図 石蒂実測図



第67図 滑石製品実測図



第68図 滑石製品実測図

れ、濃緑色の光沢を放っている。斜めの方向の縞文様がみられる。裏面は研磨されておらず、3ヶ所に帯への装着のためのかがり穴を穿っている。蛇紋岩製と思われる。2も丸瓶で一部を欠く。S E 2561の東に隣り合う円形土壙から出土した。縦幅3.1cm、横幅4.1cm、厚さ0.7cm。表面・側面は研磨され、真黒色を呈し光沢を放っている。裏面は未研磨で、やはり帯装着用のかがり穴が3ヶ所に穿たれている。頁岩製と思われる。3は巡方で、片側を欠く。縦幅3.6cm、残存する横幅3.2cm、厚さ0.6cm。蛇紋岩製と思われ、研磨された表面・側面は1と同様に濃緑色の光沢を放ち、淡緑色の縞文様がはいっている。裏面は研磨されていない。残部の2ヶ所にかがり穴が穿たれており、裏面には鉄錆がみられ、針金痕跡と思われる。S E 2553の井戸側中から出土。

第67図は上面観が橢円形を呈する断面凸形の蓋状滑石製品であるが、本来の用途は不明である。長径8.3cm、短径（復原）6.1cm、厚さ1.3cmの台部に、長径6.5cm、短径3.1cm、高さ1.5cmの突起が付く。突起のほぼ中央には径0.8cmの断面円形の孔が穿たれている。全面がノミで整形されている。黒褐色土層から出土。

第68図もやはり。石鍋再利用の滑石製品である。長さ14.0cm、最大幅7.5cm、厚さ3.2cmをはかる不整形の製品で、上が茎状に幅4cm前後と一段細くなるが、そこに孔が穿たれている。中央にも一孔が穿たれているが、貫通していない。器面にはノミ調整痕を多く残すが、平面および側面の一方はよく削られている。そこに細い線の刻文があり、「右應」などの文字が認められるが、解説にはいたらない。黒褐色土層からの出土。

小結

推定大宰府政府域の前面張出部の西城外で初めてのまとまった面積の発掘調査となった第88次調査区では、掘立柱建物10棟、井戸11基ほか多数の遺構を検出すことができた。過去のトレンチ調査などさほど遺構の存在が認められていないかっただけに、その成果は大きい。

遺構は調査区の東半では床土直下から、西半では床土下の十一世紀前後の土器を包含する黒褐色土層の下から検出された。つまり、層位的な時期区分はできなかったが、建物・柱掘形・井戸・溝などの切り合いや方位などによっておおむね四期に大別できる。その場合、調査区の東半に重複して所在する、他の建物に比較して格段に規模の大きな両面廻建物S B 2550、S B 2555および四面廻建物S B 2560が建物群の中心（主屋）をなすと考えられる。

第Ⅰ期 S B 2550を中心とするグループで、主軸を1°～2°ばかり東に振っている。S B 2570・S B 2580がこれに属する。S B 2575は方位をやや異にするが、次期に考えられる溝S B 2573に切られており、この時期に属するのであろう。道路をはさんだ第76次調査では建物が確認されておらず、これらの建物はおおむね西面するコ字状の配置をとると思われる。しかし柱筋を通さないなど、整然としたものではない。井戸S E 2552はこの時期に属する可能性がある。

八世紀後半代の段階に相当する。なお、S B2550の柱掘形の身舎のそれはおおむね方形であったが一部に円形をまじえ、廂はほとんどが円形であった。他の建物は時期を問わざることごとく円形掘形であり、第Ⅰ期の後半に柱掘形の円形化のあったことを示唆していた。

第Ⅱ期 S B2560を中心とするグループで、主軸を7°～8°ほど東に振る。S B2555・S B2560・S B2565・S B2595があるが重複し、すべてが併存するわけではない。切り合いや柱掘形出土土器などからみて、S B2560を中心とする九世紀前半の段階の建物群である。S B2560とS B2565とは柱筋を通さないが、併存すると思われる。45尺の間隔をもっている。S B2565は南側に掘られた溝S D2571・S D2572（おそらくはS D2573も）はそれに伴うと考えられる。この場合、S B2560とS B2565とが区画されることになるが、その意味はわからない。ともあれ南面して併行する配置をとっている。S E2571はこの段階の建物に伴う井戸であろう。

第Ⅲ期 第Ⅱ期と主軸を等しくするS B2555を中心とするグループである。S B2555はS E2552に後出し、柱掘形の上部から十世紀初頭前に考えられる完形の土師器の出土がみられる。各柱掘形から相当量の土師器が出土しており、それらを参考にすると九世紀後半の段階に考えられる。この時期の建物はほかには認められていない。方位を等しくするS B2595は重複し、併存しない。土壤S K2602・S K2603は次段階の土器を出土しているが、それの西側に所在するS E2556・S E2558・S E2559・S E2561などが併存すると思われる。

第Ⅳ期 建物の主軸を西へ2°ほど振るグループで、S B2585・S B2590が属するが、両者は重複し時間幅をもっている。これらと方位を同じくする遺構に側溝S D2581・S D2582と柵S A2564からなるこの地区的造構の北を限ると思われる施設がある。同様に心々で約37mの間隔をもって南に側溝S D2566・S D2567をもつ施設がある。S E2553・S E2554・S E2557などもこの時期の井戸であろう。出土遺物からみて十世紀代の段階に相当する。

これらの遺構が黒褐土層で覆われた後、十一世紀中頃以降にいたって、墓S X2600が営まれている。

ともあれ、今回の調査では建物と井戸とが組合わされて存在していた。それは官衙域ではほとんど調査例を欠く現象である。また方形柱掘形をもつS B2550をとっても桁行の間隔が6尺等間と狭く、また両面廂とはいえ柱掘形、推定される柱自体が小さくなっている。ことに廂の柱掘形は格段に小さい。こうしたことでも溝SD320以東の官衙域で検出され掘立柱建物との大きな相違となっている。こうした点からみて、S D320以西の建物は官衙とはみなし難い。官衙域に隣接する立地や石帶の出土などからみて官人宅等の性格を考えうる一画といえる。

5 第92次調査

第92次調査地域は大楠地区南北大溝（S D320）の西側にあり、1,915m²を調査した。これまで、S D320を境として東側を官衙域として考え、西側にはそれ以外の性格を有する施設、たとえば宮人の居宅などの存在が予想されていた。これを裏付けるように、本次調査域から南方約100mの地を第88次調査として発掘調査を実施し、奈良時代から平安時代にかけての宮人の居宅かと思われる建物跡や井戸跡などが発見調査された。そこで、今回の調査における主たる目的を第88次調査と同様に建物跡の検出、また、建物配置などの解明におくこととした。調査の結果、数棟の建物が規則正しく配置されていることなどが判明すると同時に、発掘区西端において、西側を限ると考えられる南北溝の東脇部分を検出し、予想を上回る成果を得ることとなつた。

地番は太宰府市大字觀世音寺字大楠328・331・335-1である。なお、鏡山猛氏条坊復原案によると右郭五条三坊の地にあたる。

調査は排土置き場の都合上、南半部と北半部とにわけて実施することとした。

南半部は昭和59年7月2日から調査を開始し、同月24日にいたって表土・床土の除去作業が終了し、直ちに遺構面を覆う暗褐色土層の発掘を開始した。遺構面が東北から南西へ傾斜しているため、暗褐色土層は東北部は薄く、南西部がもっとも厚く堆積していた。暗褐色土層除去後8月18日から南半部西北隅から遺構の検出作業に入る。9月6日地鎮と考えられるS X2670を発見し直ちに清掃、翌日写真撮影・実測後取りあげた。9月17日にいたり、遺構検出を終了し、9月21日軽気球による空中写真撮影、翌日遺構毎の撮影、9月26日から実測を開始し、10月8日全ての調査を終了し、埋め戻し作業に入る。

10月19日から引き続き北半部の調査を開始した。北半部東側では表土下が遺構面となっているため直ちに遺構検出することができた。西半部では比較的厚く遺構面を覆う層があったが順調に作業は進んだ。調査途中に別作業が2週間程入ってきたため遺構検出が終了したのは11月19日になった。写真撮影・実測などが終了したのは11月29日である。南半部・北半部の表土埋め戻し作業が終了し、調査が完了したのは12月9日である。

検出遺構

検出した主要な遺構は、建物9棟、櫛3条、井戸4基、溝・土壙・ピット多数である。前節で述べたように遺構面（地山面）が東北から南西へ傾斜しているため、東北隅では遺構面が床土の役割を果たし、南下するに従い暗褐色土層が徐々に厚くなる。この暗褐色土層中位から切り込む遺構もみられ、その代表例として柱筋が不揃いなS B2665をあげることができる。次に遺構の在り方をみると、西半部に土壙・ピット群が多く、さらに平安時代に属する井戸が西側

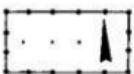


第69回 第92次調査構配圖

に偏って設けられている特徴を見出すことができる。

以下、主要な遺構について個別に説明をする。

据立建物



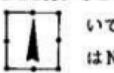
SB2620 発掘区東南部で検出した 5 間 × 3 間の東西棟建物で、SK2641から派生し、蛇行しながら西流する SD2627よりも新しい。西側 3 間分中央には床束穴と考えられる小ピットを伴う。桁行は 8.7 m (29 尺)、梁行は 4.35 m (14.5 尺) であるが、桁・梁行ともに等間ではない。柱掘形 (最大で約 0.8 m × 0.8 m、最小で 0.5 m × 0.6 m) のなかに柱根の残片が 5 本遺存 (摩耗が著しいため不明瞭であるが 1 辺 12 cm の角柱風) し、また柱痕跡が多く観察できる。それらから各柱間を測ると、桁行では東から 1.75 m · 1.75 m · 1.85 m · 1.63 m · 1.72 m、梁行は南 1 間分が 1.23 m、他は不明である。このように各柱間には多少の出入が認められるが、総長を重視して復原すると、桁行は 5.8 尺等間、梁行は 4.8 尺等間となる。方位は N 2°10'W である。

SB2625 SB2660 の東北方に位置し、棟方向をほぼ同一とする。4 間 × 2 間の東西棟建物



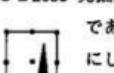
で、SK2642によって西妻柱が切られている。柱掘形 (0.6 m ~ 0.8 m) 内には柱根それ自体は残存していないが、その痕跡が多く発見された。その痕跡から柱の径を測ると、15 cm ~ 20 cm で、さほど大きくなはない。桁行 7.15 m (24 尺)、梁行 4.27 m (14 尺) であるが SB2660 と同様に各柱間にはばらつきがあり、桁行は東から 1.99 m · 1.68 m · 1.74 m · 1.74 m、梁行は不明である。総合してみると桁行は 6 尺、梁行は 7 尺等間となる。建物方位は N 1°55'W である。

SB2630 SB2620 の真北で検出した 2 間 × 2 間の小建物である。柱掘形は浅く、また不揃



いである。南北に長く 6.7 尺等間、東西は 6.4 尺等間に復原可能である。建物方位は N 2°40'E である。

SB2635 発掘区南半中央部に位置し、SB2640 · 2645 から切られる 2 間 × 2 間の總柱建物



である。柱掘形 (0.8 m ~ 1.0 m) は大きい。柱痕跡を精査したが不明瞭で明らかにしえなかった。復原すると南北に長く 6.7 尺、東西は 6.4 尺等間になる。建物方位は N 1°50'E である。

SB2640 柱掘形の相互関係から SB2645 よりも新しい。5 間 × 2 間の東西棟建物である。

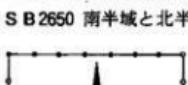


柱掘形 (径 0.7 m) は円形である。桁行・梁行ともに 8 尺等間に復原可能である。SB2660 とほぼ棟方向を一にし、N 0°30'W である。桁行が同一であることから同時併存の可能性はきわめて大きい。

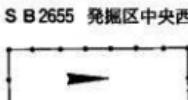
SB2645 SB2340 から切られ、北側架間が北半部におよぶ 5 間 × 2 間の南北棟建物である。柱掘形は 1 辺 1.2 m を測り、官衙域建物と何等遜色はない。しかし、東南隅から 2 番目の柱掘形のように柱筋に合わないようなものもある。柱痕跡は不明瞭で正確さを欠くが、桁行 8.3 尺、



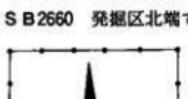
梁行9尺等間に復原できる。建物方位はN 2°35'Wで、北接するS B2660と同一であること、また柱掘形は他の建物に比すと、S B2660とともに大きく、柱掘形出土遺物も同一時期を示していることなどから同時期併存の可能性は十分に考えられ、「L」字型配置になると思われる。



S B2650 南半域と北半域に桁行がまたがっている6間以上×2間の東西棟建物である。南半部の柱掘形は大きく削平され、約10cmほどの深さしか残っていないかった。このため、西南隅柱掘形は検出できなかった。また、側柱も境界コンクリート壁のため破壊され確認できなかつた。柱痕跡（約20cm）から桁行6尺、梁行6.4尺等間に復原できる。S B2655と同一方位（N 0°25'W）であると共に、S B2650の桁行とS B2655の梁行とが同一線上に配置されていることから同時に計画され配置されたことがわかる。出土遺物はほとんどなく、時期は明らかでないが、遺物をほとんど含まない点を重視するとこの調査地発見建物のなかでは、S B2655と共に最初期に属すると思われる。



S B2655 発掘区中央西端に位置する7間×2間の南北棟建物である。柱掘形（約0.6m～0.8m）中の柱痕跡（約20cm）から桁行43尺、梁行14尺に復原できる。桁行柱間は両脇がもっとも狭くそれぞれ5.8尺、中央3間分は6尺等間、それに両脇2間目の柱間はそれぞれ6.7尺ともっと広い。建物方位はS B2650と同一でN 0°25'Wである。



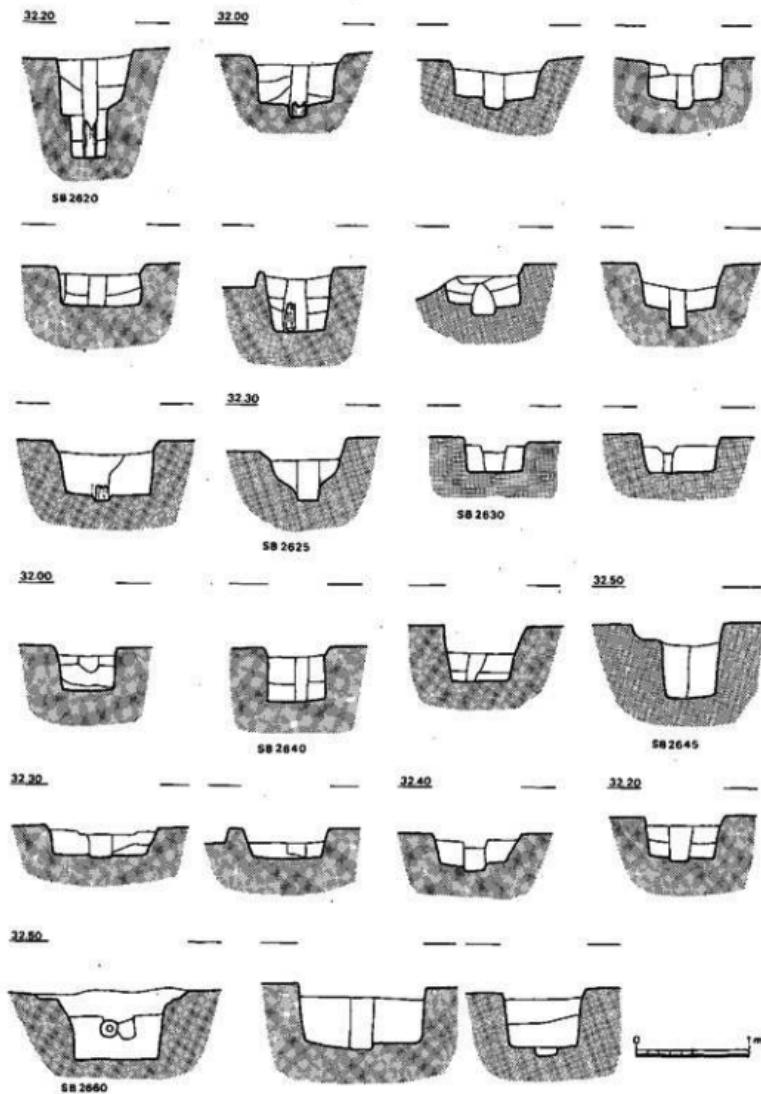
S B2660 発掘区北端で発見され、S B2645と棟方位が直角となる5間×2間の東西棟建物で、S D2350A・Bによって切られる。柱掘形（約1.0m）中の柱痕跡（約20cm）の残りは悪く、かろうじて4個確認したにとどまった。東棟部分の柱根跡が不明なため桁行を測ることは困難であるが、S B2340との関係から40尺に復原できる。これをもとに桁行各々の柱間を求めるに東から8.8尺・8.7尺・7.5尺・7.5尺・7.5尺、梁行は8尺等間となる。建物方位はN 2°35'Wである。

S B2665 発掘区西北隅で検出した3間以上×2間の南北棟建物である。柱掘形（0.4m内外）には平石を礎板として使用している。暗褐色土層中位から掘り込まれていることから平安時代、おそらくは十世紀後半頃と考えられ、検出建物中もっとも新时期に属する。

構

S A2675 S B2655の西側柱の東に接するように走る南北（3間以上）の柵列である。若干西へ振れ各柱間は7.5尺等間に復原できる。南半部の調査時にはS A2676と共に掘立柱建物として考えていたが、北半部の調査で、建物にはならないことがわかり、柵列として考えた。

S A2675 S A2675の東側に位置する南北方向（3間）の柵列で、西へ大きく約8°振っている。どの建物に伴うかは明らかでない。



第70図 捨立柱建物柱揚形断面図

S A2685 発掘区東北部で検出した東西方向の柵列（5間分）である。柵列の南側に柱穴があり、建物の一部かと精査したが、柱筋がうまく合致せず、柵列とした。あるいは、東から2～4番目の柱穴は南へ延びて、2間×2間の小建物になるかもしれない。

溝

S D2627 S K2641から派生し、西へ蛇行しながら西流する小溝で、発掘区西側の第94次調査地域まで延びていく、その途中に存する南北溝S D2680の上層埋土よりも古い。また、発掘域内検出遺構の全てから切られていることから古期に属することは確実である。

S D2350 一昨年度報告の第83次調査域から延びている東西溝である。第83次調査の溝には新・旧はなかったが、今回調査分にはA（旧）B

（新）が認められた。S D2350 Aは幅約1.5m深さ約0.8mを測り、第83次調査でみられたように、部分的に途切れていますため排水機能は有していない。この途切れ部分は約7.2m（24尺）ある。S D2350 Bは幅約1.5m、深さ約0.1mとAに比して非常に浅い、出土遺物にはA・Bとともに型式差は少なく、あまり隔たることなく埋ったと思われる。

S D2680 南半部西端で検出した南北溝である、

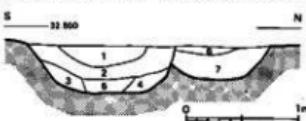
東肩部分の一部であり、また第84次調査として現在調査中であるため、その詳細は次年度に報告する。

井戸

S E2621 S B2650の南に設けられた方形縦板組（II-A-a類）の井戸である。約2.4m（8尺）の隅丸方形の掘形（残存深さ約1.1m）を有し、最下部に1辺約1.2mの井籠組の木製台を置く。木製台の四隅に径9cm程の枘穴を穿ち、それに円形の出納を造り出した方形の隅柱を立て、外側に縦板の側板を配している。横桟も角材を用い、両端の出納と隅柱の枘穴とを組み合わせている。部材の詳細は、出土遺物の項で述べる。S B2650・S B2655と共に検出遺構中最古で、八世紀代に属する。

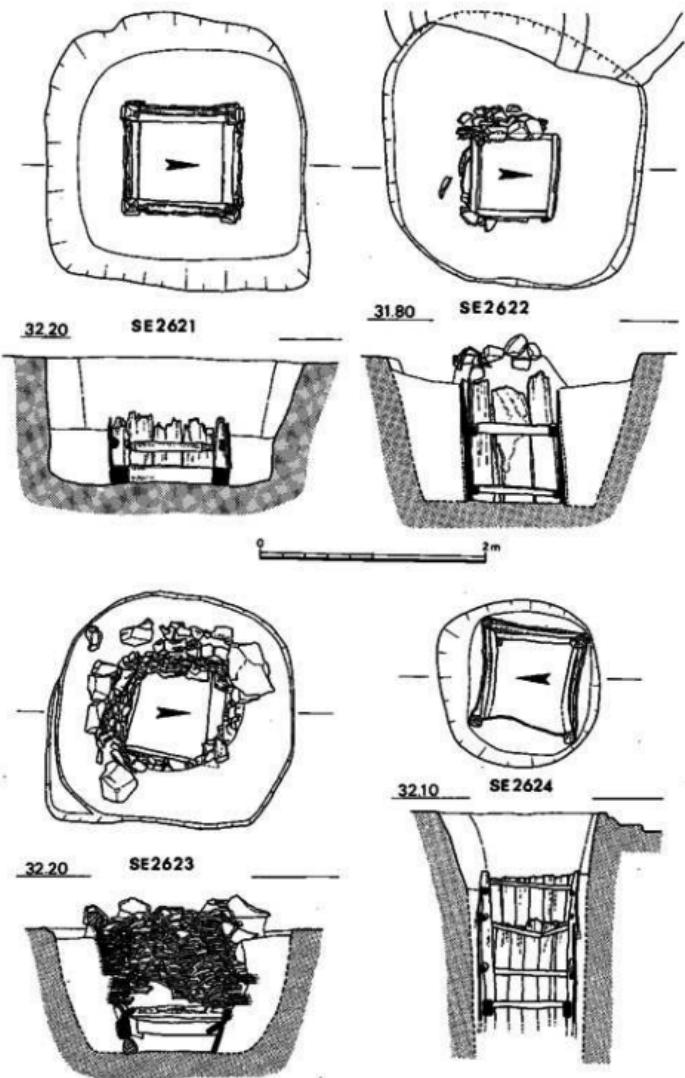
S E2622 発掘区西南部に位置し、S K2649を切る方形縦板組（II-2-a類）の井戸である。隅丸方形の掘形（1辺2.3m、深さ1.4m）のほぼ中央部に内法77cmを測る正方形の井戸側を配している。隅柱を用いることなく、横桟（6cm×10cm）だけで側板を支えている。井戸掘形上部で検出しした石群は、井戸側の裏込めである。九世紀後半頃。

S E2123 土壙群S K2652の埋土上から掘り込まれた方形の累積井戸である。下位の三面には板材を3枚積み、南側は石組の上端に狭い板材をわたしている。この下位の高さは約52cmである。上位は漏斗状に瓦を積み上げている。裏込めには大きな石（約45cm）から尋大の石まで



第71図 S D2350A・B土層図

1. 黒褐色土
2. 黒灰褐色砂質土
3. 茶褐色砂
4. 黑褐色土（黄色粘土を混じえる）
5. 暗灰色粘質土
6. 茶灰褐色土（黄色粘土塊を混じえる）
7. 黑灰色土



第72図 S E 2621・2622・2623・2624実測図

を用いている。瓦積みの井戸としては第65次調査（藏司前面域）に次いで、大宰府では2例目である。十世紀後半頃。

S E 2624 北半城西側で検出した方形縦板組（Ⅱ類）の井戸である。一辺1.4m～1.5mのはば隅丸方形の平面形を有する掘形で、内法約95cmの井戸側を配している。2段分（1.8m）まで調査したが崩壊し始めたため、これ以下の調査は断念した。隅柱は約10cm程で比較的大きいが、上から3番目までの横桟は細い。4番目の横桟（南・北）はしっかりした角材（8cm×13cm）を用いている。横桟は隅柱に穿たれた穴にさし込んで固定している。十世紀代。

土壙

S K 2641 発掘区西南部で検出した径約2.0m、深さ約1.2mの円形土壙で、S D 2627を伴う。壁・床面ともに粘土層のため、水が湧出することはない。床面から完形の土師器小壺1個が発見された。溝を伴うため、水溜穴かとも考えられるが、周囲の砂層を掘削すれば、容易に水を得ることが可能であり、また、穴藏とすれば、溝を伴うことの理解が困難である。いずれにしても判断が容易でない遺構である。

S K 2642 S B 2625の西側柱を切る。東西に細長く（約11.5m）大小7個の土壙が連なる。もっとも大きいもので1.75m×3.5m、深さ0.25mである。埋土からみると、7個の土壙には明確な新旧はなく、同一時期に埋没したと考えられる。

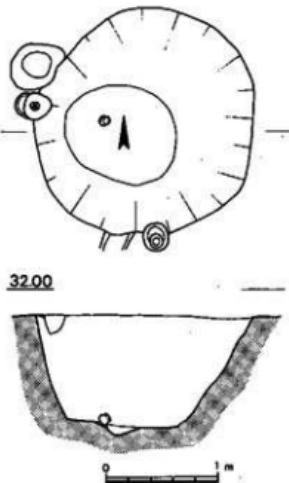
S K 2643 S K 2642の東に位置する、径1.15m、深さ0.5mの小土壙で、東半部だけを調査した。

S K 2644 発掘区南端中央部で検出した。径約1.0m、深さ0.4m程の小円形土壙である。

S K 2646・2647 ともにS D 2627を切る。S K 2646は不整形の小土壙、S K 2647は径1.1m、深さ0.6mである。両土壙とも、出土遺物は少ない。

S K 2649 S E 2622によって切られる長円形の土壙で、約2.4m×3.0m、深さ0.8mを測る。8世紀代の須恵器や土師器と共に横桟2個を検出した。

S K 2652 S E 2623によって切られる、南北に長く連なる土壙群で、長さ約20m分検出したが、上部に井戸や土壙などがあるため完掘はしなかった。発掘した部分のうちもっと深いところで、約0.6mである。出土遺物は豊富で、それからみると、八世紀後半頃に埋没したと考えられる。



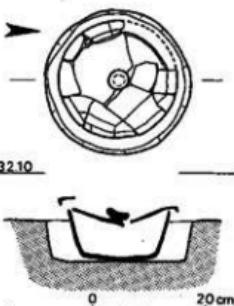
第73図 S K 2641実測図

S K2656 S B2655とS K2652の間に位置する。約1.8m×約3.5m、深さ0.3mの浅い土壌である。

S K2664 S B2645の北に接するように位置し、東西に細長い（約1.5m×約7.0m、深さ0.15m）土壌である。

地鎮造構

S X 2670 発掘区南半西北部で検出した。円形（径0.25m、深さ0.08m）の掘形の中に土師器無高台椀を据え、これに土師器蓋を被せている。蓋・身ともに丁寧なヘラミがキを施した良質な土器であり、ことに椀形の身はこれまでにみられない例であり、特別の役割のもとにつくられた可能性がある。このような状況から、S X 2670を地鎮のための造構として判断した。



第74図 S X 2670実測図

出土遺物

造構を覆う暗褐色土層や各種の造構から多く遺物が出土したが、ここでは一括資料や重要な資料について報告する。なお、特記しない限りヘラ切りである。

S B2620出土土器（第75図、図版）

須恵器

杯(1) 口径16.2cm、器高6.1cm、高台径9.4cmである。外底部はヘラ切り未調整である。体部と底部との境は明瞭である。床束と考えた柱穴の上層から出土した。

S B2645出土土器（第75図）

須恵器

蓋(2) 口径15.1cm、器高2.2cmである。外天井部は回転ヘラ削り調整を行う。特徴から八世紀前半代と考えられる。また、S B2645柱掘形から八世紀中頃から後半代の土器も出土している。

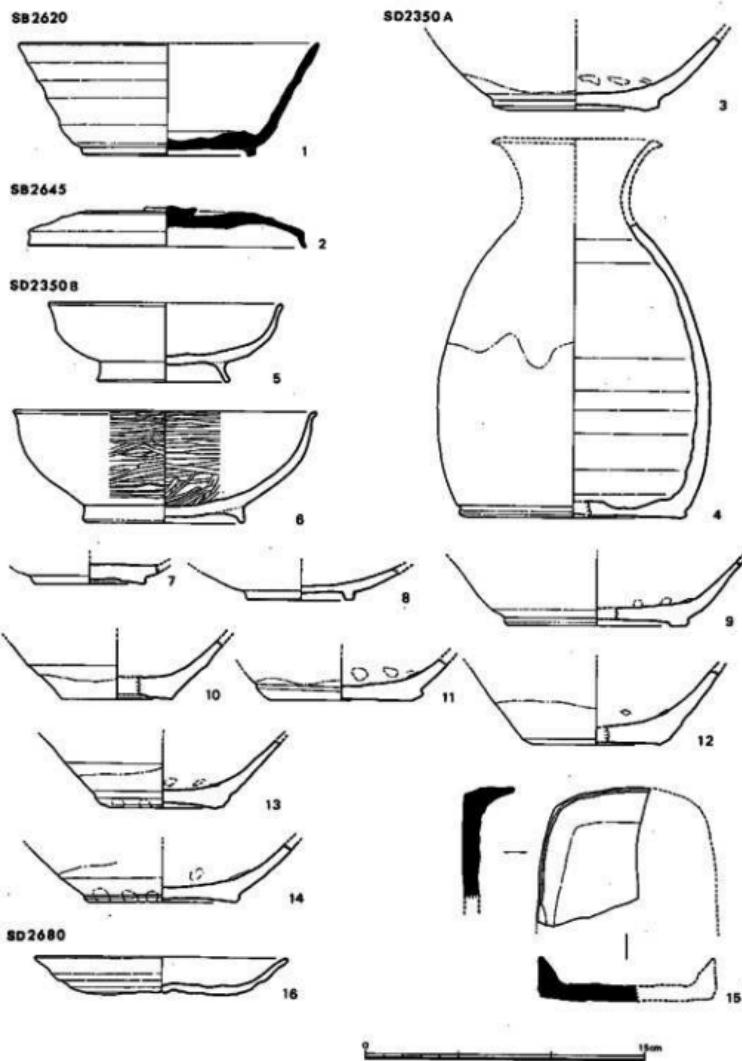
S D2350A出土陶磁器（第75図、図版62）

青磁

椀(3) 越州窯系青磁の底部片である。淡灰色の胎土に暗緑色を呈する釉をうすく体部下位までかけている。白色の目跡は6個残っているが、復原すると14個程になると思われる。

灰釉陶器

盞(4) 全体の約1/4程が残存している。胎土は精良で砂粒はほとんどなく灰白色を呈する。体部中位以上に灰釉がうすくかけられている。体部外面は回転ヘラ削り、内面はロクロ跡が著しい。残存部には把手の痕跡はなく、その有無については明らかでない。



第75図 SB2620・2645、SD2350A・B、SD2680出土土器・陶磁器実測図

S D 2350 B 出土土器、陶磁器（第75図、図版62）

土師器

椀(5) 口径12.6cm、器高4.3cm、高台径7.2cmである。胎土は精良で砂粒は少ない、遺存状態は悪く、内外面とも磨滅のため明らかでない。桃色味をおびた白茶色を呈する。

黒色土器

椀(6) 口径16.4cm、器高6.0cm、高台径8.7cmである。体部中位以上はヨコ方向、以下はジグザグ（山形状）状の丁寧なヘラミガキをする。また、体部下位から外底にかけて回転ヘラ削り調整を行っている。胎土は精良で、ほとんど砂粒は含まず、焼成も良好で内外ともに真黒色を呈する。

綠釉陶器

椀(7) 幅1.8cmの蛇ノ目高台を有する椀の底部残片である。焼成は堅緻で淡灰色を呈し、黄緑色のうすい釉が全面にかけられている。

白磁

皿(8) 体部中位で屈曲するタイプの皿に復原できる。高台疊付部は釉を取り、外底見込み部は部分的に釉がかかる。他は若干黄色味をおびた白色の釉がうすくかけられる。胎土は緻密で乳白色を呈する。第70次（般世音寺小子房地区）調査で同種の皿（図上完形）が出土している。

青磁

椀(9～14) 幅広の輪高台(9)と平底(10～14)とがある。10は平底の底部中央を回転ヘラ削りで削り取り擬高台風に仕上げている。全てに目跡を伴い、8～15・16個を数えることができる。

硯

風字硯(15) 陶質の風字硯残片である。縁部はヨコナデ、外底との境はヘラ削り調整をしている。内面は使用のため、平滑となっている。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土は砂粒が若干入り、器面は若干ザラザラしている。

S D 2680出土土器（第75図）

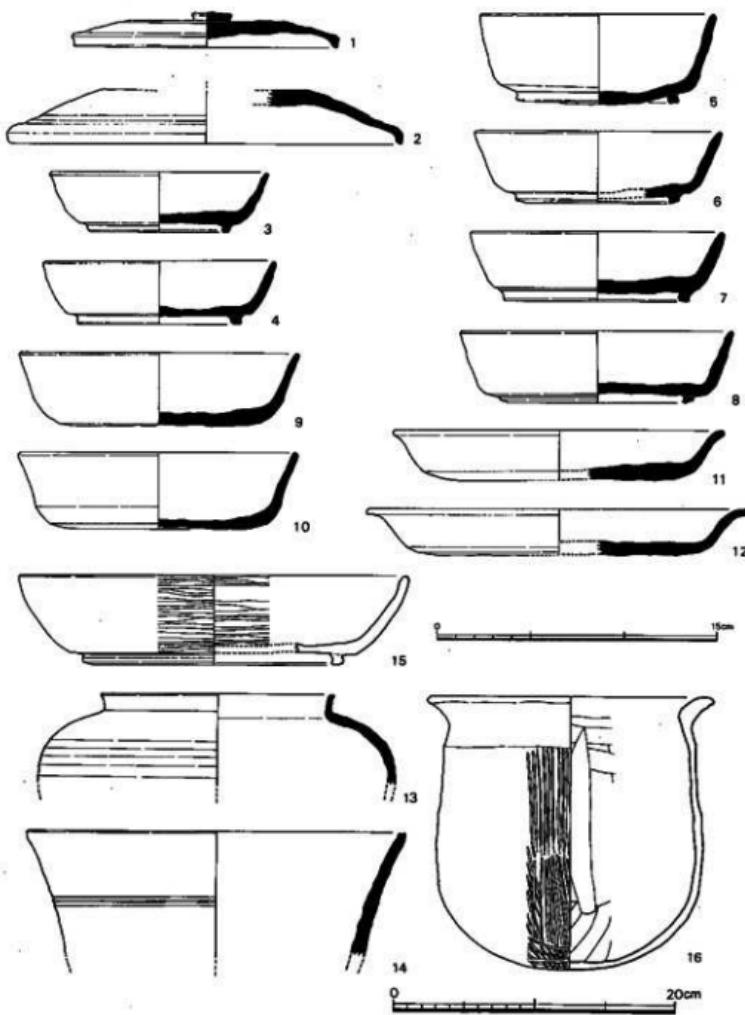
土師器

皿(16) 口径13.6cm、器高2.0cm、底径8.3cmである。内面は磨滅のため調整は明らかでない。体部外面はヨコナデ、底部はヘラ切り離しのままで未調整である。胎土中に少量の砂粒を含むが比較的精良で、淡茶色を呈する。S D 2680は現在第94次調査として調査を実施しているので詳しく述べる。

S E 2621出土土器（第76図、図版62）

須恵器

蓋(1・2) 1・2ともに外天井部は回転ヘラ削り調整をしている。1の外天井部には「×」のヘラ記号がある。



第76図 S E 2621出土土器実測図

杯(3~10) 8の外底部は回転ヘラ削り、7の SE 2621

外底部はナデ調整をしている他は全てヘラ切り離しのままである。5の外底には4~5本の棒状圧痕がある。3には油煙が付着していることから灯火器として使用されたと思われる。高台付杯・無高台杯とともに体部と底部との境は不明瞭である。

皿(11・12) 両者ともに口縁部を大きく外反させる特徴を有している。12の外底部の回転ヘラ削りは明瞭であるが、11は不明瞭である。

壺(13) 葉壺形の壺の残片である。体部は肩部以下を回転ヘラ削りしている。肩部最大径は25cmを測り、下位にある。また、SD 2340出土例よりも大きいが型的には何等差はない。

	口径	器高	底径・高台径
1	14.2	1.9	
2	21.1		
3	11.7	3.2	7.1
4	12.5	3.4	8.9
5	12.7	4.9	8.1
6	13.2	3.9	8.2
7	13.6	3.8	10.0
8	14.2	3.9	10.4
9	15.0	3.8	10.8
10	15.1	4.2	11.7
11	17.7	2.7	12.4
12	20.6	2.5	15.2
13	16.5		
14	26.9		
15	21.0	4.8	14.0
16	20.4	19.5	

鉢(14) 平底の鉢に復原できる残片で、体部上位に2条の沈線を伴う。口縁端部は若干凹む。胎土中に砂礫が多く含む。焼成は堅緻で、灰黒色を呈する。

土師器

杯(15) 口径21.0cmを測る大形品で、外底部は回転ヘラ削り調整、体部内外および内底部にはヨコ方向の丁寧なヘラミガキをする。器壁は厚く、若干SX 2670の椀に類似する。胎土は精良で、淡黄茶色に焼成されている。

甕(16) 体部最大径(19.0cm)が下位にある下張形の甕で、口縁部は短く肥厚している。内面の削りは下位・中位・上位と3段、外面の刷毛目は底部、中位2段計3段にわかれる。

以上の土器群の特徴から八世紀前半代遅くとも中頃にはSE 2621は埋没していたと思われる。

SE 2622出土土器 (第77図、図版63・90)

SE 2622・2624

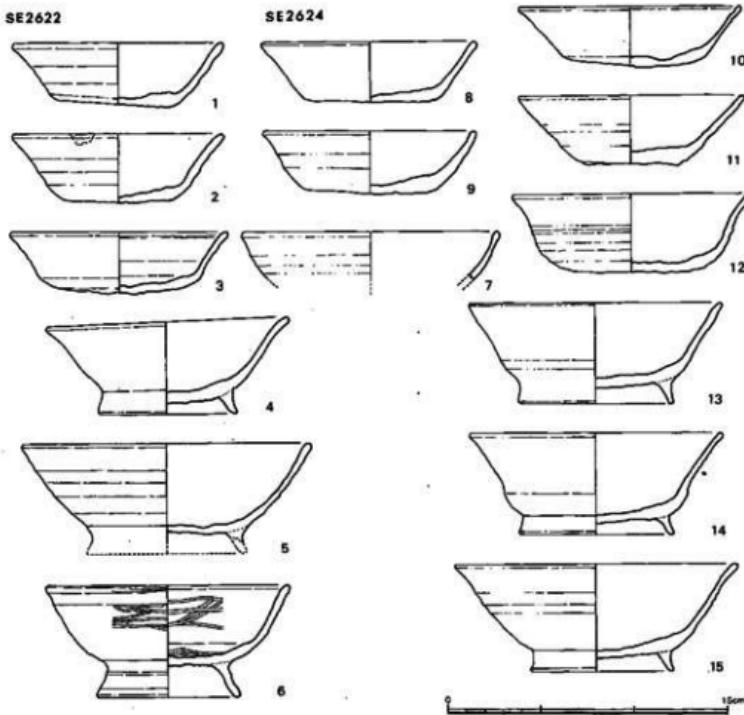
土師器

杯(1~3) 2の外底部には板状圧痕がある他はヘラ切り離しのままである。また、2の口縁部の一部には油煙が付着し、灯火器としての使用を窺うことができる。

椀(4~5) 4の体部は内彎しながら立ち上り、口縁部を外反させる。5の体部は若干内彎するも、ほとんど外方上へ延びていく。ヨコナデ・ナデ調整で他の調整はない。

黒色土器

	口径	器高	底径・高台径
1	11.4	3.2	6.2
2	11.4	3.7	5.6
3	11.8	3.3	6.7
4	13.1	5.0	7.5
5	15.6		
6	13.2	6.0	7.2
7	13.9		
8	11.4	3.2	7.5
9	11.4	3.4	7.1
10	12.0	3.2	7.7
11	12.2	3.7	5.5
12	12.8	4.2	7.7
13	13.6	5.4	8.2
14	13.6	5.5	8.0
15	15.2	5.8	7.7



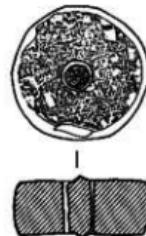
第77図 S E 2622・2624出土土器実測図

椀(6) 内面だけを焼した黒色土器A類である。若干丸味を有する体部と高さ2.0cmを測る高い高台からなる。外面中位以上と内面はヘラミガキされているが、ミガキ自体は粗い。焼成は良好で、内面の焼しは漆黒色を呈する。

縁釉陶器

椀(7) 灰白色軟質の胎土に淡黄緑色の鮮やかな釉をかけている。口縁部下1.4cm以下は回転ヘラ削り調整をしている。

紡錘車(第78図) 老司系の瓦を使用し径4.8cm×4.9cm、厚さ1.9cmの紡輪をつくる。器面の正格子を研ってほとんど消すと共に、側面も研磨し



第78図 S E 2622
出土紡錘車実測図

平滑にしている。自然木を使用した紡基の一部が紡輪の孔中に遺存している。

以上の土器は九世紀後半代の特徴を有している。

S E 2624出土土器（第77図、図版63）

土師器

杯(10~14) 3点とも異なった特徴を有している。10はS E 2622出土品と同種で、11は底径が小さく、体部は外上方へ直線的に延びる。類例は乏しく外来土器か、越州窯青磁を模した器形かもしれない。12は本来高台を有する器形であり、無高台椀とすべきかもしれない。

椀(13~15) 14は12の器形に高台を貼付けした形を有する。13・15はS E 2622と何ら変わることはない。

S E 2622と同様に九世紀後半代に埋没したといえよう。

S K 2641出土土器（第79図、図版64）

土師器

壺(1) 底面に密着して出土した唯一の土器であり。かつ完形品である。口縁部内面に浅い凹線を巡らし、球形の胴部と丸底の底部を有する。体部中位以下は手持ヘラ削りを行う。細砂粒を含むが、よく精選された胎土を用い、淡茶色に焼成されている。

S K 2642出土土器（第79図、図版64）

土師器

杯(2~4) 2・3のように口径11cm前後、器高2.5cm前後と、4のように口径12cm、器高3cmの兩タイプがある。底部はヘラ切り離しのままで、板状圧痕などはない。

椀(5~10) 杯と同様に2タイプある。杯2・3とセットになるのは口縁部を外反させる7や14、4とセットになるのは他の椀類である。しかし、体部下位が内壁する特徴は全てにみられ、それ程時期差は認められない。5の内面には炭化物が付着、9の内底には螺旋状の沈線、10の体部下位には4本の沈線が認められる。

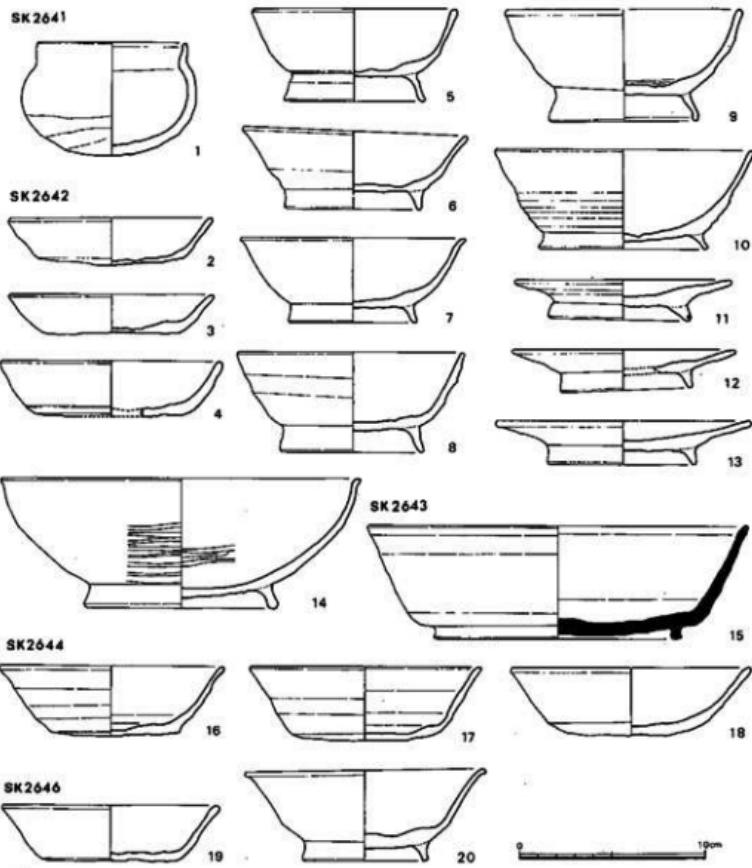
高台付皿(11~13) 口径12cm前後の11・12と口径14cm弱の13との2種が出土したが、時期的な差を指摘し難いが、13の方が古期に属することは十分首肯できるであろう。

黒色土器

椀(14) 口径19.4cmを測る大型の椀で、内外面を黒色に焼したB類に属する。器面全体の磨

SK 2641~2646

	口 径	器 高	底径・高台径
1	8.5	6.1	
2	10.9	2.6	7.8
3	11.1	2.2	7.1
4	12.0	3.0	8.2
5	11.1	5.0	7.1
6	12.1	4.2	7.3
7	12.1	4.5	6.9
8	12.2	5.4	7.7
9	12.8	6.1	8.0
10	13.9	5.4	9.1
11	11.7	2.1	7.2
12	12.1	2.2	7.1
13	13.8	2.4	8.0
14	19.4	7.0	10.5
15	20.4	6.0	13.4
16	12.0	3.8	7.4
17	12.4	4.0	7.8
18	12.6	3.7	6.7
19	11.7	3.0	7.4
20	13.0	4.9	6.8



第79図 S K2641・2642・2643・2644・2646出土土器実測図

滅が著しいためヘラミガキの詳細は不明瞭であり、かろうじて体部下位にヨコ方向のミガキの一部を観察できるに過ぎない。胎土中少量砂粒を含むが比較的精選された胎土を用い、内外ともに真黒色に焼成されている。

S K 2643出土土器（第79図、図版64）

須恵器

杯(15) 口径20.4cmを測る大形の杯である。外底部はヘラ切り後ナデ仕上げされている。

S K 2644出土土器（第79図）

土師器

杯(16~18) 体部と底部との境が明瞭な16と不明瞭な17・18がある。16は九世紀初頭頃の特徴を残すが、17・18は九世紀中頃に考えられる。

S K 2646出土土器（第79図、図版64）

土師器

杯(19) 口径11.7cm、器高3.0cmを測り、底部はヘラ切り離しのままである。

椀(20) 口縁部を水平近くに折り曲げ端部を丸く仕上げている。

S K 2649出土土器（第80図、図版65）

S K 2649

須恵器

皿(1) 口径8.0cmの小皿で、底部はヘラ切り離しのままである。灯火器として使用されたのだろう、内面に油煙の痕が付着している。

杯(2~6) 体部と底部の境は6を除いて明瞭である。外底部はヘラ切り後部分的にナデする2・4を除いて、全て未調整である。3の内面には煤が付着していることから灯火器として使用されたことが窺える。

土師器

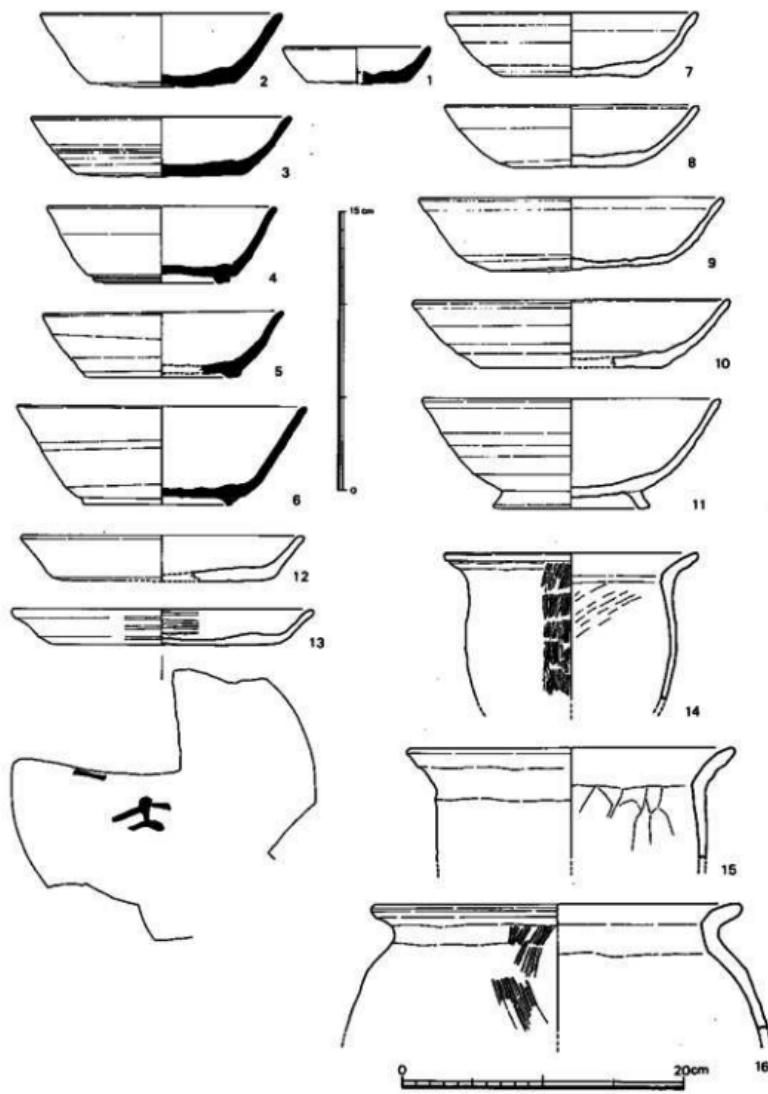
杯(7~10) 8・9は底部切り離し後体部下位から底部にかけて回転ヘラ削り調整、10は底部をナデ仕上げ、7は体部と底部との境を1条回転ヘラ削り調整をしている。

椀(11) 断面長方形の高台と若干内湾する体部とからなり、一見黒色土器の器形を想起させる。体部下位から外底部にかけて回転ヘラ削り調整を行う。

皿(12・13) 12は外底部だけを回転ヘラ削り調整、13は体部下位から外底部にかけて回転ヘラ削り調整をし、さらに体部内外および内底部をヘラミガキしている。13の外底部には「土」銘の墨書きがあり、左上に字の一画が見られるが大部分が欠失しているため判読できない。

甕(14~16) 14・15は口縁部を外上方へ均一につくるが、16は一端屈曲し、しかも肥厚する。

	口 径	器 高	底径・高台径
1	8.0	2.0	5.5
2	13.0	4.0	8.0
3	14.0	3.2	9.0
4	12.4	4.1	7.4
5	13.0	3.5	8.3
6	15.6	5.4	8.0
7	13.6	3.5	7.2
8	13.6	3.4	6.6
9	16.5	3.7	9.5
10	17.0	3.7	9.1
11	16.0	6.0	8.4
12	15.3	2.4	11.9
13	16.2	1.9	11.9



第80図 SK 2649出土土器実測図

16は八世紀前半代と考えられ、14・15が他の土器群に伴うと考えられる。

S K 2649出土品は八世紀中頃から後半頃に位置付けられる良好な資料といえよう。

S K 2652出土土器・陶磁器（第81図、図版65）

須恵器

杯(1～3) 1の外底はヘラ切り後ナデ調整し他はヘラ切り離しのままである。3はこの種の土器としては体部が大きく開くなど新しい様相を示している。2の外底に「居」銘の墨書きがあるが意味は明らかでない。

壺(4) 球形に近い体部に口頸部を接合する二段構成の壺である。体部最大径(15.2cm)の位置を求める上から2:3の割り合いになる。この最大径の位置から回転ヘラ削り調整が始まるが、外底部まではおよばない。また、この回転ヘラ削りは乾燥が進んだ段階で行われたためかヘラミガキ状を呈している。胎土中砂粒を少量含むが、比較的精良である。焼成は堅緻で灰色を呈する。

土師器

杯(5) 体部中位から底部全体まで回転ヘラ削り調整をしている。内面は平滑に仕上げていることからヘラミガキしていると思われるが、ミガキの単位などは明らかでない。内面に炭化物、外面に煤が付着している。二次的に鍋として使用したのであろう。

皿(6) 体部下位から底部全体に丁寧な回転ヘラ削り調整を行い、体部内外面と内底部をヘラミガキしている。しかし、内底部は磨滅のためヘラミガキは不明瞭である。

壺(7) 口径26.4cmを測る。体部に比して口縁部の器肉は厚く、また外上方へ直線的に延びる。外面は刷毛目、内面は斜上方へ削る。

綠釉陶器

皿(8) 体部下位の残片で、内底部との境に段を有する。体部側面に毛彫による花文を描いている。灰色の胎に黄緑色の釉がかかる。高台付皿の残片か。

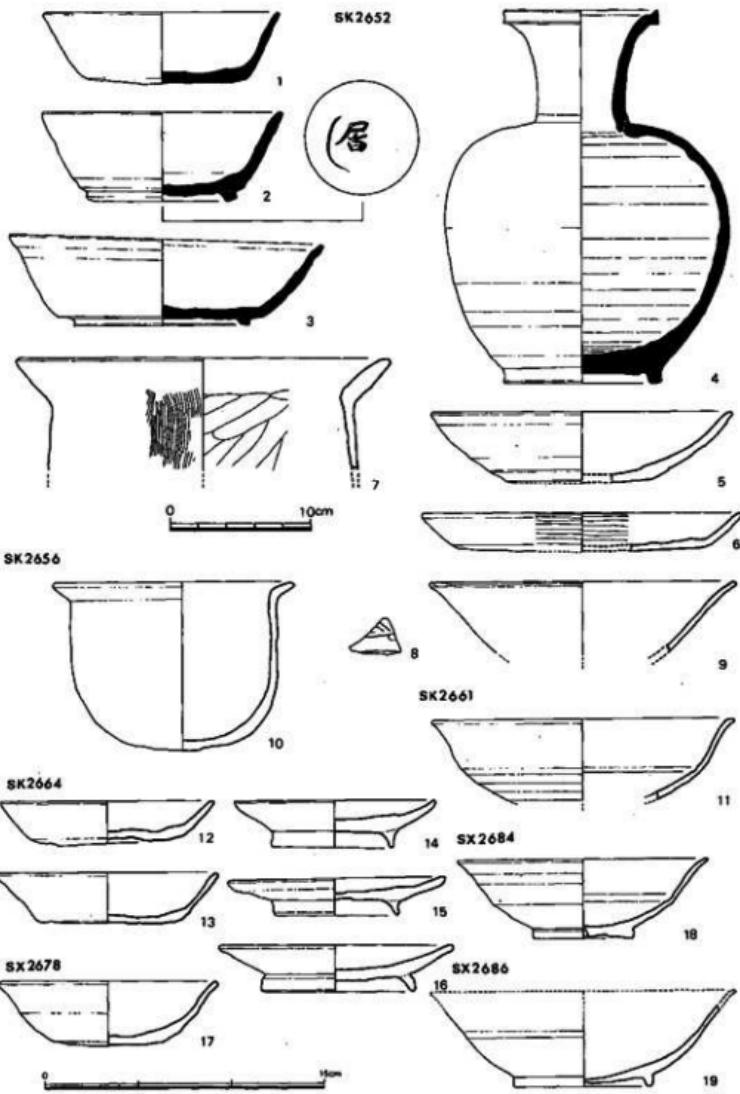
白磁

碗(9) 淡灰白色の胎土に、貫入を伴う黄色味をおびた白色の釉をかけている。口縁部に輪花の刻みが1個残っているが、総数は小片のため不明である。

青磁

香炉(図版65-A) 口径12.8cmを測り天井部に透文様がある。灰白色の緻密な胎土に淡黄緑

	口径	器高	底径・高台径
1	12.2	3.9	8.6
2	13.0	4.9	8.1
3	17.0	4.7	9.9
4	8.2	20.1	8.5
5	16.2	3.8	7.8
6	17.2	2.1	13.2
9	16.5		
10	13.0	9.1	
11	16.2		
12	11.3	2.3	8.2
13	11.9	2.8	7.9
14	10.9	2.5	6.6
15	11.9	2.0	6.7
16	12.6	2.5	8.3
17	11.8	3.5	6.0
18	13.5	4.3	5.4
19	(16.5)	(5.2)	7.5



第81図 SK2652・2656・2661・2664、SX2678・2684・2686出土土器・陶磁器実測図

色の釉が身受け部を除いて全面にかけられている。器壁もうすく作りのよいものである。

S K2656出土土器（第81図、図版66）

土師器

甕(10) 体部中位以下には指頭痕が多く残っているが、上位はヨコナデにより消している。外面には煤、内面下位には白色化した付着物が残っている。

S K2661出土土器（第81図）

綠釉陶器

椀(11) 体部中位で屈曲、内面屈曲部に1条の沈線を這らし、口縁部を外反させる。外面屈曲部以下は回転ヘラ削り調整である。焼成は堅緻で灰色を呈し、黄緑色の釉がうすくかけられている。

S K2664出土土器（第81図、図版66）

土師器

杯(12・13) 両者とも外底部に板状圧痕がある。

高台付皿(14~16) 14は口縁部を若干内彫させるが、15・16は体部と共に外上方へ引き出している。15の外底には板状圧痕がある。

S X2678出土土器（第81図、図版66）

土師器

杯(17) S B2655を切るピットから出土した。特徴や法量から九世紀後半代に求めることができる。

S X2684出土土器（第81図、図版66）

綠釉陶器

椀(18) 蛇ノ目高台を有し、体部中位で大きく屈曲する。体部外面屈曲部以下は回転ヘラ削り調整をしている。内外面の釉は全くといってよい程剥落し、淡黄茶色の素地が露出している。小ピット出土。

S X2686出土土器（第81図）

綠釉陶器

椀(19) 残片は小さく、図示した法量はあまり正確でない。土師質の焼成で赤茶色を呈する。緑色の釉は全面施釉されているが、剥落部分が多い。

S X2670出土土器（第82図、図版66）

土師器

蓋(1) 口径19.4cm、器高3.5cmを測り、幅3.5cm、高さ1.3cmの大きな撥を有する。外天井部は丁寧な回転ヘラ削り、内外面は密なヘラミガキをしている。胎土中の砂粒は少なく、また焼成は良好で赤茶色を呈する。遺構面上に露出していたため、遺存状態は良好とは言えない。

椀(2) 口径17.6cm、器高5.8cm、底径11.4cmで、器肉は厚く0.7cm～0.9cmを測る。口縁部下1cm程から回転ヘラ削りが始まり、外底部全体におよぶ。体部内外面および内底面はヨコ方向のヘラミガキをするが、内面の方が丁寧で、密に行っている。胎土は精良でほとんど砂粒を含まず、赤茶色を呈する。

地鏡具とすれば、発掘調査域検出遺構なかの古期に伴うと考えられる。

S X2690出土土器（第83図、図版67・68）

発掘区西南隅で多量に出土した土器群であるが、明確な遺構は把握できなかったので、不明遺構出土資料として報告する。

須器器

皿(1) 外底部はヘラ切り後若干ナデ仕上げしている。また、内底のナデに対応する位置に細い板状圧痕がみられる。

土篩器

杯(2～7) 2は体部下半から外底部を回転ヘラ削りし、さらに体部中位以下をヘラミガキしている。3～7のうち5は外底部を回転ヘラ削り調整をするが、他はヘラ切り離しのままである。

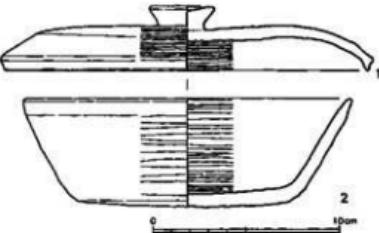
皿(8～12) 8のように口径に比して底径が極端に小さい例と4～12の例とが出土し、後者が圧倒的に多い。9の外底には板状圧痕がある。

高台付皿(13) 1.5cmの高い高台を有し、外上方へ大きく延びるため比較的深い皿部となるもので、体部下半に5条の沈線が巡る。

椀(14～15) 14は外観させながら立ち上がる特異な体部を有し、しかも、口縁部下内面に1条の沈線を巡らしている。外底部に板状圧痕あり。15は体部を外上方へ直線的に引き上げているが、体部と内底の境は不明瞭となっている。

黒色土器

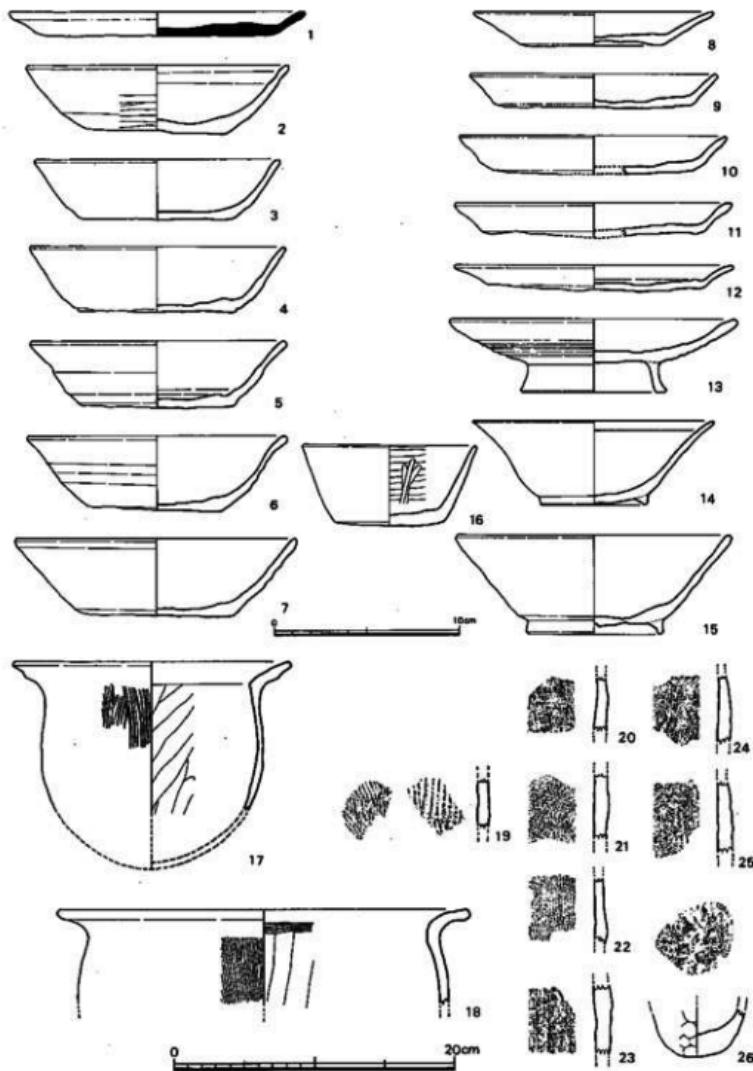
杯(16) 内面だけをヘラミガキし、黒色に焼した黒色土器A類である。外底部は回転ヘラ削り調整をしている。大宰府ではこの種の形態の黒色土器の出土は初めてである。また、形態上



第82図 S X2670出土土器実測図

S X2690

	口径	器高	底径・高台径
1	16.0	1.3	11.9
2	14.1	3.6	7.0
3	13.2	3.2	8.9
4	13.8	3.5	8.5
5	13.8	3.6	8.2
6	13.9	4.0	7.2
7	15.1	4.1	8.2
8	12.8	2.0	7.6
9	13.3	1.8	10.6
10	14.4	2.1	10.7
11	14.9	1.9	12.0
12	15.0	1.3	11.9
13	15.5	4.0	7.8
14	13.0	4.6	5.8
15	14.9	5.4	7.4
16	9.4	4.4	6.0



第83圖 SX2690出土土器實測圖

からも八世紀後半代として誤りないと考えられるので、黒色土器としては最古期に位置付けられる。

甕(17~19) 17は口径19.8cmを測り、胴部はあまり膨まない。内面は斜上方へヘラ削り、外側は刷毛目調整をしている。外面には煤が厚く付着している。18は口径29.2cmを測り、口縁部を外彎させる古い特徴を残している。内面のヘラ削り調整の上端を横刷毛目によって調整している。18は玄界灘式土器と呼称されている製壺土器の胸部小片である。外面の叩打具の刻目は木目と直交する。

壺(20~26) 内面に布目、外面に指頭圧痕を多く残す、いわゆる「型造り」による円筒形の壺である。23・24の胎土中に金雲母を少量含む。

暗褐色土層出土土器・陶磁器 (第84~86、図版69~71)

須恵器

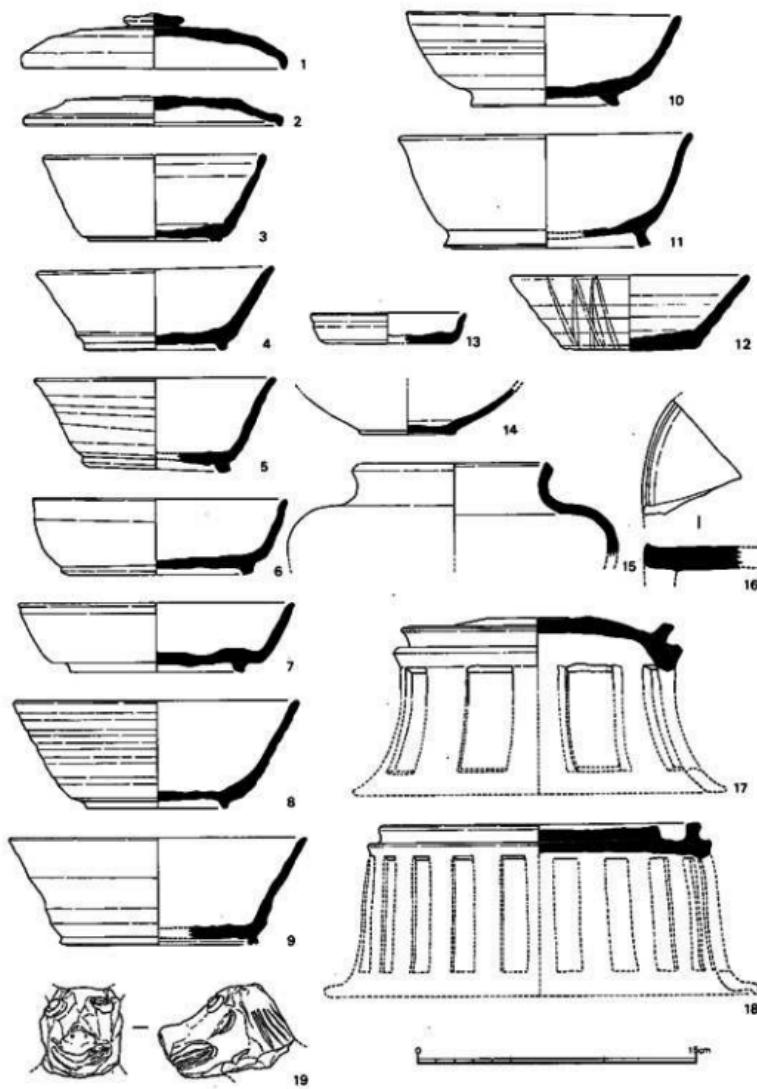
蓋(1・2) 1は3.2cmの幅広の撥を有し、天井部を回転ヘラ削り調整するが、2は撥はなく、また天井部はヘラ切り離しのままである。

杯(3~12) 高台付では10・11と6および3~5・7~9の3つのタイプにわけられる。10・11は高台を外方へ、体部の丸味は顕著である。また10は体部下位を回転ヘラ削り調整をしている。6は体部の丸味が10・11に比してそれほどではなく、SD2340からもっとも多く出土するタイプに属する。3~5・7~9は高台が脆弱な4・8や体部と内底部の境が明瞭な3・5・8・9などを含み、八世紀中頃以降の特徴がみられる。12は平底で体部を上方へ直線的につくる通例の杯である。底部から体部にかけて火漆の跡が顕著である。

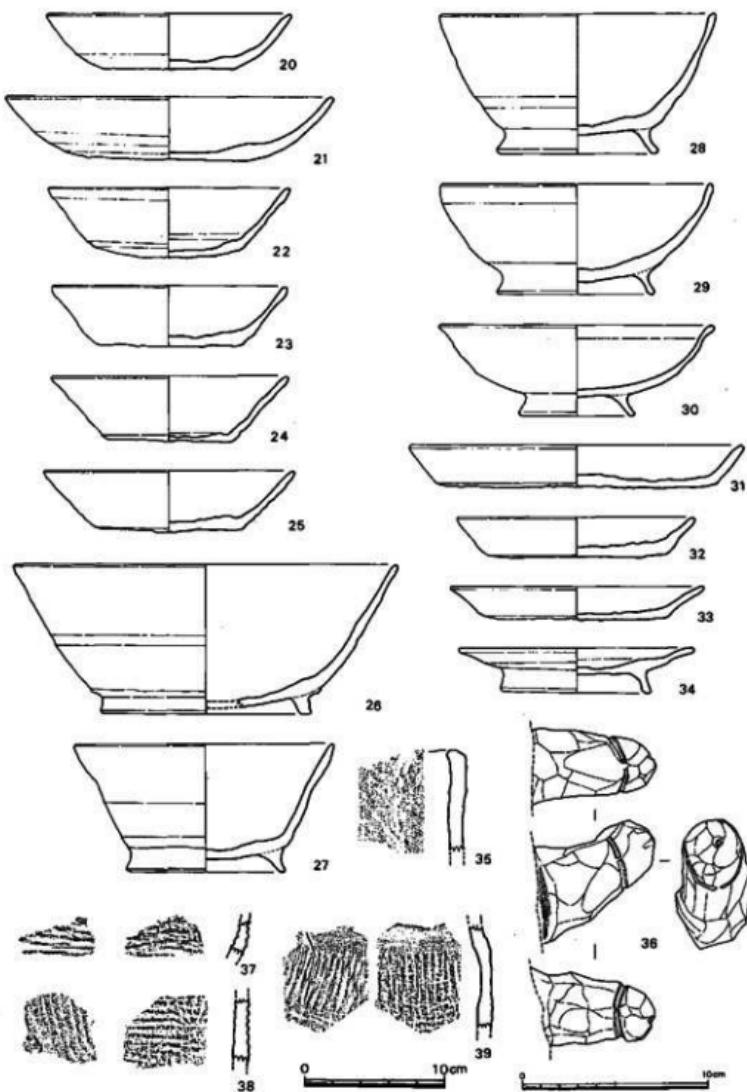
皿(13) 口径8.3cmの小形の皿で、外底部を回転ヘラ削り調整している。

椀(14) 径5.2cmを測り、若干段をなす底部は糸切り離しのままである。胎土は精良でほとんど砂粒を含まず、焼成は堅緻で淡灰色を呈する。在地

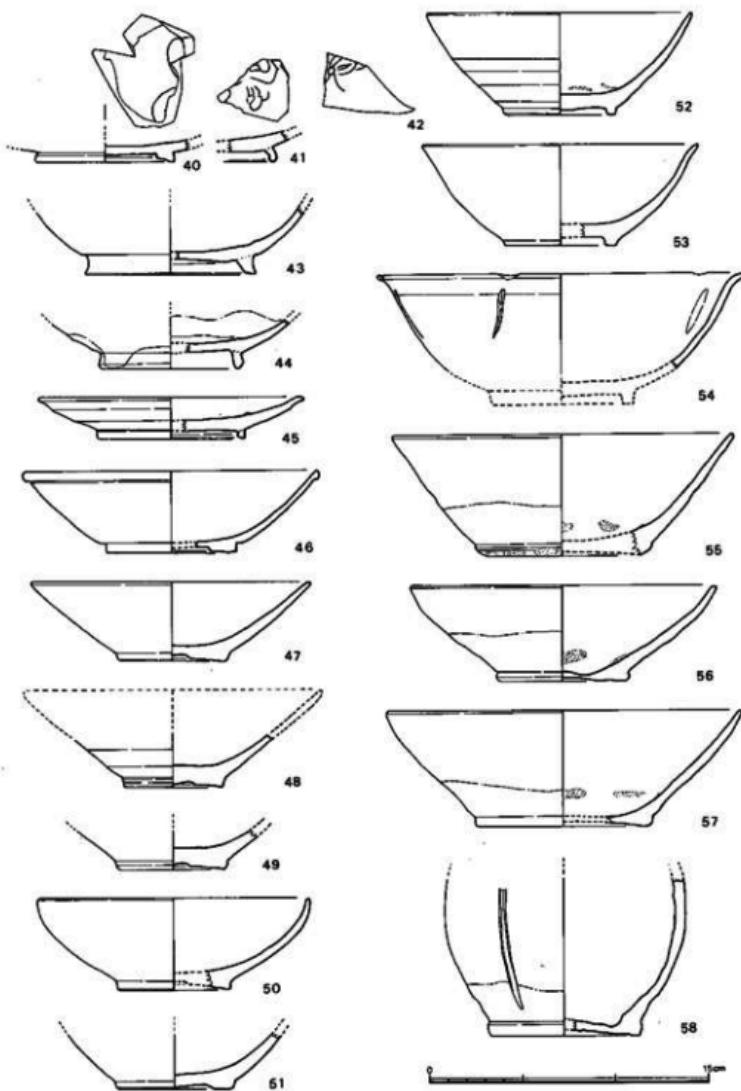
	口 径	器 高	底径・高台径
1	14.1	3.0	
2	14.0	1.6	
3	12.5	4.6	7.2
4	12.8	4.4	7.1
5	13.0	5.0	8.0
6	13.7	4.1	10.3
7	14.9	3.7	9.4
8	15.4	5.8	7.6
9	16.0	5.8	10.7
10	14.8	5.0	8.0
11	15.8	6.1	11.1
12	12.8	4.0	9.0
13	8.3	1.7	6.8
15	10.2		
20	13.3	3.0	7.1
21	17.7	3.4	8.6
22	12.6	3.9	7.9
23	12.8	3.3	8.0
24	12.8	3.5	6.7
25	13.5	3.4	7.8
26	20.8	8.1	11.3
27	14.1	6.9	8.8
28	14.9	7.6	8.2
29	13.7	5.6	8.4
30	14.8	5.0	6.2
31	18.0	2.2	15.1
32	12.8	2.2	10.1
33	13.7	1.8	10.0
34	12.7	2.4	8.1
45	14.3	2.3	7.9
46	16.0	4.4	7.0
47	15.0	4.2	5.9
50	14.2	5.0	6.1
52	14.3	5.6	6.0
53	14.9	5.5	6.0
55	18.4	6.6	9.5
56	16.5	5.2	7.2
57	19.1	6.3	9.5



第84図 暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)



第85図 嗜褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)



第86図 噴褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)

にはみられない土器であり、搬入されたものと思われる。

壺(15) 口縁端部を斜めに仕上げ、一見三角形口縁にみえる壺である。小片からの復原のため法量などについては正確さを欠く。類例の乏しい資料である。

硯(16~18) 16は風字硯の残片である。縁部は0.2cmと低い。裏面には突帯状の剥離痕があり、ここが脚となる。十分に使用されたためであろう、硯部は平滑である。17・18は透しを有する円面硯である。17は硯部と脚部を同時に造り、内外堤を貼付けし、台形状の透しを入れる。18は17と基本的には同じような造り方をするが、硯部底部は円盤を貼付けし、その周囲を海部としている。

獸形陶製品(19) 横からみた姿は犬を思わせるが、正面からみた鼻の形状や牙の表現などから猪とも考えられる。耳の上位は欠失している。全体の調整はナデによるが、口や耳それに体毛などはヘラ状工具を用いて成形している。顔面の一部に赤色顔料がみられる。胎土は精良で砂粒は少ない。焼成は良好で、淡灰色を呈する。

土器

杯(20~25) 体部下位から底部全体を回転ヘラ削りする20・21と調整をしない22~25がある。前者は胎土も精選され砂粒をほとんど含まない。23の外底部には板状圧痕を伴う。

椀(26~30) 体部は外上方へ直線的に延び、体部中位から底部にかけて回転ヘラ削り調整をする26、同じく体部を直線的につくるが、高台はやや弱々しくなり、調整をしない27・28、体部が丸味を有する29、それに内部にミガキが認められる30がある。それぞれは時期を異にする。

皿(31~33) 大形の31と小形の32・33がある。33は板状圧痕を伴う。31は八世紀、32・33は九世紀代に位置付けられよう。

高台付皿(34) 口径12.7cm比較的大きな口径を有する。外底部には板状圧痕がある

塙壺(35) 内面に細い布目を有し、外面に指頭痕がある円筒形の塙壺である。細砂粒を多く含み焼成は良好で赤茶色を呈する。

甕(36~39) 36は把手を陽物形に仕上げたもので、亀頭や尿道口など実にリアルに表現している。全体を指成形、ナデ調整し、ヘラ状工具によって形を造り出している。この種の陽物形把手は学校院跡（第38次調査）出土例に次いで2例目である。37~39は玄界灘式土器として命名されている製塙土器である。いずれも大形品と考えられるが小片のため復原は困難である。外面の平行叩き目は木目に直交する。38は少量金鑄母を含む。

縁釉陶器

椀(40~43) 40は小蛇ノ目高台、41は半月状の高台を有し、42は体部片である。いずれも灰白色の精選された胎土を用い、淡黄緑色の釉がうすくかけられている。43は暗灰色硬質に焼成され、濃緑色の釉が全面にかけられている。外底部見込み部分には糸切り痕が未調整のまま残っている。

灰釉陶器

梶(44) 外底部を回転ヘラ削り調整をする他はヨコナデである。淡黄緑色の釉は体部外面下位まで、内面は重ね焼きする部分を環状に露胎としている。内面には重ね焼きの目跡が残存している。灰色に焼成された胎土は精良である。

皿(45) 内面だけに緑色のナマコ釉がかけられている。体部外面中位以下は回転ヘラ削り調整をしている。内面には重ね焼きの目跡が残っている。胎土は精良で淡灰色を呈する。

白磁

梶(46) 小さな玉縁口縁は折り曲げてつくっている。高台疊付以内は露胎、他は若干黄色味をおびた淡白色の釉がかかる。高台付近および円底部に若干貫入を伴う。胎土は精良で、白色を呈する。高台脇には焼成時か、それ以前に付着した粘土が焼き付いている。

青磁

梶(47~57) 47~51は蛇ノ目高台を有し全面施釉後高台疊付部分の釉をカキ取っている。この種の陶磁器は例外がほとんどないといってよい程重ね焼きしないが、例にもれずいずれも内部見込み部分には重ね焼きの痕跡はない。52~54は輪高台を有し、全面施釉後疊付部分の釉をカキ取っている。内面の見込み部分には白色の目跡がS2では9個、S3では7個ある。S5は体部下半を露胎とし、底部外面から内側にかけて回転ヘラ削りしている。回転ヘラ削りし、面を成す底部脇部分を重ね焼きの接点とする。内面には白色の目跡が残る。S5・S6は円盤状の底部、釉下に白化粧土を有する。外底の切り離し痕（糸切り）をヘラ削りにより消し去っている。内面には重ね焼きの白色の目跡がある。

水注(58) 細貫入を伴う淡黄緑色の釉を体部下位付近までかけている。体部を工具により押え、瓜臘状にしている。外底部には焼台上の粘土が薄く付着し、淡黄灰色となっている。

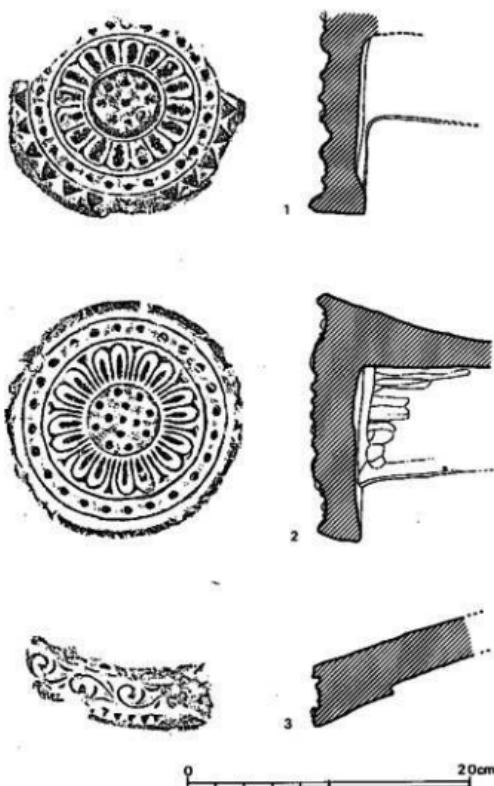
瓦類（第87図、図版90）

今回の調査で出土した瓦類は丸・平瓦の他軒丸瓦25点、軒平瓦28点および無文磚、文字瓦である。これらは主に造構面直上を覆う暗褐色土層から出土した。出土した軒先瓦の内訳については巻末の一覧表に示すとおりである。第87図はS B2660、S E2621から出土した軒先瓦である。

軒丸瓦は11種類出土し、なかでも鵠臘館式が総数の28%、老司Ⅱ式が20%を占めている。第87図1はS B2660の北西隅の柱穴から出土したもので、老司式の流れをくむ。中房に1+8の蓮子を配し、弁区との間は彫りが深く圓線が巡る。弁は単弁十六弁蓮華文で、外区内縁に珠文26個、外縁は斜縁で外向凸鋸歯文が配されている。凸鋸歯文は完存する例から24個になる。瓦当と丸瓦との接合位置は珠文帯付近にあるが、内側の支持土が厚くあてがわれているのが一つの特徴である。さらに瓦当裏面下端に凸帯が認められるがこれらは現在、大宰府出土の軒丸瓦の中では老司式の流れをくむものに限られている。焼成は黒色である。

2・3は鴻臚館式で、SE 2621の井戸中から丸・平瓦片と共に出土した。2は中房に1+4+8を配する複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当と丸瓦の接合位置は弁付附近にあり、いわゆるサシコミ式による技法である。鴻臚館式の場合は瓦当と丸瓦の内面に支持土が極めて少なく、そのほとんどは丸瓦凸面の方にあってがわれており、2もそれに従っている。裏面は丁寧なナデ調整を行っている。3は左半部が欠損し明らかでないが、完存する例から左右に4回反転する均整唐草文である。外面は黒色に焼成されている。

文字瓦は総数58点出土し7型式14種類に分類できる。このうち「平井」銘瓦が圧倒的に多く、総数の約70%を占め



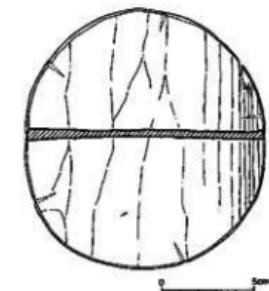
第87図 軒先瓦拓影・実測図

る。なかでも「平井瓦」と陰刻された文字瓦が29%を占めている。この他「佐瓦」、「大国」、「小イ瓦」、「八年」、「筑前瓦」銘などがあり、SE 2623の井戸中から比較的多く出土した。

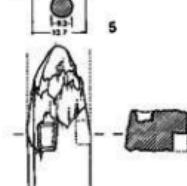
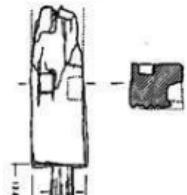
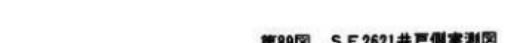
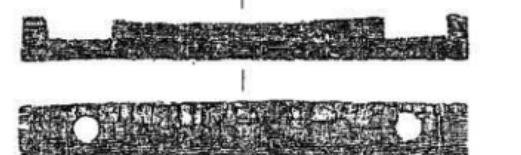
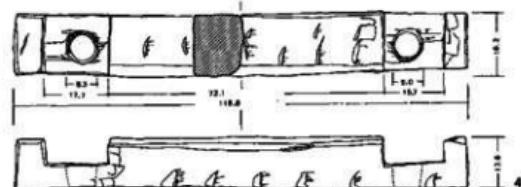
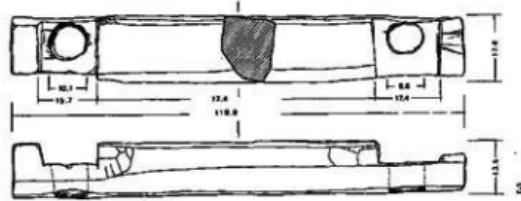
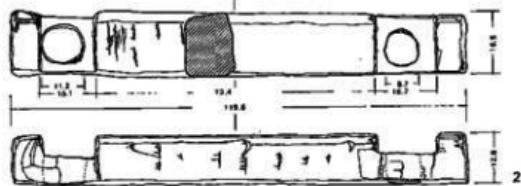
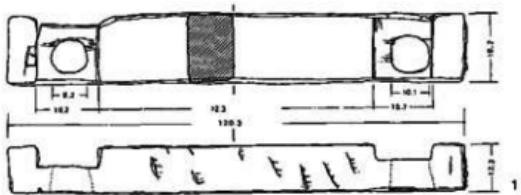
木製品（第88図、図版85）

井戸や土塼から出土した。

曲物底板 長径14cm、短径13cmでやや長円形を呈する完形の底板。両面は鋸により丁寧な削りで整え、側面はやや法をつけ



第88図 SE 2622出土木製品実測図



第89図 SE2621井戸側実測図

る。周縁側面には側板を固定するための木釘孔が、ほぼ等間隔で5ヶ所に穿たれている。いずれも木釘は残っていない。柵目材。

柵 井戸 S E2622から4点、SK2649から2点出土している。S E2622出土のものは、いずれも平面形が長方形の横柵で、肩部は角張らせている。断面は楔形で棟部を丸くする。幅は不明であるが高さは4.2cm~4.4cmで4点ともほぼ同大と思われる。歯長は3.3cm~3.4cm、歯数は3cmあたり29~36本で若干の精粗がある。SK2649出土の2点も同型式の横柵で一点は完形である。幅10.9cm、高さ4.2cm、歯長3.0cm、歯数は3cmあたり25本である。

S E2621井戸側(第89図、図版86) 方形縦板組の井戸で、井戸掘形の底部に組まれた台と隅木4本が残存していた。この井戸は八世紀代に属し、その構造を知る上で貴重な資料であった。

木製台は全長118.8cm~120.3cmで、約13cm×約17cmの角材である。仕口は角材の両端を合欠きにし、組合わせる。仕口の部分には隅柱を立てるための径8.0cm~11.2cmの枘穴をノミで穿っている。木口は鋸挽きで、側面は手斧で削っている。隅柱は4本が残っていたが、残存状態は悪く、下部のみである。12.5cm~16.2cmのはば正方形の角部材で、径6.0cm~6.7cmの断面円形の出柄がある。出柄はノミで細かく丁寧に削られており、木口には鋸挽きの痕跡がある。また出柄を除いた位置から約17.0cmの所の相対する2面に横桟を入れる3.0cm×5.5cm、深さ約10.0cmの枘穴がある。器面は腐蝕しているので、工具痕については明瞭でない。木製台の組合せ内法は72.1cm~73.4cm(約2.4尺)のはば正方形となる。

S X2679出土鉄製品

鎌(図版90-A) 先端部を若干欠失し、現存長5.8cm、身幅は1.6cmを測る平根式の鉄鎌である。S K2647の東北方に近いピットS X2679から出土した。

石製品(第90図、図版90)

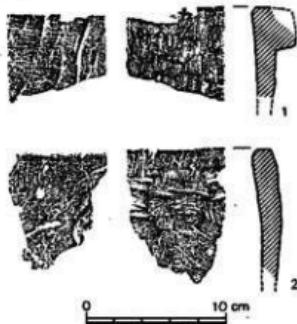
石鍋(1・2) 2点とも縦耳付の鍋である。外面は横方向、内面は縦方向に平ノミを用いて削るが、この内面は仕上げのため頗著なノミ痕は消されている。1は若干鉄分を含み淡赤灰色、2は白灰色を呈する。1は暗褐色土層、2はS E2623出土。

勾玉(B) 長さ2.8cm。方頭に近い頭部からゆるやかに内寄し、尾部は細くなる。腹部のC字形剖込みは著しい。床土出土。

小結

本次調査により当該地において数次にわたる建物の

変遷の一部が明らかになったので、このことについて述べまとめとしたい。



第90図 喰褐色土層・S E2623出土石鍋実測図

第Ⅰ期 SB2620・2625・2650・2655、SE2621、SX2670で構成される。SB2650の北側桁方向を延長するとSB2655の北架行と同一線上になり棟方向が直交することから、同時に建造されたものと思われる。SB2620とSB2625は棟方向を略一にする。この二棟をⅠ期と考えたのはSB2655の梁間とSB2620・2625の梁間が同一であり、柱頭形中にはほとんど遺物を含まず、しかも含んでも全て八世紀前半代の特徴を有するものだけであったためである。しかし、棟方向が違うため西北方に位置するSB2635を伴って、Ⅰ期のなかである時期を形成した可能性は否定できない。

第Ⅱ期 この期は建物配置によりa・bの2小期に分かれる。

第Ⅱ-a期を形成する遺構はSB2660とSB2645の建物である。SB2660の梁行の延長線よりもSB2645の東側桁行は若干西側へずれているが検出遺構中両者とももっとも大きな柱頭形を有し、棟筋が直交し、柱頭形中出土遺物も同一時期を示す。Ⅱ-b期との関係でSB2660が主屋になると考えられる。

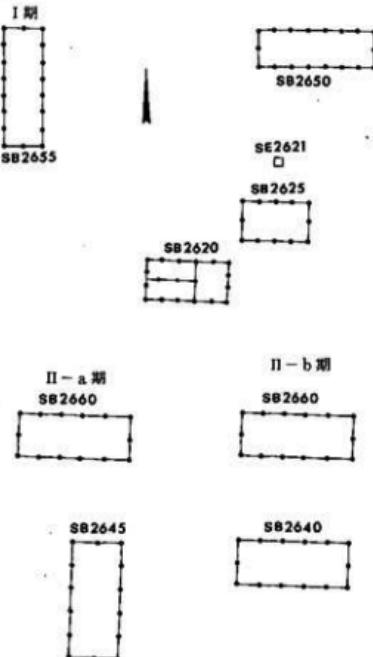
第Ⅱ-b期はSB2660とSB2640からなる。SB2645廃絶後SB2660の桁行および棟方向をあわせてつくっている。

第Ⅲ期に伴う井戸は未検出である。

第Ⅳ期 暗褐色土層除去後検出した円形の小掘形を有する建物群およびⅠ・Ⅱ期に属さない井戸からなる。柱間を問題にしなければ、5間×2間の建物に復原できるものが、SB2620と重複する位置にあり、これがこの期に相当する。

第Ⅴ期 暗褐色土層中位（暗褐色土層は2面にわかれるが、調査時に精査したが分離するのが困難であった）につくられたSB2665がこの期になる。

第Ⅰ期は八世紀中頃、第Ⅱ期は八世紀後半から九世紀初頭、第Ⅲ期は九世紀から十世紀、第Ⅳ期は十二世紀を下限とする。



第91図 第92次調査 時期別遺構配置概念図(1/800)

大宰府史跡の発掘調査については、これまで竹内理三氏を委員長とする「大宰府史跡発掘調査指導委員会」の指導のもとに進めてきたが、今年度その改組を行い名称も「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称した。その構成については下記に示したとおりである。

大宰府史跡調査研究指導委員会名簿

	氏 名	所 属	部 門
委 員 長	岡 崎 敬	九 州 大 学 教 授	考 古
副 委 員 長	平 野 邦 雄	東 京 女 子 大 学 教 授	国 史
委 員	浅 野 清	愛 知 工 業 大 学 教 授	建 築 史
	小 田 富 士 雄	北 九 州 市 立 考 古 博 物 館 長	考 古
	狩 野 久	奈 良 国 立 文 化 財 研 究 所 飛 鳥・藤 原 宮 跡 発 掘 調 査 部 長	国 史
	岸 俊 男	奈 良 県 立 櫻 原 考 古 学 研 究 所 長	国 史
	笹 山 晴 生	東 京 大 学 助 教 授	国 史
	澤 村 仁	九 州 芸 術 工 科 大 学 教 授	建 築 史
	杉 本 正 美	九 州 芸 術 工 科 大 学 教 授	造 園
	坪 井 清 足	奈 良 国 立 文 化 財 研 究 所 長	考 古
	中 村 一	京 都 大 学 教 授	造 園
	横 山 浩 一	九 州 大 学 教 授	考 古
	渡 辺 定 男	東 京 大 学 教 授	都 市 工 学

別 表

別表1

番号	軒丸瓦	14			87.90			88			92			
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	
1		9	6	SD 320 中層 黒色粘土 灰砂土 下層 砂土							5	20	SE 2622 暗茶灰色土 SX 2679 暗褐色土	
2		1	0.7	SD 320 下層 砂土							5	20	暗褐色土 表土	
3		1	0.7	SD 320										
4		12	8	SD 320 上層 砂土 粘質土 中層 黒色粘土 灰砂土 下層 灰褐色土	SD 2335(砂)	4	7	灰褐色土 茶褐色土			1	4	暗褐色土	
5		21	14	SD 320 中層 黒色粘土 灰砂土 下層 砂土	3	5	灰褐色土 茶褐色土							
6		3	2	SD 320 上層 砂土 中層 灰砂土 下層 砂土							1	4	SE 2622	
7		3	2	SD 320 中層 褐褐色土 下層 砂土							1	4	SB 2660	
8		54	36	SD 320 上層 粘質土 砂土 中層 黑色粘土 灰砂土 下層 灰褐色土 砂土	SD 2340(中層粘土) SD 2340(中層灰褐色土) SD 2340(上層茶褐色土)	10	18	1 茶褐色土	1 33.5	1 原土	7	20	SE 2621 暗褐色土 SX 2683	
9					1	1.8								
10		11	7	SD 320 上層 砂土 中層 黑色粘土 下層 砂土	SD 2340(上層茶褐色土) SD 2335(砂)	13	23	茶褐色土 灰褐色土 茶褐色土 茶褐色土 原土			1	4	SD 2350-B	
11		3	2	SD 320 中層 灰砂土 茶褐色土										
12		2	1.3	SD 320 中層 黑色粘土										
13		1	0.7	SD 320 中層 黄砂土									SD 2350-B	
14										SD 2382		1	4	SD 2350-B

別表2

番号	軒丸瓦	14		87.90		88		92		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
15		1	0.7	SD 320 上層 粘質土	3	5	灰褐色土 茶褐色土			
16		2	1.3	SD 320 上層 砂土 中層 荒砂土						
17		4	2.7	SD 320 中層 黒色粘土 荒砂土 暗茶色土 茶褐色土	7	12.5	暗褐色土 茶褐色土			
18					1	1.8	茶褐色土			
19		2	1.3	SD 320 中層 荒砂土	1	1.8	灰褐色土			
20		1	0.7	SD 320 上層 砂土						
21					1	1.8	灰褐色土	1	4	SK 2651
22		1	0.7	SD 320	1	1.8	暗褐色土			
23					1	1.8	灰褐色土			
24					1	1.8	灰褐色土			
25		1	0.7	SD 320 中層 荒砂土						
26					1	1.8	灰褐色土			
27										
	不 明	16	11		1	1.8		1	35.3	
	合 計	149	99.5		56	99.2		3	99.9	
								24	100	

別表3

番号	軒平瓦	14			87.90			88			92		
		点数	%	出土構構・層位	点数	%	出土構構・層位	点数	%	出土構構・層位	点数	%	出土構構・層位
1		41	26	SD 320 上層 砂土 中層 黑色粘土 下層 貝殻土 黃砂土 灰褐色土	10	12.2	SD 2340(茶褐色粉) SD 2340(黑色粘土) SD 2340(貝殻質土) SD 2340(中層灰白色粘土) SD 2340(上層茶褐色土) SD 2340(中層茶褐色土) SK 2522 SX 2523 SB 2355 SX 2337 SX 2529	3	27	SX 2616 東土	7	25	SX 2678 SX 2683 暗褐色土 灰土
2		1	0.6	SD 320 下層 砂土			SD 2335 茶褐色土						
3		1	0.6										
4		74	4.6	SD 320 上層 砂土 中層 黑色粘土 下層 砂土 貝殻土 黃砂土 灰褐色土	43	32.4	SD 2340(上層) SD 2340(貝殻質土) SD 2340(茶褐色土) SD 2340(中層灰白色粘土) SD 2340(上層茶褐色土) SD 2340(中層茶褐色土) SK 2522 SX 2523 SB 2355 SX 2337 SX 2529	3	27	SE 2554 黑褐色土	9	32	SE 2621 SE 2622 SK 2652(上層) 暗褐色土 暗灰色土 灰土
5		14	9	SD 320 上層 砂土 中層 黑色粘土 下層 砂土	2	2.4	SD 2340(中層灰白色粘土) SD 2340(上層茶褐色土) SD 2340(中層茶褐色土) SK 2522 SX 2523 SB 2355 SX 2337 SX 2529				2	7	
6		1	0.6	SD 320 中層 黑色粘土			SD 2340			SE 2554			暗褐色土
7		10	6	SD 320 上層 砂土 中層 黑色粘土 下層 砂土 灰土	20	24	SD 2335 SK 2522 茶褐色土 茶褐色土 茶褐色土 茶褐色土(下層)	1	9.1	SE 2554	3	11	SD 2350 暗褐色土
8		1	0.6	SD 320 中層 黑色粘土							3	11	SE 266 暗茶灰色土 暗褐色土
9		1	0.6	SD 320 下層 砂土									
10		2	1.2	SD 320 上層 砂土 中層 黑砂土									
11					5	6.1	SE 2510 灰褐色土 茶褐色土	2	18.2	SK 2603 SX 2612			
12								1	9.1	茶褐色土			
13		2	1.2	SD 320 中層 黑砂土									SE 2623
14											1	3	
15		4	2.5	SD 320 上層 黑色粘土 中層 黑色粘土 貝殻土									
16							SX 2529						
	不 明	8	5										
	合 计	160	99.9				82 99.5			11 99.5		28 100	

図 版



(上)第14次調査区全景(南から)
(下)柵 S A 2505(南から)



図版 2



井戸 S E 2502(北から)



井戸 2503(南から)



井戸 S E 2504(東から)



瓦組遺構 S X 2501(北から)



同上



第87次調査区全景(東から)



第87次調査区全景(西から)



第90次調査区全景(南から)



第90次調査区全景(東から)

図版 6



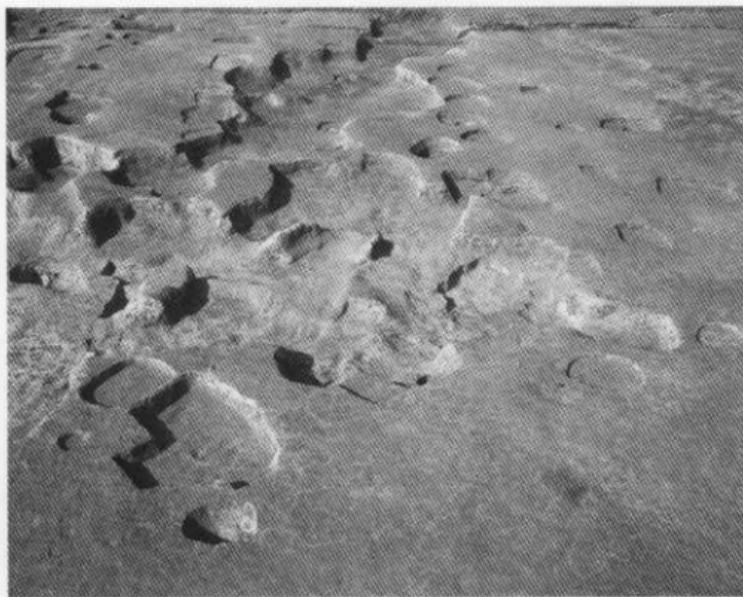
掘立柱建物 S B2355(東から)



掘立柱建物 S B2515(北から)



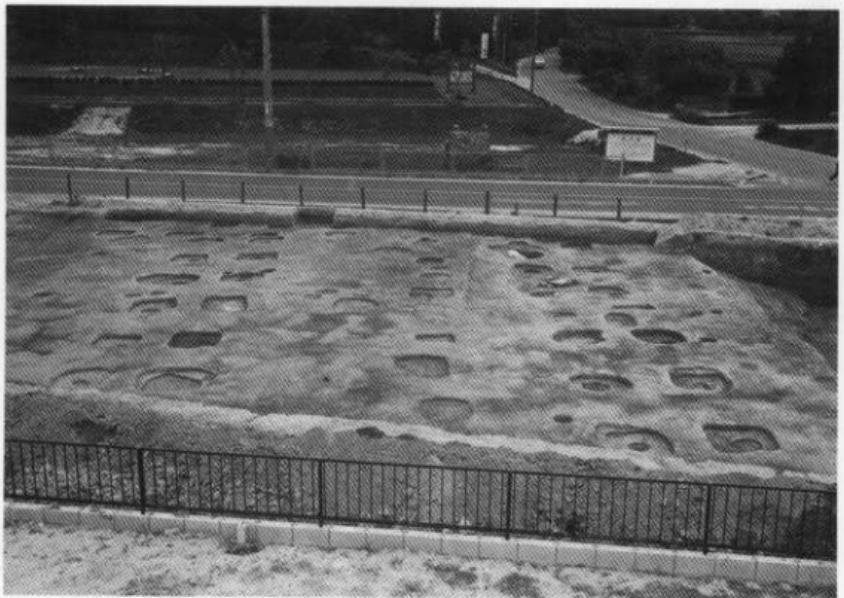
掘立柱建物2520・柵 S A 2522(北から)



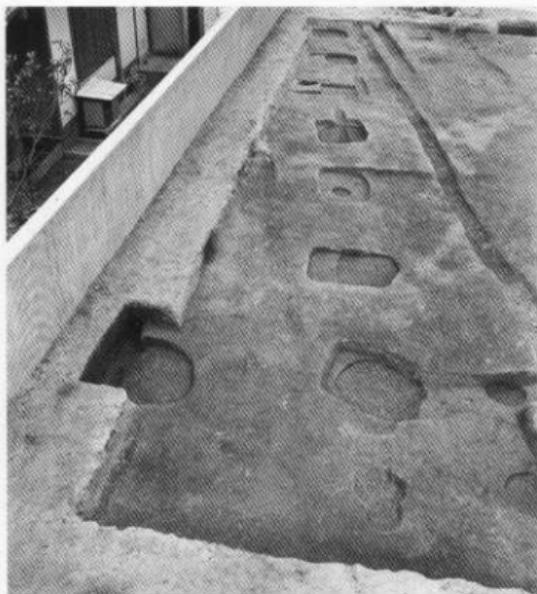
同上(東から)



掘立柱建物 S B 2525・2530南妻(南から)

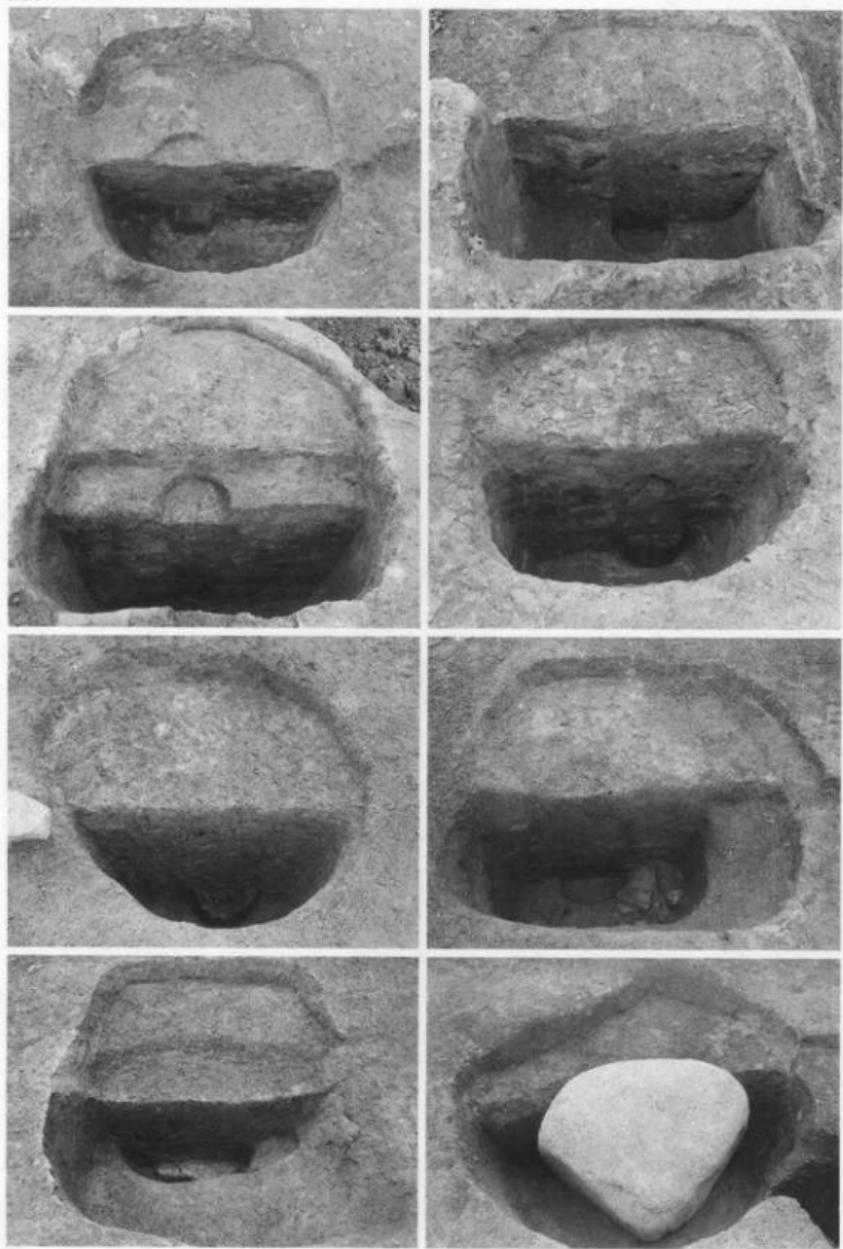


掘立柱建物 S B 2525・2530(南から)

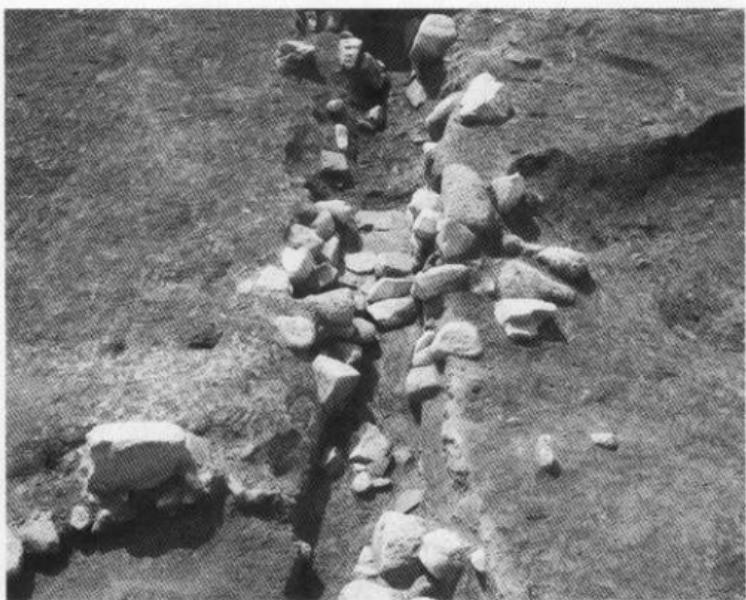


(上) 挖立柱建物 S-B 2535(南から)
(下) 挖立柱建物 S-B 2540(南から)





掘立柱建物 S B 2355・2525・2530・2535柱掘形

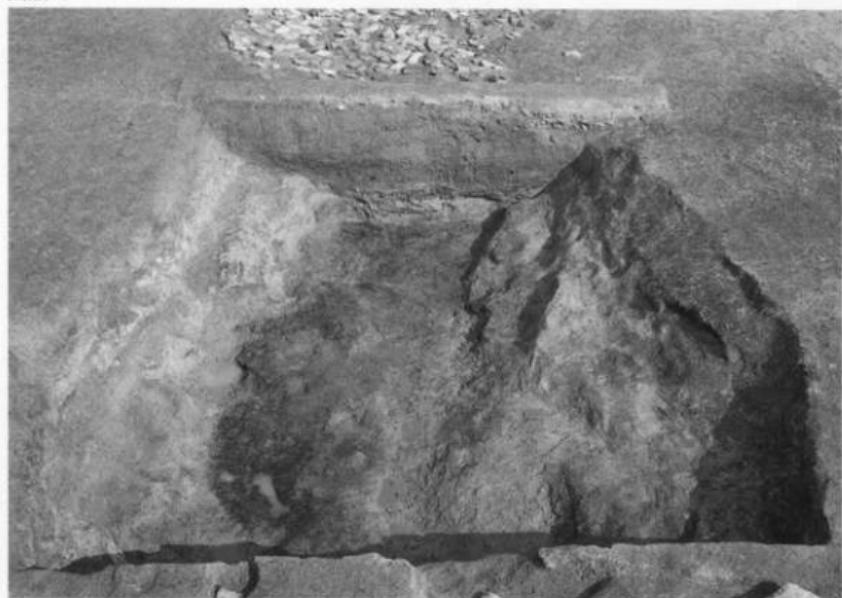


溝 S D 2335(北から)



溝 S D 2335・瓦敷 S X 2523(北から)

図版12



第87次調査 溝S D2340(南から)



第87次調査 溝S D2340土層(南から)



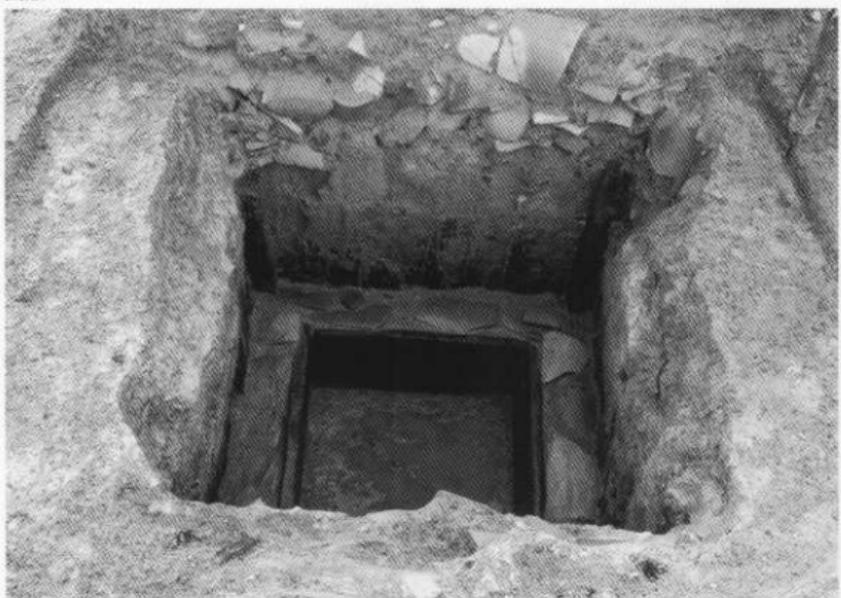
(上)第90次調査

溝S D 2340(南から)

(下)第90次調査

溝S D 2340土層(南から)

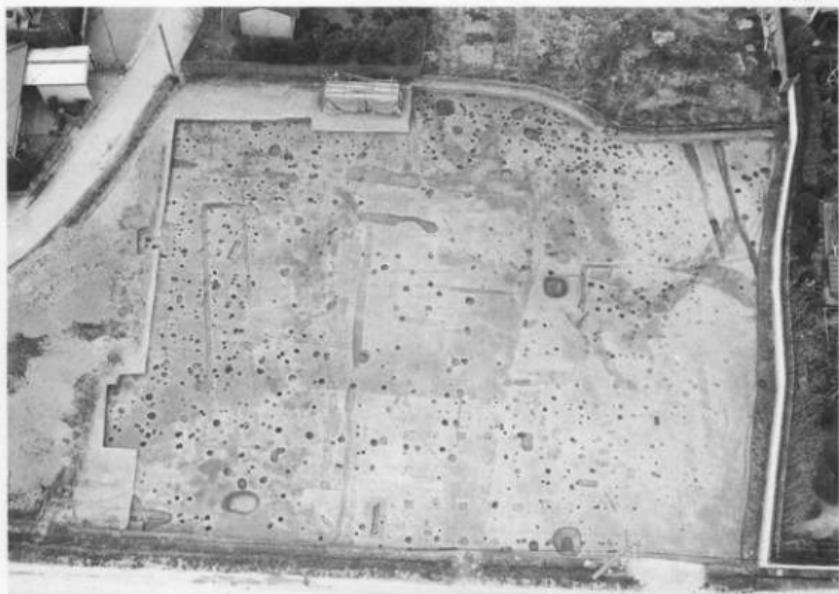




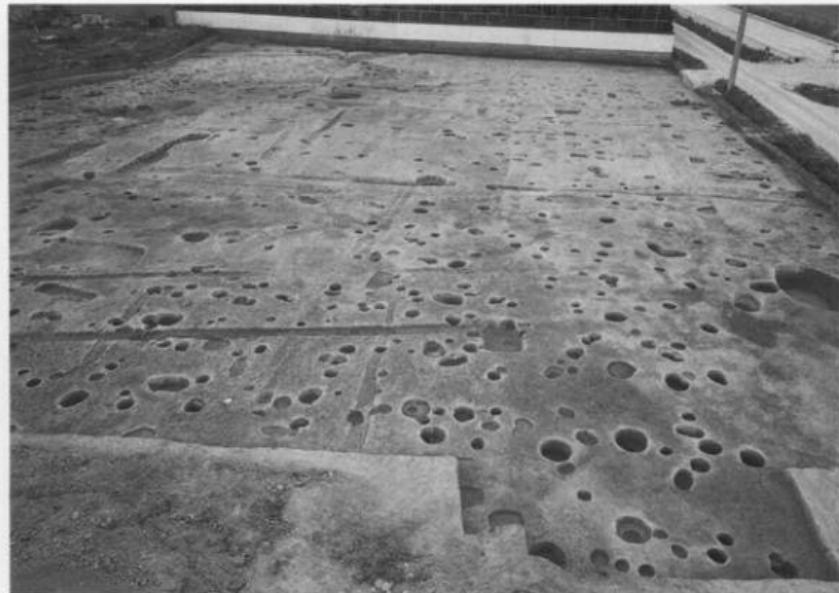
井戸 S E 2510(東から)



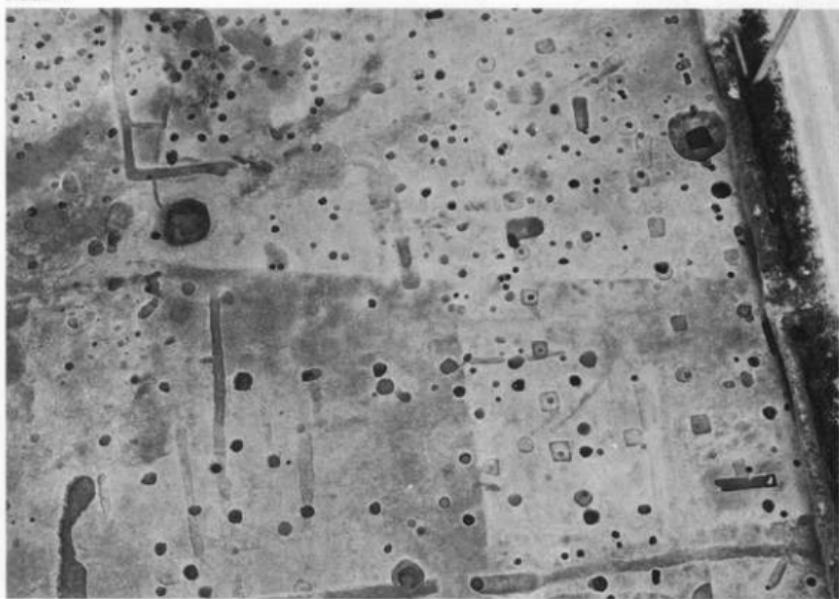
同上(東から)



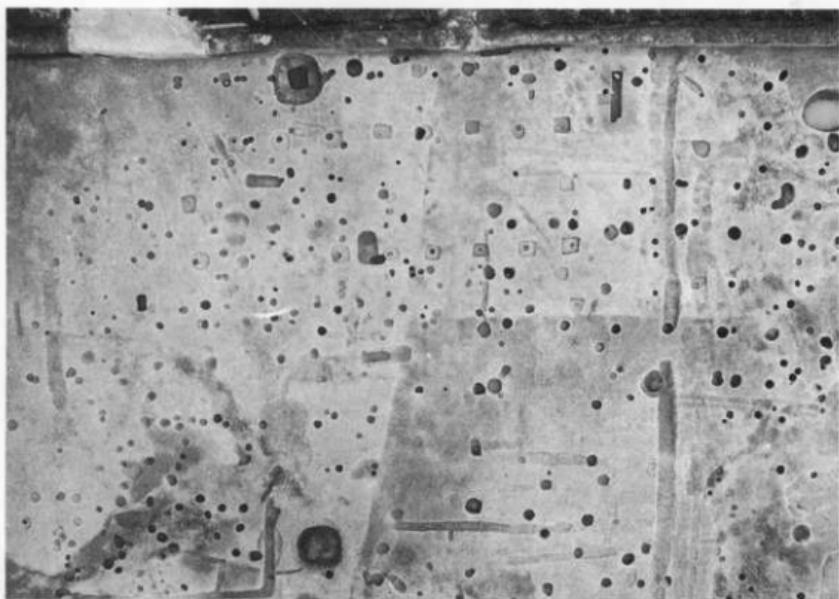
第88次調査区全景(空中写真)



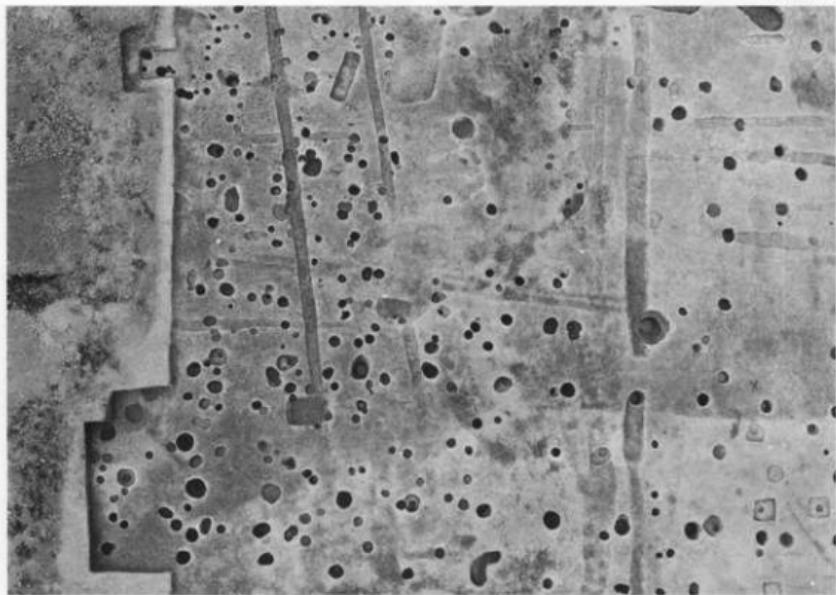
第88次調査区全景(南から)



掘立柱建物 S B 2550・2565(空中写真)



掘立柱建物 S B 2550・2565(空中写真)



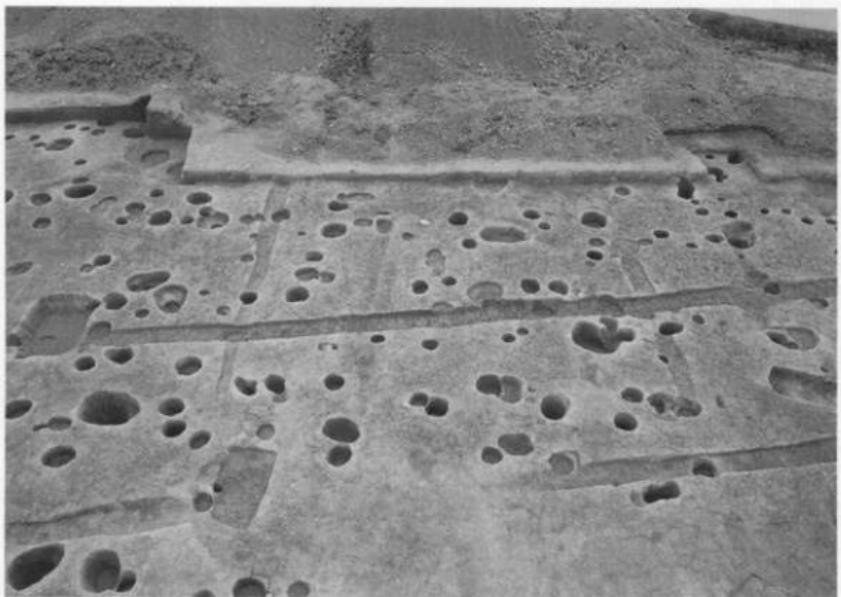
掘立柱建物 S B 2555・2560・2595(空中写真)



掘立柱建物 S B 2550(南から)



掘立柱建物 S B2555・2595(南から)



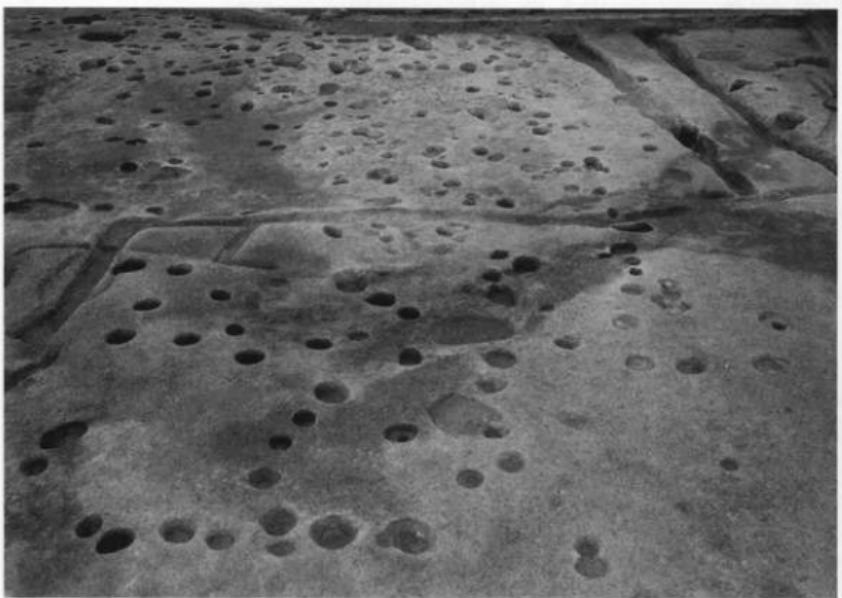
掘立柱建物 S B2560(北から)



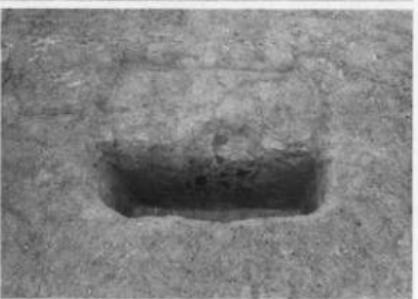
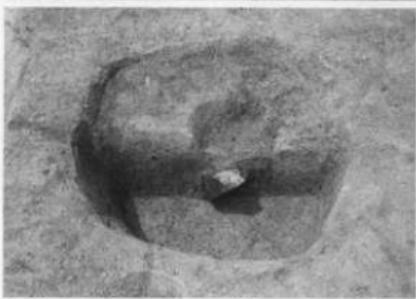
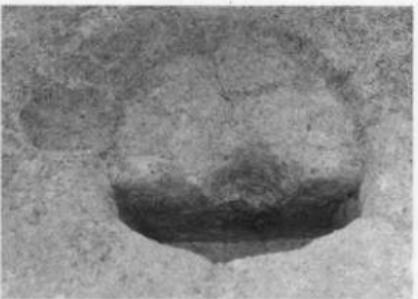
掘立柱建物 S B2565(南から)



掘立柱建物 S B2575(東から)



掘立柱建物 S B 2580・2585・2590(東から)

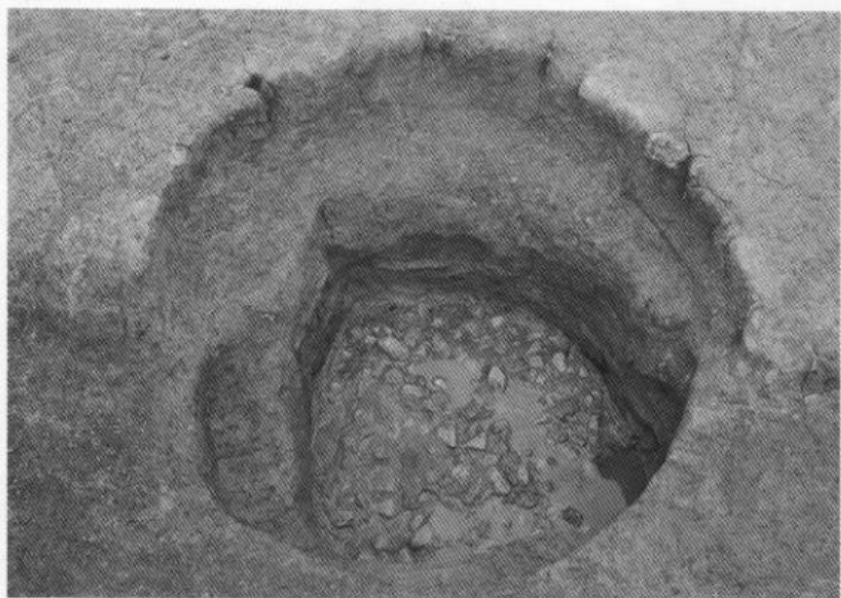


掘立柱建物 S B 2550柱掘形



(上)溝 S D 2581・2582(東から)
(下)井戸 S E 2551(西から)





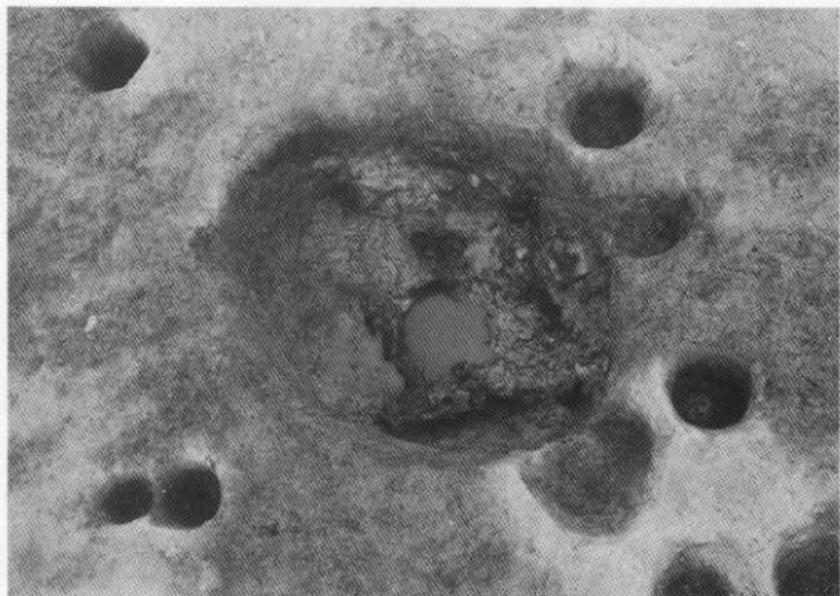
井戸 S E 2552(南から)



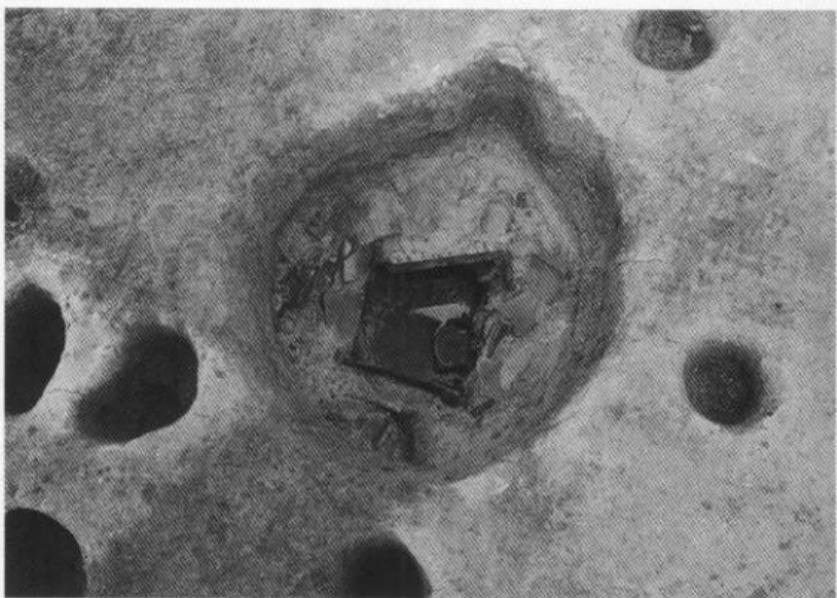
井戸 S E 2553(東から)



井戸 S E 2554(南から)



井戸 S E 2556(東から)



井戸 S E 2557(東から)



井戸 S E 2558(南から)

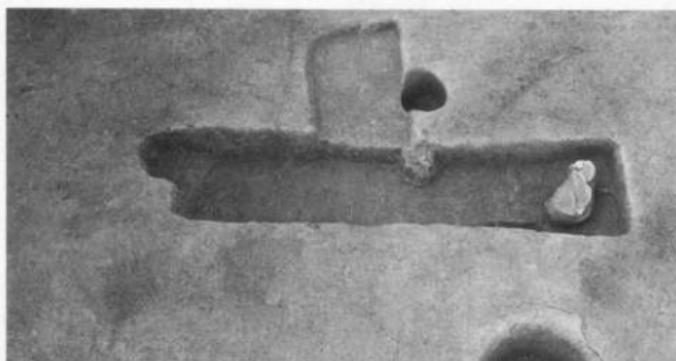


井戸 S E 2561(南から)

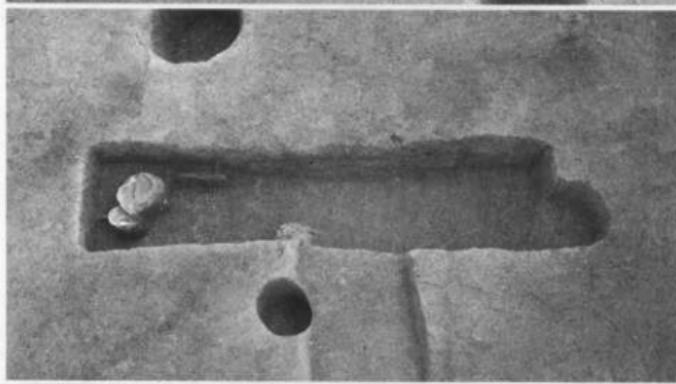


井戸 S E 2563(東から)

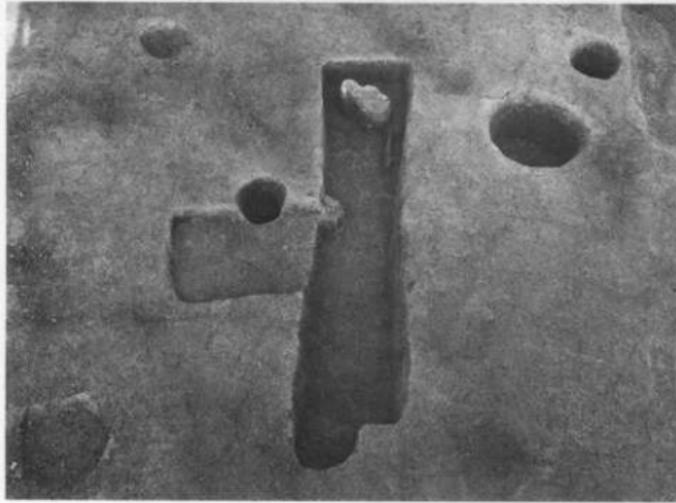
木棺墓 S X 2600
(南から)



同(北から)

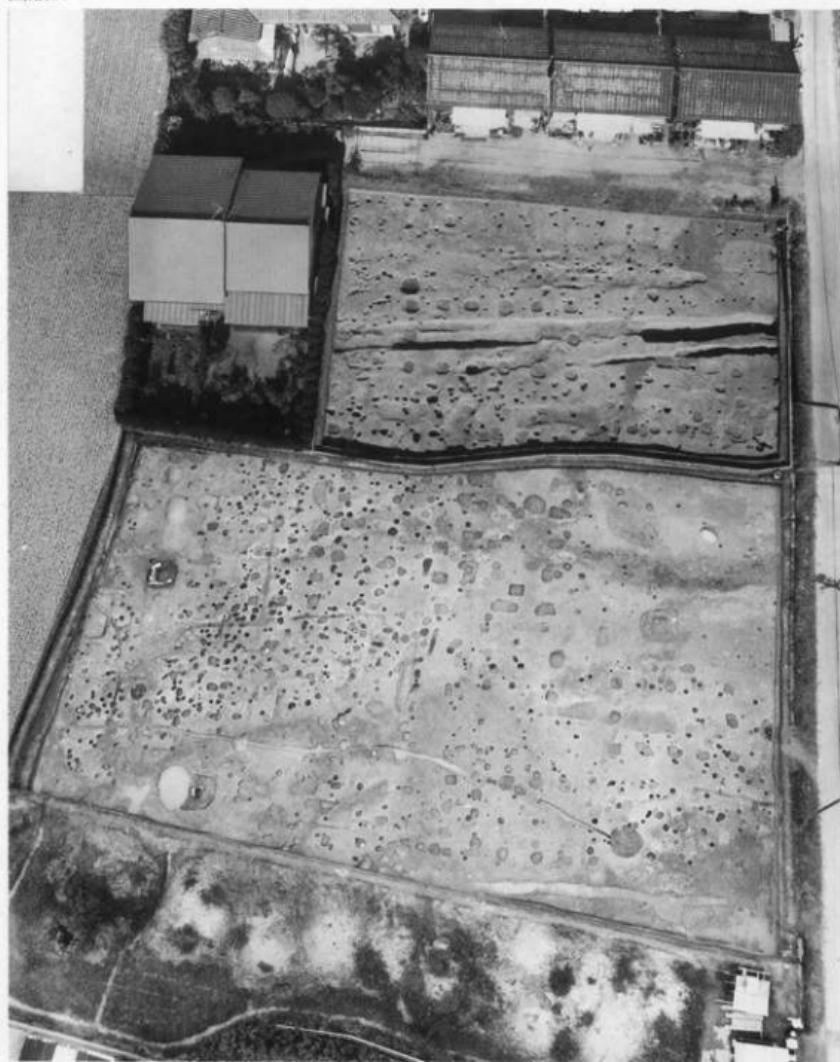


同(西から)





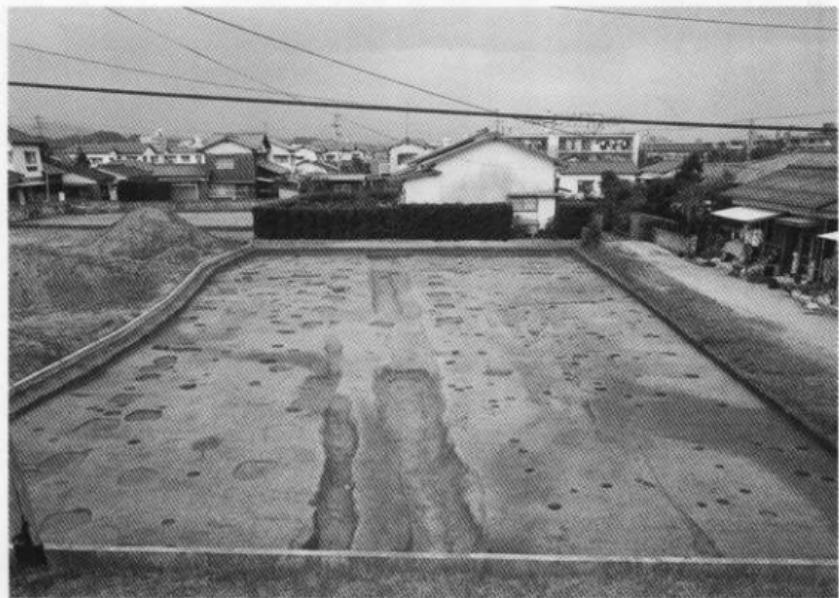
第92次調査区と大宰府政庁(空中写真)



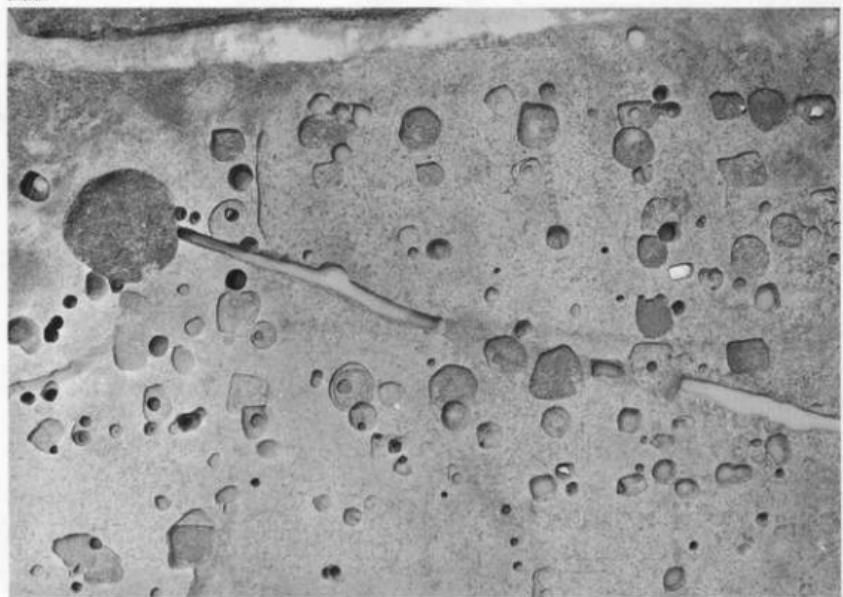
第92次調査区全景(空中写真)



第92次調査区南半部全景(東から)



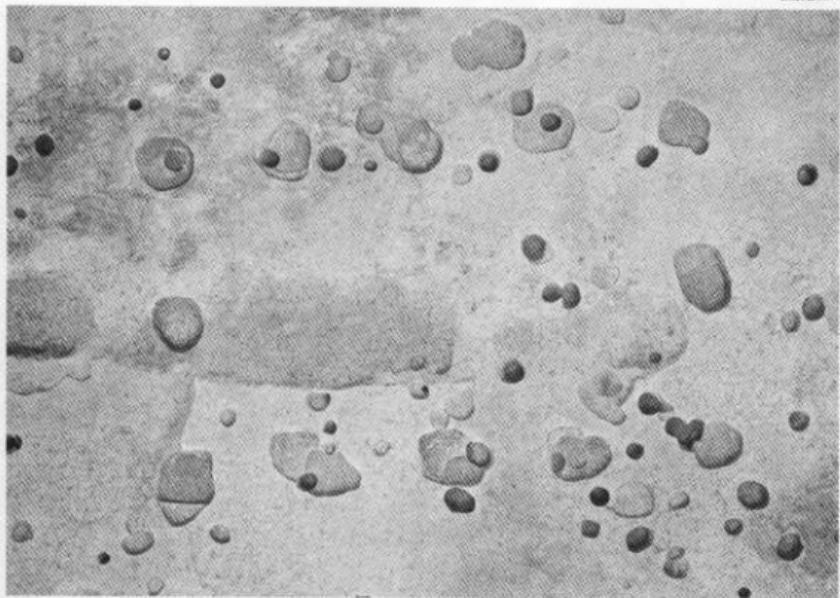
第92次調査区北半部全景(東から)



掘立柱建物 S B 2620・土壤 S K 2641・溝 S D 2627(空中写真)



掘立柱建物 S B 2620(北から)

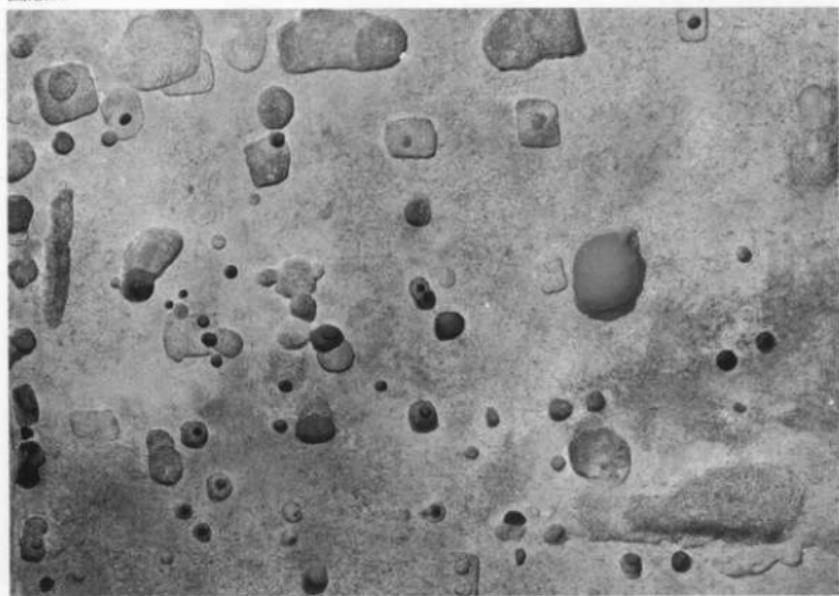


掘立柱建物 S B 2625(空中写真)

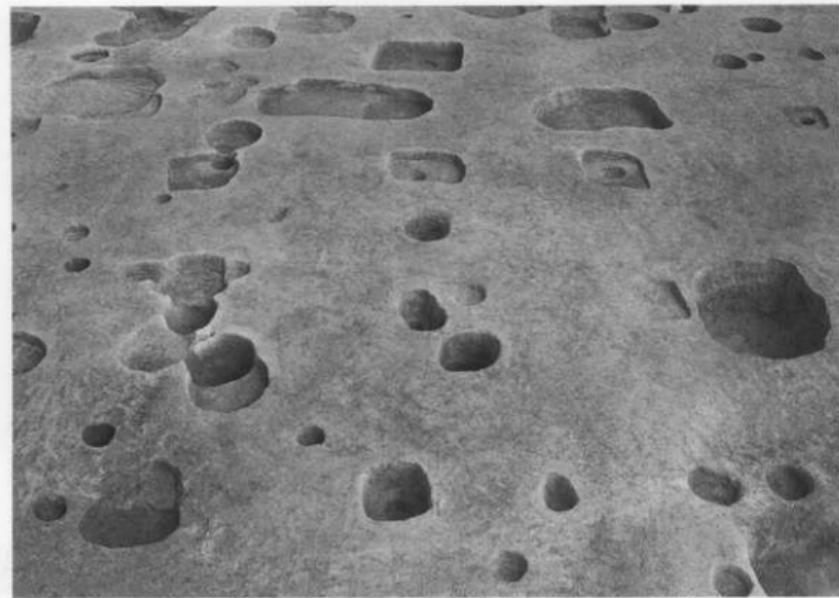


掘立柱建物 S B 2625(南から)

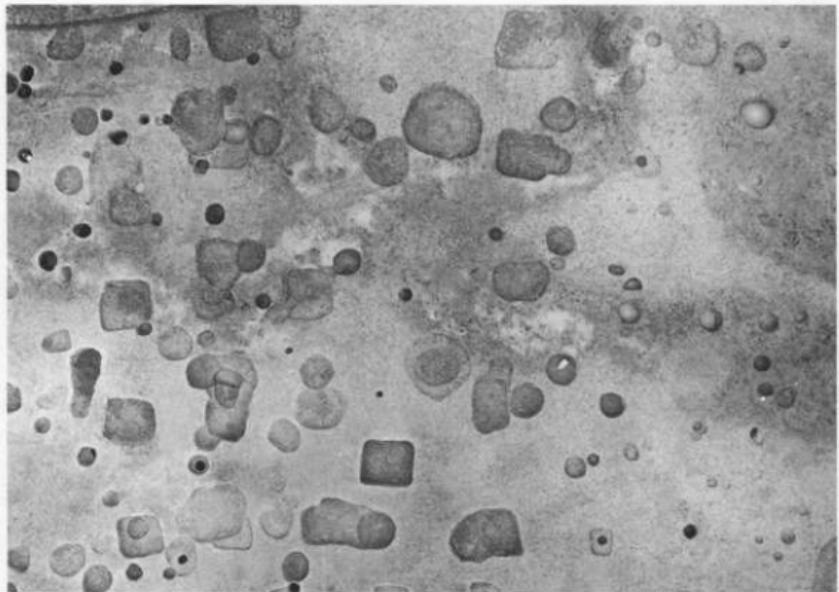
図版32



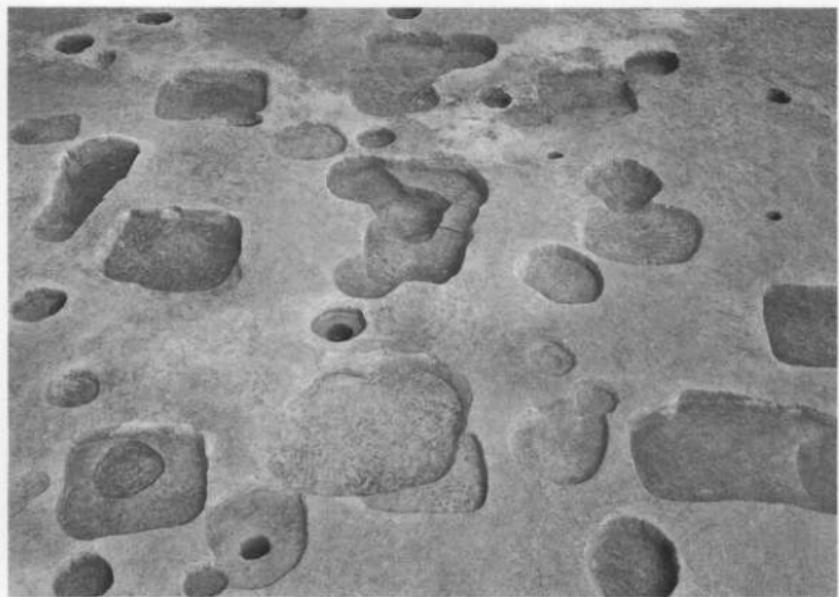
掘立柱建物 SB2630(空中写真)



掘立柱建物 SB2630(南から)



掘立柱建物 S B 2635・2640(空中写真)



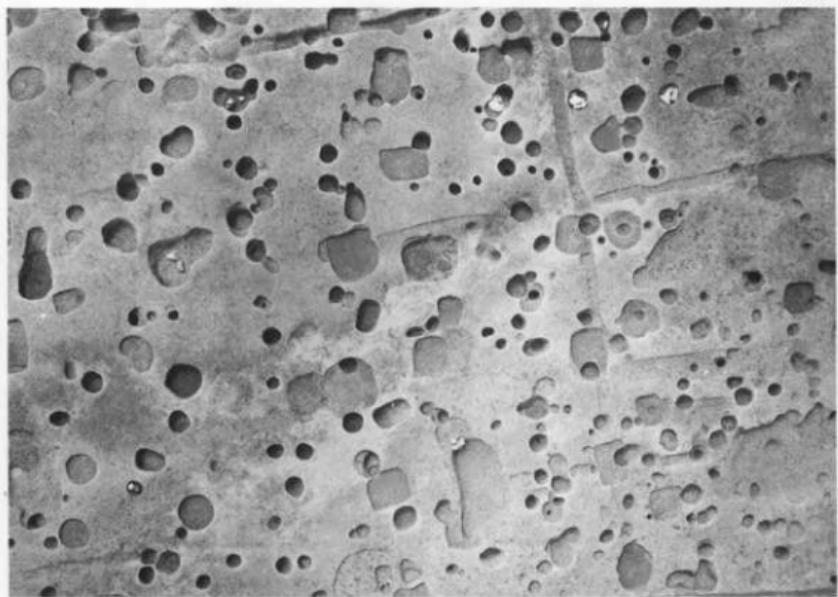
掘立柱建物 S B 2535(南から)



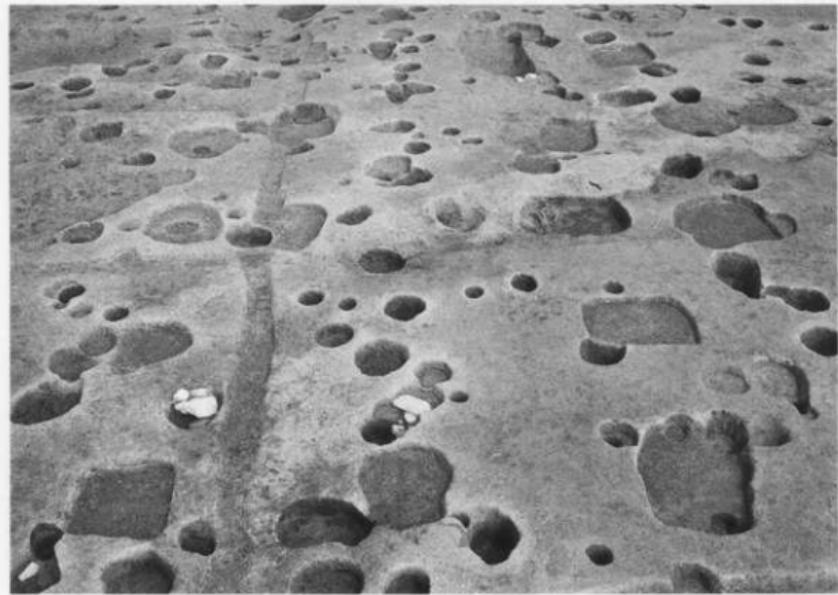
掘立柱建物 S B2645(東から)



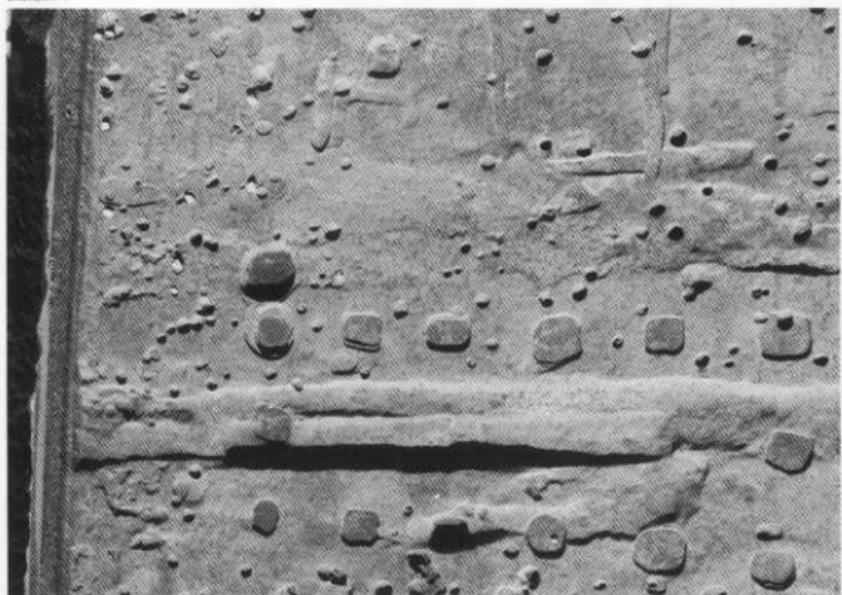
掘立柱建物 S B2650(東から)



掘立柱建物 S B2655(空中写真)



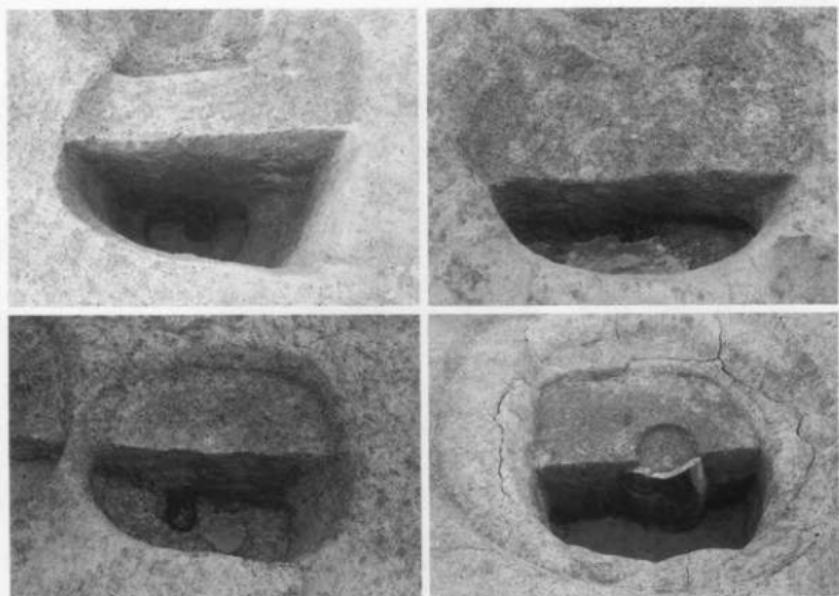
掘立柱建物 S B2655(南から)



掘立柱建物 S B 2660・2665(空中写真)



掘立柱建物 S B 2660(東から)



掘立柱建物 S B 2620・2660柱掘形



溝 S D 2350・2632(東から)



井戸 S E 2621(東から)



井戸 S E 2621(東から)

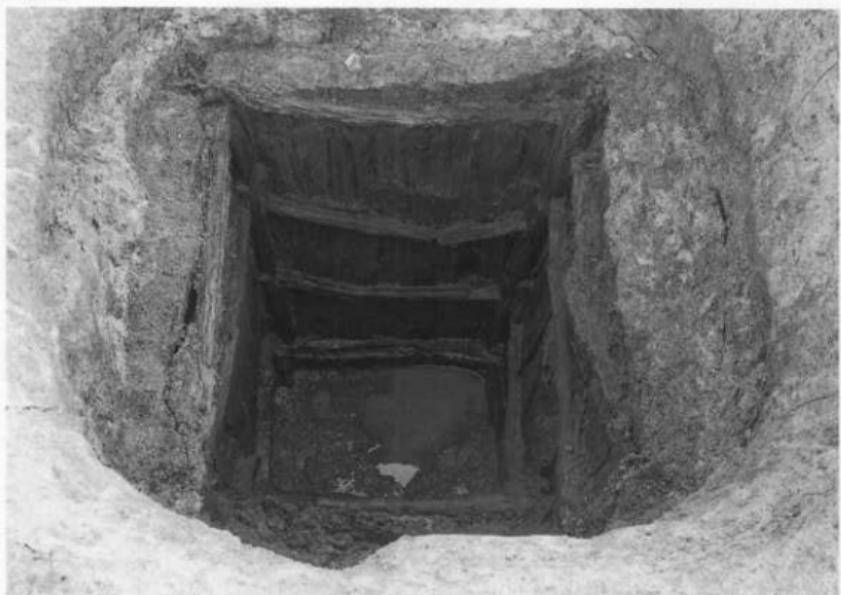


井戸 S E 2622(東から)

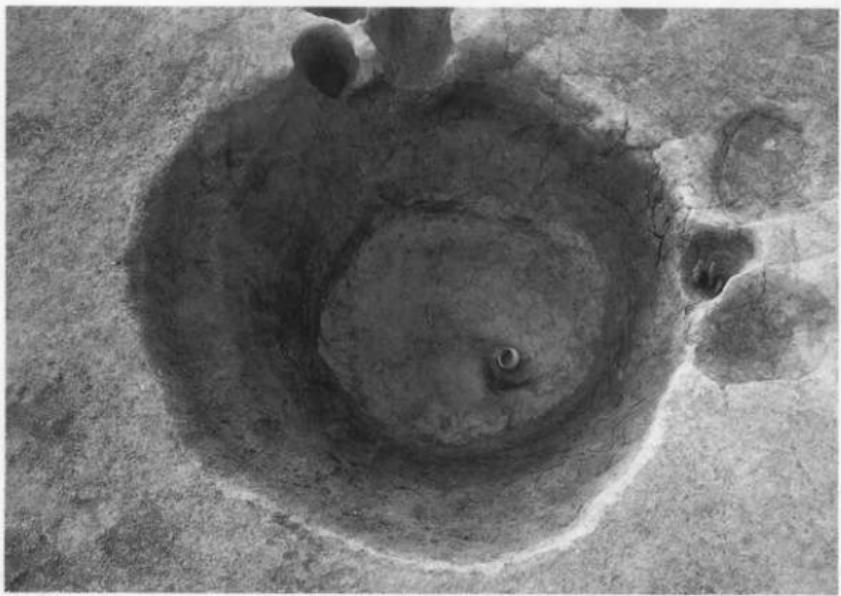


井戸 S E 2623(東から)

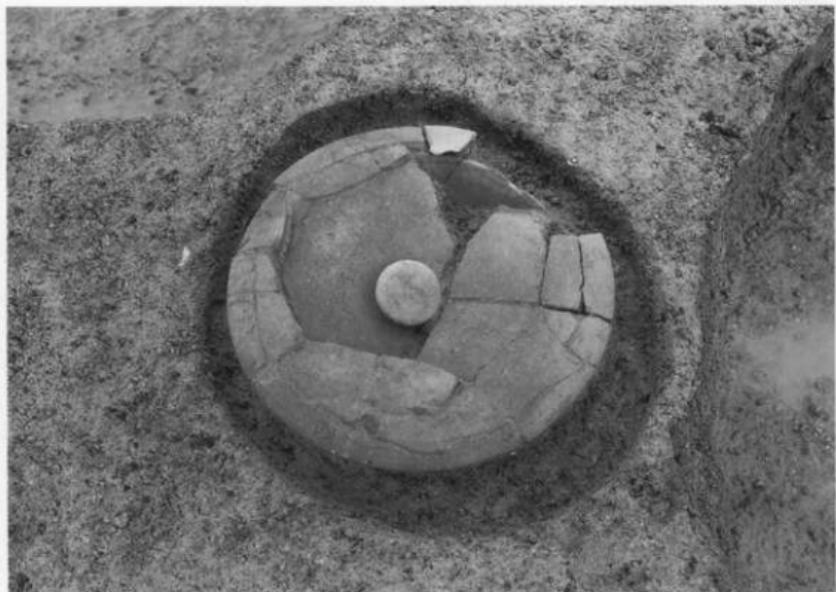
図版40



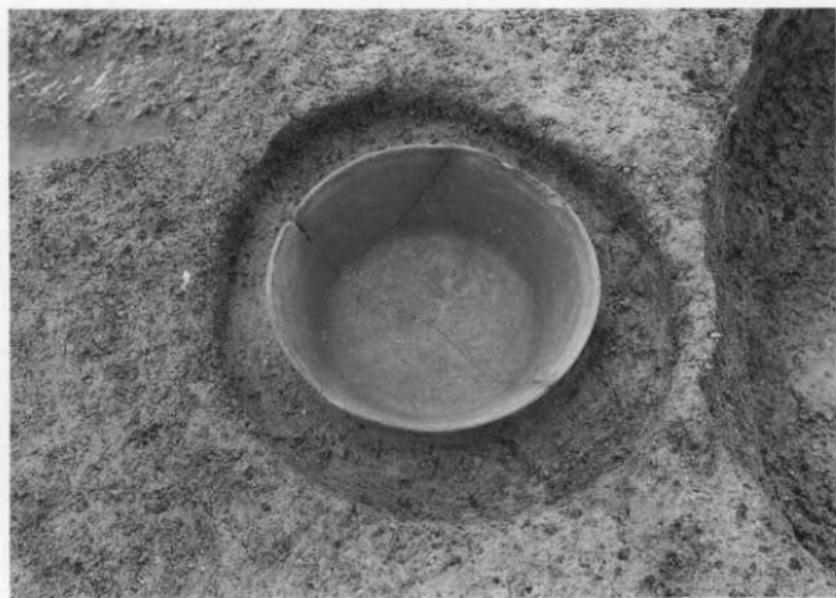
井戸 S E 2624(西から)



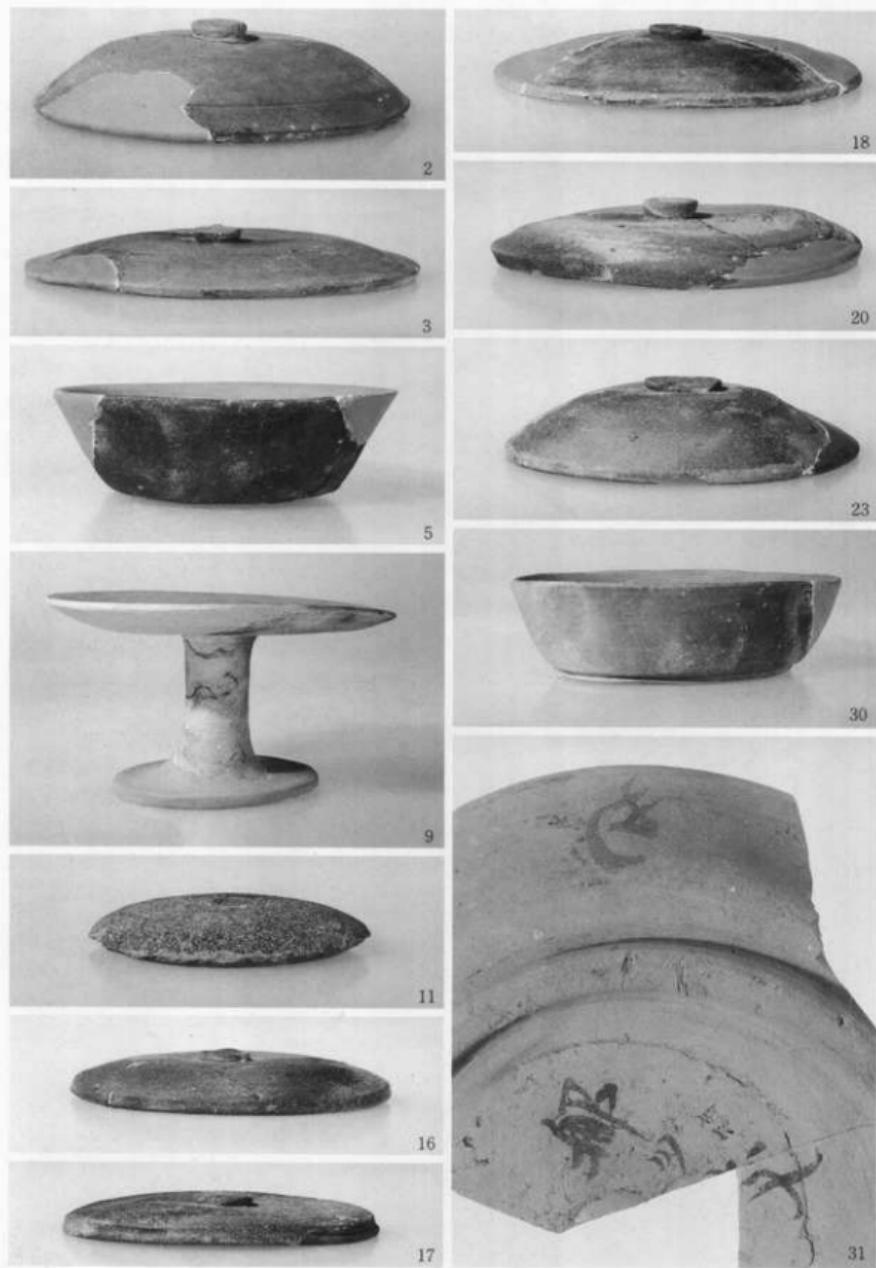
土壌 S K 2641(東から)



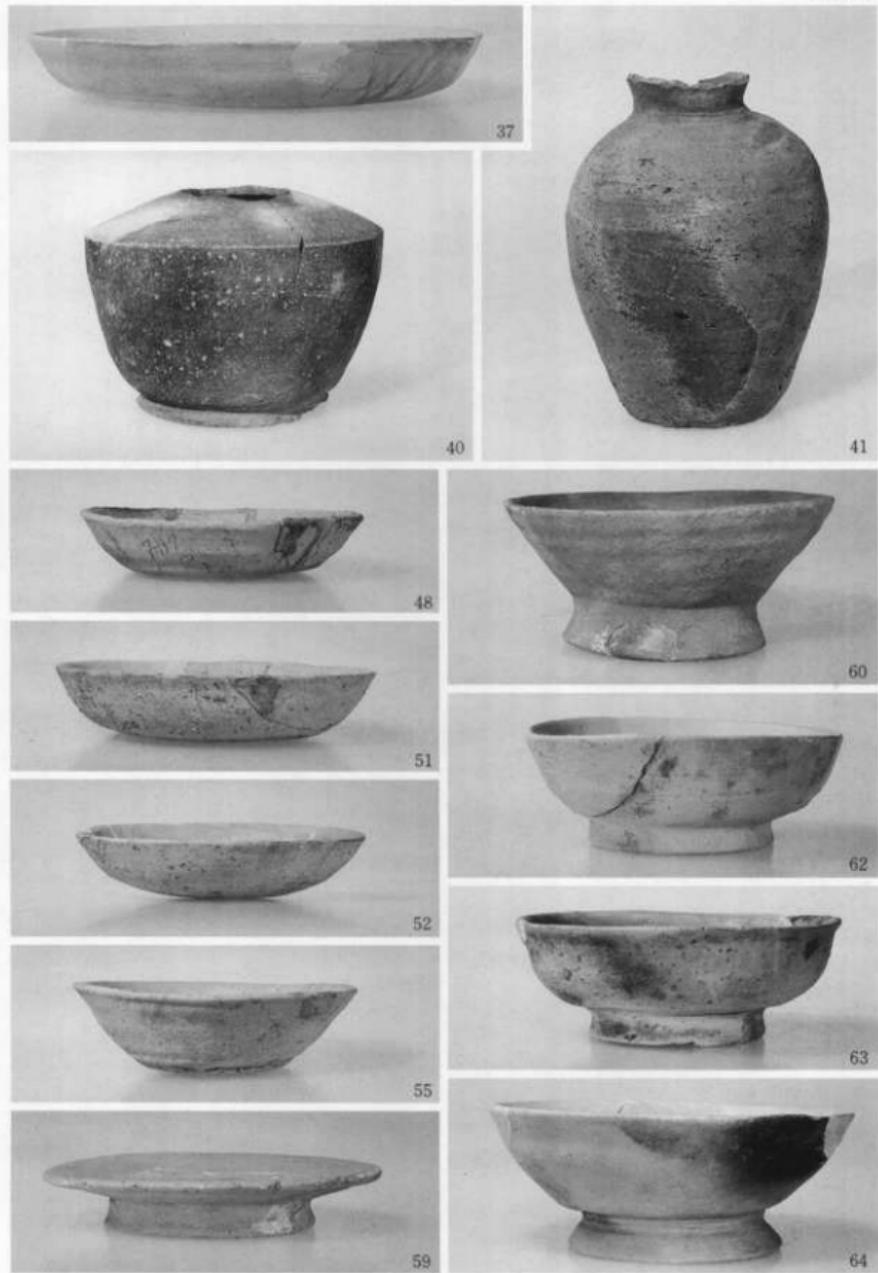
地鎮遺構 S X 2670(東から)



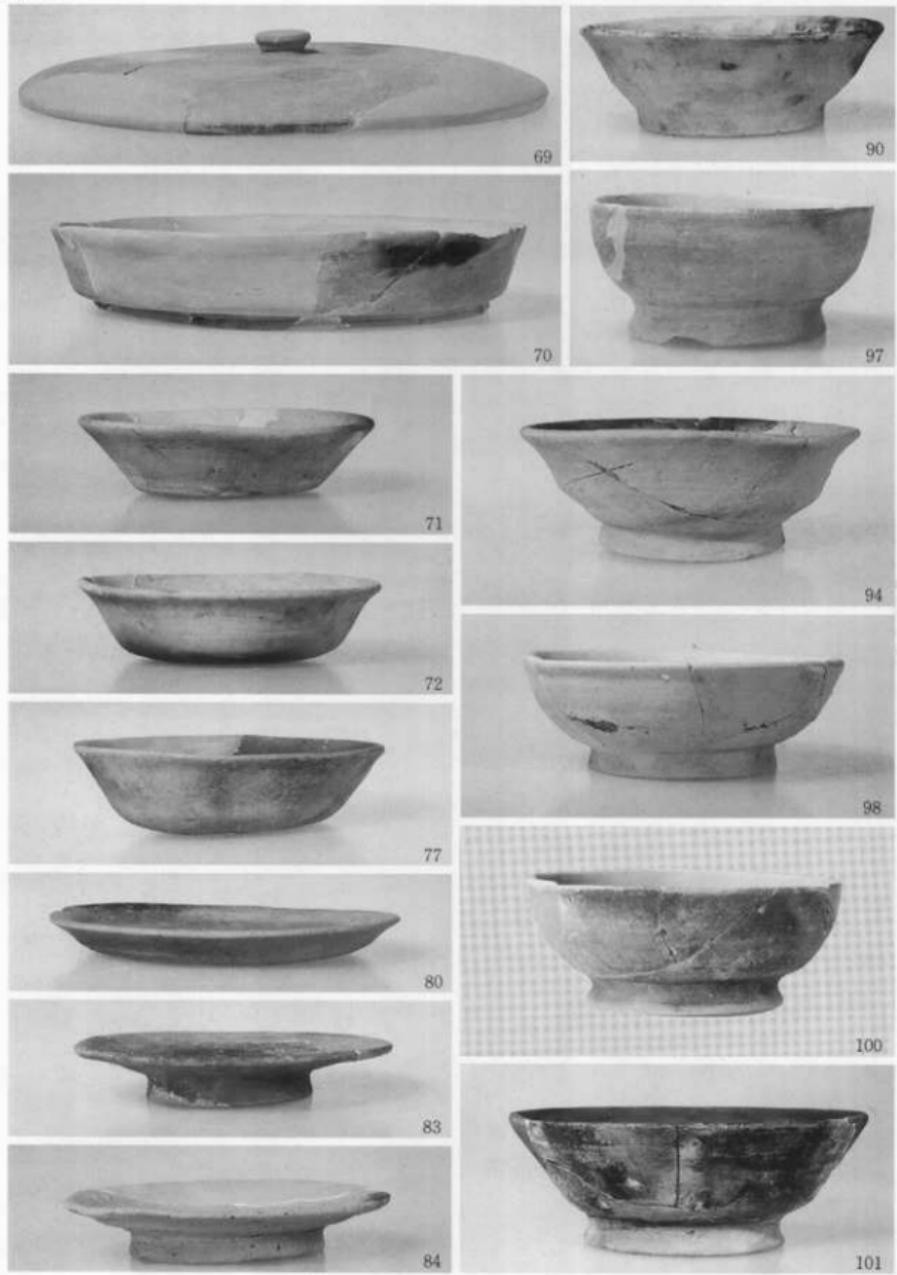
地鎮遺構 S X 2670蓋除去後(東から)



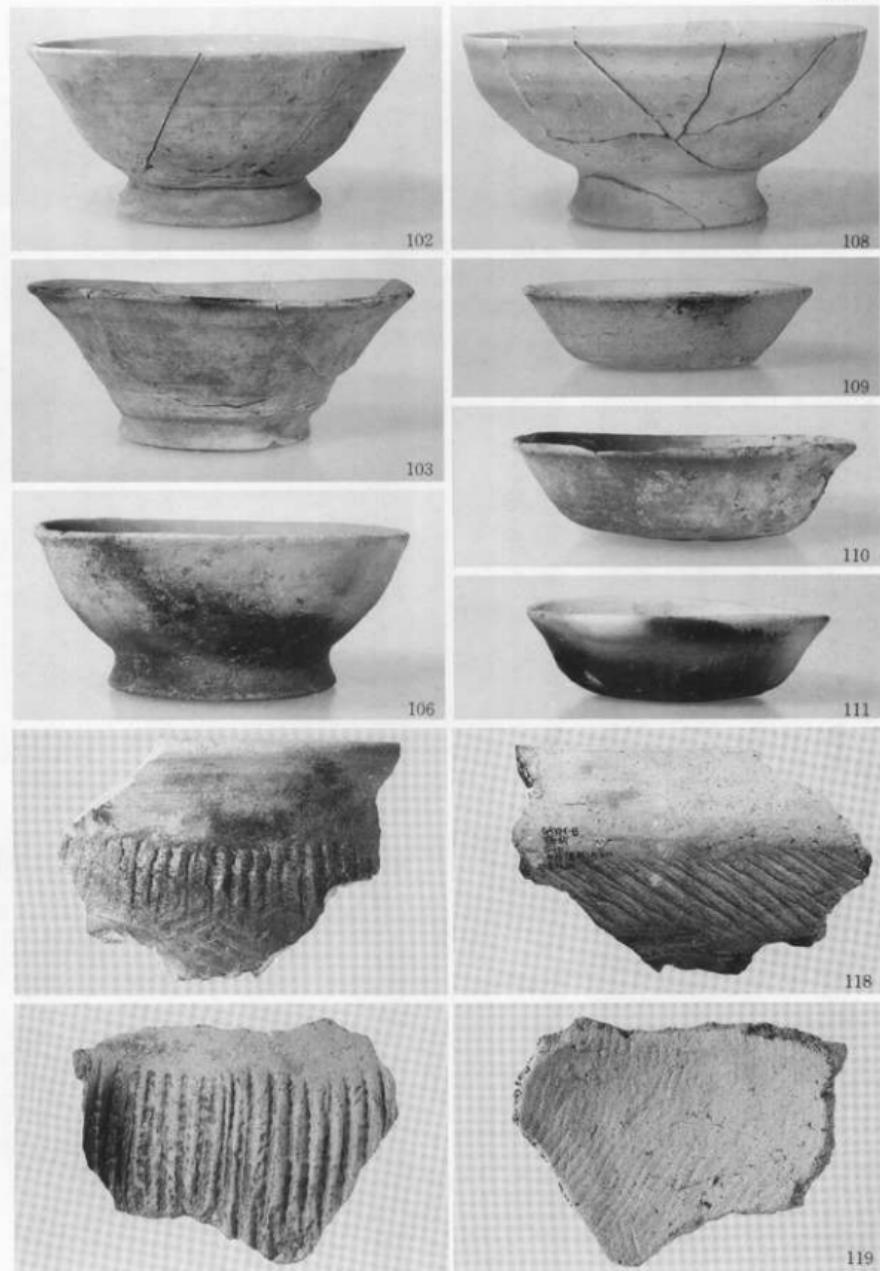
第14次調査 SD320出土土器



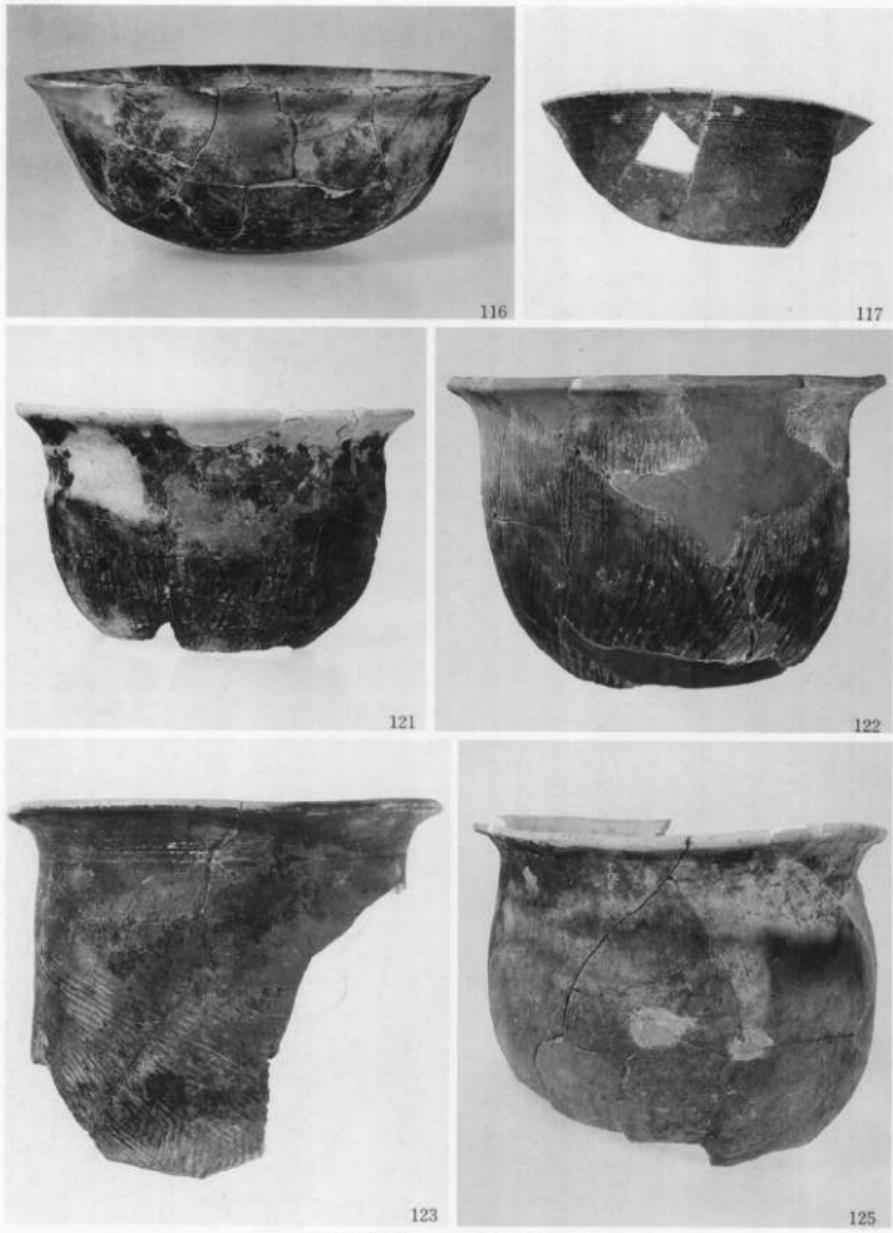
第14次調査 SD320出土土器



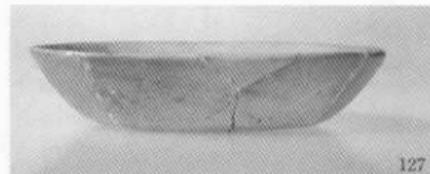
第14次調査 SD320出土土器



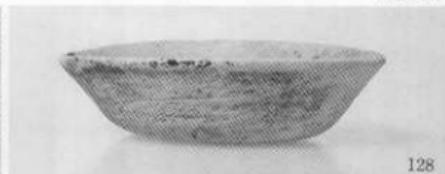
第14次調査 SD 320出土土器



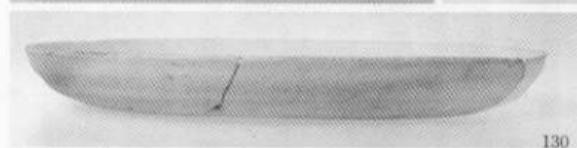
第14次調査 SD320出土土器



127



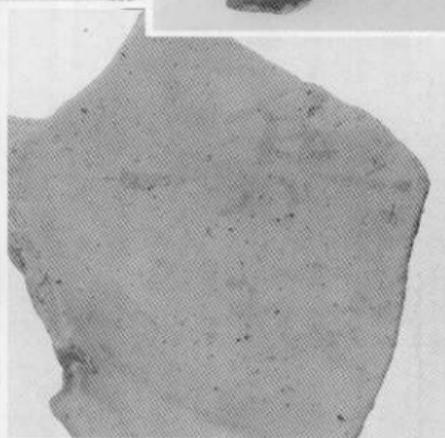
128



130



134



135



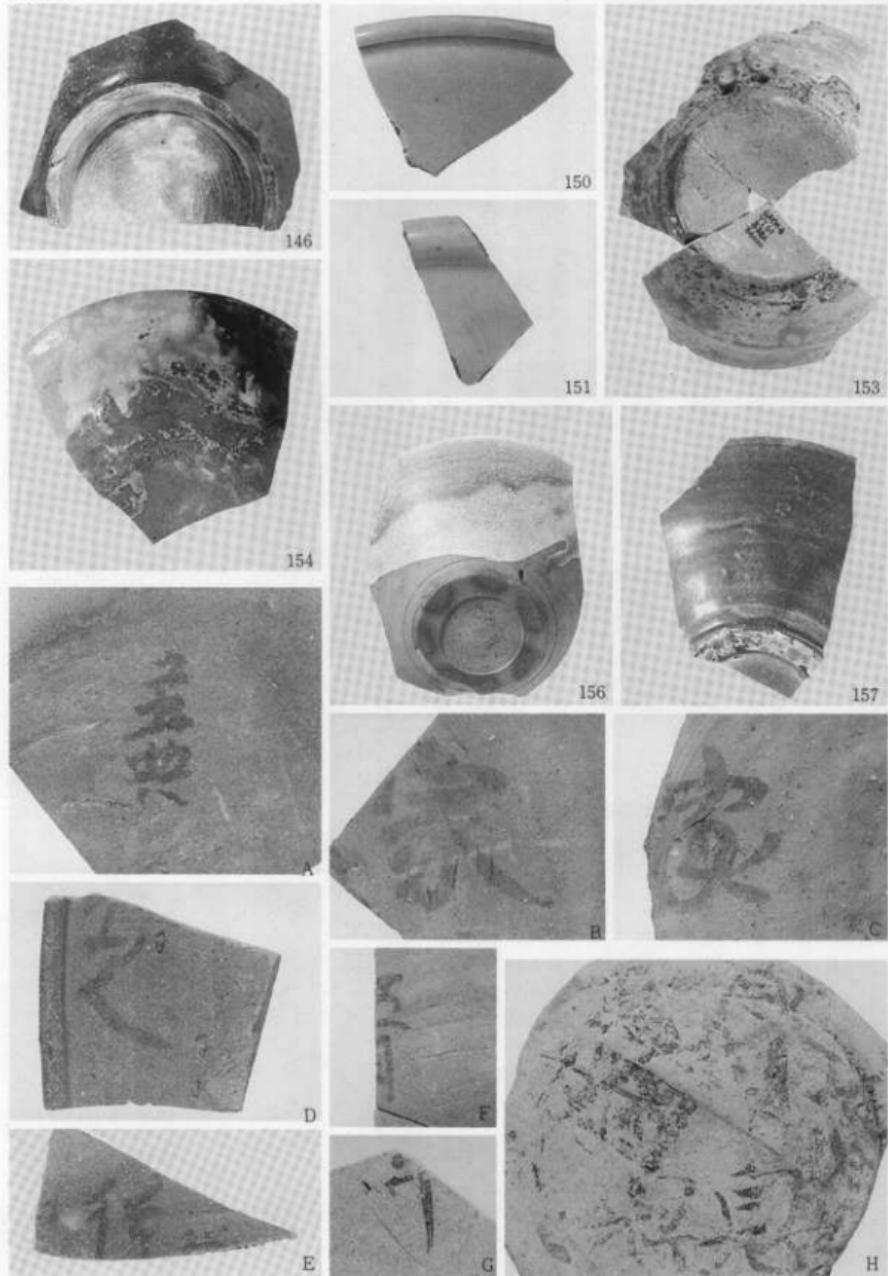
136



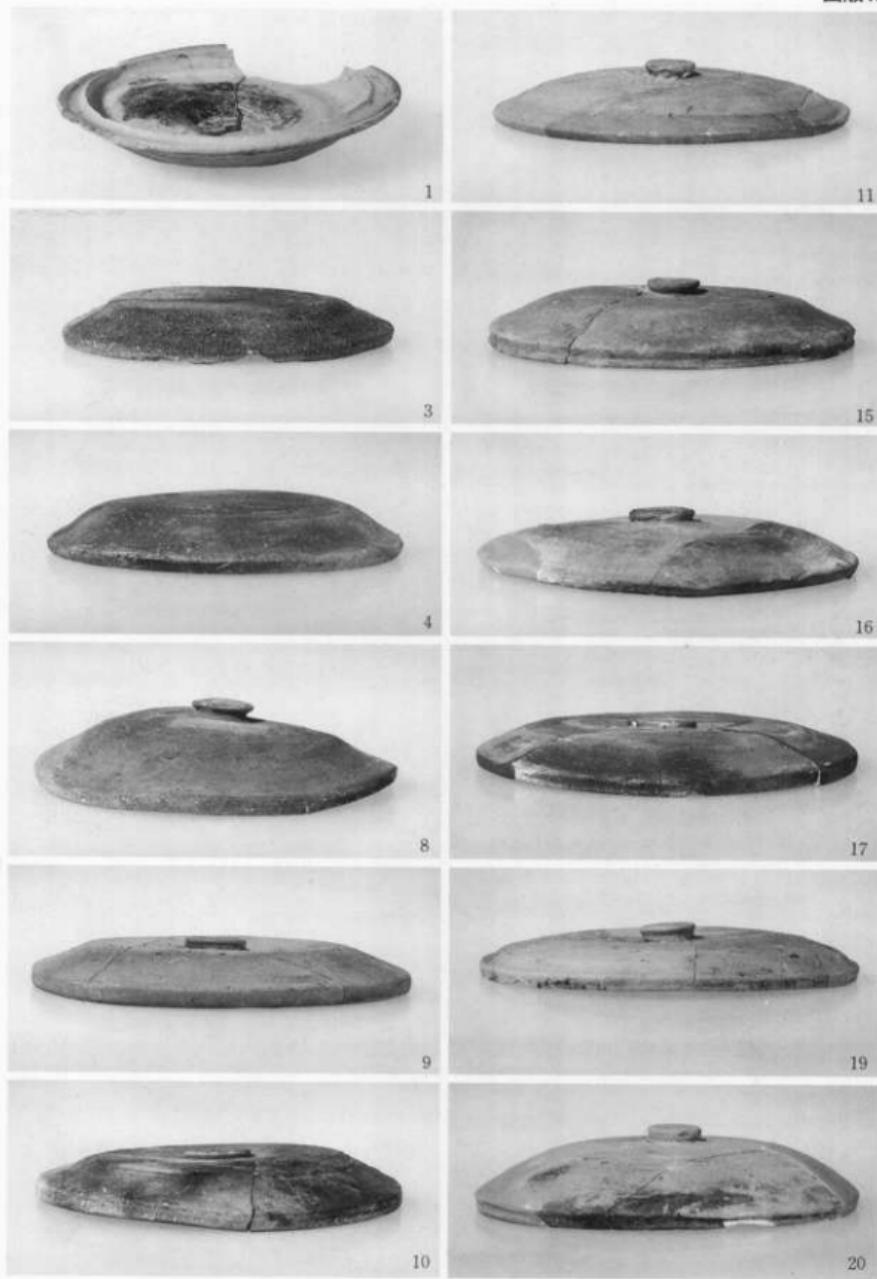
137



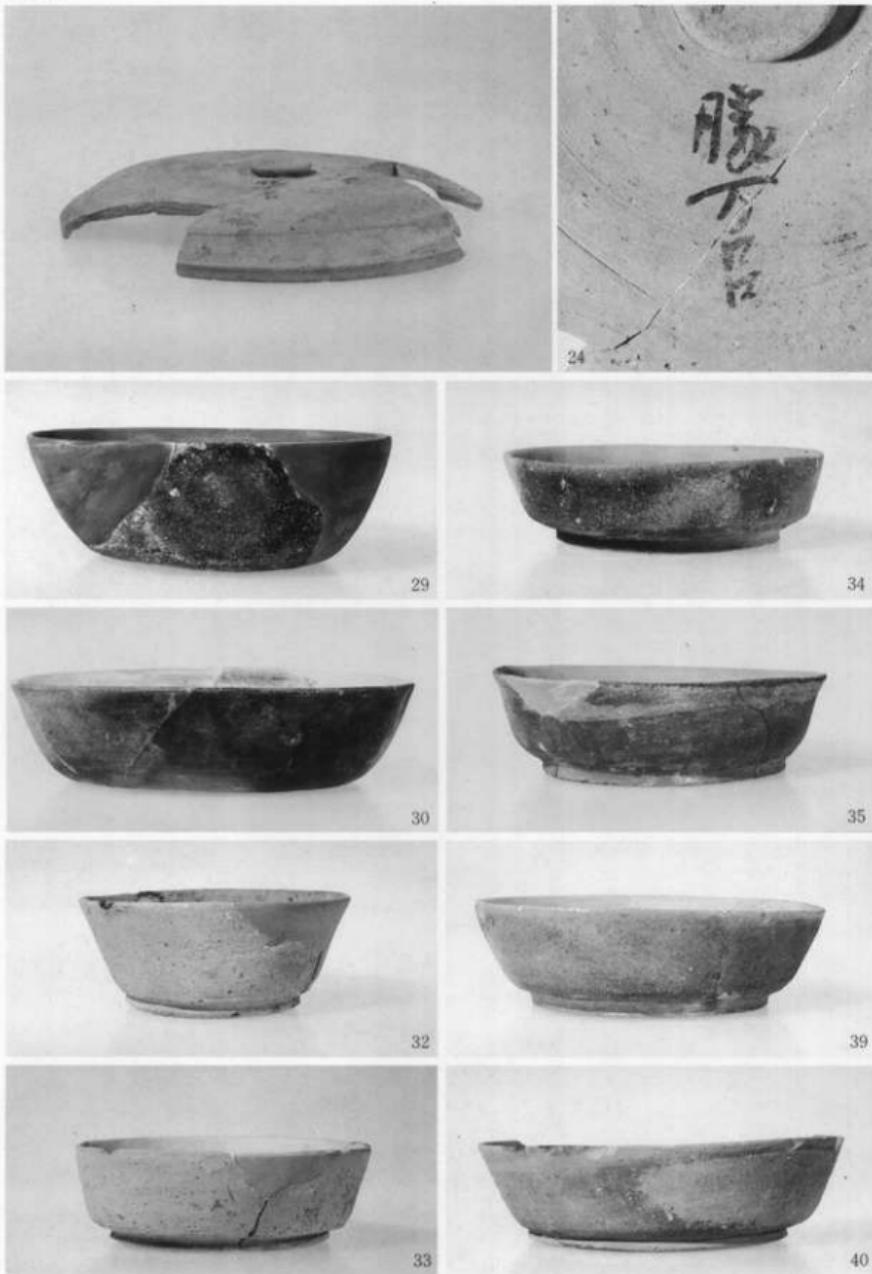
165



第14次調査 SD320出土陶磁器・墨書き土器



第87・90次調査 S D2340出土土器



第87・90次調査 SD 2340出土土器



44



52



47



53



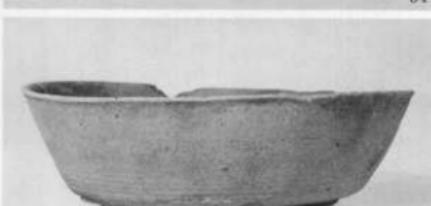
48



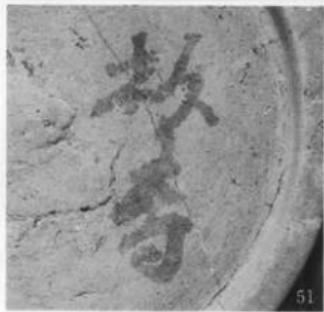
54



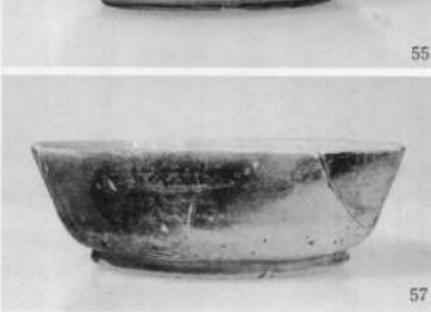
51



55



51



57

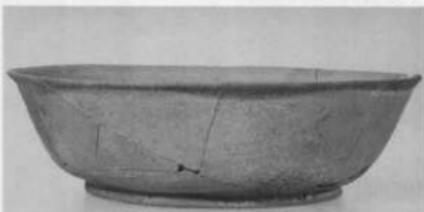
第87・90次調査 S D2340出土土器



68



63



69



65



60



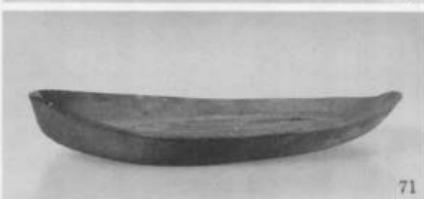
66



70



67



71

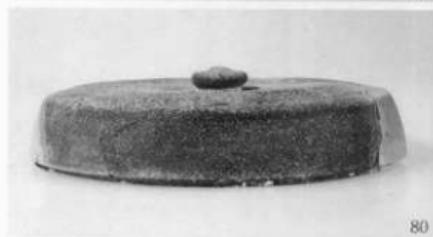
第87・90次調査 S D2340出土土器



74



83



80



88



81



90



82



91



95



96



102



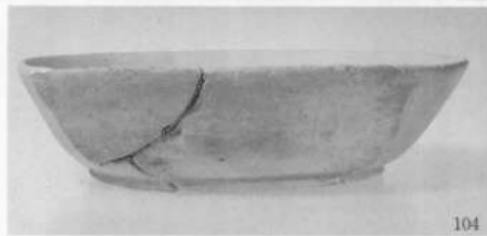
103



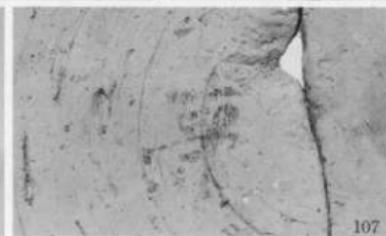
101



105



104



107



109



110



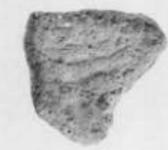
111

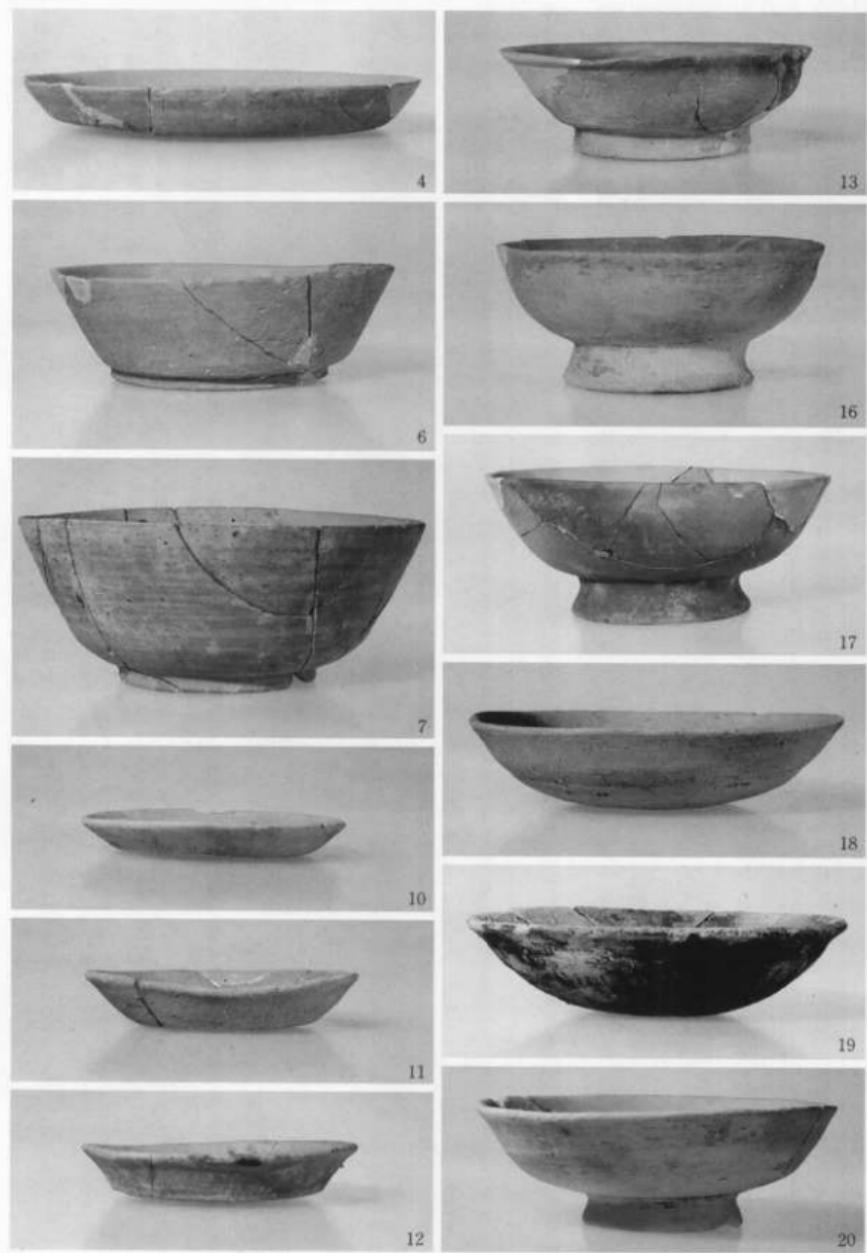


A



B





第87・90次調査 S D2335・S E2510・S K2524・出土土器



1



1



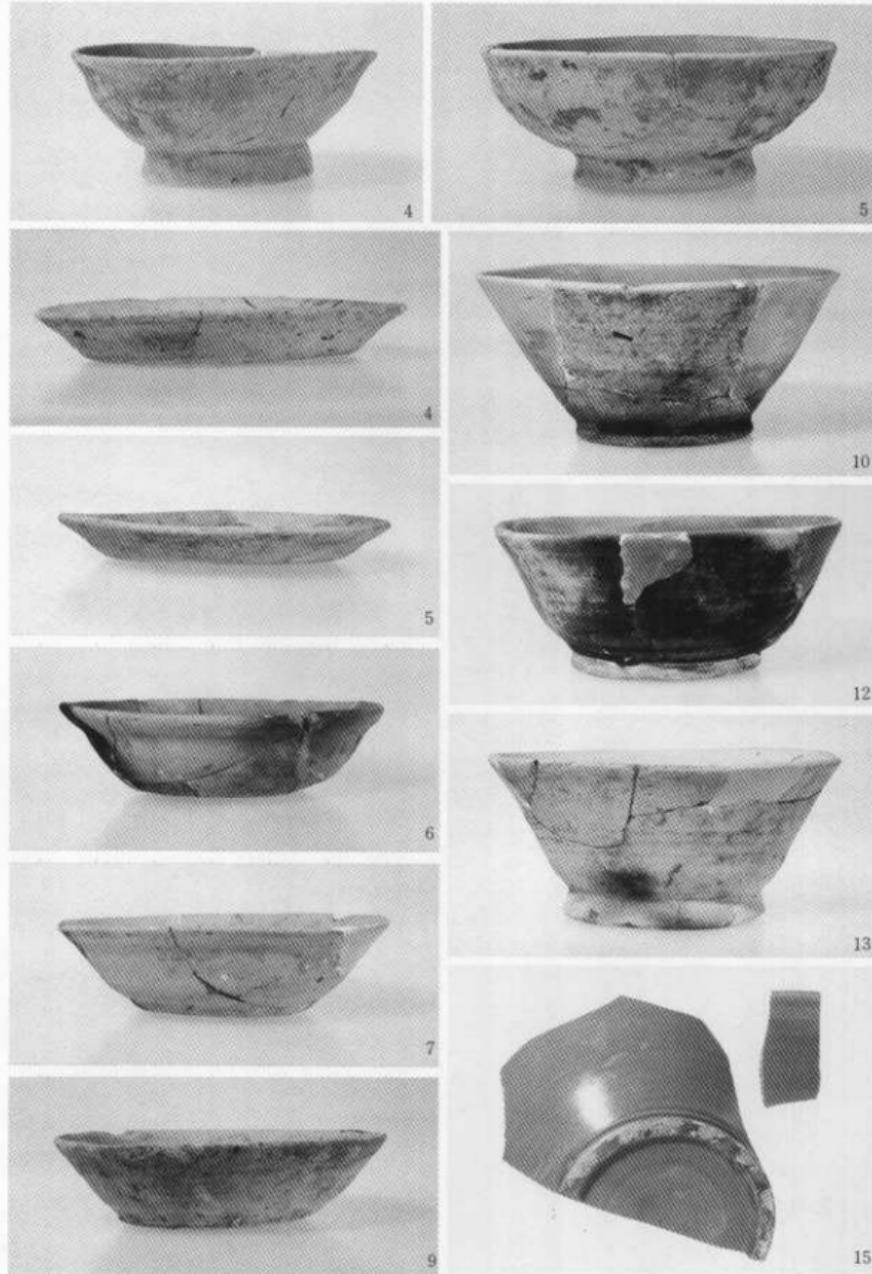
2



2



第87・90次調查 S X 2514・2529・2532・茶褐色土層出土土器陶磁器・硯



第88次調查 SB2555・SE2551出土土器・陶磁器



7



9



12



14



13



14



16



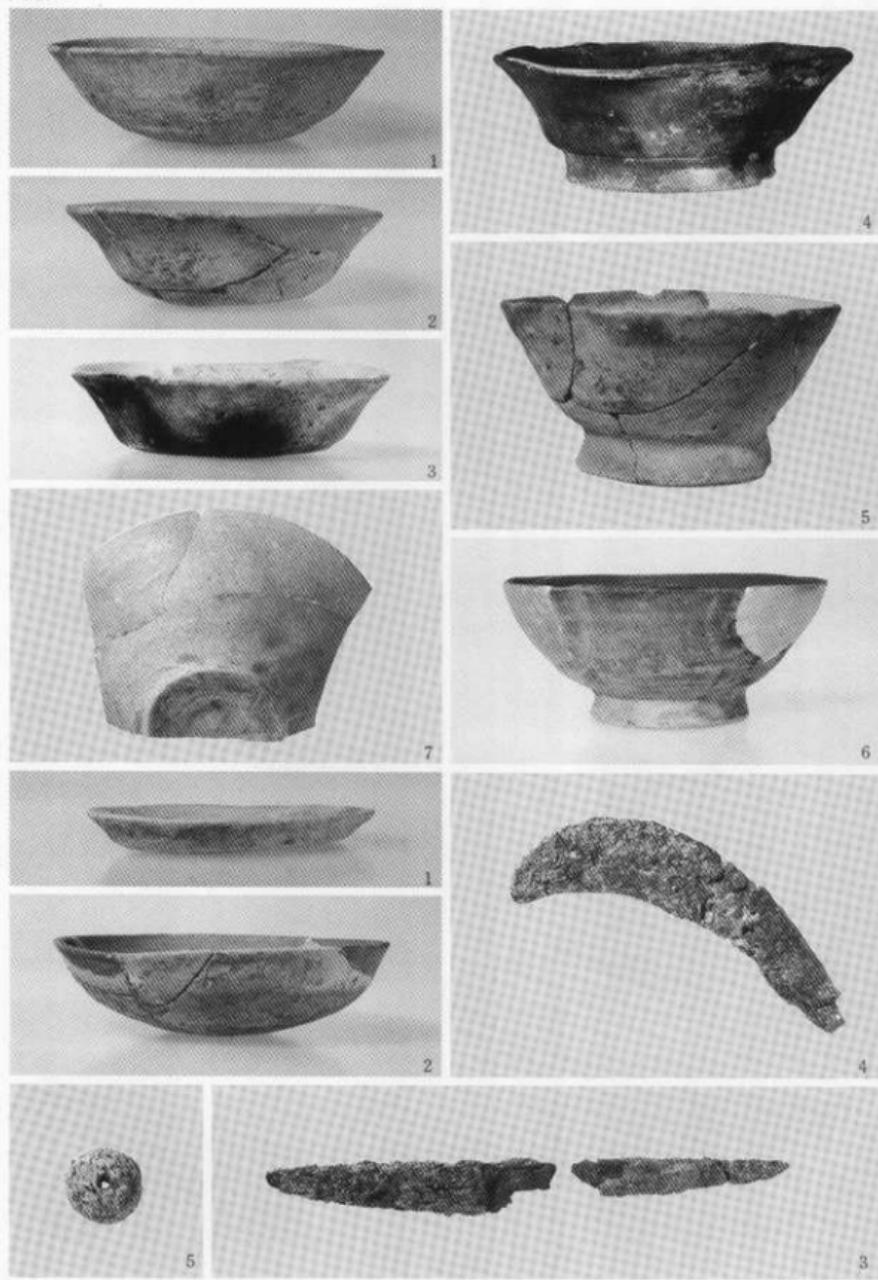
17



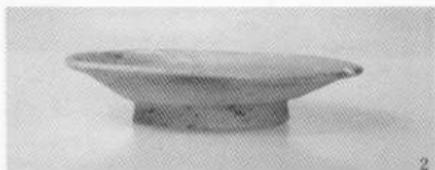
18



19



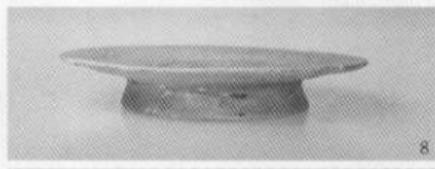
第88次調査 S E 2561・S X 2600出土土器・陶磁器・金属器



2



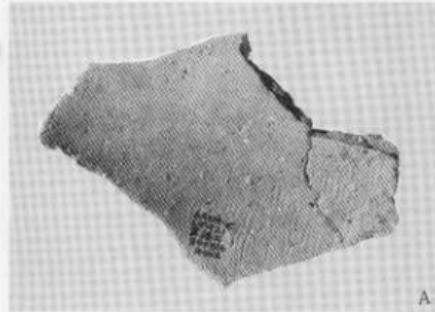
3



8



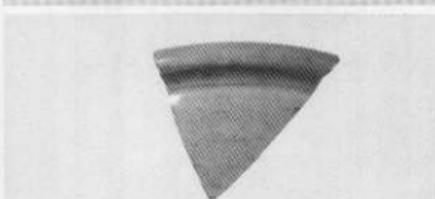
A



A



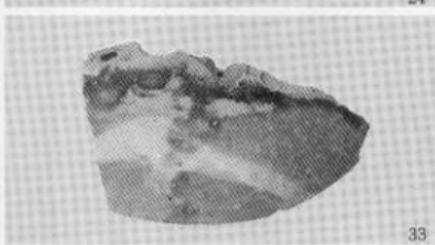
A



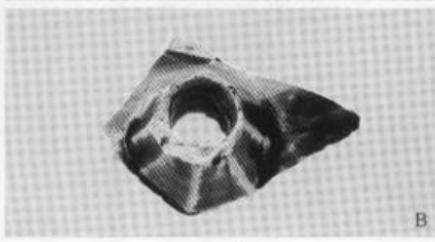
22



24

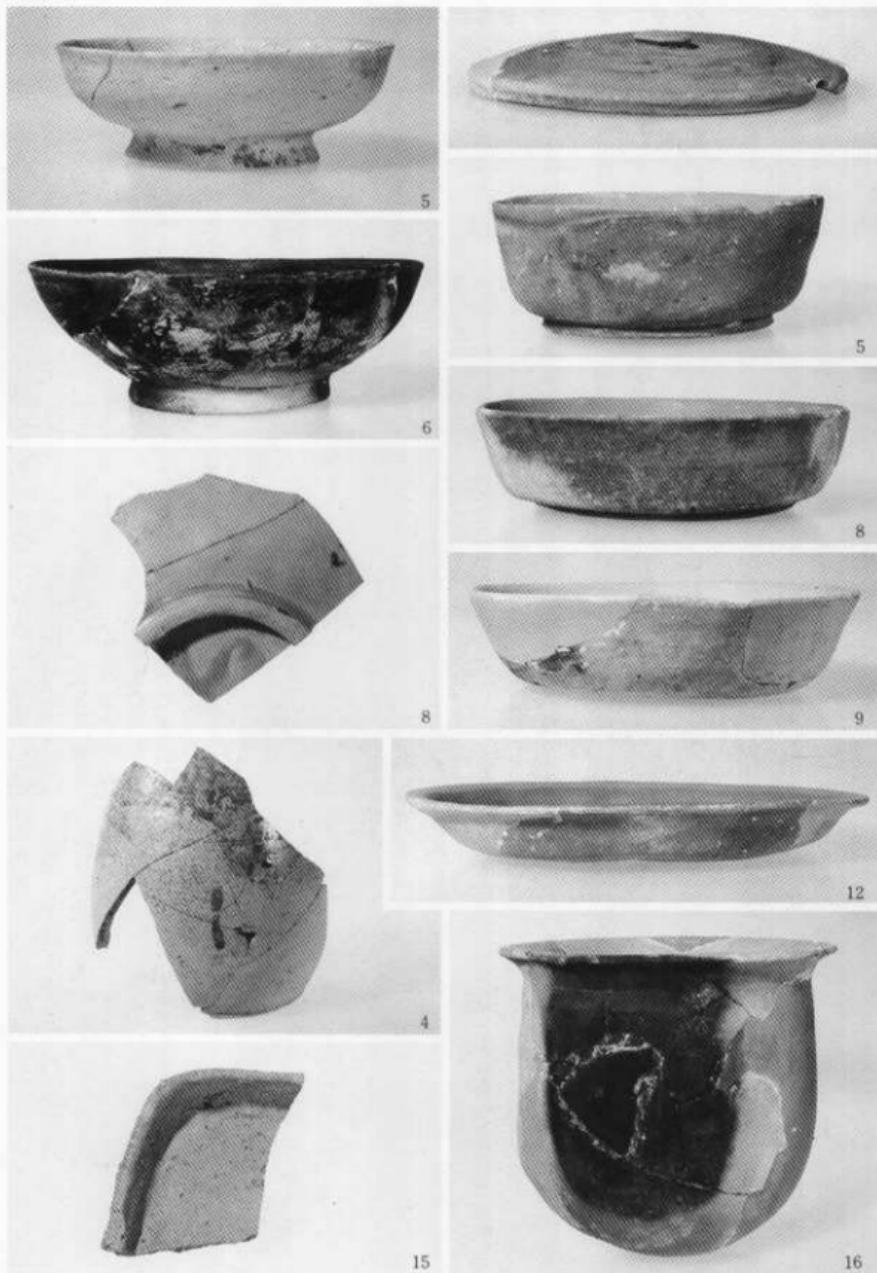


33



B

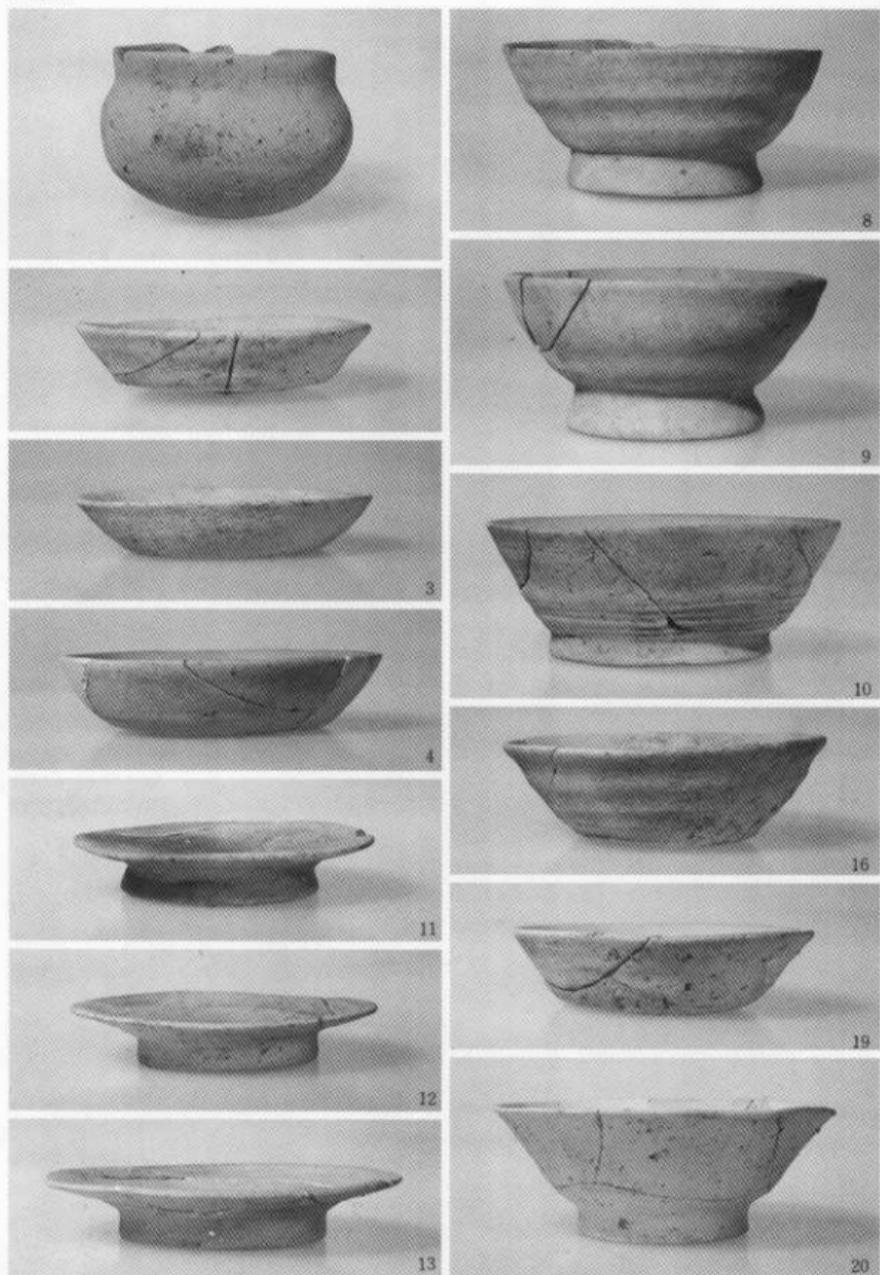
第88次調查 SK 2602・2603・黑褐色土層出土土器・陶磁器



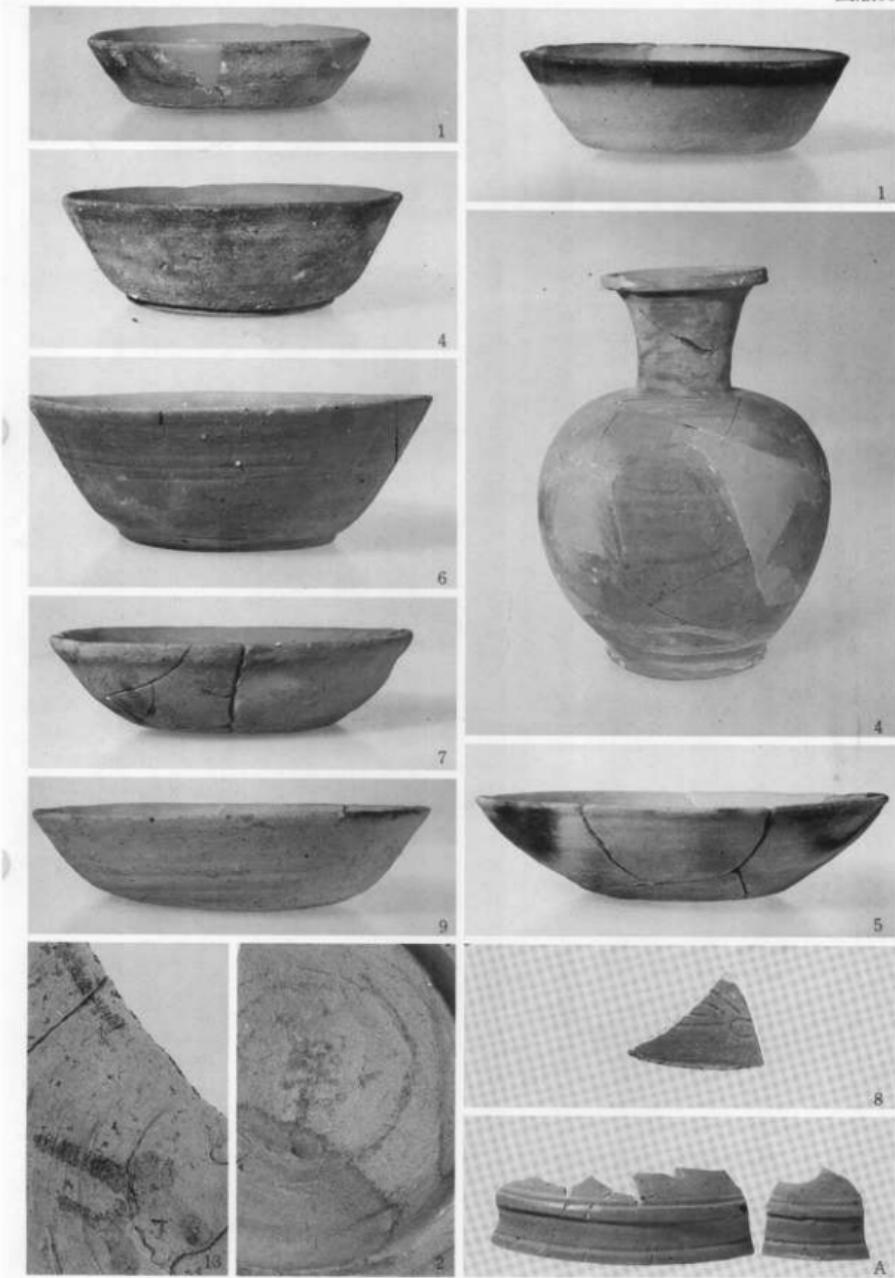
第92次調査 SD2350A・B、SE2621出土土器・陶磁器



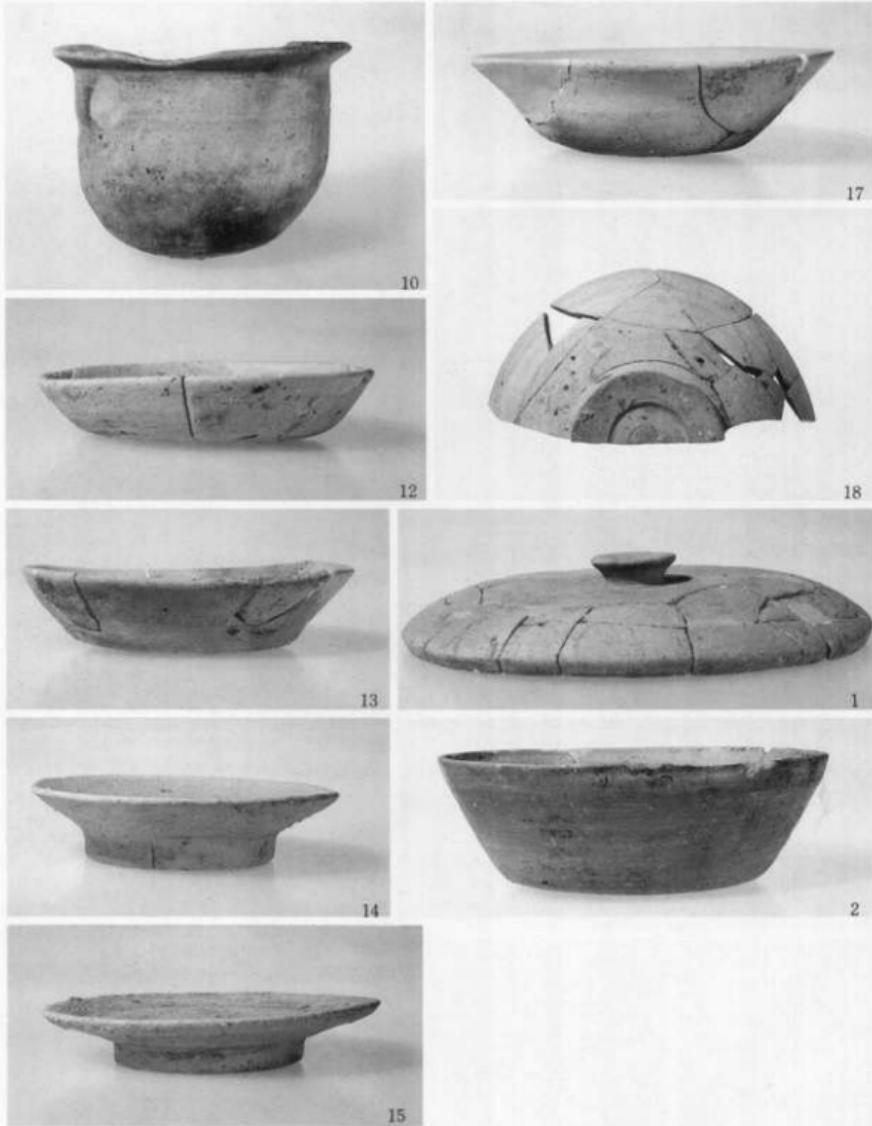
第92次調査 S E 2622・2624出土土器



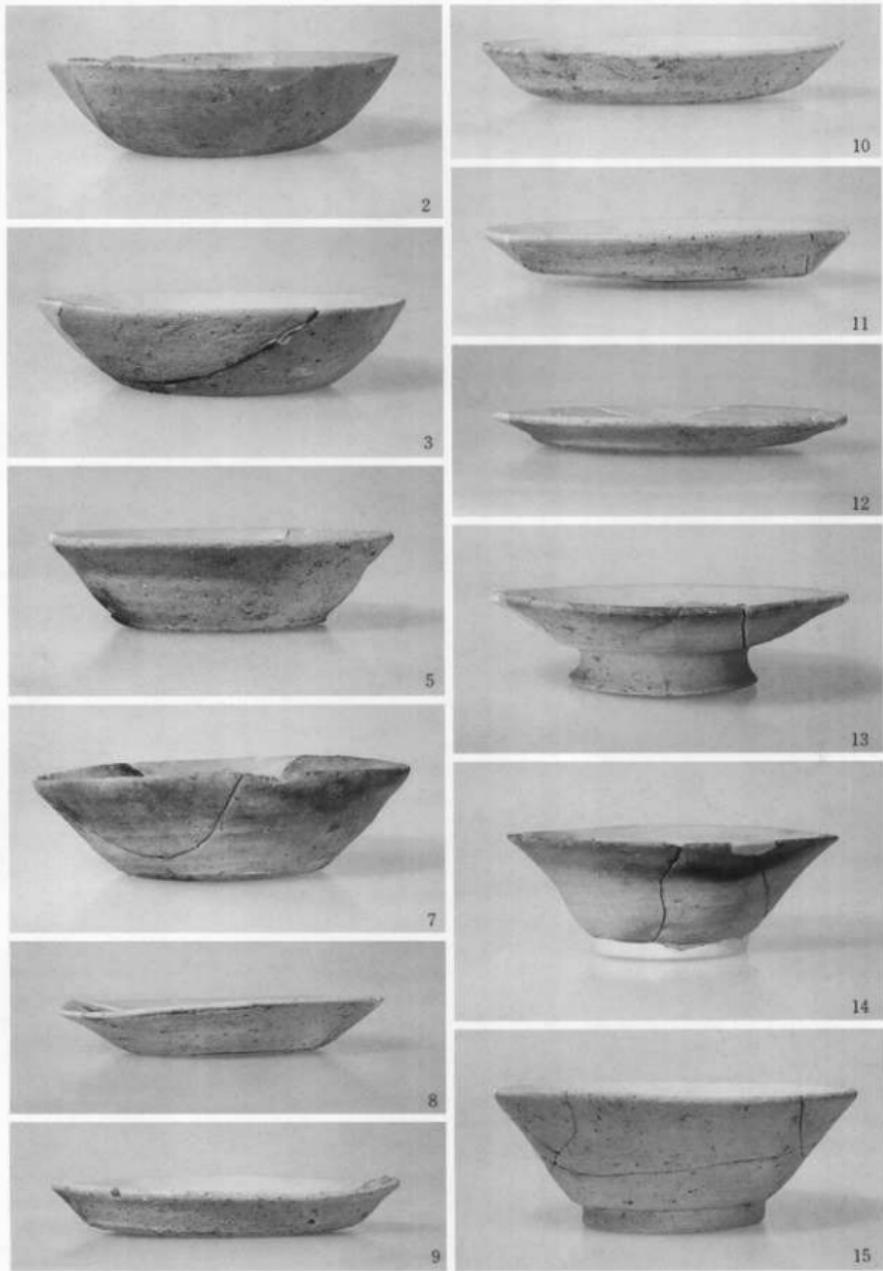
第92次調査 SK 2641・2642・2643・2644・2646出土土器



第92次調査 SK 2649・2652出土土器・陶磁器



第92次調査 SK2656・2664、SX2678・2684・2670出土土器



第92次調査 S X 2690出土土器



16



19



22



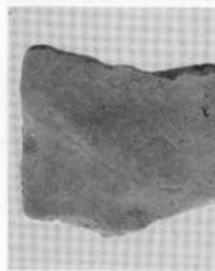
23



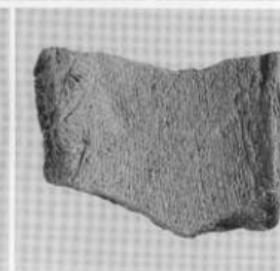
24



25



21



26



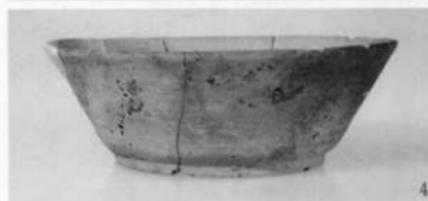
第92次調查 S X 2690出土土器



2



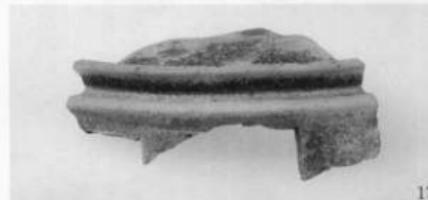
18



4



20



17



21



23



27

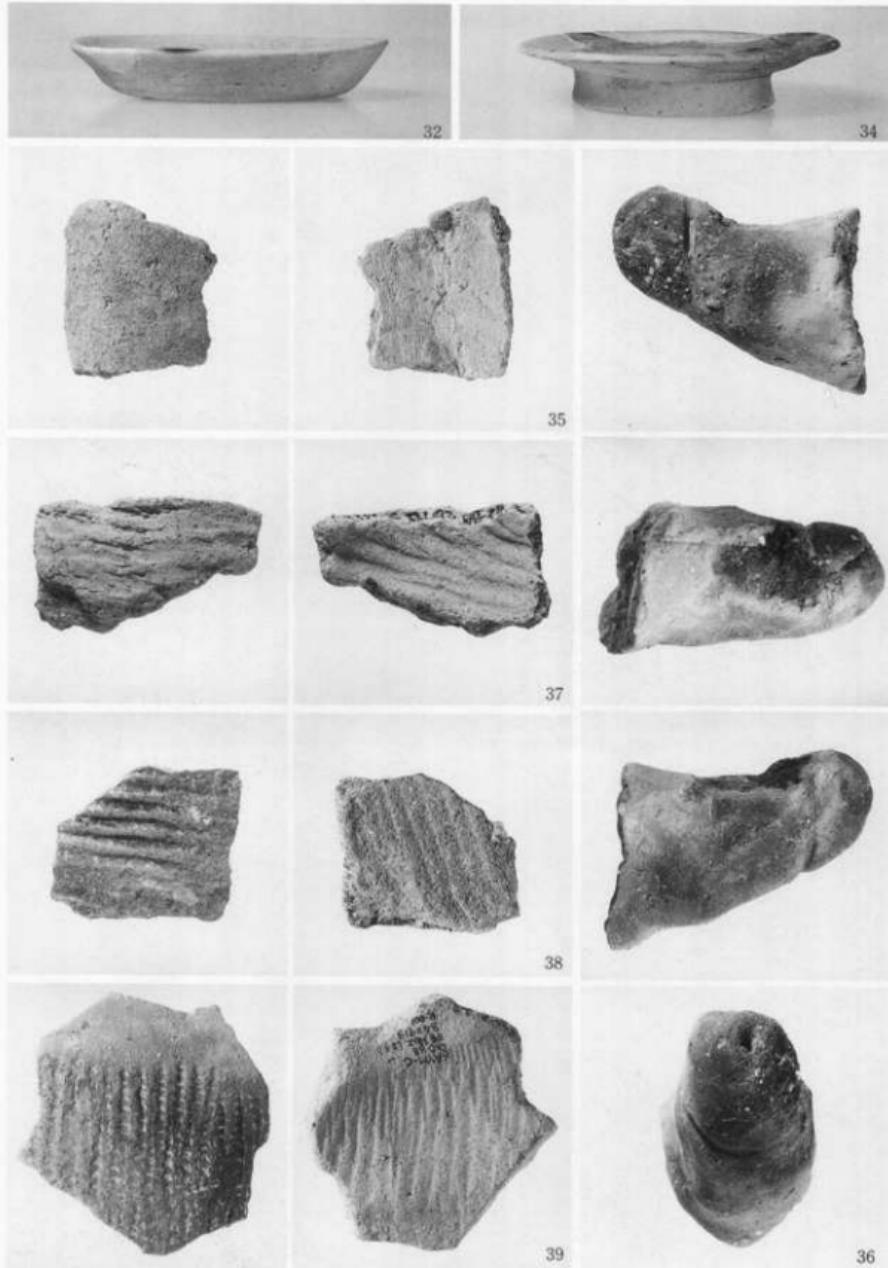


19

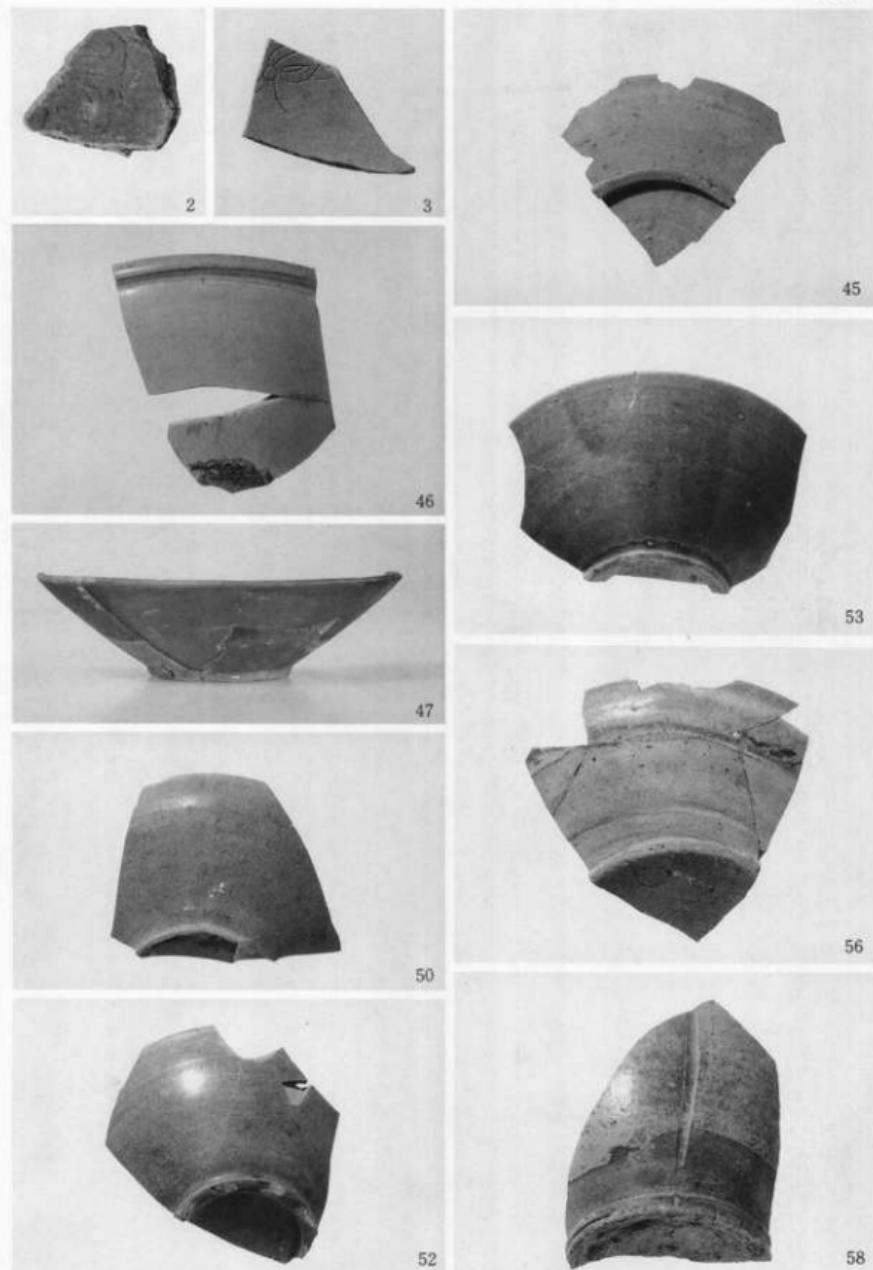


30

第92次調査 暗褐色土層出土土器・土製品



第92次調查 暗褐色土層出土土器



第92次調査 暗褐色土層出土陶磁器

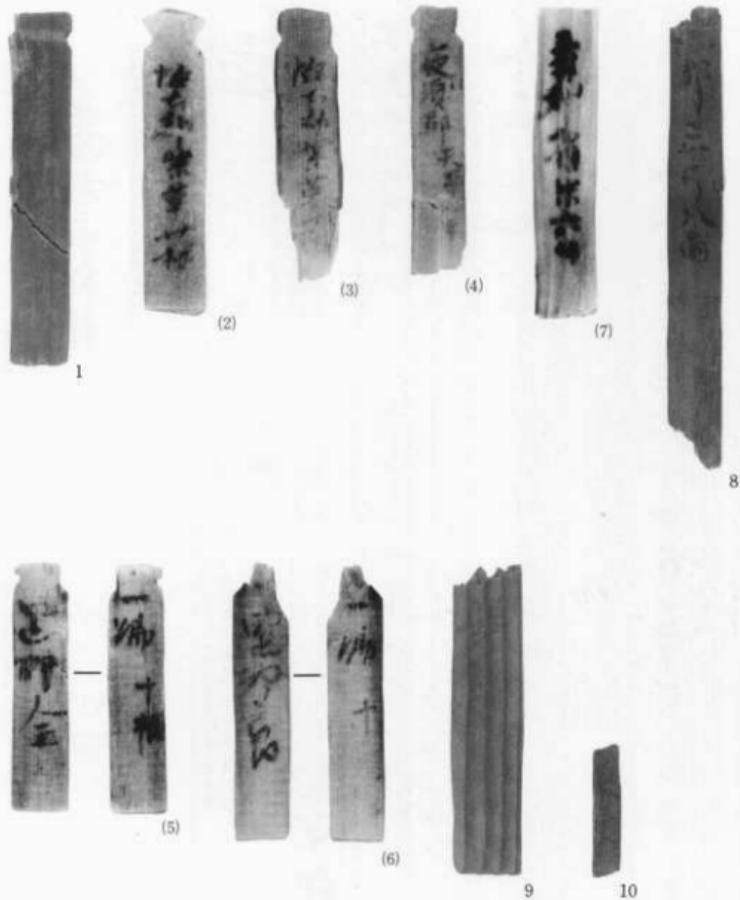




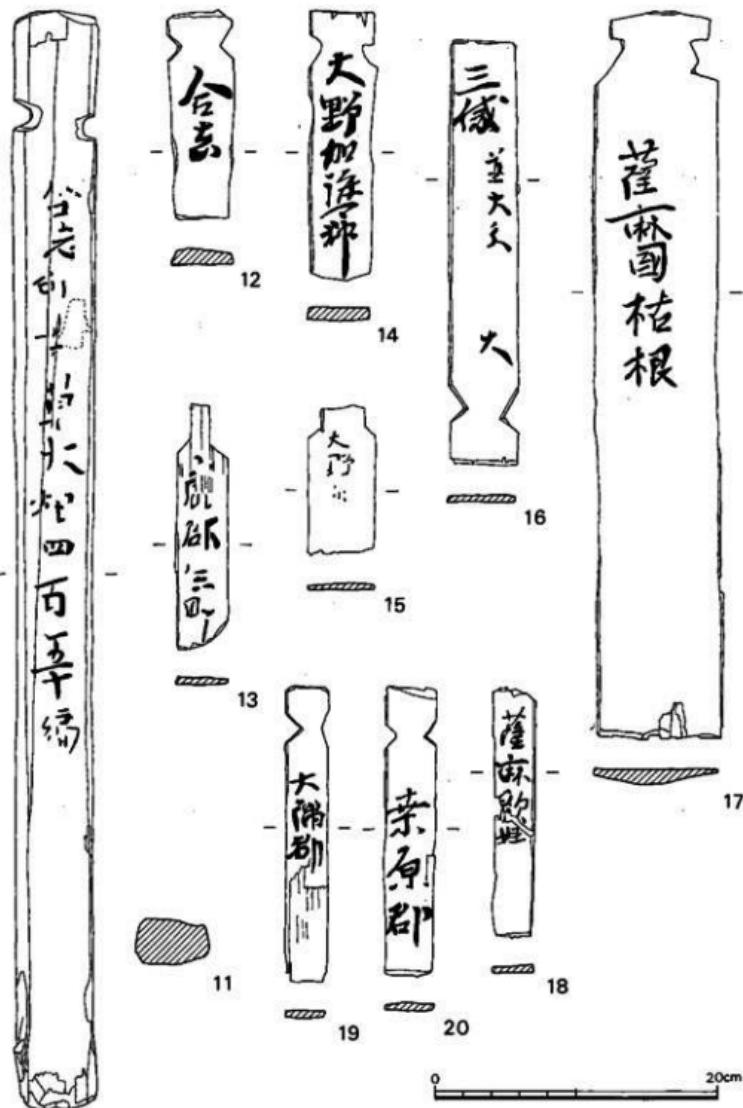
第14次調査 SD320出土木簡

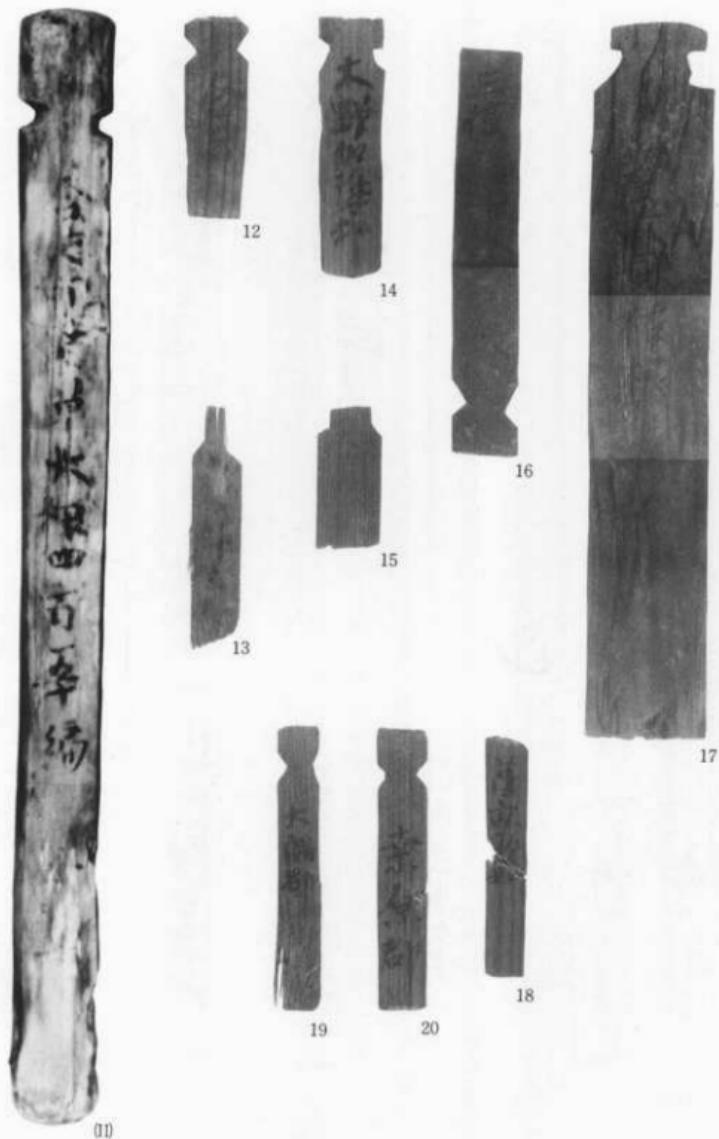


0 20cm

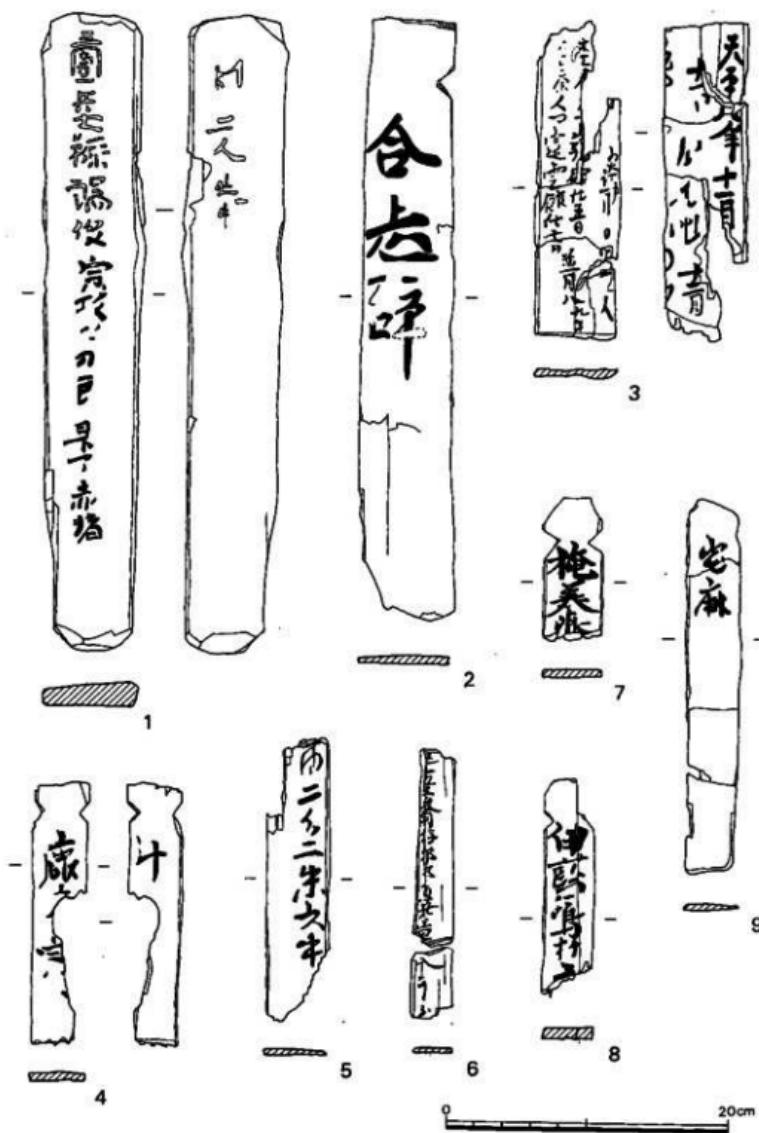


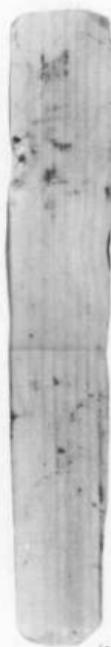
第87次調查 SD 2340出土木簡





第87次調査 SD 2340出土木簡





3

(1)

(2)



7



9



4



5



6



8



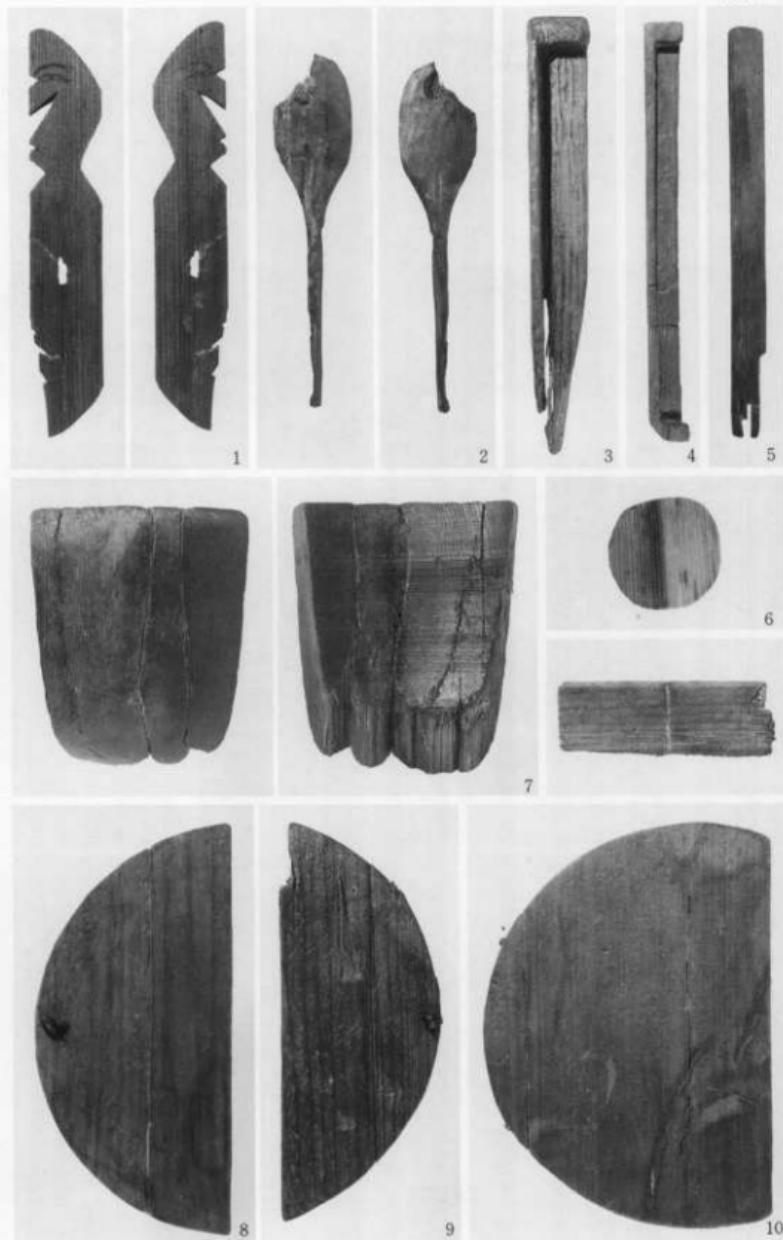
第87次調査 SD 2340出土木簡



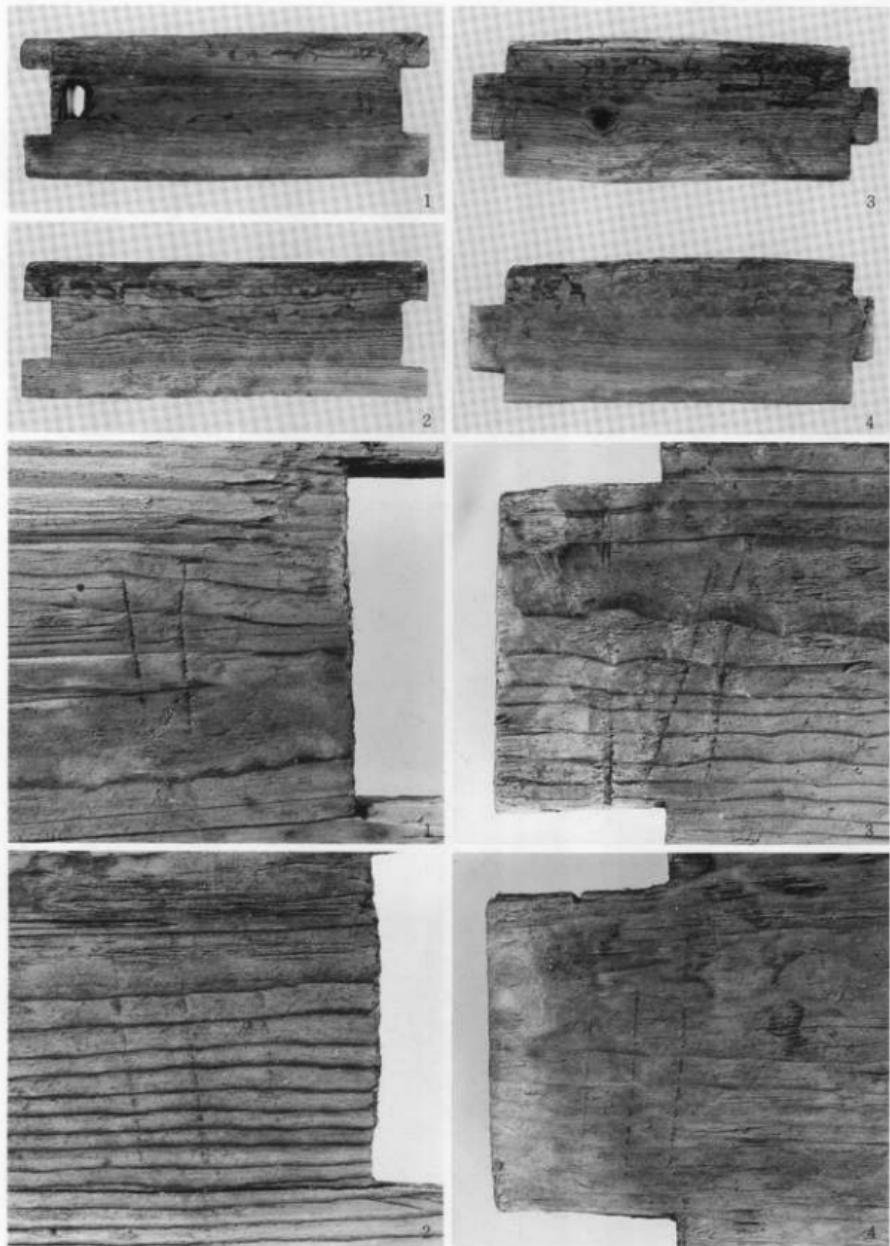
第90次調査 SD 2340出土木簡



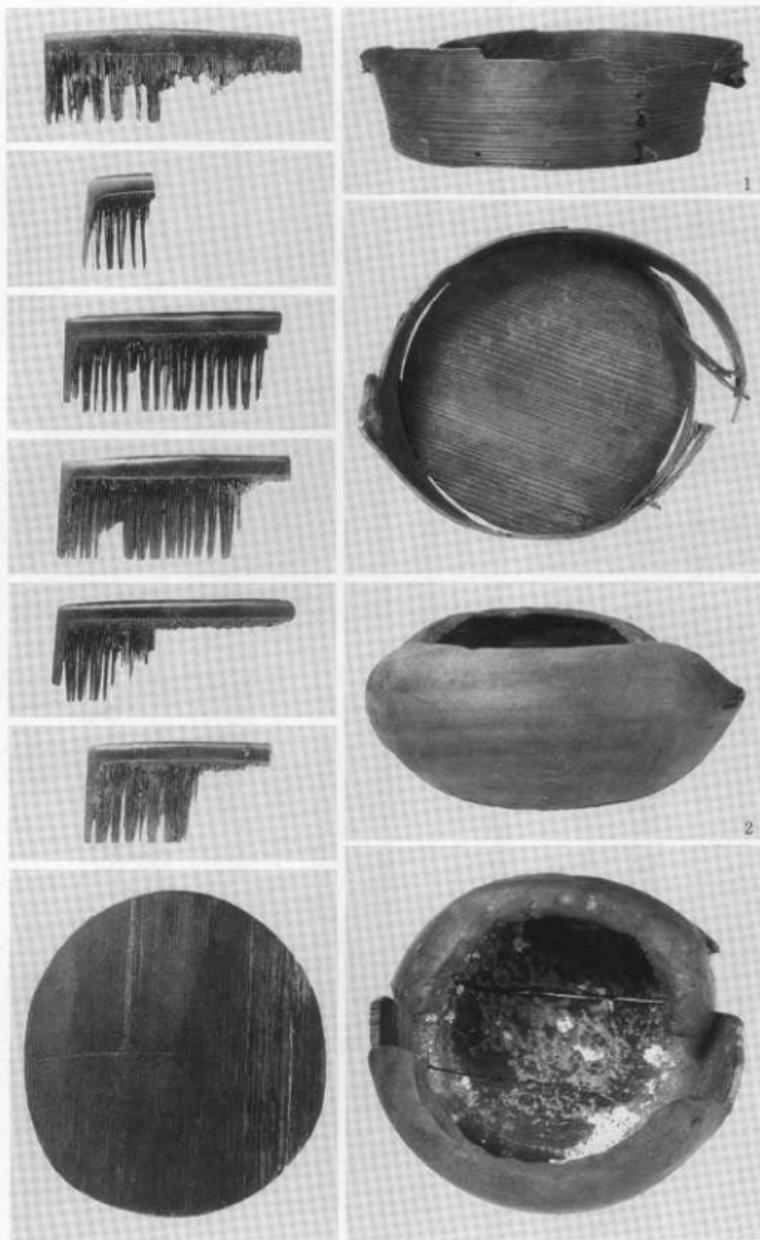
第14次調査 SD 320出土木製品



第87・90次調査 SD 2340出土木製品



第87・90次調査 S E 2510井戸側



第88次調査 S E 2557・2561、第92次調査 S E 2622・S K 2649出土木製品

図版86



第92次調査 SE 2621井戸側



1



2



3



4



5



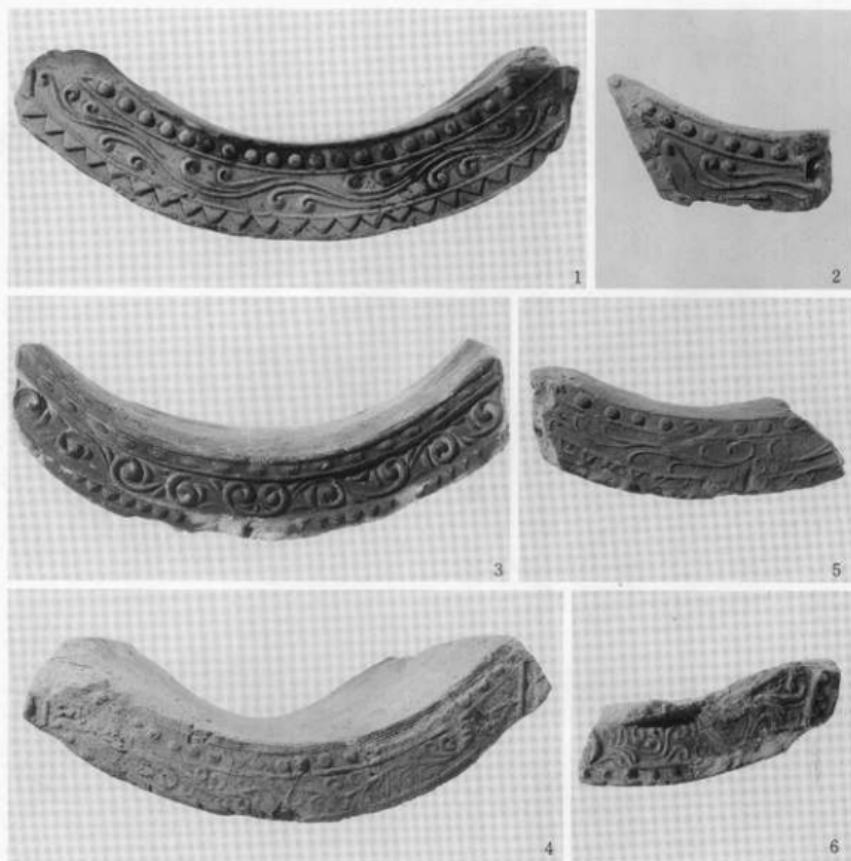
6



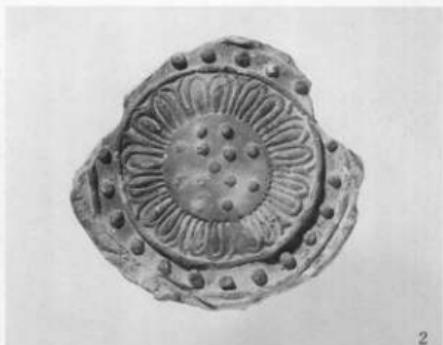
7



8



第14次調査 SD 320出土軒平瓦



第87・90次調查 S D2340・S E2510・茶褐色土層出土軒先瓦



1



2



3

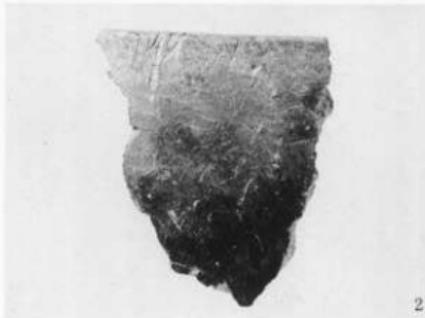


1



B

A



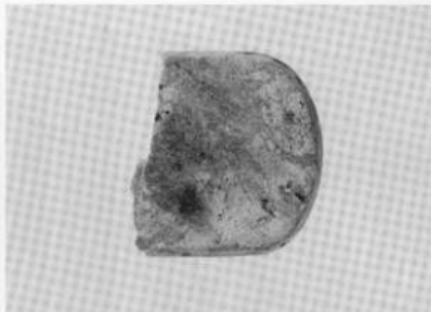
2

第92次調査 出土軒先瓦・石製品・鐵鎌

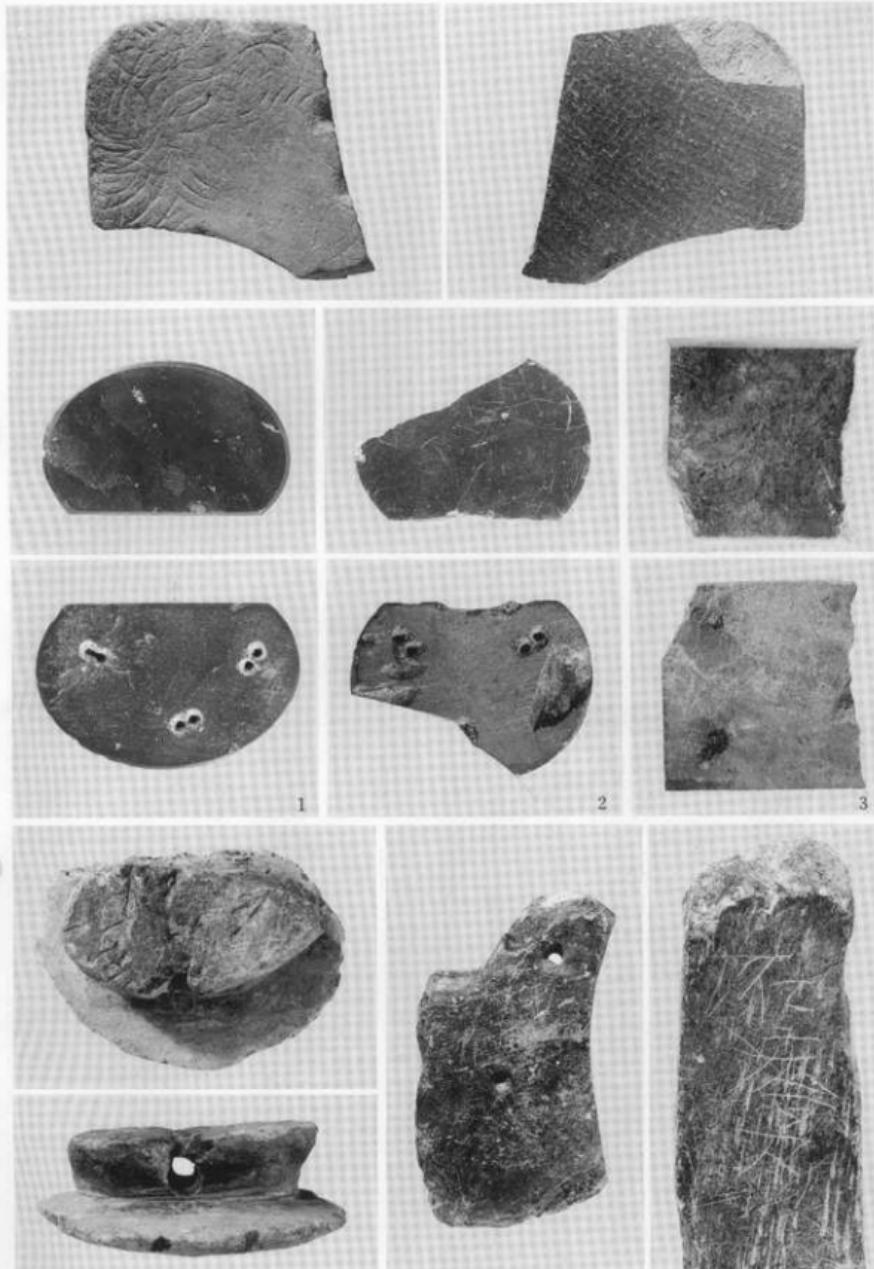


1

第14次調査 SD320・SE2503出土鉄製品・石製品



第87・90次調査 SD2340・茶褐色土層出土土製品・石製品・草履



第88次調査 出土硯・石帶・石製品

大宰府史跡

昭和59年度発掘調査概報

昭和60年3月

発行 九州歴史資料館資料普及会
太宰府市大字太宰府字太郎左近1025

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目4番16号